

サの部

サムエル

撒母耳前後書

撒母耳前後書

人士間に起れる困難なる出来事に對して商量を興へ、又其の嗣社の監督を務めたりしかども、彼の名聲は其の在任地以外、以色列の全家には響けり知られず、彼が名聲を博するに至りしは、或る機會に於て彼が以色列の牧畜に關するエホバの計畫を遂行する手段として、エホバに選ばれたるがためにして、彼は以色列王國の建設に當りて發言權を有せず、サウルを擧げしに依りて其義務を果したる共、王の實際的選擇に關しては參與せざる者の如くに記述せられたり。然れ共此の古文書は唯獨かに斷片的の形に於て吾人に保存せられし者なることは疑ひなき事なれば、吾人は更に後代の文書に保存せらるる所の一層満足なる物語に依りてサムエルの生涯と事業とに關する歴史を補はざるべからず。此の後の文書はサムエルを以て明白に古き物語に描かるる世に知られざる預言者よりも遙かに廣き感化の範圍を有せし者として記述せり。即ち此書の記者の指示する彼の位置は、エホバの代表者として人民の上に臨みたりし第二のモーセの如き觀あり。記者は彼の職分を以て以色列人の不信を癒して唯一の眞神に奉仕せしむることに在りとし、又彼を士師の務を實行する者、壓迫者ヘリシテ人の手より以色列人を救出する者として描寫せり。サムエルの此二表示の相違は甚だ著しく、一見一を是とすれば他を非として斥けざるを得ざるの觀あり。且つ前者は古代の色彩も帯びて歴史上大價值を有すること疑ひなしとすも、後者を以て非歴史的也として排除すべからず。蓋し後者は前者に關係なく獨立して、別の見地に立ちて書かれたる者にして、假令古き物語中にサムエルの幼時即ちシロに於けるエホバの關係及び民の爲めの代請等に就て語る所なきも、此等の事實を非歴史的也と

いふ可らず。左れ共後の物語が吾人に傳はりたる形式に於て其の後代の預言者の色彩を帯ぶるものあるは疑ふべからず。要するに記者が以色列の過去の歴史を回顧し來りてサムエルを最後の士師となし、又預言者の先驅者として叙述したる者にして、大體の評價に誤謬なきも、後代の影響を蒙るものあるは明也とす。

撒母耳前後書 The Book of Samuel, I and II. **註名** 舊約聖書中の經典。此二書は列王紀略と同じく、希伯來經典に在りては元來一書なりしが、七十人譯は撒母耳書及び列王紀略を以て、イストラエル及びユダ二王國の完全なる歴史也となし、之を『王國の書』(Hibia *Books*)と名けて四卷に區別せり。エホバの拉丁譯も同一の區分を用ひたれ共、標頭を改めて『列王紀』(Libri Regum)と爲せり。現時の希伯來聖書は七十人譯及び拉丁譯に從ひ四卷に區別せられたる共、前二卷は撒母耳書、後二卷は列王紀略と稱せらる。

此書を撒母耳書と名けたるは、其初めにサムエルの事を記したる故、サムエルが書中の記事に重要な地位を占むるに由る。

【此書の内容】 撒母耳前後書は現形に在りては四部に大別すべし。即ち(一)サムエル及び王國の建設(前書一―五章)、(二)サウル及びダビデの事(前書十六―後書八章)、(三)ダビデの事(後書九―廿二章)、(四)補遺(後書廿一―廿四章)是也。尙之を小別すれば左の如し。

(一)サムエルの出生よりサウルの死に至る(前―十五章)。

(二)サムエルの出生及び幼時。エホバの遺失。

サムエル、エホバの後を嗣ぐ事。エホバの滅亡及び神の櫃のヘリシテ人に擡はらるる事(一の十一―七の二)。

(三)サムエル以色列の士師となり、ヘリシテ人の手より以色列を救ふ事。人民の求めに應じ、サムエルの備に依り、サウル、アンモン人を取り、以色列王となる事。サムエル以色列人に論ふ事。サウル、ヘリシテ人と戦ひ之に勝つ事。サウル、アムレク人を取りたる事。サウル、エホバに背きたるがため、エホバは彼を棄て國を他に移すべしとのことを、サムエル、サウルに告ぐる事(七の二―十五の廿五)。

(四)ダビデの出現より王位に即くに至る(前十六―後八章)。

(イ)サウル治世の間に於けるダビデの歴史。ダビデにサムエルに膏注され、サウルに仕ふる事。ダビデ勇士として成功し、サウル及び人民に貴まる事。然れ共之がためサウルに嫉まれ、殺されんとす。出奔する事。サウル、ダビデを追ひたる事。ダビデ、ヘリシテ人の中に遁れたる事。サウル再びヘリシテ人と戦ひたれ共、利あらずして、其子等と共にギルボア山に於て戰死する事(前十六―廿一章)。

(ロ)ダビデ、サウル及びヨナタンの死を聞き哭く事。ダビデサウルの家との間に戰爭續き、ダビデ遂に勝利を得、王となる事。彼れエホバをとり、ヘリシテ人の羈束を脱する事。神の櫃をエホバに携へ來る事。ダビデ王國の基礎立する事(後一―八章)。

(三)ダビデ治世の歴史(後九―廿章)。

(イ)ダビデ、ヨナタンの子メヒゼケレに親かな

サの部

撒母耳前後書

撒母耳前後書

撒母耳前後書

る事。アムモン人の戰爭。ダビデ大なる罪を犯す事(九―十二章)。

(ロ)アブラハムの謀反、及びシバの謀反(十三―廿章)。

(四)補遺(後廿一―廿四章)。

(イ)歴史上の出来事、即ちギハオン人及びサウルの家の事(廿一の―四)、ダビデの勇士等功名の事(廿一の十五―廿二、廿三の八―廿九)、ダビデ兵數を調へたる事(廿四)。

(ロ)詩歌の斷篇、即ちダビデの詩(廿二)。ダビデ最後の言(廿三の―一七)。

此書に記されたる歴史は凡そ百年の長きに渉り、此間以色列人に士師に記されたる國民的崩壊の狀態より、漸次堅固なる國民的存在を有するに至れり。王政の建立は從來分立したりし種族間の結合の表徴にして、又此結合を成就せしめる方法なりき。故に此間の歴史の興味は主として、王政の建立に與りたるサムエル、サウル及びダビデの身邊に集中せり。

【材料及び時代】 現形の撒母耳書は希伯來文書編纂の好通例にして、其内容を見る者は直ちに、其作者が希伯來歴史家の例に従ひ、前より存在せる文書を用ひて、其材料となせる事實を發見すべし。作者が此書編纂のため採用したる主義は、モーセ六經の編纂に採用せられたる主義と同じく、此書に在りても亦エホバ古典とエホバ古典とが其重なる材料として用ひられたるを見る。然れ共此等の文籍は各々其立脚地を異にして各自獨立せる者なることは、今日批評家の悉く一致する所にして、且此書の編纂者は此等の文籍に記載せる出来事の相異なる記事と調和せんことを努めず、サムエル及びダビデの歴史に起れる重なる出来事を、二重の形狀に於て再出するこ

とを以て満足せり。是れ前書七章より後書八章迄に記載せる記事が重出せる所以にして、サウルが國王として選ばれたること、及び神に膏められたることに關し、二箇の獨立せる記事の存在せるも亦之れがため也。編輯者は又ダビデがサウルに紹介せられたる事、ダビデが王朝より選ばれたりし事、ダビデがサウルの生命を求めざりし事、ダビデがヘリシテ人の中に遁れし事、及びサウルの死せし事に關しても、亦二重の物語を保存せり。

此の如く此書の編輯者は、殆ど凡ての場合に於て二重の物語を其儘保存し、敢て之を調和せんことを求めず、唯僅少の場合に在りて一方を省略し他方を長く書きたることあるのみ。去れば吾人の愛に爲すべき事は、此等の材料を研究し其起源を考察するに在り。而して之を爲すに方りて吾人の指針となるべきは、立脚地の各々相異なるに在りし雖も、二者の相違は著大にして、其の年代を定むるに敢て困難を感じざる程也。即ち一方に於て吾人が假りに古き物語と呼ぶ所の者に在りては、吾人は單純直截の歴史を有す。而して此歴史は其明確なる文體、其活動せる記事及び其宗教的觀念より考ふるに、頗る古代の作なること明也。換言すれば吾人は此處に王政時代の初めに存在したる社會及び宗教の狀態の記録を有す。之に反して新なる物語は晩代の宗教的教訓の着色を帯び、前八世紀の預言者の教訓に次げる時代のものたること明也。

タイチン及びワネルハセンは、此新なる物語を以て申命記の材料より出でたりとせし、レール此説を繼承したれ共、コルニル及びアブテは、少くとも一部分はエホバ古典と密接の關係を有せりとの事を主張せり。即ち此物語の言語及文體が著しくモーセ

六經の正典に類似せり、此等の批評家は此物語を以て其趣き也と思惟し、アブテは更に進んで此物語の初の部分にアムより出でたるものにして、此二典より來れる材料は後第三の作者に依りて編輯せられ、後更に申命記編輯者に依りて編輯せられたる者也と云へり。モーセ六經の材料なるアム及びエホバカナン人の征服に終らずして、尙後代の歴史にまで繼續せりとの説は尤もなることなれ共、此書に記載せる二箇の物語とモーセ六經の材料とを更によく精査すれば、此二書を以て同一なる者也と云ひ難し。今此點を更に詳言すれば、前書一章より後書八章に至るまでに記載せられたる歴史の大部分は、同一の主意に關する二箇の物語を存せり。此等の物語がもし別々に書かれたる者にして、其之を書きたる作者の立脚地相異り、且文體にも相違あること明也。文體の相違は殊にサウルの國王に選ばるる記事(七一―七二)に於て著し。コルニル及びアブテは七、八章、十の十七以下及び十二に記せる記事、即ち新なる物語のE典と著しく類似せるを示し、故に此物語はE典より來りたる者也と論じたり。然れ共此類似は二氏の云ふが如く著しき者に非ず。又假令著しき類似せりとするも、其中には又E典以外の材料より來れる者を含めり。故にアブテは此困難を除かんとため、第二のE典記者が前八世紀の預言者、殊にホセアの感化を受けて、其記事の大部分を改作せる也との説を唱出せり。然れ共二氏は此物語を同一視するに於て餘りに極端に馳せたり。此物語が言語及び思想に於てE典と密接の關係を有すること否をばらざる事實なれ共、吾人は其作者はE典源に關する人にして、彼(又は彼等)がサウル及びダビデの歴史を書ける時、同一の精神、同一の思想に動

サムの部

サムソン

サムナーのサムマ

サムマ

かされたる者もこのことを想像するより以上の事を想像すること能はず。...

【参考書】 批評的には、ウェルハワセン。...

サムソン

人名

サムソンなる名は太陽の意義を含む。...

サムナー

人名

サムナー ジョン。...

サムマ

人名

サムマの語源はサムソンに由来する。...

を以て彼もカルヴィン説にて養はれしが、長じて此説に不満を感じ漸く懷疑不信に陥りつゝありしを、...

サムマの語源はサムソンに由来する。...

サの部

サモス。サマト。サラ

サラミス。サルゴン

サルゴン

サモス

地名

サモス Samos。...

サラ

人名

サラ又はサライ Sarah, also Sarai。...

サラムス

地名

サラムス Salamis。...

サルゴン

人名

サルゴン Sargon。...

サルゴンの語源はサルゴンに由来する。...

三位一體

て、初代教會に知られたる唯一の三位一體也。此三位一體は洗禮の形式に言ひ顯はされ、弟子等は『父と子と聖靈の名に入れられてバプテスマを受け』(太廿八の十九)又保羅は其兄弟を祝するの形式に之を用ひ、『願くは主耶穌基督の恩と神の愛と聖靈の交際留曹凡て諸君に在らん』(コリ二の十三)の十四)斯く初代教會は父、子、聖靈を承認し、毫も之が秘義のために隠蔽したることなし。當時未だ耶穌の神人的性格又は神の三一的生命に關する思辨なく、三位一體と云へる語は使徒時代に未だ之れあらず、又如何にして一體にして三位なるを得べきやの問題も起りたることなし。當時人々の最も興味を有したりしは靈的、實際的にして、思辨的に非ず。父と子と聖靈と共に神也との信仰は、彼等に取りては光明にして暗黒に非ざりし、こは新約全書の示せるが如し。神の子は彼等の中にやどり、神の靈は彼等に内住し、此二に依りて父は彼等を取りて實在する者となりたり。神は基督に於て世を己と和がしめ、又靈に依りて己を人に顯はし、生命を與へたり。是れ即ち初代基督教徒の三位一體也。

(一) 新約聖書の教義。此教義を形成するに至りし根本思想は、第四福音書也。此書に依れば、耶穌は自己の豫先存在を主張し、彼は其世に生れ出でざりし前既に神と共に在り、豫め彼のために備へられたりし事業を遂行せんために世に來りしことを公言せり(約八の四十二、五十八、十二の四十四、五十六の廿八、十七の四、五、廿四)。此書の緒言(一の十八)は耶穌の此主張を紹介せんため書かれたる者の如く、此處には道(ロゴス)は太初に神と偕に在りしのみならず、道は即ち神也、此道は天地創造の事業に與り、萬物一として之に由らば造られたる者なし、此道に生命あり、此生命は人の光也と云ひ、而して此道肉體となりて世に來り、聖靈と真理とに滿ちて人の間に留り、故に耶穌を見し者は道の榮を見し者なり。其意即ち神と偕に在り、而して自ら神なる道耶穌に於て肉體となりしことなれば、耶穌の榮光は即ち神の榮光也と云ふに在り。此處には神及び神と偕なる神とを區別し、後者の語は言出、若くは出現に在りしと云ふ、此出現せる道耶穌に寄り、彼をして神の眞の顯現たらしめたりと云へり。斯く此思想は簡短に表白せられ、之より以上の事に及ばず。此處には又三位一體なく、唯神格に區別あるを示せるのみ。此區別は獨子の觀念の基礎、化身の可能なることと論議して用ゐられたり。而して見えざる神を人類に顯現したる基督の神性及び先在を説明せんために、作者が此區別を設けたる者なること明也。

を示し、彼は神の體にて居りしかども、自ら其神と匹く在る所の事を棄て置き、こゝ思はず、却て己を處ふし僕の貌を取りて人の如くなれり』と云へり。又四一の五十七には、彼は人の見ることを得ざる神の狀にして萬物の先に在り、萬物は彼に由て造られたりとあり。彼は又凡ての造られし者の初子也と呼ばれたり。此等の言は何れも第四福音書の緒言と同義にして、基督を以て神と偕なる神として之に豫先存在を歸せる者也。希伯來書にも亦之を同一の思想あり(一の二、四)。此處にも亦基督を以て神の榮の光輝其實の眞像にして、萬物を造り、其權能の言を以て之を扶持し、人類の罪の淨を爲せる先在者也と云ひ、ロゴスなる語なしと雖も、ロゴスの教義を藏せり。

三位一體

三位一體

三位一體

る者也。(二) 教會に於ける教義。新約以後の時代に於ける此教義の發達を略叙せんに、初代教會に在りては基督の豫先存在を信じ、基督に附するに神性を以てしたりしかども、初代師父の多數は神子の次位、説を取り、子を以て神の性質より必然的に發達したりとせし、寧ろ父の意志の働に依りて生れたりとせし、又子の身上の存在を絶對的に永遠とせしに幾分制限を置き、其本質上の存在のみは即ち絶對的に永遠とせり。而して當時の神學者の多數は聖靈の有身位なるを認識し、之を神格の第三位に置きたりしかども、此時代に在りては聖靈に關する議論は甚だ少く、且子の教義に比すれば稍曖昧なる言語多かりき。アリウス説論争の結果教會の正統説となりし者に於て、此教義は漸くに其歩を進め、ニカヤの師父等は明に子の發生を以て永遠とせし、神性としては離る可らざる者とし、三位中の第一位は父としての外は思考すべからざる者なり。而して彼等は又發生を以て父の意志に依るとせし、性質の必然に依るとせり。ニカヤの信條中之を辯護する者の最も大切とせざるは、子は父と同質(homoiouion)也との語に在り。アタナシウスは若し神の子なる教主を以て父と同質とする信仰を棄つるときは、基督教は最早完全の宗教なる能はずと云へり。正統派の學者等は神の三身位の本質を論ずるに方りて、又其實體的同質なることを論ぜり。アタナシウス曰く、『三位なる神は永遠にして一也』。又曰く、『子は父の本質を同ふし、所謂同質也』。シメオン・ホウレイ、アマプロス等の言も亦之に同じ。彼等の子を以て次位とせしは、其身上の關係にして、即ち子は單に子の地位を有し又發生せしこの理由を以て

父より小とせ共、此は唯身上の區別に過ぎずしと本質の區別に非ずと爲せり。ニカヤの信條には聖靈に關しては單に『我佛は聖靈を信ず』とあるのみ。然れ共子の神性及び同質論を主張せる正統派の學者は、聖靈の神性及び同質論をも主張したり。即ちアタナシウスは明に聖靈の神性を有することを教へ、又其父と同一なることは子の父と同一なるが如しと云ひ、シメオンは聖靈を以て神の性質を知り、且之を有し、萬物の範圍以上在り、三位中の一位を占め全能の力を有すとせし、ナウマンズのケレゴリは父、子、聖靈は神性云ふ點に於て一也、其特有の點を云ふ時は三也と云へり。斯くして三八一年コンスタンチノープルに於て開かれたる會議に於て、聖靈の神性を主張せる教義全書を占め、其定めたる信條には『我佛は聖靈を信ず、聖靈は生命の主又授與者にして、父より生じ父及び子と偕に禮拜と榮光を受け、又預言者に依りて語り給へる者也』と記され、ニカヤ三位一體の教義は是れ確立し、三身位と神の唯一との調和は、三の身上の本質に於て唯一也との思想に依りて成れりと思惟せられたり。

聖靈なく唯子に依りてのみ救はるべき者に非ず、又父及び子なく唯聖靈に依りてのみ救はるべき者に非ずして、父子聖靈なる唯一眞正不死の神に依りて救はるべき也』と。彼の教義の他の特色は、其屬を用ゐたる例解に在り。彼は三位一體の關係は人間の性質の中に見るを得べしとせし、之に依りて其秘義を説明せんとせり。曰く『吾人は存在し、又存在する、とを知り、而して存在及び其意識を覺ふ者也』。又曰く『愛なる概念の中には三位一體の關係あり、愛は常に三者を含む、則ち愛其物、愛する者、愛せらるる者是也』。彼は又記憶、智力及び意志の三者に依りて之を説明せんとし、記憶は同一の感を超す所にして、又心意が自身を知るに至る所以也、故に又自身に關する意識を受するに至る所以也と云へり。彼が子を以て父の像にして、父が自身を知るの意識を客觀的となしたる像也とし、而して聖靈は父子との交際の紐にして其相互の愛の源也とせしる思想は、後世哲學的に三位一體を解説する教義を前表せり。

三位一體

三位一體

三位一體

サの部 三位一體

三位位を承認したれ共、子及び聖靈の三位位を主張し、英國の神學者中にも第二第三の三位位者第一の三位位者より幾分下位に在りて唱へたる者甚だ少からざりき。ソシニウズ派は三位一體説に反對し、基督は單に人間たるに過ぎず、聖靈は神より人に附與せられたる靈又は勢力に外ならず、三位位が同一の本質を有すといふが如きは道理に反すも唱へたり。過去二百年間に於ける自由思想の運動は、三位一體に關する従来の定義及び思辨に對しても亦反對を惹起したりしが、神格に三の區別ありとの事は尙教會の信仰として一般に承認せらる。此信仰の基礎に關しては、或る學者は主として聖書の證據を引き、他の學者は天啓以外哲學思想に訴へて之を證せんとせり。後者はヘーゲル派の人々に多く見る所に於て、ヘーゲル自らは三位一體の教義は眞正哲學又は神學の基礎也と云へり。彼に依れば、靈なる神といへる概念の中には必ず三位位の區別を含有す、何れかれば神は過程の全體なるが故にのみ靈なる者なれ共、其過程の全體には必ず三つの階段あらざる可らざれば也。彼曰く『靈とは神の歴史也、即ち神が自身を區別して之を客觀せしむる、而して又之を自身に復歸せしむる過程也。全體として見る時は神は靈也、唯父のみ神といふは眞ならず、神は始めにして終也、神は永遠の過程也、生ける過程也。三位一體とは即ち絕對が自身に對して自身を區別し、而して尙其處に同一を保有する事也』と。ヘーゲル派に非ざる神學者中にも、三位一體の教義を以て神に關する哲學思想中に入るべき者とし、確實正當なる神の概念即ち神を有心的創造的の智慧及び意志と概念するに三一の教義を必要とせざる者多し。マルテンセン曰く三位一體なる本體の思想は、有心的哲學の觀念

三位一體

と同一也、故に三位一體を實體的に思考することは、即ち神の有心的生命に必要な本體の形狀を思考すること也』と。其意三位位及び自覺力は共に自我を客觀するの必要ある者也、而して客觀たる自我を主觀たる自我と結合するの必要ある者也、是れ則ち三位一體の過程に外ならずと云ふに在り。ドルチル其他の學者も亦之を均しき説を唱へたり。是れ則ち三位一體の教義を哲學的に解釋したる者にして、之を略言すれば、三位一體の過程は自我を客觀にし、再び之を自我と結合せしむる過程にして、第一は子の産生を示し、第二は聖靈の發生を示すといふに在り。然れ共近代の學者中にも、亦第二第三の三位の地位を奉ずる者あり。又全く三位一體の教義を否認する者あり。新英州の神學者は後者に屬す。ユニテリアン派は三位一體説に反對して起りたる者なるはいふ迄もなし。(三) 結論 以上略述せるが如く、本質上の三位一體説は顯現の三位一體の考察より起れる歴史的發達の過程にして、全く哲學的觀念なれば、神は果して其本質に於て三の存在を有するや否やは哲學上の問題也。故に吾人此問題に來る時は、此教義を説明し立證するために吾人の思ふ處を辨し得べしと雖も、之を詳論するは此書の目的に非ず。故に爰には唯此教義の有する意義を示すを以て満足すべし。(イ) 三位一體の教義は、神は一也といへるの同一の意義に於て三也といふこと非ず。此教義に反對する者は屢々云へり、神は一ならば三位に非ず、三ならば一に非ずと。然れ共是れ眞の三位一體説に對する故論に非ず、何となれば眞の三位一體説は、神は一也といふより外の意義にて三也といふ者なれば也。

サンキ

(ロ) 一個の神に三個の神格ありといふは、誤解に導き及ぶ。譯して神格と云へる語は拉丁語の「ヘルツ」ナリより來りたるものなれ共、「ヘルツ」なる語は、今日ば初め此語の用ゐられし時の意義より頗る異なる意義を有す。今日の思想にては人格は他と分離したる内容的性質を有する者の意義なれ共、此は全く古代の思想とは異れり。故に今日も神は三個の神格を有すといふは、三神と略同の思想の如く思惟せらるべきは敢て驚くべきに非ず。然れ共初代の基督教會が此語を用ゐたりし時には、今日吾人が思惟せるが如き意義にて神に三個の神格ありと思惟したりしに非ず。吾人が有心的靈也と云へる神は、吾人が今用ゆる語の意義にて、唯一個の神格を有せりとの義に外ならず。神は一個のヘルツ也。吾人は有神論に於て斯く主張す。神學に於ても亦之を否む可からず。三位一體の教義を以て説明し難く思はしむるは、古人の用ゐたる言語を今日の意義にて解釋するがため也。故に以上の所言を心に留むるは、此教義を解するに於て甚だ必要也。去らば吾人が三位一體に依りて意義する所如何。曰く『神は一個の神格也、而して其性質には其三重の顯現に於て示されたる三方面有す』と是也。(ドルチルの『基督教義の系統』カフタンの『ドグマチク』及び其他の組織神學、教義史等を見よ)。

サンキ

イラ デグウィッド G. R. D. In David. 人名 一八四〇—一九〇八 米國の傳道者、讚美歌作者、ペンシルヴァニアのエタムラに生る。廿九年間アイ、エル、ムーアにて共に働く。其美妙なる聲を以て歌へる讚美歌(多くは彼自ら作れるもの)は彼等の勳を成功せしめたる

サの部 サンク

原因の一なりき。ムーアの死後彼は専らムーアの事業に關する講演のために其身を献げたり。其最も有名なる讚美歌の中には "The dainty and mine" "When the mist rolled away" "Faith in the Victory" 等あり『福音讚美歌』(一八七五—九五)『聖歌及び聖曲』(一八七三)『日曜學校歌集』(一八九〇)『青年讚美歌集』(一九〇二)等を著し著しく世に行はる。

サンク

サンク ロフトウ リリアム Sankey, William, D.D. 人名 一八一六—一九三三 英國の大監督。サンクトガのフレンジーフィールドに生れ、領事のエマヌエル、カレッジにて教育を受け、一六四二年其のフェローとなり、四九年神聖同盟及び契約に調印を肯んぜずしてフェローを解かれ、大陸に行き、王初回復の時歸り、ダラム監督コソンの附屬牧師、大學説教者、神學博士、エマヌエル校長、ホルツの「アイ、エル、ムーア」教會の「アイ、エル、ムーア」の大テアコンを歴任して、一六七七年カンタベリー大監督となり、チャールズ二世の臨終に侍し、ウェーリス二世を戴冠せしむ。ウェーリスの教會首長に就ては喜ばず、王の赦罪宣言を讀むを拒んで塔獄に投ぜられ七監督の一人なりしが、彼は塔獄宜しきを得て免されたり。一八八〇年ウイリアム及びメアリーへの忠信誓約を拒んで九一年客職せられ故郷に退く。其の著書中出版せられしものも存す。

産後祝別式

産後祝別式 Chuching of Women. 慣例 猶太人の律法(利十二の六)に基きて立てられたる古代の宗教的慣例にして、中世以後羅馬教會に行はる。婦人が産後始めて教會に参詣する時、産産に伴ふ危険を免れ、且幸に子を得たることを神に感謝するため、司祭より受くる儀式也。希臘教會にては之

三聖童の歌

に新約の慣例(路二の廿二)を加へ、産後四十日其生れたる子を神に獻げて其祝福を祈るを例とす。英國教會の祝典書にも此儀式に關する禮文あり。然れ共英國教會以外のプロテスタント教會には全く此慣例なし。

三聖童の歌

The Song of the Holy Three Children. 書名 舊約經外聖書中の一書。『キヤンナの歴史』及び『ドラゴン没落の歴史』と共に但し耳書に附加せられたる者にして、嚴密に之を云くば "The Prayer of Amaran" and "The Hymn of the Three" 也。希臘語及び之より取りたる譯語にのみ現存す。六十七節を有し、正經但以耳書三の廿三、廿四節の間に挿入せられ、アザリヤの祈、叙述的物語及び燄火の中より救はれたることに對する三聖童の感謝より成る。作者及び著作の時代は明ならず。

サンシモン

サンシモン クロード アンソリー Claude Henri, Comte de Saint-Simon. 人名 一七六〇—一八二五 佛蘭西の社會改革企圖者。陸軍士官たる教育を受け、米國獨立戦争には勇戦せしが、若き時より社會改良に心を向け、メキシコにては兩米開地開墾を建言し、西班牙に在てはマドリッドを海に接せしめんと建言す。佛國革命の間渡地を買ひ占め、之を賣買して富を得、巴里に大邸宅を造りしが悉く掠奪せられ、無一物となりて其の企てたる大規模の社會改造も瓦解せり。此を以てステール、カストラン夫人に此の改革計劃の補助を乞ひしも、夫人は之を斥けたり。其より後は自らの肌を凍ぐために苦心して死する時に及べり。其の著作は『シネガア一住民の書翰』(一八〇二)『第十九世紀の勞働文學の概論』

三十九箇條

The Thirty-nine Articles. 信條 英國教會の信仰箇條にして、大監督バカル(Barlow)之草案を立て、一五六二年倫敦に於て開かれたる備會會議に於て、兩大監督區内の批准を経て公にせられたる者也。新約書と共に英國教會の奉ずべき教義及び行為の標準を示す。此處に表明せられたる教義及び其形式は、長き間に變遷し來れる者にして、今其歴史の概略を示せば左の如し。羅馬教會と分離せる後英國教會に於ては、其要すべき改革の範圍に就きて其說一定せず。即ち保守派は成るべく羅馬教會の舊案に依らんとし、溫和改革派は適宜に羅馬教會の弊害を矯正せんとし、アナバプテスト派は教義及び行為に根本的の改革を願さんとし、諸説紛々たりしが、一五三六年十箇條の信仰箇條王命に依りて制定せられ、此等の諸説を調和せんとせり。然れ共此信仰箇條は一般の人々に満足を與ふるに能はず。保守派の勢力強大なりし結果、一五三九年備會會議及び國會はヘンリーの六箇條なる

三十九箇條

サの部

三十九箇條

者を通過せり。此中には化體説、晚餐には二元素を要せざる事、教職の婚姻は許容すべからざる事、マ...

三十年戦争

ある事、假令聖典を執行する教職不遇任たりしとて、其執行せる禮典は無効に歸せざるべき事、晚餐の葡...

三十年戦争

が、今其次第を略叙すれば左の如し。之れより先きドナウワルト市に於て、プロテスタント教徒が加特...

サの部

三十年戦争

聖すべしとの命令を發し、獨逸帝國內のプロテスタント教派を撲滅せしめんと謀りたりき。然るにアラ...

山上の説教

ワテスブルクの平和條約を承認し、又ルーテル派とレフオルト派との同一特權を承認し、以て此長く...

サンタのサンデー

(一) 神の國は舊約(六の一四)新約(六の五)十五)新約(六の十六)十八)及び地上の財貨并に...

サの部

サンデ

サンヒ

サンヒ

大監督の子、牛津にて教育を受け、一六一〇年より一二年迄米國を旅行し、二一年より二四年迄ツァーニア植民地事務官たり、同地に於て最初の水車、鐵工及び船を造る。又チャールズ一世の侍従たることも數年、斯くて退隱を以て生を終れり。其の著書東方紀行『レレシオン』や『オグレイ』の『メマモル』『オセロ』『アコーナ』の『基督の受難』の翻譯や、詩篇、約百篇、傳道之書、雅歌等の同意譯は共に有益なり。トッドのサンデー文抄は彼を明に知るに頗る便を與へたり。『エームス』、『モントゴメリー』は彼の詩篇は英語中最も詩的のものなれども知る人少しと言ひ、チャールズ一世はカリスブルク圍城中之を愛護し、ドライデンは彼を前時代を眞實に表はせる人と言ひ、ゴープも英國の詩學は彼に負ふ所多しと言へり。

サンデイス

エドウィン Sandys, Edwin (人名) 一五一九—一八八、英國ホルタの大監督。領地聖職の、カレッジにて教育を受け、新教に改宗し、一五七七年カレッジの長に選ばれしが、ジョン、アレーに黨して塔獄に投ぜられ、次で自ら國を去りし、エリザベス即位して歸朝し、一五五九年ウオルメスター監督、七〇年倫敦監督、七六年ホルタ大監督となる。『監督聖書』起稿者の一人たり。又式文訂正者の一人たり。説教あり。

サンデマン

ロバート Sandeman, Robert (人名) 一七一八—一七一、フランス派又はサンデマン派の設立者。蘇格蘭ヘルスに生れ、ジョン、ガラスの女婿たり。エザンバラのフランス派教會の長老なりしが、一七六〇年倫敦に出て一教會を造り、六四年米國に行き其思想を傳へ、コンネチカット州ダンバリーにて死す。其徒は二三千を超えしことなし。

サンヒドリン

Sanhedrin. (synagogue) (譯語) エルサレムに於ける高等審判所及び高等會議に適用せられたる名にして、廣義に於ては又普通審判所の意義にも用ゐらる。通常『集議院』と譯す。

其の特色は教義に於ては基督教を定義して單に基督教の教義と事業とを首同することのみとし、儀式式文戒規等にては一層他と異なる所あり、一週一回聖職をを守り、愛憎を行ひ、毎日曜には朝より夕まで禮拜し、血を以て穢らしたる物を食ふを避け、一種の共產主義を行へり。

アン時代のサンヒドリンは『ハスモニアン』の法廷と稱せられ、其歴史は中ばパルサイ及びサドカイ二派消長の歴史と交錯せり。即ちパルサイ、ヘルカヌスの治世の終にはパルサイ人サンヒドリンを逐はれて、サドカイ派サンヒドリンを組織せしが、ヤンテウスが治世に至りてはサドカイ派逐はれてパルサイ派サンヒドリンを組織したり。然れ共此勝利は當時にして、アレキサンデル、ヤンテウスが治世にはサドカイ派パルサイ派に勝ち、サドカイ派に勝たり。後羅馬の代官カピニウス西利亞を治めし時に至り、サンヒドリンは一度其勢力を失墜したりしが、間もなく其勢力を回復し、アンチパテルの幼子ヘロデを審判したりしに、ヘロデ權力を得るに及びて其審判に與かりし者に復讐したりしが、サンヒドリンをば懲罰せしめ之を用ゐて老ヘルカヌスに死刑を宣告せしめたり。羅馬の方伯が猶太を治めたりし時代に至りて、サンヒドリンは依然猶太國民の上に最上權を有し、耶蘇の審問(太廿六の五十七、可十四の五十五、十五の一、路廿二の六十六、約十一の四十七)及び使徒時代に於ける他の場合の審問(徒四の十五、五の廿二以下、六の十二以下、廿二の廿、廿三の二以下、廿四の廿)に關する新約の記事は此の如き者として之を顯はせり。エルサレム滅亡するに及びサンヒドリンも亦一たび其存在を失ひたりしが、後猶太人が新なる状態の下にパルテナに於て新生活を初むるや、エルサレムのサンヒドリンも亦復活し、ヤブチに於て教師の集會を開き、之を以て從前のサンヒドリンの續きとせたり。後學者の中心ヤブチを去るに及び、此サンヒドリンはテマリアに移されたり。サンヒドリンの名は近代に至りて

サの部

サンセ

讚美歌

讚美歌

又復活せり。一八〇七年ナポレオン一世猶太教代表者の集會を召集したりしが、此等の代表者は此集會をサンヒドリンと名け、エルサレム大サンヒドリンの形式に従て之を組織せり。猶太教と國家の法律との關係及び猶太人と非猶太人との關係に關する宣言の外此集會は取立て、云ふべき程のものな遺す。

(一) サンヒドリンの組織 ミシナに依れば、サンヒドリンは七十人の會員より成立せり。此會員の數は民十一の十六に記されたる七十人の長老にモーセを加へたるより起れる者也。七十人及び七十一人の數に關する異論は、議長が其總數に加はるや否やに依りて起る所也。サンヒドリンを組織したるもの何人なりやに關しては判然たる証明なし。其會員が『長老』と呼ばれたるは、サンヒドリンはモーセが七十人の長老を選びたりし時に設立せられたりしと思惟せられたるに基く。新約全書に於てサンヒドリンの會員が『長老』及び學者と並べ稱せられたるは、此會の會員が此二大階級より補充せられたるに依る。サンヒドリンの事務執行の方法及び議長の職務等に關し、新約全書の記事は明白ならざれ共、ヨセフの傳ふる所に依れば、紀元前四十七年ハスモニアン朝の祭司長ヘルカヌス二世はサンヒドリンを召集し、ヘロデの處分に就て指揮したりしと云ひ、又紀元前六十二年サドカイ人の祭司長アナクヌ二世は或る死刑執行の宣告を通過するためサンヒドリンを召集せりといふ。新約は又耶蘇審問の時祭司長カヤパ、サンヒドリンの議長となり(太廿六の五十七)保羅審問の時祭司長アナクヌ二世が議長たり(徒廿四の一)と記す。然るに傳説的文書には祭司長に關する類る職分に就ては毫

も記す處なく、却てサンヒドリンは其れ自ら議長を有せりとのことを傳へたり。此議長の最も單純なる名稱は『法廷の首』にして、又之を『法廷の父』とも稱せり。而して後『ナシ』、『王』の義と云へる語はサンヒドリンの議長の名稱となれりとのことを傳へたり。ヨセフ及び新約の記事は此傳説的文書の記事との矛盾を調和し難し。

美歌の體たる希伯來の詩歌より、次第に其體様を叙すべし。

【希伯來の詩歌】 舊約聖書卅九卷中六卷は、全篇これ詩也。即ち叙情詩には雅歌、哀歌、詩篇あり。智慧の書と唱へらるるものには、箴言、約百篇、傳道書のあり。經外聖書にシラク書あり。その散佚して今に傳はらざるエホバの職の記(民廿一の十四)ヤシヤルの書(書十の十三)の如きも歌詩也。其他アロンに對する祝福(民七の廿四—廿)契約の類を述ぶる歌(十の三十五)を初めとして、デボラの歌(十五章)の如き民謡あり。全篇を取つて極めて實し。出埃及記十五章のモーセの歌は、讚美歌の如く見ゆれば、同廿一章廿一節のミリアムの歌を詩篇時代に至りて敷衍せるものと信ぜらる。

デビラの唱歌隊は、隊員十を以て數へられしが、代上十五、十六章を見よ。樂あり、器あり、瑟ありて細き音を出し、琴ありて太き音を出し、銅の鏡ありてうちをやす。その他角あり、喇叭あり。古の伶人は自ら歌を作りしもの也。而して詩篇中の數篇は正しく此等の樂人の手になりしなるべし。後年巴比倫にさらはれし時も希伯來人の歌詩也との事は、かまびすしかりけん、詩百廿七篇に記せる歌今なほ讀むものをして亡國の民のあはれをしのばしむ。約百記其他はやも類を異にせるを以て、こゝにいはす。詩篇は實に希伯來聖歌の最高峯なり。而して後の讚美歌といふもの、詩篇の感化をうけしこと頗る大なるも世人の知る所也。

新約に入りては路加福音書、詩を含むこと最も多し。マリアの歌(一の四十六—五十五)は母前二章のハンナの歌によりしものにして、我が『さんびび』が四七に收めらる。ザカリヤの歌(一の六十八—七十

サの部

讃美歌

讃美歌

讃美歌

九「さんびが」四七〇「天軍の歌」二の十四、「さんびが」四六九の前半「シメオンの歌」二の廿九「三十二」...

「東方教會の讃美歌」 東方にては歌の禮拜に用ゐらるゝ事早くより也。多少の異論もあれど「Hymn」...

し、迫害を受けつゝコンスタンチノールの公堂の支那先などに會して、終夜その歌を歌ひしといふ。五世紀の終りに至りて、ロマチスといふ人出でたり。

思想を讃美歌にうつす者數篇、後世の人之を西方讃美歌の始祖とす。アンブロシオに就ては、其徒弟たりしアラガスタンに認めたるものあり。之によれば...

サの部

讃美歌

讃美歌

讃美歌

の折りに歌はれぬ。

されど拉丁の讃美歌中最もすぐれたるものは「Dixi Domini」の日のや、おそろしの日のやなるべし。アシシのフランスの友なるセラノのトマス...

既にして文藝の復興あり。その影響よりして羅馬にても法王レオ十世の時、讃美歌集を改訂すべしとの命あり。一五二三年に至りて完成なり。次で公會層の改正あり、一六三一年に成りぬ。中世の讃美歌大方の改正層より省かれ、新時代の歌加はりぬ。

年ルイ十四世の初め、讃美歌集を公にせり。歌數僅に八首、されど一五二七年の版には六十三首、一五四五年の版には百廿五首となれり。尤もルイ十四世の歌として今日に傳はる者原廿五首、翻譯十二首のみ。廿餘年間讃美歌に携はりし人としては、歌數極めて少けれ共其作は優れたるもの也。中に就きて傑作を『かみわが橋、わがつよき橋』(「さんびが」四三七)とす。ラメケの所謂「カール」が仇なり世に傳せざるを、亡ぶ可らざる神の御業をなし居るなりと信じて、自ら強うせし作にして、諸も亦彼の作なり。

サの部

讚美歌

ス、教師をして新編會を催さしめ、自ら跪いて熱心に祈り、軍を率いてこの歌をうたひつゝ「イエスよ、今日御名の爲に戦ふ我をたすけたまへ」と彼は遂にたり。戦は激しかりき。午前十一時一彈あり、ガスマスをうちぬ。馬上の英姿は見るべからず。わが神、わが神」とは彼が今の叫なりき。黄昏ソレンスタインの軍破れさりぬ。アドルフは死を以て北歐の宗教上の自由を購ひしなり。ローウェンシュテールの二詩又名あり。一六三六年戦者なり、軍人たるマルチン、リンゲハルト「いざやこゝに聲うちあけて」(三三六)をものしぬ。是れ編述の「Deum」とて國家の大典に用ゐらる。フレデリック大王の軍ルーセンに勝つや之を歌ひ、普佛戦争の時も普蘭士軍は響々之を唱へき。グアイセル、ニウマルク等の作又之に次で名あり。同じ頃の作家ヘルマンはシレンヤの牧師なり。その地の戦亂の苦なりしより生死の間に出入せしこと幾回なるやを知らず、感慨あふれて、聖歌なる。歌は多く新編の意をこめたり。ヘルマンの主観的な反して、ミストあり、その歌は客観的ななり。

十七世紀の後半にはゲルハルト、フランク、シエツフレールの三大家あり。就中ゲルハルトはルーテル以後の第一人といはる。彼の歌は概して長篇なり。その讚美歌となりて存するもの多くはその節節也。内容は個人の経験を歌へるものにて概して主観的也。「主はわが友、われ主のもの、仇は圍むまじ、いかにあそれん」(三三三)の歌は此の四十三年迄迄迄する迄なく、四十八歳迄迄らす、聖り、妻は長く病みて死し、五人の子の中四人まで失ひ、終にルーベンの寂しき寺領に隱遁せし種阿不遇の人の作也。彼の作に多きは我といふ語なり。みづかひ

讚美歌

の歌は空をわたり、地にもひやく(同六二)といふも、この人のなり。その子の愛かりしをりの「わが子なり、まなり、かくてもなほ我子なり」の時もあはれなり。而してフランクとシエツフレールとは、共に神の愛を歌ひしもの、一種の情熱あり。十七世紀の末に敬虔教徒顯はる。ゲルハルト以下の作を讀まば驚る思湖の偶然ならぬを知るべし。この派の人また特殊の歌ありき。シエツフレールの「てらしたまひれ、ひかりの光よ」(同四三)はその一例也。テレスターケン等の作また持てはやする。ツインツェンドルフはモラヴィアン教徒の心懐なり。其のサキソニーより追はるるや、亞米利加に往きてハンツルバニアに留まること數年、感化の地に現れり。作歌凡そ二千首、實より量に於てまさるその評もあれど「なほエスぞみちびきたまふ」といふ一篇の如き、作者の信念を窺ふに足らん。ツインツェンドルフの後反動起りて、ゲラルト、グロブスタックなどの、やう冷静にして教訓的な歌はれぬ。

佛國革命の起るや獨逸の讚美歌また其影響を受けた。ノグアリスとフォークとは新時代を代表せり。之をローマンチック派といふ。情深くして想像豊富なり。十九世紀に入りての獨逸の聖歌は敬虔教徒の歌の復興せしものと見るべし。アルント、アルベニ、テニ等名あり。去れど聖書にあつきものをスピットマとなす。この點に於て彼はゲルハルトの邊を摩すといはる。たゞスピットマの作は讚美歌といはんより聖詩也との評あり。

【英國及び英語の讚美歌】 英國も初めは他の國と同じく、詩篇を歌ひしに過ぎし様改作して禮拜に用ゐたりき。ヘンリー八世及びエドワード六世に仕へしトマス、スタンホールドの一五四九年に公にし

讚美歌

たるものを世に詩篇の舊版といふ。凡て三十七篇也。其後次第に斯る企ありて、一五六二年には歌はるる様になりたる詩篇の全部あらはれぬ。この書にはテアマム、主の祈、朝夕の祈なども添へられたりき。

蘇格蘭にて一五六四年教會の總會にて一定の禮文を編纂する事を定め、大體に於て以上の詩篇を採用したりき。ウェームス一世の治世右の詩篇を改譯せんと企あり。一六三一年ウェームス王の編輯といふ名義にて世に出でたり。一六四二年の「長期國會」にては更に詩篇の改訂案を審議する事となり、上院はパーソンといふ人の譯をよしとし、下院はロースといふ一議員の譯を可とし兩相下らざりき。一六四六年國會の請求に依りエナンバラの總會にて改訂委員を擧ぐる事となりぬ。委員等苦心年をこえて一新譯を得たり。この譯大體ロースの案に基きしものなり。蘇國教會擧りて之を用ゐぬ。

英國にては一六九六年博士ニコラス、ブラッデー、欽定詩人ナーム、テートの二人相結びて詩篇の新譯を公にした。この譯教會に容れられて盛んに用ゐられぬ。テート、ブラッデー合作の歌は今の讚美歌にもその面影を止めたり(二五〇其他)。かく詩篇のみを歌ひたりし時は會衆の心引立たざりしかといふに然らず。英國の教會は永き間之を用ゐ今なほ用ゐ居る也。近代の意味にていふ讚美歌は十六世紀の中頃蘇國の詩人ウェッゲパーソンがルーテルの作數篇を譯したるに始まる。十七世紀の上中期にはワイザーといふ詩人あり、讚美歌作者として記憶せらる。同世紀の文人にてはミルトン、テラー、ドワイヤンなど聖歌に筆を染めたり。その頃即ち十七世紀の中より英語讚美歌は體をなしたる觀あり。讚美歌史の

サの部

讚美歌

著者アードは英語の讚美歌を次の三期に分ち、第一期を一六五〇—一七八〇年、第二期を一七八〇—一八五〇年、第三期を一八五〇—現代とせり。我國の讚美歌と斷ち離さるるある讚美歌のこゝなれば、之に従ひて略々詳かに説かん。第一期の歌は教理的、教訓的、第二期のは傳道的、福音的、第三期のは經驗的にして敬神の念に富む。

(一)第一期は國家も教會も共に多難なりき。三十年戦争の傷未だ癒えず、ウエストフリアの條約成りて後二年のみ。佛國にはマザリン政權を執り、英國にはクロンウェル共和政を布き、チャールス一世は刑せられ、米國の殖民地も多事にて英人と國人とは相争ひ、ニウアムステルダムはニウヨークと變せんせり。やがてチャールス二世は英國の王となりたり。倫敦に時疫あり、死するもの數萬、大火あり、全市場と焦土となりぬ。和蘭との戦もありき。新教最後の勝利もありき。十八世紀は西班牙國相續の戦に初まり、フレアテック大王の戦も長く、やがて佛國革命の大波瀾となりぬ。國家かくの如し、教會堂變なきを得んや。宗教上の異見、宗派心の我執は政事上の争論、國民間の紛亂を惹起したり。戦は國家の争にして又宗教の争なりき。メソヂストは起らんとし、アルメニアン派とカルヴァン派とは相争へり。ヒウム、ホルター、ギゴンの如き人物も顯はれ「天路歷程」も亦公にせられたり。かゝる時の讚美歌の教理的なるも教訓的なるも自然の勢といふべし。

此期の初に於ける高名なる作家を監督ケンとす。この人牛津の出身にしてチャールス二世の宮廷牧師となり、侃々諤々當時の腐敗を責めたりき。マコワレ一箱ケンを評して「人間の弱點を有するものとして

讚美歌

は基督教徒の理想に達せり」といへり。ケンの作多けれど世に用ゐらるるものは歌二首、頌一首のみ。此三首皆どこ何れの歌集にも存す。朝の歌(同三三)、「夕の歌(同三一)及び頌(同四六)」是也。アイトソンの作にして讚美歌中第一流に位するものを「はてしも知られぬ天つ海原を(同四二)とす。『みよみめぐみと思ひ見れば(同五〇)』といふも、この人の作にて「感恩の情」といふ論文に添へしもの也。英國の獨立教徒にアイザック、ワッツあり。讚美歌界の巨人たり。ワッツ少年の頃より宗教上の波瀾の中に漂ひ、青年の頃に非國教徒の事にて當時は大學に入る事を得ざりき。此の人の歌は、何れの聖歌集にも頗る多し。日本のにも「主のさかえに」入りたまひし(同二七)「わが神、わが主、みよみよについで」(同二〇)を初めとして三二、四六、四九、五八、七四、八四、一一〇、一二五、一三一、一四七、一五四、二〇五、二三四、二七七、三二二、三二四、三四六など何れも此の人のなり。次で出でたるをドッドリツゲとなす。作をなすに精や苦心をなし、技巧を弄したる跡あり。ワッツ、ウエスレー杯とは肩を比ぶる能はざれど、よき歌少からず。もろびと譽りて迎へたまつれ(同五七)は作中の白眉也。その他「主エスを知りぬる」(同二九)「神にたより」(同二一八)「めさめよ我がたま」(同二八〇)なども佳作也。此の人の歌には聖書の語のよみ籠られたるもの極めて多く、教理的なる故や理屈に陥れり。ワッツ派の女作家にステールあり、女流讚美歌作者の初め也。そのすぐれたる作は「たえぬひかり」(同三三)「みよみめぐみ(同三五)なり。蘇國のエルスキンといふ作家も、ワッツの感化を受けし者也。メソヂスト第一流の作家のチャールス、ウエスレーなるは、いふまで

讚美歌

もなし。彼はワッツと共に英國の二大作家なり。見なるウエスレーは獨逸の讚美歌史中ゲルハルト、シエツフレール、テレステケン、ツインツェンドルフ等の作を譯したれ共如何程まで原作を出だしや明ならず。弟のチャールスは評を抜きたる作家にして、その作に以上の獨逸作家の調を傳ふ。チャールスの歌はワッツ一派のより主観的にして、精や教訓的也。同じ思想を繰りかへすより時にうきなき感なき能はず。いかなる物に逢ひても心の向き方一様なるもその短所なるべし。されどその感情は切にして深く、歌ふ所正論を得て、調も優れたるものは疑もなく「わがたましひを受するエス」(同二二七)「われは我がたましひの、ひ人エス」と思ひ切りて譯するを至當と信ずとす。此歌のそのの題は「誘惑にかゝりて」とあり、ウエスレー兄弟が暴徒に道はれし頃の作也といふ。英の讚美歌中トブラアの「千歳の岩よ」と優劣を争ふ。情の温きが「この作の長所也。その他「夜をみる月に今やわがりて」(同三)「エスのみよみめぐみとみよみ」(同二九)を初めとし六〇、一一一、一一二、一三八、一四五、一五七、一六八、一六九、一七八、一八二、二〇三、二二〇、二四七、二七四、二九四など、或は喜ばしく、或は勇ましく、或は優しく、或は生氣あり、或は感を見るが如し。三六の「よるづもの」のそばに「しらす」といふをも、チャールスの作とする説あれど、うけがたし。後にウエスレーと別れし傳道者にヘロツットといふあり。『あまつみづかひ』、エスの御名の(同九五)の大作を以て聞ゆ。モラヴィアン派のメソヂストにセンニツクあり。『みよ雲に乗りて』(同二〇六)といふ名歌は、彼の

サの部

讚美歌

作をチャールズ、ウェズレーが透視したるものと稱へらる。之を英語の「Hymn」とす。あまつみやこに召されてのぼる(同二五九)のぼりたまひしエスキみのあそ(同二七七)またその作なり。カールゲン派のメソヂストにトブラデーあり。其のソマン、ウェズレーと激しく争ひしは人の知る所、作家としての天分極めて豊かなり。その『千歳の岩』(同二一五)は、テラッドストーン之を拉丁語に譯したりき。『なやみと病のなすとき』(同三二七)又この人の作なり。歌の終り、始めの美はしきを缺くとの評あり。ウィリアムズまたカールゲン主義メソヂストの使徒なり。『わが大神よ、つよき御手もて』(同二二六)はその大作也。時人之をウエルスのワァツツとす。第一期の終りを飾るものをニワトン。カワバルの二人とす。『オレニー讚美歌』は即ち此二人の力を籠めたるもの、ニワトンの雄々しく、カワバルのは優し。ニワトンの作時に乾癩なれど、時に羅海の高潮に乘ず。ニワトンに『さあ、文に満ちたる神の都は』(同二一〇)あれば、カワバルに『みめぐみあふる、イマエルの』(同二八五)あり。エスキみのみは(同二二二)『なやみのあらぬ』(同三六〇)『なほのたびら』(同二八)『いざわがたま』(同二四四)『友さあ、いふ友は』(同二九六)などニワトンのなり。殊に三六〇、二九六など叙録の水夫たり、船長たり、遂に節を折りて書を讀み、熱心なる修道師となり、變化ある生涯を送りし人の作として見れば面白し。多病多感、幽鬱狂亂の氣味あり。三度まで自殺を試みたるカワバルを保護して、讚美歌をもせしめたるは、ニワトンの力なり。カワバルの詩には、時に餘りありと思はるる所あり。されどそれはこの詩人にとっては實驗のことばなるなり。

讚美歌

『われらもいづみを深く潜り、紅の罪を皆洗はれん』などの句はその一例なり。カワバルの歌にて最も見事なるは『神は風に乗り、波をあゆむ』(同二一九)なるべし。『みづのひかり』(同二四八)は實驗の歌也。『いづくに御民の』(同二八)は、オレニーの新福音場を廣き處に移したる時の吟也。』
 (二)第二期 第一期より第二期に入るは、一の新世紀に入るが如し。新教は樹立せられ、英國には前朝の如き大内乱はあらず、佛國革命は一時停頓たる光景を呈せしが、それより方に静まり、ナポレオンは各地に轉戦せしが、渾沌たる中より秩序は生じぬ。トラファルガーに、ウェストローに、英國海陸の権力は動かす可らずなり。グイットリア朝の文筆は開きぬ。一七九〇年頃より傳道會社は相續きて起り、一八〇〇年には英國に大ババイルあり、奴隷賣買は一八〇七年に、奴隷制度は一八三三年に廢せられたり。傳道の福音なる第二期の歌はかくして世に出でたり。此期の初めに出でたる有数の作家をセントゴメリーとす。第一流の作家は云ひ難けれど、第二流の上位を占むるものなること疑ふべからず。その傑作は『ちよの定めし時』(同二七五)『七』(同二七五)『新は口よりいで、こゝろ』(同二三七)は讚美歌といふよりは詩に近しとの評あり。その他『主よ、まよひの』(同二四)『みそらけりゆく』(同六八)『うみゆくとも』(同二九六)『主よ、試み』(同二七六)『主よ、共ならん』(同三五二)『たふさきかな』(同四三五)等あり。ミス、アワパーといふは、英國教會の信徒也。女史に『おほひ上れる諸國民』(同二六三)の作あり。傳道の歌也。ゴータス夫人の作と傳へらるる傳道の歌に『いまこそほつち主にまつらひぬ』(同二五五)あり。是してさる人ありしや、

讚美歌

はた誰人かの雅談なりしや明ならず。マリオットといふ英國教會の教師に『こゝの闇をば』(同二六〇)といふ傳道の歌あり。ヒーバーは第一流の作家也。傳道の歌として凡を越えたるは『きたのはてなる水』(同二五三)也。莊嚴なるは『聖なる御なる』(同三五五)也。その他『くしき星』(同三七二)『世のためさかれに』(同三三九)『あくまの國を』(同二七六)などあり。『あしきめ』(同三三七)は作者が子を養ひしをりの作として痛ましく、『みづみのたなびく』(同四二四)は優し。ヒーバーと時を同うしたる英國の作家に、ヘスチングスあり。『あなうるはしシオン』(同四一六)をもて知らる。是も傳道的なり。福音のフイブ、フアオン又同代の人也。ペンキ屋の妻なりし此の人の歌に『わづらはしき世をばし』の『れ』(同二四一)の佳作あり。貧家の世話女房が富家の夫人に恥かしめられしをりの吟なり。『月の影はうすれゆく』(同二四〇)また誦すべし。政事の大氣の中に人となりたるロバート、グランドは、銀婚の出身にして、ゴンベイの知事なりしが、作家としても第一流に位す。『あめつちの御神をばほめまつれ人の子』(同二五二)といふは莊大なり。『われらば歴の中にひれふし』(同二〇六)も亦大作なり。詩人カーター、ホワイトも聖歌をもせり。その名を得たる作を『みそらにきらめく千よあつ星』(同六八)とす。『みづみはちのうみかみ』(同四〇)また見事なり。たゞこの人の吟は獨り吟に宜しく、衆と共に歌ふに可ならずとの難あり。ミス、エリヤとといふは英語をもせる讚美歌作家として『主よ』(同二一)の名あり。『いさなを血を流して』(同二一)は、作者自身の悔改の時を感興也。ヒーバー風の歌として其後かゝる歌種出したれども、之を

サの部

讚美歌

邊りには少なからず。『花のあけぼの』(同二一九)『うつりゆく世にも』(同二九五)などの作存す。一八二七年キープル、クリスチャン、イヤアを公にしたり。この書は教會の年中行事を歌へるものながら、幾多の見事なる讚美歌はこの中より採られぬ。キープルは牛津運動の領袖たり。自ら醒めて教會を醒さんとしたるこの運動はめざましかりき。キープル、マント、ニウマンのがじになる歌を残せり。キープルの『くるあそび』(同二二二)『は』(同二二二)『クリスチャン、イヤア』中の朝の歌也。『わびた』(同二二二)は同書の中の歌也。『いもせの道』(同三八二)またその作也。カール、イヤア、ニウマンの大作は『みめぐみあふる光』(同二二二)也。第五節の天使の我を慰ふといふ思想に、種々入る人あれども、それは窮屈なる見解ならん。第二期の作家中第一と稱せらるるは、ライデー也。その傑作『エスキミ十字架を御手より受けて』(同二二二)は自己の經驗を歌ひしもの、道を他人に傳へつゝ實は眞の道を知らざりしに、朋友の末期に會して熱主を認めたりしをりの作なり。『日暮れて四方はくらぐ』(同九)は健康すぐれずなりし牧師が會衆と最後の聖餐を共にしたるをりの吟也。ユニテアン教徒にはアダムス女史あり。『主よ、みも』(同二二二)は、本歌のしてはやさるるを思ふべし。英國の監督ドーンも作家たり。『ひかりしづかに』(同二二二)『つみのひさやより』(同二二二)などの吟あり。されど英國讚美世界の二大家は、バルマーとミスとなり。『まごころを』(同二二二)は、病にせめられ居りし事として情いそ切なり。ミスは英國教會の作

讚美歌

者にして又讚美歌作者たり。バルマーは神學者、ミスは實行者といふ趣あり。近代に出て來るを集めたる作家をヒーバーとす。『つみの重荷をエスキみに』(同二二二)などなやめる者のさまを畫き出してめでたし。『つかれたるもの我に來り』(同二七五)は樂にあはして引立つ歌なり。その他二〇一、二八六、三三〇、四四七など和譯あり。アルフォルドといふは第二期の聖歌たり。『ゆきしもしげき』(同三七八)といふ作をこめたり。』
 (三)第三期 第三期は或る意味に於て讚美歌の衰退期也。是れ或るものを捉へんとて未だ捉へ得ざるにやあらん。過去の想と型とにて何ぞやら物足らず、さればさて新調未だ整はぬに似たり。されば讚美歌界には編造その他古歌の翻譯盛行はれ、新しき知らんとして故きを温ぬるなり。大體の調は空理を説かずして實験を重じ、切實に神に對せん。この期に至りては婦人作家の出づる事實に著しく、ホルスウィック、フエンドラター、ウインタウキーの三女史は編造の作を紹介するを以て任となせり。その他ワリアン、アレキサンデル、ハーバード等婦人作家たり。アレキサンデル夫人の『みや、の外なる』(同二六六)『さんびが』(同二七三)『世の涙さわげど』(同二六六)等あり。ハーバードは恐らく當代婦人作家の隨一なるべし。『作は祈禱なり』といへる此人の言は、歌にもよく現はれたり。女史Book Heroの語を見て『此身を君にささげまつる』と云ひし以來、心狀一轉已を空うして主に仕へたり。『きみなるエスキ』(同二六三)『わがきみエスキ』(同二八九)などの婦人の想をうかばしむ。女史にさしてはイエスは決して千餘年の前にありし人物にあらず、彼方に必ず會ふべき君なりしなり。世人

讚美歌

女史を評して十九世紀のセオドワといふ。男子の作家にてはヒーバー最も名高し。但し批評は紛々たり。『みづみのたなびく』(同二五五)はそれを代表するに足る作なり。『みづみのたなびく』(同二五五)また愛時せらる。カスワルとニールとの二人は、希臘及び拉丁の歌の譯者として聞ゆ。監督ホアの作又重んずべし。『閉せる門をばたさきて』(同二八七)など人を動かす。『あめりくどり』(同二二八)『わがさうぐる』(同二四九)またよし。ムデー、サンキー一派の福音歌は別に一派をなす。その作家フアンニー、クロスビーの如きは、一人にして既に三千餘首の作あり。福音歌の米、英兩國を動かしたるは驚くばかりなり。されど調準ればその歌と曲とは、ヒーバーの集會、青年の會合その他に限られて、未だ教會の禮拜に用ゐらるるに至らず。之を以て讚美歌にも音樂にもあらず、歌の説教なりといふ論客すらなきにあらず。何せよかの地の教會にて『The Hymnal』を稱するものには此種の歌を見る事稀也。尤もプレスビテリアンの讚美歌には此種の曲一二首を収め、更に後に出版したる南北美以教會の歌集には、クロスビーの作五首、サンキーの曲一を収めたり。』
 【日本の讚美歌】 支那は東洋にありて傳道の門戸古くより開けたる所なれば、讚美歌も亦早く入りしなるべし。其の公讚詩には二百七十五首を含む。翻譯佳なりと雖も原作の如何は知り難し。ヒリッセンの如きは英國が土を得て後に日本にてその讚美歌を印刷したるなり。日本の讚美歌にて早く出でたるは一致教會の『讚美歌』なるべし。其中に『我母のふさころを』とされしは『云々』といふあり、奥野昌綱の歌也。メソヂスト教會の『基督教聖歌集』は元氣

ザイオの罪祭

ザイオ

ザイオの罪祭

ザイ

はよかりしが繁華なる書なり。明治廿三年(一八九〇)の『新撰讃美』に至りて新界は一新したり。奥野昌綱の歌の熱ある、松山高吉の言語に富む、植村正久の趣味あるとあはせて貢献する所多かりしならん。降りて明治廿六年(一九〇三)に至りしんびりあはる。新教の各派は爾來同一の歌集を用ゐる事となれり。而して此集は『The Hymnal』といはんにあはれり。多し。福音歌集をふくめるものなり。これ國情の相違にもよるならん。而して、この日本の讃美歌時代は、今後ありといふべし。想に於ても、調に於ても、然らざるを得ざる也。

【参考書】 一巻にて備はれるを求めんには、Julian's Dictionary of Hymnology 宜し。Duffels English Hymns 又可也。英語に譯しある詩は、希臘の昔より獨立の近代まで包含す。Breder's The History and Use of Hymns and Hymn-tunes は組織たる真書也。前の歌者には、目的を異にする『詩論の評論』の記者ステッドの編輯せる Hymns that have helped 小冊子なら面白し。福音歌集の事を知るものには、Sankey's My Life and Sacred Song あり。傳通用によし。大英百科全書中の『讃美歌』は堂々たる文也。本文之マブリードの著者に負ふ所多し。

サン・マタン・ノイ・クロード

人名

Sancti, Louis Claude de. 人名 一七四三—一八〇三 佛蘭西の神学者。アマダスに生れ、篤信なる家庭に成長し、宗教學校にて教育を受け、法律を修め、陸軍に入り、ポルトガル守備隊士官の時、ドム、マリーナ、ド、パルカールの熱心なる心腹者なりしが、間もなく之を離れカゲリオストロと結び、スウェーデンを研究し、軍隊を辭して

ザワイエ

人名

Zawiey. 人名 一五〇六—一五二二 イエズイット社の宣教師。印度の使徒と稱せらる。西班牙國ナダールの風習顧問官。アンデ、マヤツの末子也。幼より強健、調達なりしが、武を好まずして文を嗜みしかば、一五二四年父を巴理大學に送り、聖パルバ校に學ばしめたり。學業の進歩速にして、二八年彼は既にカレッサ、デ、ボワザイのアリストテレス哲學の講師となり、三〇年マストルノの學位を得たり。此年彼はイエズイット社の創立者イタナシウス、ロヨラと相知りしが、ロヨラは忽ちザワイエに最良の宣教師たる資格を有するを看破し、遂に彼を助めて其宣教師の事業に與ることを承諾せしめ、七人の同志を得て一五三四年イエズイット社の基礎を敷き、聖地傳道の計劃を立てたり。ザワイエは其他の同志と共に三六年以大利に往き、法王パウル三世より聖地傳道の許可を受け、三七年ゲニニスにて按手禮を受けたが、ゲニニスと土耳其との間に戦端の開かれたるため遂に聖地傳道を果さず。ザワイエは其他の人々と共に内地傳道に従事したりしが、葡萄牙王ジョン三世が東印度の領地に宣教師を派遣するの企を爲すに至り、ロヨラはザワイエを選みて印度に赴かしめたり。於是ザワイエは法王より其聖休たるべき簡文を得、先づリスボンに往きて國王に謁し、其信任を得て、一五四一年四月七日其三十五回の誕辰を以てリスボンより印度に向て出立し、翌年五月ゴアに着せり。彼は此處に五箇月間止りて活動し、道徳上諸種の改善を謀り、次でコモリンよりムバに至る海岸に十五ヶ月間傳道し、四三年の末一たびゴアに歸り、夫れよりトラヴァンコーアに往きて其處に成効ある働をなし、

ザイオの罪祭

ザイオ

ザイオの罪祭

ザイ

『誤り』(七七五)『神と人と宇宙との間の關係の性質』(一七八)を著し大に注意を喚起す。又英國、以大利、羅馬等を巡りて、各地にてウィリアム、ロー、ベスト、ガラツツイン一族など時の神祕者流と交り、八八年より九一年までは愉快にストラズブルに住み、メーメを研究し『神の人』『エタケ』『新神』を著す。佛蘭西革命をば大に讚美せしが、其の道徳責任を缺けるを見出だして、九年『友へ贈る書』九七年『人道會の光』一八〇〇年『事』の精神を著し警告せしむる人なく、一八〇二年『人の靈の善』を出だせし全くシャトーブリアンの『基督教の精神』に壓倒せられたり。晩年は重にヤコブ、メーメを佛譯し、此大難事を甚だしく成し遂げたり。フランツ、フォン、ポートルは彼の著を大抵獨譯に譯せり。彼は見神的精神を組織せざりし。書中基督教真理の光の閃めけるを見る、少からず。

ザイオン派

宗派名

Zionists. 宗派名 ゾン、アレキサンダー、ドローイーの創設せる一派にして、又『クリスチヤン、カトリック派』と稱す。其條を見よ。

罪祭

儀式

Sin Offering. 儀式 古代以色列人の獻げたる犠牲の一種。其規定は利未記四章に記さる。罪祭に於て主とする所の意は清罪及び救罪にして、知らずして犯せる罪のために設けられたる者也。罪祭に等儀あり。此等儀は贖るべき罪の輕重に依りて定むるに非ず、此禮物を獻ぐる人の身分に應じて定むる。例之全會衆を代表する祭司長の罪を贖ふには、一個人の私罪を贖ふよりも一層嚴密なる清罪法を要するが如し(利四の三一—三二)。又支那の罪は平民の罪よりも重なるを要する者

ザカイ

人名

Zachary. 人名 此の名稱は舊約書中(利二の九、尼七の十四)に存するザカイ(純潔を意味す)の一名稱なり。新約書中に存する稅吏ザカイは路十九の一十に傳へらる。彼はユダヤ人にして、(テネチウリアヌスは彼を異邦人なりと云ふ、此は路十九の九の「アラハム」の裔なる記事に合はす)エリコに於ける稅吏の長なりき。ザカリヤ Zacharias. 人名 此名を眞ふ

ザカリヤ

人名

ザカ

させらる(四の廿二—廿五)。最高級の罪祭に在りては犠牲に供するに禮の若き者を以てせり(出廿九の十、十四、廿六、利四の三、十四)。贖罪の日に於て一般人民の罪祭として供する者は二頭の牡山羊也(利十六の五)。其他毎年の祝祭及び新月節に於ても亦(利十六の五)。(廿二、廿三)。平素以色列人の罪祭には一の山羊又は牡羔を供す(利四の廿八、卅二)。極めて貧乏者は雄鳩又は鴿を獻ぐる者定めらる(利七の七、十四の廿二)『犠牲』及び『罪祭』の條參照。

ザイレ

人名

Zailer. 人名 一七五—一八三二 選の神学者。一七七年イエズイット派の學校に入り、七三年同派解散後インゴルスタット大學にて神學及び哲學を修め、八〇年教義教授とせられ、後アインゲンンの牧會學教授に轉じしが、九四年政治的陰謀に與みし、又イレルミナテ(社會改革の一團體)に入れりて訴へられて俄に解職せられ、多年ムニヒ又はエスネルセルに退きて著作に從ひ。極端本山派は彼を正統派ならずと思ひしも、此れ理由なき疑にして、彼は終始熱く神學の信仰を抱き、唯理派及び宗教風潮の對して戰ふこと頗る勇たり。著る内に其著作『諸世紀の文書』宗教の根本教義論、福音書の教育書、上の智慧等、由りて弟子等集まり來り、神學校なくして宗教的感化著しく、外國よりは屢々許を尋うして招き來れり。一八一八年普魯西王は彼をケルン大監督にせんさせし、バイエルンを去るを欲せしめて之を許し、二一年レーゲンスベルクの教職員とせられ、二二年副監督に、二九年監督とせらる。メルキナル、アイヘンプロックは弟子中の有名なる者なり。

ザカリヤ

人名

Zacharias. 人名 舊約書中此名を眞ふもの廿七人あり。撒加利亞書(一—八)を書きたる預言者ザカリヤに就て『撒加利亞書』の條を見よ。撒加利亞書 The Book of Zacharias. 經名 舊約經典預言書中の一書。内容及性質を異にせる二部より成る。(一—八)章(二)九—十四章是也。初の部分はザカリヤの書きたる者なれ共、終りの部分は他の時代に、他の人の書きたる者なること明也。『ザカリヤの眞の預言』の一の二に其名の記されたるザカリヤの眞の預言は、一章より八章に涉り、三部に區分せらる。即ち左の如し。(一) 一の—六、ザカリヤが其同胞に向て悔改を促せる簡短にして而も熱切なる勸奨。彼は彼等の先祖等がさきの預言者等の警告を聞きしらずして受けたる結果を示し、以て悔改の必要なることを説く。此預言はダビデ王治世の二年八月、即ち哈基書二の一—九の預言と二の十一—十九の預言との間に爲されたる者也。

ザカ

撒加利亞書

ザカ

ザカ

ザカ

ザカ

サの部

撒加利亞書

撒加利亞書

撒加利亞書

(二) 一の七、六の九、同年十一月なされた預言にして、八箇の表號的異象を記し、附するに六の十、十五を以てす。猶太人、殊にゼルバベル及びヨシヤに向て神殿再築の事を奨励せんために爲されたる者にして、各異象とも天使之をザカリヤに説明せる者として記さる。

(三) 七、八章、ダリヨス王治世の第四年九月に爲されたる預言。第七章にはゼルバベルの人々が第五月に守りたる斷食(神殿の滅亡を記念せんため皆因の同守りたる者也)は尙引續きて守るべき者なりやと問へるに答へて、ザカリヤがエホバは斷食を要め給はず、其要め給ふ者は彼の道徳的教誨を守らんことにして、彼等の先祖等は之を守らざりしかために刑罰を受けたる也と云へりとの事を記し、第八章にはメッシャの將來の光景を描き、其時には國は榮へ地は其果、物を生じ、其初めの日は歡喜の時となり、諸國民は來りて猶太人民の福祿に與るべしと云へり。

【ザカリヤの活動及び思想】 ザカリヤはベレキヤの子、イダの孫にして(一の一、七)イダは俘囚より還りたる一祭司の家族の首長なり(二の四)。

故にザカリヤが其民の中に預言を始めた時は、尙幼弱かりしならんと思はる。一の二に依れば、彼はダリヨス治世の二年八月、即ちハカイより二月月運く其預言を始め、第四年七月まで其勳を繼續したりしかし(七の一参照)。去れば彼の活動せしは凡そ二年也。其政治的背景はハカイのそれと同じく、ダリヨスの即位と共に大なる恐慌を生じ、エルサレムの人民は深く壓迫を感じ、エホバは其民を恤れみ給ふことなく、遠く離れ居り給ふが如くに思惟したりき。於是ザカリヤは其同胞に希望の念を起さ

しめ、終極の時の速に來るべきことを信ぜしめんことを努力したりしが、彼の努力は多少成功したりしが如し(七の二以下参照)。ザカリヤに依れば、メッシャの日の來るに缺くべからざる條件は、神殿の建築にして、エホバ再び其民と共に住み給はば、凡ての異福は其終を告ぐべしと也。故に彼はハカイと同じく人民をして神殿建築の事業を企てしめん、ことに其全力を集中せり。ザカリヤが祭司の職を以てメッシャ王の來る保證となせるは實に之がためにして、彼が其當時の人々の希望を勵まさんと努力せるはメッシャの預言が此書の中心を占むる所以の事實を說明す。書中に記せる異象は、凡て當時のメッシャ的期望を中心として起れる者なるが故に、吾人は此書より當時の人々が有したりしメッシャ的期望の如何なる者なりしやを知り得べし。此期望の中心的人物はメッシャ王にして、ザカリヤは之をツエマーと呼び、ゼルバベルと同一視す。而して此書の編輯者はゼルバベルに代りて、祭司長ヨシヤを以てせり。ザカリヤに在りては祭司長は顯著なる地位を占め、彼はエホバの前に人民を代表し、隨時エホバに近より得べしと爲せり。

此書には哈基書と同じく、直接なる預言のインスピレーションを缺く。預言者に爲されたる神の使命が、天の使に依りて傳へられたるが如く記さるは之がため也。故に異象は此書に在りては最早直覺より來れる者に非ずして、熟慮せる考察の結果として得たる者也。斯く此書に在りては天の使顯著なる地位を占むるに至りしが、此は超絶的なる神の觀念の發達し來れる結果にして、當時の思想に依れば、エホバは人の上に高く其坐位を占め給ふ者なるが故に、人は天の使の仲保に依るに非ざれば、直接に之に近

可らずと爲せり。サタンの初めて顯はれたるは此書なれ共、此書にては尙一箇の名稱たるに過ぎず。是が固有名詞の性質を帯ぶるに至りしは代上廿一也。此書に於て發達せる他の觀念は、罪を以て獨立せる力となすの思想にして、罪は婦人として離人化せられ、シナルの地即ち滅亡の國に携へ往かれたりとして記されたり(五の一以下)。シナルとは異邦全體を含有するの稱也と思惟せらる。又此書には哈基書に於けるが如く、但以耳書に於て發達せる神の國と此世の國との思想の萌芽あるを見る。素より此書に於ては此二者尙未だ著しく對立せられざりしと雖も、一には第二以賽亞書の思想の影響と、又一には不信なる異邦民に對し、以色列人が真正の宗教を傳ふるの任を負へりとの自覺を有したる結果とに依りて、凡ての國民の中より救を求むる人々エルサレムに集り來りて、其處に住むべく、エホバは其民として彼等を所有し給ふべしとの思想を此書に發見すべし(二の四以下、八の廿以下)。是れやがて但以耳書に至り神の國と此世の國との對立せる思想の基をなせる者也。

【第九十四章】 (一) 内容、第九章はダマスコ、ツロ、シドン及びバシテの上に来るべき審判の言を以て初む。エホバはエルサレム及び其住民の保護者にして、メッシャ王は驕馬に乗り、エルサレムに來り此處に坐すべし。斯くして諸國民の争は止み、俘囚に在る以色列人は其國に還るべく、エホバは己に敵する者を服従せしめ、其民を養ひ、よき者に報らむべし。第十章に於て預言者は、以色列人がテラヒム又はト黨に頼ることなく、エホバに頼らんことを勸む。以色列人は徒にテラヒム又はト黨師の如き、空しき事を言ひ虚偽の夢を語る者に頼るが故

サの部

撒加利亞書

撒加利亞書

座席のザツク

に、無能なる牧者のために痛まざるべし。然れ共エホバは此等の牧者を罰し、ユダの家を顧みて之を強くなし、又エフライム人を救ひ其地を歸ることを得せしむべく、埃及とアッシリヤとは其後より卑くせらるべし。第十一章は一二三節にバレスナナの東及び北に起るべき戦の光景を記す。四一七節は其當時起りたる事實の物語にして、預言者は此處に其説教の内容を如實的形に於て示せり。彼は以色列の民を教養せんため、當時の無能なる牧者に代はるべき使命を蒙り、恩恵及び調和の二主義に依りて其民を牧したりしが、彼の其民を顧みて如く彼等も亦彼を惡みたりしかば、彼は如上の二主義を棄て、エホバの教に従ひて思ふる牧者の爲す處を爲したり、是れエホバの彼等を罰し給ふ道なりければ也。十三の七、九は此に記せる威嚇の言の補遺として見るべし。第十二、三章(六節まで)は一箇として見るべし。諸國民及びユダはエルサレムを圍むべし。去れ共審判はユダより諸國民に移り、エルサレムは安全にして其もこの處に居ることを得べし。エホバはダビデの家をエルサレムの民の榮のユダに歸ることをなからんため、初めユダの民を救ひ、又エルサレムを守り、エルサレムに攻め來る諸國民を滅し給ふべし。斯くてエルサレムの居民は其割たりし者を仰ぎ見、彌子のために哭くが如く之がために哭くべし。而してエホバはダビデの家を其居民のため、罪と汚穢とを潔むる一の泉を開き、地より偶像の名を絶ち、預言者及び汚穢の靈を去らしめ給ふべし。第十四章は再び諸國民のエルサレムを攻撃すべきことを以て初む。色は取られ家は掠められ色の中は擄へられ往くべし。其時エホバ出で來りて其等の國人を攻め撃ち、其足を嶺山の上に立つべ

し。嶺山は其眞中より東西に裂け、大なる谷を成すべく、居民の中は此谷に逃れ入るべし。此日に光明なるべく輝くもの消失すべし。然れ共唯此に一日の目あるべく、輝くに活ける水エルサレムより出で東西に流るべく、エホバ全地の王となり、エルサレムを攻撃せし諸國民は生きたる英魂を受くべしと雖も、遠れる者はエルサレムに集り來りてエホバを拜し、擧げ節を守るべし。

(二) 各部分の關係及び時代、關しては學者の説一致せず。故に之を確定せんこと頗る難しと雖も、四箇の別々に記されたる斷篇の集りたる者也との説は最も信すべしに似たり。即ち(イ) 第九章(十の一三を含む)及び第十章三節より十一章三節は同一作者の手に成りたるが如し。此部分が何時頃成りたるものなりやは明ならざれ共、九の十三に「メッシャの人々」を以てエホバの民の最も大なる敵として記されたるを見れば、亞歴山大王の次ぎの時代に屬する者也と推定するを得べし。然れ共此外に連るべき歴史的地位の明記せらるものなれば、果して何時頃のものなりや正確に推定すること能はず。

(ロ) 十一の四一七、十三の七、九は前の部分の作者とは別の作者に依りて書かれたる者の如し。此處には作者の當時に起りたることを記したる者なれ共、何時頃のことなりや明ならず。然れ共十一の九、十六に牧者に就て云へることは、以西結書卅四章に照してのみ理解し得べければ、俘囚以後に歸する者なることは疑なし。(二) 十二の一、十三の六も亦他の作者の手に成りたる者にして、此部分が俘囚以後の作なること疑なし。(三) 第十四章も亦前の部分より外の筆に依りて書かれたる者にして、此部分も亦俘囚以後に成りたる者也。

(三) 此部分の宗教的價值、第二撒加利亞と稱せられたる此部分に於て、吾人は最早適當に預言と稱すべき者を見ず、此は寧ろ匿名記者の終末論ともいふべき者也。此部分の作者は何れも著しく古預言者の影響を受けたる。殊に著しきは利未記時代の感化也。九の九以下にメッシャ王の事を記さるるには非ざれ共、此部分に在りてはメッシャ王は比較的重要なる人物に非ずして、全く之を除去するも全體には差したる關係なし。彼はもはや敵と戦ふ勇者に非ずして、全然受動的態度を有する平和の君也。此部分に於て最も著しきは全世界を包容せる神の國の觀念にして、エホバは全世界の王、從て彼は一にして其禮拜し亦一なるべきことを記さる。然れ共此書主義も著しく利未的着色を有し、神政體の清潔、律法の優越最も重要視せらる。

【參考書】 ケーレルの『俘囚以後の預言書註釋』シ、エチ、エチ、フイトの『ザカリヤ及び其預言』ダブリウ、エチ、ローの『撒加利亞書註釋』ロホルトソン、スミス、十二の小預言書『フライエルの』書約文學續論。

座席 **Raw. 齋語** 英語 **Raw** は佛語 **Raw** より來り、高き場所の義にて、元來貴人の座する所なりしが、今は一般の座席を指す語となれり。外國の教會にては此座席より若干の賃料を徴収し、之を以て教師の給料を補ふを例す。

ザツク **Augst** フリドリッヒ **Wilhelm** **Sack** August Friedrich Wilhelm. **人名** 一七〇三—一八六六、獨逸の神學者。ヘルンブルヒにて、教育を受け、フランクフルト大學にて神學を修め、一貴族青年の家庭教師としてライプシヒ及びゲッティンゲン大學を訪ひ、ヘッセルムアール

ザク

ロ公の子の家庭教師としてヘーレンスレーベンにて三年を過し、一七三一年マリアアールヒツツ改革教會傳道者に招かれ、四〇年伯林の宮廷牧師となり、大なる力を以て其頃フリードリヒ二世の廷内に参入せんとせし佛國傳道説、英國自然神論に反對す。四五

年伯林科學アカデミーの會員に選ばれ、五〇年高等教職會員とせらる。四八年基督教信仰の辨証を出だし、又説教集六冊を公にす。中に蘭、佛、英語諸に譯せられしものも少からず。

ザック カルル ハイネリッヒ Zuck, Karl Heinrich. 人名 一七九〇—一八七五 編

逸の神學者。伯林大學の講師、ボン大學の特別教授となり、一八三二年同正教授となる。四七年マリアアールヒツツに招かれ、高等教職會議員となり、後其の長とせらる。彼は所謂シユライエルトマツヘル派の左翼の代表者にして、著書多し。基督教神學、基督教論争、福音書論、福音書及福音の合同、ヨハニスハイムよりシユライエルトマツヘル迄の言論の歴史、神學的論文等、は其重なるものなり。

ザックス ハンズ Sachs, Hans. 人名 一四九四—一五七六 獨逸の詩人。裁縫師の子なりし一五〇一より九年迄其郷里の拉丁語學校に出入し、文法音樂修辭學天文詩學哲學等を修めし、自ら凡てを忘れたりと言ひ、其の文書の博學を示すに拘はらず、滑稽詩も拉丁語も知らぬ無學者と自稱せり。一五〇九年執師に奉公し、一年より行商して製靴器を精古し、獨逸の諸大市を廻り同業組合の間に於て詩法及び詩を學ぶ。當時マイスター、センゲルと稱せし一派の詩人は同業者にして教會會又、同業組合會館に於て毎日暇及び毎休日の午後會合し、諸歌謡を起し、詩を以て賞を得たる者へ刺繍の花輪

又ハデビアの像を贈たる銀貨を附けたる羊毛の紐を贈りたり。ザックスは之に趣味を感じ、四年ムーニヒにて始めて一詩を作りて彼等の中に加はり、六年ヨレムベルヒに歸りて執商として定住し結婚し、其職業を以て多日の家族を支ふると共に、文學に従事して直ちにマイスター、センゲルス中の第一流者となりぬ。當時ヨレムベルヒは自由市にして繁榮の頂にあり、カルロス五世も之を訪ひ、ルーテルも之を賞し、アルブレヒト、アムレド、ヘーテル、フィシエ、アンドレアス、オシアンデル、ペーテル、ヘンライン、ウヴァルス、スベンゲレル等の名士は市より出て居たり。ザックスも彼等に伍し時代の詩人の代表者となり、其の詩に顯はしたる意見に由て獨逸宗教改革に大なる貢獻なせり。初のヨレムベルヒのマイスター、センゲル等が規則として定めし事に、ルーテルの聖書に反する事は一切書ひざるべしと云ふことありき。ザックスは多作の詩人にして、其の全集は大阪三十四番六千六百三十六篇より成れり。其の詩の種類は多様なれど、審美的性質は如何にも一貫し、之と共に又哲教的の詩にして、思想道徳的傾向を有し、宗教改革に向へり。其の詩は小冊子となりて獨逸全體に散りしが、最も有名なるはルーテルの詩篇を翻譯文化したる『ライツテンベルグの墓』オシアンデルの序文を有する『不思議の預言』等なり。戯曲には悲劇あり、喜劇あり茶番あり、假作譯あり、問答あり。同業者等と共に自ら演じたるものも。悲劇の中にアダムとエバの樂園放逐あり、終末の審判あり。喜劇の中には『エバの不運の兒』あり、カインとアベルの事を仕組みたるもの、『カストリスと面白』。其の戯曲は善惡の問答なること多く唯獨なる道徳的目的を有せり。

ザク

イエルン(ハバリア)のルイ一世はムーニヒ市のルーメンスハレ(表彰館)にザックスの半身像を列し、カールバウハは其の遺言宗教改革の初頭に彼を出だし、一八七四年にはヨレムベルヒのスピータルブラーに銅像立てられたり。

ザドク Nettek. 人名 舊約書中此名を負へる者多くあれ共、其最も重要な者エルサレム祭司職の建設者となす。其起源及び早き時代の歴史に就ては吾人信すべき記録を有せず。其初めて聖書に記されたるは、デビデの用ゐたる吏員の日録中にして『アヒトの子ザドクとアビヤの子アヒレヤは祭司也とあり(母後八の十七)』デビデがアブラハムの難を避けてエルサレムを通れし時にも亦此二人の名記さる。彼等はデビデに伴ひ神の櫃を昇き往かんとしたれ共、デビデは櫃を市に昇き戻さしめ、事の成行を見て之を報せよと命じたり(母後十五の廿四以下)。デビデ治世の終にアビヤはアドニヤの徒に結びしが、ザドクはソロモンに從ひ彼に膏を注ぎて之を以色列の王となせり(王上一の七、八、廿四)。ソロモンは其地位の堅固を市に及び、アビヤタルを廢して、ザドクを之に代はらしめたり。斯くてザドクの子孫が爾後百年間祭司職に在りて牛耳を執りしこと疑なく、申命記の改革に依り地方的聖所の廢せらるるに及びては、其地位一層高まりたり。エゼキヤはザドクの子孫のみを以て正統の祭司也と云へり(結四十の四十六、四十三の十九等)。歴代志略の記事は以上の記事に異り、デビデを助けん爲め身をよるひアブラハムに來りたる武士の中に『ザドクとあり(代上十二の廿八)』此物語の精神は聖書其のそれと異り、甚だ信じ難し。

ザドク

ザドクの子の家庭教師としてヘーレンスレーベンにて三年を過し、一七三一年マリアアールヒツツ改革教會傳道者に招かれ、四〇年伯林の宮廷牧師となり、大なる力を以て其頃フリードリヒ二世の廷内に参入せんとせし佛國傳道説、英國自然神論に反對す。四五

ザンキ ヒエロニモス Zanchi, Hieronymus. 人名 一五一六—一五九〇 以太利の宗教改革者。一五三一年聖アウグスチヌス派に入りしが、ルーテルもメランクトンもカルヴァン等も研究して、ルーテルにて宗教改革を説教し、危きに遭ひて免れ、シネヅワ、英國、スウェーデンを歴訪し、五三年ストックホルムにて舊約聖書教授とせらる。初めはマルバツハのルーテル派神學者と愉快なる交ありしが、カルヴァンの預定説を賞し、又ルーテルの基督論の說を攻撃せし相乖離し、六三年シヴァエナのレフホルム教會の牧師に轉じ、同地にてマルバツハ神學者等との論争書を公にす。六八年ハイデルベルヒの教授とせられ『スマム』に就て講義し、次第に名聲を博す。非三位一體論者との論争にも加はり、『ア、トリアス、エロヒム』、『ナチュラ、ア、エハリアス、ア、イ』等を著す。特權選後ルーテル徒となりし時に及びて、ハート河畔ニウシャタルに退き餘生を終ふ。

懺悔 Penitential Psalms. 詩篇 中著しく懺悔の精神を顯はせる七篇をいふ。即ち詩篇第六、第廿二、第卅八、第五十一、第百二、第百卅、及び第百四十三にして、其中第五十一篇は最も著しき特色を有す。此等の詩篇を初めて懺悔詩として撰出せるはオリゲンにして、法王インノーセント三世の時より後特に四福音のために用ゐられたり。

懺悔 Confessor. 術語 信徒の懺悔を聽

シの部

シース Death. 『生』及び『終末論』の條を見よ。 シーアス Edmund Hamilton. 人名 一八〇一—一八七六 英國の牧師。一八三四年ユニオン學院、三七年カムブリッジ神學校を卒へ、マサチューセツ州ウエーランド、同州ランカスター及びウエスタンにて牧師たり。ユニテリアン派に屬せし、スウェーデンホルム派の見解を有し、屢々基督の絕對的性に於ける信仰を告白せり。一八五九年より七一年迄ルーファス、エリスと共に『月刊宗教雜誌』を編輯せしが、又『更生』古時代の描字『アタナシア』一名靈魂不滅の豫光『基督の心たる第四福音書』基督教生活の說教及び歌等々著し、靈的の力と美とに光つるに由て著る『人』には御恵み地には平和『It came upon the midnight clear』及び『Calm on the listening ear of night』。『わい』二篇のクリスマス讃美歌は有名なるものなり。

シーアス Barnabas. 人名 一八〇二—一八〇 英國の教育家。十三

歳の時浸禮教會に加はり、獨立の精神發して十五歳には自活し、十六歳には學校教師となれり。一八二五年ブラウン大學を、二八年ニウトン神學校を卒業し、暫くコンネクチカット州ハートフォード第一浸禮教會の牧師たり。二九年ニウロル州州ハメルトン文學神學館の古語教授となり、熱心、博學、勢力を以て知らる。ハメルトン浸禮教會牧師をも兼ね。三三年歐洲に行きハルレ、ライプツヒ、伯林にて二年間研究し、ネアンデル、トールック等の名家より教を受く。三四年ハムブルヒにて七人に浸禮を施し、英米の浸禮徒と交通ある最初の獨逸浸禮教會を作れり。捕縛と投獄とを恐れて浸禮をば夜間に行ひしが、其より嚴しき迫害の中に獨逸浸禮徒は急増して教會百二十、會員二萬五千人に達するに至れり。シーアスは三五年ハメルトンに歸り、三六年ニウトン神學校の神學教授となり、十二年間留まり、後の九年間は總理たり。其の教授は該博遠徴、暗示的適用的にして聖書的なりき。彼は又多年『基督教神學』を編輯す。又一般教育に熱心なるものから、州長官アリクスよりマサチューセツ教育局長に擧げられ、四八年ハルレス、マンの評任後同局長に任ぜられ、ニウトン校長を辭す。七年間其の能力を揮ひ、丹誠を盡して此職に從ひ、教師等と人民とより望を得しが、八五年ウエーランドに歸りアラウン大學長となり、十二年間在任す。六七年ヒューデイー教育資金の理事長となり、デアーンニア州ストートンに移り、死に至るまで此の重任を充たせり。彼は學生に敬愛せられ、同輩に崇められ、知れる限りの人より尊ばれたり。四年ハーパードより神學博士を、六二年エールより法學博士を贈らる。

週 Weeks. 『詩』の條を見よ。

死。シーアス

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

ザンキ。懺悔。懺悔詩。懺悔僧

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

ザン

ザンキの系統をエレアザルに溯らしめたる記事(六の四一十五、五十一、五十三、廿四の九)も、ザドク系の祭司をアロンの長子の系統に屬せしめんこの目的を以て作りし者にして、人為的なを免れず。

ザンキ ヒエロニモス Zanchi, Hieronymus. 人名 一五一六—一五九〇 以太利の宗教改革者。一五三一年聖アウグスチヌス派に入りしが、ルーテルもメランクトンもカルヴァン等も研究して、ルーテルにて宗教改革を説教し、危きに遭ひて免れ、シネヅワ、英國、スウェーデンを歴訪し、五三年ストックホルムにて舊約聖書教授とせらる。初めはマルバツハのルーテル派神學者と愉快なる交ありしが、カルヴァンの預定説を賞し、又ルーテルの基督論の說を攻撃せし相乖離し、六三年シヴァエナのレフホルム教會の牧師に轉じ、同地にてマルバツハ神學者等との論争書を公にす。六八年ハイデルベルヒの教授とせられ『スマム』に就て講義し、次第に名聲を博す。非三位一體論者との論争にも加はり、『ア、トリアス、エロヒム』、『ナチュラ、ア、エハリアス、ア、イ』等を著す。特權選後ルーテル徒となりし時に及びて、ハート河畔ニウシャタルに退き餘生を終ふ。

懺悔 Penitential Psalms. 詩篇 中著しく懺悔の精神を顯はせる七篇をいふ。即ち詩篇第六、第廿二、第卅八、第五十一、第百二、第百卅、及び第百四十三にして、其中第五十一篇は最も著しき特色を有す。此等の詩篇を初めて懺悔詩として撰出せるはオリゲンにして、法王インノーセント三世の時より後特に四福音のために用ゐられたり。

懺悔 Confessor. 術語 信徒の懺悔を聽

死。シーアス

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

ザンキ。懺悔。懺悔詩。懺悔僧

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

懺悔。懺悔詩。懺悔僧

神の部

酬恩祭の宗教

酬恩祭 Peace Offering **慣例** ムーセの律法に定められたる禮拜の行作にして、其規定は利三の一十七、七の十一、十八に記さる。酬恩祭の主とする所の意義は、神の定め給へる道に依りて神に接し、以て之より生ずる福果を得ること、換言すれば神と和ぐ、こと也。酬恩祭に三種あり。即ち(一)感謝又は讚美の禮物(二)還願(三)隨意の禮物也。酬恩祭に於ては其犠牲を悉皆祭壇に捧げず、唯其脂のみを供ふ。脂は其動物の最良なる所と認められたるが故也。私に酬恩祭を献ぐる者は、其動物の脂を取り去りたる後手づから之を携へ来るのみならず、其胸と右肩とを祭司の處に携へ來りて搗祭となす。搗祭に供へたる胸を取り去りたる後餘りたる肉は献者の所得にして、犠牲の祝節として聖所に於て之を食ふべき者也。此時其家族及び他の者を招きて俱に食すること許さる。斯くして尙餘りたる肉あれば之を貧者に與へたり(申十二の十七、十八、十六の十一、十二)。此の如く犠牲の肉を諸人に分配するは酬恩祭のみにして、此祭は即ち神献者の客となり之と交親し給ふことを證する也。

宗教 Religion **術語** 邦語の「宗教」なる語は、プロテスタント教傳道に日本に開始せられて以來一般に用ゐらるる語なれ共、其以前には「宗門」又は「宗旨」等の語ありたるのみにて此語なし。此語は英語のReligionを翻譯せる者にて、レリヂョヌなる語は拉丁語のレリギオ(Religio)より來れり。古代の希伯來語の中にも、又爾後諸語、ケルト語、印度語、支那語、亞利比亞語の中にも此語と同義の語なし。最初基督教徒も亦此語を知らず、故に新約聖書の中に見えず。(英譯聖一の廿七に此語あれ共、原語は「神に對する畏敬」の義にして、レリギオと

宗教

同義の語に非ず)。第三世紀に至り此語は初めて基督教の言語中に入り來り、一種の意義を生ずるに至りたる者の如し。然れ共此語の適當なる定義には吾人未だ到達せず。古代羅馬の著述家等は宗教を外部的に定義して、儀式的傳統及び祖先より譲られたる社會的制度となし、基督教會の中にも亦之に類似する觀念行はれたりと雖も、宗教は單に外部の儀式制度等の集合に非ずして、又心理的現象なれば、斯くの如きは未だ以て宗教を適當に定義したる者といふ可らず。蓋し宗教の満足なる定義に要する者二あり。即ち一方に在りては、技術、道徳の如き宗教と密接の關係を有する人間思想の形状より宗教を區別し得るやう叙述すると共に、他方に在りては、主觀的感情及び歴史的寛容の形状に於て宗教の取りたるあらゆる形状を包含し得るやう叙述すること也。然れ共吾人は尙未だ宗教の取りたるあらゆる形状を知り盡したるに非ざれば、吾人の提供する定義なる者は尙未だ試験的なることを免れず。故に吾人は爰には唯人が自己の宇宙の一部分なるを自覺するより生ずる感情は、宗教の基礎を爲すもの也といふを以て暫く満足せざるべからず。

宗教の分類 儒教、佛敎、猶太教、基督教及び回教の如き有史時代に起りたる宗教の起源及び關係を決定し、之が分類を爲すは困難なることに非ずと雖も、有史以前に起りたる古代の宗教の多數は、信用すべき記録又は傳説を有せざるを以て、之が關係を定め分類を爲すこと容易に非ず。

(一) 系統的分類 ヲックス、マウレルは其著「宗教學」に於て最も必要なる分類は、宗教學に於ても亦均しく必要なる分類ならざる可らずと云へり。概して

宗教

論すれば、同一言語を有する種族若くは國民は、又同一宗教を信ずといふことを得べく、少くとも最も古代の宗教に在りては然りといふことを得べし。然れ共此は宗教の比較研究に依りて證明せられざるべからず。二個の國民の宗教が教義及び禮拜の方法、殊に神と人の關係に關する思想に於て一致し、而して此一致を人性的普遍的な要求に依りて説明すること能はざる場合に於てのみ、吾人は甲の宗教の乙の宗教より出でたる者なるか、然らざれば甲乙共に他の同一宗教に其根源を有するものなることを推斷し得べし。而して若し二個のみならず更に多數の宗教が之を同一様に相一致せば、吾人は爰に宗教の系統を有すべし。吾人は相異なる系統に關する宗教の相互の關係に就ては尙未だ決定すること能はず。相異なる系統に關する宗教が、其神話及び習俗を相互貸借して、以て相互に感化し影響したりしことは容易に證明し得べしと雖も、其系統其ものはもと同一なる一個の古き根柢より出でたるものなりや否や未だ明ならず。故に宗教の系統なるものを、要するに大體の上より立つるに過ぎざれば、此立脚地より分類するを系統的分類(Genealogical Classification)といふ。此分類法に従て世界の諸宗教を區別すれば左の如くなるべし。

(イ) アリアン又は印度日耳曼系 之を分ちて東アリアン、西アリアンの二系となす。東アリアン系に關するものは印度、波斯、フネギヤの宗教にして、吠陀教、婆羅門教及び佛敎は印度人の所産に係り、ゾロアスター教は波斯人の所産に係る。西アリアン系に關する者は希臘、羅馬、日耳曼、スカンディナヴィヤ、スラブ、及びケルト人の古宗教にして、此等の宗教は後に至り基督教のために取りて代はられ

神の部

宗教

たり。

(ロ) セミテツハ系 分ちて南北の二部となす。南部の宗教はサビアン宗教及び亞利比亞北部の宗教にして、回教は一中希伯來宗教を基礎として亞利比亞の北部に起れる者也。北部の宗教は更に分ちて東西の二部となす。東部の宗教は巴比倫及びアッシリアの宗教にして、西部の宗教はアラマン、小亞細亞、ヘブライ、フェニキヤ、迦南の諸宗教及び希伯來宗教にして、希伯來宗教は古以色列人の宗教、モーセの宗教、預言者の宗教及び猶太教を経て基督教に發達せり。

(ハ) 亞非利加系 埃及、アツカヤ其他亞非利加人の宗教は之に屬す。

(ニ) 支那の宗教 儒教及び道教を含む。

(ホ) 亞米利加土人の宗教 エスキモー、及び南北亞米利加印度人の信する諸宗教を含む。

(ヘ) 馬來人の宗教 馬來半島、ギンネヤ及び其他南洋諸島の宗教を含む。

然れ共言語若くは人種に依りて區別したる以上の分類法は、宗教の尙未だ發達せざる状態に在りては可也と雖も、既に發達したる状態に在りては、宗教は言語及び國民性より獨立する者にして、其信徒の屬する人種若くは其使用する言語と深き關係を有する者に非ざるのみならず、全く相異りたる言語を語り全く相異りたる人種に屬するものか、同一宗教を信奉するの例は吾人の見る所也。故に吾人は以上の系統的分類よりも更に科學的なる分類法を發見し採用せざる可らず。

(1) 形態學的分類 所謂形態學的分類(Morphological Classification)と稱するは、近代の學者が科學的精神に基きて試みたる方法にして、其分類の方法

宗教

は學者取る所の立脚地に依りて相同じからず。今其一二の例を左に示すべし。

(イ) ヘーゲルの分類 ヘーゲルは世界の宗教を三に大別し(一)自然の宗教(Religion of Nature)(二)靈の宗教(Religion of Spirituality)(三)絕對的宗教(The Absolute Religion)となし。第一は人類の幼稚なる時期に應じ、第二は青年の時期に應じ、第三は成人の時期に應ずるとなし。更に此等の宗教を區別し、自然の宗教は(a)直接的宗教即ち魔法、幻術及び拜物教を含めるもの(ハ)萬有神教、幾種の宗教及び拜物教、空想の宗教なる婆羅門教及び實在其物に關する宗教即ち佛敎を含む(ヘ)自由の宗教(先明の宗教なるゾロアスター教、悲願の宗教なる四利亞教、秘義の宗教なる埃及教を含む)より成れりとなし、靈の宗教は希伯來人の崇高の宗教、希臘人の美の宗教、羅馬人の悟性の宗教也となし、而して基督教を以て絕對的宗教也となせり。然れ共此分類法は何が故に各宗教は全般的發達に於ける段階たるに止まらずして、各々其自らの獨立の發達を有するやを適當に説明すること能はず。從て各宗教は種々の立脚地より觀察するを得べし。而して全體より論ずるに、ヘーゲルは強て其哲學的見解を宗教の分類に應用せんとするの傾向を免れざるが如し。

(ロ) ホイットチーの分類 教授ホイットチー(Whitney)は宗教を(一)國民的宗教(National Religion)(二)個人的宗教(Individual Religion)の二に分類して曰く「諸宗教間の相違は、國語の如く一社會の智慧の集合的産物にして、歲月を経て漸く意識的に發達したる所謂人種の宗教と、一個人なる建設者ありて之に依りて開始せられたる宗教との相違より著しきものならず。後者は、其間進化する者か

宗教

其當時の最善なる意見と感情との重要な代表者として、形式と迷信とに反對し、其同胞をして教義終に道徳的模範の新聞體に對する誠實審判の信仰を起さしめ、且自ら之が模範師となれる者にして、ゾロアスター教、回教及び佛敎は此の如くして起れる者也。而して基督教は其間進の性格及び權威に關しては宗教史家の見相異れりと雖も、個人的、普遍的の性質を有する點に於て、又前記諸宗教と同一階級の性質を有する者也」と。此分類は或る目的のためには有用なるべしと雖も、未だ之を以て徹底せる科學的の分類と稱す可らず。何となればアラマン、希臘人及び羅馬人は何れも其宗教の問題の何人なるやを指定すること能はざるべしと雖も、彼等の宗教に亦或る個人若くは或る學派の感化を認めんばならず。所謂社會の智慧と稱する者は、其社會の優秀なる人々即ち個人若くは非ずして何ぞや。其起源及び歴史の不明なる者は之を無意識的發達と稱すべしと雖も、此は譬喩的の意義に於て然るのみにして、神話若くは宗教的儀式の如きも、其體を尋ねれば國民若くは種族中の優秀なる個人創作に外ならず。之に反して高尚なる宗教の問題なる者は、其當時の最善なる意見と感情との重要な代表者也とするも、彼等は要するに其同時代の人々の上に立つ者にして、彼等が斯る宗教を開始し得る者は、畢竟斯る思想が其時代の人々の心中に發達し來りしがために外ならず。左れば國民的宗教と云ひ個人的宗教といふも、其中には共に個人の要素あり、共に發達し來れる者にして判然と兩者を區別し得る者に非ず。

(ハ) ナイトールの分類 教授ナイール(N. P. Nider)は世界の宗教を(一)自然宗教(Nature Religion)(二)倫理宗教(Ethical Religion)の二に大別せり。自

の部

宗教改革

第二に重きを置き、第三を忘るゝ事少からず。
(一)客観的原理は聖書の正釋に新約を信仰及び實
行の唯一の無誤なる源泉又標準なりとし、其の個人
の自由解釋の權利を主張し、天主教が聖書と傳説と
を並べて信仰の源泉標準なりとし、傳説に法王及び
會議の命令を以て唯一の合法無誤なる聖書解釋者
となすに反對せり。此を以て極端に説明して、聖書の
外にプロテスタント宗教なしと云ひし者もあれど、
必ずしも凡ての教會の權威を否定せしむるはならず。
之を聖書に次ぐものとし、聖書に照して之が價值を
定め、次第に進歩擴張し行く基督教徒の意識に由れ
る聖書解釋を信ぜり。故に自己獨特の教義認識を有
せしと雖も、亦羅馬教より其のまゝ受け繼ぎしもの
も少からず。唯だ聖書中に根據を有せざるものを排
したり。カルヴィン派は最も天主教主義反對の方向
に進み行きしものなるが、而もルーテル派、英國派
も皆法王の權威、善行の功德、被罪免、聖母聖者遺物
の禮拜、七禮典(洗禮及び晩餐は例外)、化體及びマ
サ、犧牲説、煉獄説及び死者のための祈、耳語懺悔、
僧侶獨身生活及び僧院制度を否定し、禮拜に於ける
拉丁語を廢し、通用語を取る。ことに於ては一致せり。
(二)宗教改革の主觀的原理は、信仰のみによりて義
せらるゝ事、即ち善行の内活動せる信仰に由り、
神の自由なる恵に由りて義せらるゝ事と云ふ也。此
は基督教の教は個人間的のものなるを意味し、且つ凡
ての榮光を基督に歸するを目的とす。何となれば罪
人は生ける信仰に由りて信ぜられたる基督の充分完全
なる功德に由りてのみ、神の前に義せらるるればなり。
即ち有罪の實を取り去られ、義と稱せらるればなり。
斯くて此の説は當時一般に行はれ、プロテスタント
にて大體是認せられし所の説、即ち信仰と善行とは

宗教改革

義せらるゝ事の二つの源なりとて、善行を多く重
んずしものに反對せしなり。勿論善行を否定し輕視
ししたるに非ず、之を義せらるゝことの條件とせ
ず、信仰の結果、義せられたる證據とせし也。
(三)宗教改革の社會的原理は一般信者は祭司なりと
いふことなり。此の主義は基督教平人の權利義務を
重んずることを意味せり。即ち聖書を通用語にて讀む
のみならず、又平人が教會の行政其他にも與るこ
とを意味せり。此は僧院政治制度にて教會を單に僧
侶のものとなし、之を以て神と人との間に介在せり
となせるに反對したるもの也。
【諸國に於ける宗教改革】(一)獨逸の宗教改革
獨逸の改革はルーテルの才と精力、及びメランクト
ンの學問と雄辯とに依りて指導せられ、ザクソンア
選侯其他の侯伯に依りて助けられ、人民の多數に依
りて後援せられ、諸監督及び帝國政府の壓迫にも拘
らず進行せり。一五二七年十月三十一日ワイマール
ヘル大学に於ける教界代表會議は實に其の初め
たり、又實にプロテスタント教の誕生日なり。初は天主教
會の藩籬内の改革とせられ、ルーテルの如きは在來
の教會より觀るゝを非常に恐れ、教會の或教義制度
をば敢て、僅少の弊害を指摘攻撃し、自ら若し法
王にして此等の弊害を適當に知らば必ず之を非認す
るならんことを確信し居たり。然るに事態は思はぬ方に
發展し、彼は教會の中心と地位をすべからざる争を
結び、一五二〇年六月法王レオ十世はルーテル破門
を宣告し、ルーテルは又此の法令を以て自己に
反對する教會法と其他の書を焼き棄てたり。是れ實
に宣戰の信號なり。二一年に於けるワルムス會議
にてはルーテルは有名なる否定をなし、法王の破

宗教改革

門に加へて更に皇帝の禁令を受けたり。されど時代
の教會と政治との最大勢力の前に立て動ざりし一
貫の勇氣は、史上最大の偉業にして、又實に自由の
進歩に於ける一時期を作れり。當時羅馬の種々なる
弊害に對する不満足と、福音を自由に説かんとする
願は非常に強くなり、改革は此等法王皇帝の破門
禁令にも拘はらず、積極的の形にても、消極的の形に
ても、直ちに全國に弘まり、一五三〇年に至らざる
前に北獨逸の大部にて既に十分の足溜りを有したり
き。殊にザクソンニア、ブランデンブルク、ヘッセン、ホ
メニア、ネーデルラント、リューネブルク、フイ
ースラントの諸邦、及びハムブルク、リュベック、
ブレーメン、マゲデブルク、フランクフルト、ニ
ュンベルクの諸自由都市にて最も強く、境太利、バ
ハリア及びライン流域にては壓迫せられ居たり。斯
く速に改革主義の弘まりしは、改革者等の文書、ル
ーテルの聖書獨逸語翻譯(一五二一年より三四年に
至る)等の力により、福音主義の讚美歌、禮拜及び
民心に新思想を注入して大なる力を有したり。一五
二六年のスパイエル會議は、各邦をして改革の問題
に關しては、世界會議が萬事を決するまでは其の相
異のまゝにて在るを許し、斯くて宗教の事に就ては
分邦各獨立なる主義の基を立てたり。此の制令獨逸
にては行はれ、各邦の君主は各自其の政府と密接
の關係ある教會を獨立となせり。されど一五二九年
のスパイエル第二回會議は改革の一層弘まるを禁ぜ
しむべし、少數派の新教諸君主は二九年四月十九日付
を以て此の決議に對する抗議を試み、之よりプロテ
スタント(抗議の徒)の名を得たり。
一五三〇年のワグスマルヒ會議は、メランクトン
の作れる信仰告白を定め、之をワグスマルヒ告白

の部

宗教改革

と稱せしが、此議會にてプロテスタント教は舊教會
主義に甚だ近き所に歸り、若し之に従はざれば虐待
せらるべき事となれり。是れ實に獨逸改革の第一期
を結ぶものなり。
第二期は兵力を以てルーテル主義を防衛せんための
シュマルカド同盟と、神學論争調和のため兩黨の
數次の會合と、ルーテルの死と、ラチスボン、アッ
グスブルヒ、ライプツヒ諸議定條約と、シュマルカ
ド戦争と、ザクソニアのモリツの下にプロテスタ
ント軍の得たる成功と、ルーテル派諸邦が宗教自由
を贏ち得たる一五五五年のアグスブルヒ平和條約
とのありし時代なり。
第三期は一五五五年より一八〇〇年迄にして、ルーテル
教會内部の論争、即ち義せらるゝ事と深めらるゝ
事に關するオウアンナル論争、羅馬主義と融和の精
神より起れる不拘泥論争、信仰と善行に關する自力
協力論争、聖餐に於ける基督の現存に就ての
論争ありし時代なり。此の三論争に依りてルーテル主
義の教義は發達完成し、メランクトンの作れるアッ
グスブルヒ告白及び其解釋、ルーテルの兩信條約、
一五三七年ルーテルの作れるシュマルカド條約、
一七七年ルーテル派神學者の編したる「協約の告白
文」となれり、されど嚴密なるルーテル徒がカルヴ
ィン派及び溫和なるルーテル徒(即ちメランクトン
派又はフイリッパ派と稱せらるゝもの)に對する狂
妄的態度は、多くのフイリッパ派を驅逐してプロテ
スタント教會(カルヴィン派)に投ぜしめたり。殊に特
權侯領、プレーメ、ナッサウ、アンハルト、ヘ
ッセンカッセル、ブランデンブルヒに於て最も甚だ
しかりき。
獨逸のレフォーム教會はハイデルベルヒ告白を採

宗教改革

用せしが此は一五六三年獨逸フイリッパ派の命
命により、溫和なるカルヴィン派の神學者ツァカリヤ
ス、ワルシヌスとカスパー、オレフイアヌスと編し
たるものなり。
獨逸宗教改革の神學的方面の歴史は十六世紀中に終
結したれど、政治的歴史は悉く三十年戦争後、
一六四八年のウエストファリア條約にて、ルーテル
派と獨逸レフォーム派とが(他派は加へられず)
帝國内に天主教徒と同權を得るに至りて始めて終結
せり。此二派は今日に至るまで或は別々となり、或
は普魯士、バーデン、ヴュルテムベルヒ、其他に於
けるが如く福音教會と稱せられて一組織となり居れ
るが、獨逸に於ける政府公認及び補助の教會なり。
其他の小教派は一般人民には多く好まれず、英國
及び米國の浸透派及びメソヂスト派の補助を受けて
繁榮せり。獨逸は近代にては凡ての此等の教派及び
信仰に自由を與へ、嚴密なる正統説より唯理派獨逸
派に至るまで自由に發展し、神學校には諸派の人々
を擁護せり。獨逸は近世の神學諸科の工場の製あり。
殊に聖書學、史學に於て最も進歩せり。
(二) 獨逸に於ける宗教改革 獨逸の改革は獨逸の
改革と同時代に起りしも、而も獨立して起りしもの
にて、其の結果ルーテル派とは別なるレフォーム
派の興起となれり。聖餐に於ける基督の現在と
いふ説を除けば、獨逸改革主義は獨逸の根本的に
は悉く一致せり。されど教會行政、戒規、禮拜に關し
て獨逸の方は一層舊教會より距り行き、且つ人民の
根本的進歩的實際的改革を心がけたり。其の發展は
自然三期を爲す。一はツワインゲーン時代、即ち一
五一六―一五三一年、次はカルヴィン時代、即ち一五
三二―一五三九年、三はプリンケル及びベーズ時代、即ち第十

宗教改革

六世紀の末迄なり。第一期は重に獨逸諸諸邦に關
し、第二期は佛蘭西諸諸邦に、第三期は共に兩方に
關す。ツワインゲーンは一五一六年始めて極々の弊
害に對する改革試教をなし、一五年チウリヒにて一
層有力に之を始めた。彼の目的は「源泉より基督
を説き、人の心に基督を挿し入るゝ」にありき。初
はコンスタンツ監督の同意を得て説教し、監督はツ
ワインゲーンの志を助けて獨逸に於ける被罪券販賣
を止めんとし、大に彼を信用し居たり。然るに一五
二二年ツワインゲーン新食を人間の發明なりと説
き、惡業之を守らざるもの多きに至るや、監督との
關係此に破れ、チウリヒの行政官は此問題を決する
ため、二三年の一月及び十二月に公開討論を催し、
此會にてツワインゲーンは官民の後援を負ひつゝ、反
對者に打ち勝ち、二六年には市と近村の諸教會は拜
儀や像範を撤去し、舊教のミサを棄て、單純なる禮
拜に代へたり。獨逸國會は僅の多數にて改革運動に
反對し、獨逸共和のため此問題を決せんとして、神學總
會議を一五二六年バーデンに催し、改革派のエコラ
ムバティウスとルーテルの對立を對立せしめたり。此の結
果は改革主義の利となり、同主義は今や官吏の希望
によりて多數の聲に引き入れられたり。パーセルは
エコラムバティウスにより、ベルンはハレルにより
て、改革主義を導き入れられ、聖アレン、シヤフハワ
セン、アラールス、アッペンツェル、ツルガワ、グロ
ンクス諸邦も半ば之を入れ、佛蘭西諸諸邦はフア
ーレ及びヴェイレー之を入れんとしてカルヴィンの
ために途を開けり。されどルーネン湖周圍の諸
小部ツワイフ、シュワイフ、ワグナルデン、ルーネ
ン、シーアは斯くて新主義に反對し、終に新

シの部

宗教改革

宗教改革

宗教改革

教皇と諸教皇との戦争となりぬ。ツウィンゲリーの政策は柔和なりしも、ヘルンツの政策は殘酷にして、宜れむべき山地人を飢饉に陥れしかば、舊教皇は其の權利を維持せんとして、一五三一年十月カッヘルに於てツウィンゲリーの小軍と戦ひて之を敗り、ツウィンゲリーも之に死せり。而してエッラムバレイウス亦數週後に死せしかば、獨逸諸國に於ける改革は此に行き止まりて、同地方の多數は今日天主教を奉じ居れり。

然れども改革は佛蘭西諸國にて新勢力を發揮して大に盛となり、カルヴェン出で、其の大なる感化を揮ふに至れり。カルヴェンは佛蘭西に生れ佛蘭西の教育を受けし人なるも、信仰のため故國を逐はれ、一五三六年ウェネツアの小共和国に下居し、此にて宗教改革の大神學者大教育者として非凡の才を顯はし、ウェネツアの教會を改革主義の模範教會となし、ウェネツアを以てのアプロタスタト被迫害者の避難院ならしめたり。其の著「インスチテューション」(註解)はレフォルムド教會を信仰告白に歸せしめて、教職の平等と平人長老の與政補助を實現したり。

一五六四年カルヴェン死して後は、ベイス(一六〇五)とチウリヒに於けるクワインゲリーの後繼者アインゲルと之を繼ぎて、獨逸改革の成就のため、又佛蘭西、和蘭、獨逸、英國、蘇格蘭等に主義を弘むるために力を盡せり。

(三) 佛蘭西に於ける宗教改革、獨逸及び獨逸に於ける宗教改革は、人民多數の心を制せしむるに對し、佛蘭西にては政府も教會も民衆も一致して之に反對し、改革は大試練と迫害の中を通過せざるを得ず

りき。元來佛蘭西は常に羅馬に對して或程度まで獨立を維持し、且つ巴理大學は人才の淵藪なり、第十五世紀の諸會議に本末を以て改革を迫り居りしを以て、國狀は一の變化を來すに都合好かりしなり。先づプロテスタント主義を告白したるはルフェーブル、ワッセルマー、フアーレル、グレイ、マロー、オリヴェタン、カルヴェン、ベイズ等何れも學問能力秀でし人なりしが、大抵國を去て危を避けたり。佛蘭西語獨逸に改革主義確立するに至りて、佛蘭西の同運動は始めて眞面目となりぬ。而して佛蘭西レフォルムド教會の祖は實にカルヴェンとベイズに外ならざりき。彼等の下に在りし弟子等は故國に歸りて改革主義を傳へ、一五五五年最初のプロテスタント獨逸巴理にて結ばれ、五九年同市にて最初の大會議を開けり。六年オアシにて舊新教徒神學會議開かれ、ベイズは羅馬教會高僧等の前にて新主義を辯じしも、無益に終り、此時「改革」なる語を教會の名として採れり。七年ロシニールにて總會開かれ、ガリア告白とカルヴェン主義を根本とせる教會政治及び戒規を採用せり。されど教會と國家とを結合する所をば採らず、却て兩者を相反するものとなしたり。佛蘭西にては改革運動は常に政治的の意味を含み、第十六世紀の終まで國を分断せし内亂を續せり。而して羅馬派は人民の多數に接せられ、ベイズ徒を驚き居たり。侯はシャルルマニエの裔にして、當時ガリア家の占めたる王位を視ひ居たる人なり。プロテスタント即ちユグノー派は少數なりしも、佛蘭西最高の血統に屬し最有力なりし人も加へ居て、王位の第二系に屬し、ユグノーの裔たりしナヴァール公に率ひられ居たり。攝政女王カトリーヌは自ら羅馬教徒なりしも、兩派を驚かせんと勉め

居たるが、而も羅馬派の勇士等は巴理を其手に占領し、コンデー公はオルランズを占領したり。内亂は續けざるに三たび起り、一五七二年八月二十四日にはギース侯と宮廷との計略にて、ナヴァールのアンリ一世とシャルル九世の妹との婚案に托してプロテスタントの首領を招き、一舉に之を屠り、所謂聖バトリマイの虐殺を現出したり。全國又此種の虐殺を現出して、新教徒は數こそ減じられたれど亡び盡さず。内亂は尚起り、一五八九年アンリ三世がドミニコ派の一僧の手に暗殺せられ、ナヴァールのアンリ王位に登り、アンリ四世となるに至りて始めて止り。アンリ四世の即位と共に新主義は此に全く勝を得し如くなりしが、而も天主教徒は佛蘭西内に多數を占め、外には西班牙王及び法王の助あり、反對の王を擁びて再び國に勢血を灌ばさんす勢を示せしかば、アンリ四世は政界と愛國心に制せられ、幼時より守り來りし新教を公然棄却し、九三年天主教を告白し、同時に一五九八年のナント令を發して國內のプロテスタント教會を公認し、各人信教の自由を法律に依て與へたり。是れ佛蘭西天主教史の最大動搖時期を結びしものにして、其時全國に七百六十の新教團體ありき。かくて佛蘭西は一時繁榮せしが、間もなくリシエラの壓制によりて又覆せられ、終にルイ十四世が一六八五年ナント布令を撤廢せしに至りて全く壓倒せられ、僅に「曠野の教會」となりて殘れり。されど極度なる迫害の中にも佛蘭西内に殘存せしものあり、或は歐米新教國の到る所に散りて教會を遺れるもありたり。

(四) ネデルラントに於ける宗教改革、低地諸國に於ける改革は、ルターの感化を受け起りし

シの部

宗教改革

宗教改革

宗教改革

が、一層多く獨逸改革者等よりの感化に由りて起れり。最初の獨逸改革者はエシュ及びヴェスにして、一五二三年アントウェルプにて燒き殺され、ルターは詩に歌はれたり。カルロス五世と其子フェリペ二世世は相續して壓制政策を取り、宗教及び政治の自由を不新思想を撲滅せんとして、アルプス侯の如きは殘忍の點に於て古代の羅馬皇帝等を凌駕し、一五六七年より七三年まで六年の攝政中に、十萬の和蘭新教徒の生命を奪へり。アプロタスタは言へり。此に於て終に北部の七邦は聯邦共和國を造り、初めオレンツのウイリアムを戴き、一五八四年其の暗殺せられし後は其子モーリスを戴き、長き苦闘の後羅馬教會を西班牙支配より免れ出づるを得たり。されど南方諸邦は尚天主教を奉じ西班牙に臣屬したり。一五七四年最初の和蘭改革大會開かれ、翌年ライデン大學起る。教會は一五六三年のハイデルベルヒ問答と、六一年のベルギー告白と、一六一八年一九九年のドルト大會教典を採用せり。ドルト大會は當時全國を動かせしアルミニウス説論争のために開かれたるものなり。アルミニウス徒一名抗議徒は、カルヴェン派正統説より五點に於て異り、意志の自由と條件的預定を主張したる者なり。ドルト會議は之を非認せしも、尙教派として忍容せられ、アルミニウス。ユグノー、グロッチラス。エヒスコピウス。ヨムボルク。ル。クレア(クレイクス)など有名なる學者の文書に由りて、第十八世紀中英獨佛のプロテスタント神學に大感化を與へたり。メソヂアストはウエスレーに導かれてアルミニウス説を取りぬ。和蘭の正統教會は米國にては第二の古き教會にして、一六二八年以來レフォルムド、プロテスタント和蘭教會と稱し、後米國レフォルムド教會と稱せり。

(五) ガリアに於ける宗教改革、ガリアの改革はヨハン・フラス及びブライゲのヒーロニムス(ワローム)に由りて其の準備をせられたり。二人ともコンスタンスの會議の命にて焚き殺されしが、其の隨從者は多く殘り、殊にシュエツ人地方即ちスラゴ地方に於て甚しかりき。ついで戦起りフラス徒の全勝利となるべかりしを、同徒中のカリストス派ウラタ派とガリア派間に内訌ありて敗れ、其の殘徒よりウニタス、フアトルム即ちガリア兄弟會なるもの起りぬ。彼等は使徒時代教會の單純と清淨とを復せんとして、ウラトルド派と親しき同盟を結びぬ。迫害は甚だかりしも、ガリア及びガリアに於て迫害は甚ざりし。宗教改革起りし時此徒は羅馬に於て存せり、アプロタスタ告白の教義を取りしものも多かりしが、多數はレフォルムド派即ちカルヴェン徒に入れり。マキシミアン二世の朝ガリア人全體を改革するの光見えしが、ブライゲにて始まる三十年戦争と、イエズイットの對抗改革とは新教に大打撃を與へ、ガリアは曠野と化せり。アントンといふイエズイトは、一六三七年自ら揚言して己れは六萬以上のガリア書籍を焚けりと言へり。其多くは聖書なりき。モラゲイアに遺れ行きしがガリア兄弟會の徒は、クインツェンドルフ伯の保護の下に、一七二二年モラゲイア教會の骨髄となり、爾後今日に至るまで少數ながら最も活潑敏成なる福音主義教會として存在せり。されどガリアに於てもプロテスタント主義は全く撲滅せられ終らず。ヨセフ二世の時より其の重き頭を擡げ、一七八一年十月有名なる寛容令を發し、降てツェツカ人愛國心と國文學の振起るに至りて更に勢を得、一八六九年にはブライゲにてフラス五百年祭を行ひ、其の文書を出版せり。一

八八〇年にはガリアに五十、モラゲイアに三十はどのレフォルムド教會ありて、居二ヘルゲネチー告白及びハイデルベルヒ問答を奉じ居たり。ルター派は之よりも少く、獨逸人の地方に居たり。

(六) ハンガリアに於ける宗教改革、此國には一五二四年後にウイテンベルグより歸りし學生等始めて改革運動を起し、フェルナンド一世は或貴族及び都市に禮拜の自由を許し、マキシミアン二世(一五六四一七)此自由を擴張せり。一五四五年エルテド大會はルター派教會を組織し、五七年クンツェン大会はレフォルムド教會を組織し、獨逸移住者は大抵アプロタスタ告白を取り、土著のクアキア人はヘルゲネチー告白を取れり。ルドルフ二世宗教自由を廢ふるや、トランシルバニア公ステファン、ボグスカワと土耳其と聯合せる勢に乗じて征服し、一六〇六年ハンガリア及びトランシルバニアに於けるルター派カルヴェン派を全く忍容するの制を回復し、其後繼者ベツレン、ガボル及びゾルグ、ラコチナー一世の代には更に一六二二年のニコルスアルグ條約、一六四五年のシンツ條約に依て之を確定せり。トランシルバニアにてはソーチヌス説も存らへりて今日に至れり。

(七) 波蘭に於ける宗教改革、波蘭の改革はフランス徒の遺體者及び獨逸改革者等の文書に刺戟せられて起れり。王シヤムンド、アウグスチヌ(一五四八一七二)は改革を好み、カルヴェンと文通せり。同國の最有名なるプロテスタントはヤン、ラスキ(又はワシ、アラスコ)なり。彼はカルヴェン徒なる信仰のため國を出で奔りしを波蘭貴人より呼び返され、友人にも助けられて聖書を翻譯し、ルター、カルヴェン兩派の和合を謀り、一五六〇年に死せり。兩派

シの部

宗教改革

の合同は一五七〇年セントマルの議定書にて行はれし...

宗教改革

ワテマンベルヒのブーゲンハーゲンを招きて改革の案...

宗教改革

舊教徒の別なく撤回したり。されど人民の側には之...

シの部

宗教改革

再興せられ、前世紀に之を改めて女王は自ら教會の...

宗教學

本せんことを努めたり。短き内亂の後一五六〇年の...

宗教學

く、文明國民の宗教は云ふに及ばず、野蠻未開なる...

シの部

宗教會議

り。(宗教學の參考書に就ては「宗教」の條下を見よ)。
宗教會議 (Council (Concilium)) **事** 蹟
 宗教會議は基督教の歴史に於て、教義、儀式及び
 制度發達の中心を爲せり。此會議は教會の必要より
 起れる者にして、使徒時代に於けるエルサレムの宗
 教會議(徒十五)は實に之が模範なりき。歴史に傳
 へられたる最初の宗教會議は、モントニ教に對し小
 亞細亞に開かれたる者にして、第二世紀の中以後に
 開かれたる者多し。第二世紀の終に至りては、エメ
 ソ、パレスチナ、メソポタミア、ガントス及びゴワル
 に於て相續して開かれたりき。拉丁教會に於ける宗
 教會議は、第三世紀の初め北亞非利加に於て開かれ
 たる者をして嚆矢となす。カイザリアの監督フィ
 ミリアンのクブリアヌスに附りたる書翰に依れば、
 東部教會に於ては第三世紀の初め毎年二回宗教會
 議を小亞細亞に開きたりしといふ。後此會議は漸次
 其區域を擴張し、フルギアのイコニウムに開きたる
 會議(二五六)には、ガラテヤ及びキリア地方の監
 督來集し、アルレスの會議(三一四)には、同リゴワ
 ル地方の監督のみならず、ブリテン、日耳曼、西班
 牙及び北亞非利加の監督も亦來集せり。斯くて星移
 り物變るに從ひ、監督管區の會議は大監督管區の會
 議に發達し、大監督管區の會議は、更に發達して教
 長管區の會議となり、遂に全世界會議なる者召集
 せらるゝに至りし。

宗教會議

會教義の標準となれり。ニカラの會議(三二五)はコ
 ンスタンチヌス大帝之を召集し、三百十八人の監督
 出席せり。コルドヴァのホシアス及び亞歷山のアマ
 ナシウス實に之が領袖なりき。コンスタンチノー
 プの會議(三八一)はテオドシウス大帝之を召集し、
 百五十人の監督之に出席し、ナウアンのアレロ
 イウス及びニッサのアレゴリウス之が領袖となり
 て、三位一體の教義を定めたりき。エペソの會議
 (四三一)はテオドシウス二世及びゲラシムスニ
 ス三世之を召集し、凡そ二百人の監督出席せり。此會
 議の領袖は亞歷山のテオドロスなりき。カルケドンの
 會議(四五二)はマリアヌス之を召集し、凡そ五百
 人の監督之に出席し、羅馬の監督レオ之が領袖とな
 りて、基督論の正統教義の基礎を築けり。(註)テオ
 ドシウスニ「ユウチケス」一性派の條を見よ。第五回
 の會議(五五三)はコンスタンチノーブルに開き、僅
 に百五十人の監督之に出席せるのみ。而して其多く
 は東教會に屬せり。此會議は一般にカルケドン會議
 の結論に過ぎずと思惟せらる。第六回の會議(六八
 〇)も亦コンスタンチノーブルに開かれ、基督論に
 關する議論を更に進行せり。(註)一性派の條を見よ。
 第七回の會議(七八七)はニカラに開かれ、主として
 偶像禮拜に關する問題を議定せり。第八回の會議(八
 六九)はコンスタンチノーブルに開かれ、フオチア
 スに關する問題を議決せり。然れ共最後の二會議の
 議決は單に東教會に於て効力を有するのみ。斯くて
 東西兩教會は全く分離して今日に至りし。
 是より以後の宗教會議(八六九—一三一)は又自
 ら別の一團を爲し、全く西教會にのみ屬し、法王政
 治の發達と相伴ふ。第八回の會議閉會後凡そ二百五
 十年間は西教會に於て、西班牙、佛蘭西、英國及び

宗教會議

日耳曼等の諸國に於て各州及び各國に地方的宗教會
 議ありしのみ。此等の會議は教會の歴史に大なる勢
 力を與へたりしを以て、何れも全教會に對して効力
 を有したりしに非ず。後ラテラン會議(羅馬聖約翰ラ
 テラン教會に開かれたるを以て此名あり)を初め
 して、再び全世界宗教會議なる者相續して開かる。此
 時期に屬する者四、第一回は法王カヨクストス二世
 之を召集し(一一二二)凡そ三百人の教職出席して、
 カヨクストスの條約なる者を制定す。此條約に依りて
 帝王は教職任命の權を放棄せり。第二回は法王イン
 ノーセント二世之を召集し(一一三九)凡そ一千人
 の教職出席して、舊法王アナクレットの出したる凡
 ての命令を取消したり。第三回は法王アレキサンテ
 ル三世之を召集し(一一七九)單に教會の條例を評
 決せるのみ。第四回は法王インノーセント三世之を
 召集し(一二一五)四百十二人の監督及び八百人の
 寺院長及び牧師之に出席し、且東部王朝の大使及
 び皇族貴族の多數亦出席せり。此會議は古來開かれ
 たる會議中最も壯觀を極めたる者の一にして、教義、
 儀式、條例等全般の問題に涉りて討論し、化體説、
 私語告白、異端究問法等を議決して之を發布せり。
 第五回は開かれたる二回の會議も亦此部類に屬す。其
 の第一回は羅馬皇帝フレデリック二世を破門し、且
 其位を廢せんとの目的を以て、法王インノーセント
 四世之を召集し(一二四五)第二回は希臘、拉丁二教
 會を調和せんためアレゴリウス十世之を召集せり。
 次に開かれたるは、インノーセントの會議(一三一一)に
 して、クレメント五世之を召集し、此會議に依りてチ
 ムプールの僧派を解散せり。
 インノーセント三世(一一九八—一二一六)に至り
 て其極點に達したる法王政治は、カニフエーニョ八世

シの部

宗教裁判

(一二九四—一三〇三)の時より漸次衰頹に傾き、遂
 にアヴィニオンと羅馬に二人の法王住して各々其權力
 を争ふに至りしかば、此分權を調和し、且教會の惡風
 を矯正するの目的を以て、ヒヤの會議(一四〇九)
 及びコンスタンツの會議(一四一四—一八)相續して
 開かれたりしが、法王の奸策に依りて充分に其目的
 を達すること能はず。更にバセルの會議(一四三一—
 四三)及び第五回ラテラン會議(一五二一—二七)開
 かれたりしが、法王及び法王所屬の僧侶は依然改革
 に反對したりしを以て、是亦其目的を達すること能
 はず。教會の惡風は益々増長して、遂にルーテルの宗
 教改革に至りし。トレントの會議(一五四五—六三)
 は獨逸皇帝チャールス五世の希望に基き、僧侶の不
 品行を矯正し、且新舊二教を調和するの目的を以て
 開かれたるものなりしが、羅馬教徒は初めより改革
 者の運動に反對し、羅馬教會の信仰簡條を議定せり。
 此會議の後久しく全世界會議は開かるることなかり
 し。第十九世紀に至りては、アヴィニオン會議(一八六九
 —七〇)開かれ、此會議に於て羅馬法王の不可譲説
 議定宣言せられたり。(各其餘を見よ)。
宗教裁判 Inquisition **制度** 羅馬教會
 が中世に於て異端を討せんとして設立したる裁判所
 にして、又「聖廳」(Holy Office)とも稱せらる。
 第十二世紀以前に在りては、教會の信徒中異端を奉
 じ、又は信教を廢棄したる者は、教會の定めたる法
 律に從て之を罰したりしが、カトリ派(其餘を見よ)
 と稱する異端第十二世紀の初に至り其勢頗る盛にし
 て、佛蘭の南部、日耳曼皇帝の所領なる以太利の北部
 諸州、及び以太利に於ける法王領に迄蔓延し來りし
 ため、日耳曼皇帝フレデリック一世は協議の上、一一

宗教裁判

八四年教會令を發し、監督に命じ異端の疑ある地方を
 巡回し、異端の徒を檢査し、有罪と認めたる者を政
 府の裁判に渡さしめたり。是れ即ち宗教裁判の起源
 也。然れ共宗教裁判の真正なる創立者と目すべき
 は、法王アレゴリウス九世にして、彼は一二二九年
 宗教裁判の組織を定め、異端の捜査、抑制を以て早
 に其教區の監督に別々に委任せず、若干の修道
 僧より成れる特設裁判官を置き、之を法王及び其修
 道會長との直轄に關する者と定めたり。而して彼は
 又一二三一年法王領諸國のため教會令を發し、凡て教
 會の所附を受けたる異端者の手に引渡さるべ
 きことを定め、又頑冥なる異端者に課すべき刑罰を
 は聖俗の混合裁判所といふべき者にして、教會の
 任命したる裁判官は國法の定むる所に從て刑罰を宣
 告し、刑を執行することは専ら政府の裁判官に屬せ
 り。
 之れより先き日耳曼皇帝フレデリック二世は、一二
 二四年教會令を發して、以太利北部に在るローマ子伯
 爵所領内の異端者を焚殺すべきことを命じたりし
 が、一二三九年に至り此教會令の施行範圍は、以太利北
 部の他の諸州にも擴張せられたり。佛蘭西に於ては
 宗教裁判は第十三世紀中南部諸州に行はれ、西班牙
 には一四七八年國王フェルナンド及び女王イザ
 ベルの請願に依りて創設せられ、法王シクストス六
 世之を認可せり。フェルゲナンド王が之を創設した
 る目的は、在昔西班牙を占領したりしムーア人の後
 裔と猶太人の子孫とを檢査するに在りしが、後に至
 りて西班牙の宗教裁判はプロテスタント教徒の檢査
 に用ゐられ、第十九世紀の初めに至るまで繼續せり。
 又法王パワロ三世は一五三六年葡萄牙國王ヨハ子三

宗教條約

世の懇請に依り、同國に宗教裁判を閉鎖することを
 許可せり。此の如く此制度は第十三世紀の初めに起
 り、第十六世紀の終には殆ど消滅し、獨り西班牙に
 於てのみ第十九世紀の初に至る迄存続せり。而して
 此制度の行はれたるは、佛、西、葡の四國にして、
 獨、英其他の諸國には及ばざりき。
 宗教裁判の用ゐたりし刑罰は頗る殘酷にして、犯罪
 の嫌疑ある者は拷問を加へ、有罪と決定せる者には
 火刑、四裂、肢體を切りぞぎ、斧にて割りぞぎ
 等の刑罰を課したり。宗教裁判の犠牲となりて殺さ
 れたる者の數は頗る多く、西班牙の宗教裁判所は最
 も長期に亘り、且最も殘酷を極めたる者にして、其
 數三萬二千人に達したりといふ。
宗教條約 Concordat **滿語** 宗教條約と
 は羅馬法王と各國政府との間に締結せられたる條
 約の謂にして、歴史上著名なるはワルムス、ワー
 ルナムベルグ、ゲインナ、普爾士、バグリア、パ
 ーテン、上ライン、奧太利、和蘭、佛蘭西、西班牙
 等の宗教條約と稱せられたるもの是也。抑も此宗
 教條約は純然たる條約の一種なりや、もし果して然
 りとせば法王を以て完全なる一國家となさざる可
 らず。或は單に一片の協議書に止まれりや、然らば
 則ち法王は國家と對等の地位に在るものなりと
 いふを得ず。此問題は國際法上法王の地位に關する
 所の者にして、之に關して數箇の學說あり。第一は
 特權説にして、法王及び監督等之を固守し、教會は
 國家の上に立つ者なるが故に、教會と國家との間に
 結ばれたる宗教條約は完全に双務契約の性質を有せ
 ず、法王は何時にても取消し得べき特權を有すと主
 張す。此の説は中世紀には行はれたれ共、今日の國
 家には適用す可らず。第二は法律説にして、特權説

シの部

宗教心理学

と全然相反し、國家は教會の上に位して主権を有する者也との前提より、之を以て主権者が其部下の者に對して公布せる法律に異らざるをなし、君主は何時にても之を取消し得べし、教會は此の如き權利を有せずと論ず。此説は特權説の極端なるが如く他の極端に走れる者也。第三は條約説にして、契約は當事者双方の合意に依りて解除するを得れ共、條約は相當の理由ある場合には、一方の意思に依り一片の通知を以て自由之を解除するを得べし、而して宗教條約は契約に非ずして條約の一種也と論ずる者也。然れ共元來國際條約に於ては其當事者たる者は對等の地位を有せざる可らず。然るに宗教條約の場合に於ては、教會は國家と對等の地位に立つ者に非ず、信教自由の原則を認めたる今日に於ては私法人たるが又は公法人たるを得るのみ、故に條約の第一要件たる當事者に於て兩者相異れりといはざる可らず。第四説は宗教條約は主権者の間に締結せられたる者に非ざるが故に條約に非ず、一國が其制度を立つるに當り羅馬法王と協同したる者に過ぎず。故に之に違背することあるも、條約違反又は契約違反の場合に於けるが如く、一定の制裁を蒙る者に非ずと論ず。此説は進歩せる國際學者の說にして、最も現今の狀態に適す。

宗教心理学 Psychokology of Religion.

宗教心理学 宗教を以て一個の心理現象と見、宗教的關係より生ずる個人の心的機能の研究する學問にして、換言すれば宗教的意識は如何にして發現せらるや、又宗教的意識に於ける心的機能は如何なる状態を呈するやを研究するは宗教心理学の目的也。近年心理学の發達と共に、宗教の心理的研究又漸くに進歩し、神學に實驗心理学の科とならんとするの傾向あり。

宗教哲学

傾向あり。此主意に關する參考書としては、ニワマン、スマイスの『宗教的感情』ハッセルの『宗教に於ける心的基礎』トムソンの『人心の宗教的感情』エグア、レートの『宗教的信仰の心理的要素』ヌメルバットの『宗教心理学』ウェーメスの『宗教的經驗の種々』等を推す。

宗教哲学 Philosophy of Religion. 學科名

宗教哲学は宗教及び宗教的觀念を科學的に研究する者にして、宗教及び宗教的觀念は之を感情若くは實驗の範圍より取り去りて、科學的研究の對象となし得べしとの假定より始む。而して宗教と哲學とは元來同一の對象を有する者なると共に、此等の對象に對する人心の態度は、兩者の場合に在りて各々相異れりとの事を暗示す。即ち宗教の場合に在りては、此等の者崇敬信仰の對象となりて直ちに人心に來り、而して遂に唯外形的事實若くは徹底的表現の形式となりてのみ來る。哲學の場合に在りては、推理講究の對象となりて來り、而して遂に純正思想的思想の形式となる。感情は凡ての場合に於て知識を包容す。感情の對象は其道徳的なる其審美的なる其宗教的なるに拘はらず、其中に包容せられたる知識に依りて領解せられざる可らず。此知識を感得れば其對象との關係に盲目的本能若くは動物的衝動に過ぎざるものとなるべし。然れ共感情の中に包容せられたる知識は、尙ほ包含的、隱微的知識たるに過ぎず。眞に知識の名に副はんには、先づ更之れよりも以上、之れより高尚なる者とならざる可らず。而して其高尚なる者を説明するは哲學の特權也。故に吾人は宗教哲学に於て、吾人の心意が尙ほ或る意味に於て客観となり、主観と客観とが直覺的情緒の中に融合せる直接の範圍を去り、單純なる信仰を察

宗教法典。修道僧。宗派

て、更に冷にして而かも更に高貴なる範圍の中に入る也。換言すれば宗教哲学は一見矛盾的思想なきが如く見ゆる自然の調和を破り、更に深奥にして破る可らざる一致を追求し、宗教の合理的基礎を定むる也。宗教哲学の參考書としては、フロン、ケーアドの『宗教哲学精論』(一八八〇)フライアールの『宗教哲学』(一八八六)フエーアールの『基督教哲学』(一九〇二)ヤバチエの『歴史及び心理学を基礎とする宗教哲学』(一九〇二)此書邦譯あり。ロツツェの『宗教哲学概論』(一八九二)ローレルの『宗教哲学』(一八四九)フリーディングの『宗教哲学』(英譯一九〇六)等を推す。

宗教法典 Canon,ローの條を見よ。

修道僧 Monk 『寺院及び寺院主義』の條を見よ。

宗派 Sects or Denominations. 前語 宗

派とは同一宗教の中に在る分派の謂にして、基督教も亦數多の宗派を有す。新舊二教は其大區分にして、此二大教派は宗教的觀念に於て異なる相違を有す。即ち舊教徒に在りては、基督教の要素は超自然的に神より與へられたる教會の權威に服従するに在り。羅馬教徒の信する處に依れば、教會の首領は羅馬法王にして、彼は無條件に信條を定め、又細微の點に至るまで、基督教徒の生活及び禮拜を律するの權を基督より委せられたる者なれ共、プロテスタント教徒は法王の權威を拒否し、聖書を以て信仰の標準となし、真心の自由を重視せり。是れプロテスタント教の羅馬教會と分れたる主因にして、此根本的相違より教義、制度等の上にも亦大なる相違を生じたり。舊教亦分れて二となる。東(希臘)西(羅馬)二教會即ち之にして、元來此二教會は之を奉する信法の固

シの部

宗派

民性、國語及び其天賦の資質初めより相異りし者なるに、西帝國の建設せらるるに及びて、法王政治の發達を來し、コンスタンチノールの教長と羅馬法王との間に競争を起し、其結果遂に東西相分離するに至りし也(尙詳なることは『希臘教會』及び『羅馬教會』の條を見よ)。真心の自由を重視し、羅馬法王の教權に反對して起りたりしプロテスタント教が、許多の宗派を生ずべきは論理上當然の結果也。宗教改革運動の初めに當り、ルーテルはツヴァンゲリイと聖職の關係に於て意見合はず、一五二九年マルブルグの會議に於て調和を謀りたれ共其効なく、遂にルーテル派(Luther Church)、アプ、ムド派(Balformed Church)の二に分れたり。是れプロテスタント教に於ける宗派の嚆矢也。二者近似せる點を有すること多しと雖も其異なる點を擧ぐれば、ルーテル教は直接に羅馬教會に存する猶太教的要素即ち儀式禮文の主義に反對し、プロテスタント教は其異教的要素を攻撃せり。一は重に内部の精神を改革せんとし、他は内部の精神と共に外部をも改革せんと欲し、一は觀念論及び神祕説に傾き、他は實際的の氣力強盛にして、教會と社會との理想を實行せんとするの風あり。一は救済に關する主觀的の狀態即ち各個人の信仰を重じ、他は客觀的の狀態即ち神の意志權力を重じたり。福音の自由とはルーテル派の標語にして、聖書は新約を重じ、プロテスタント派の神學者は神の律法の思想を重じ、舊約全書より其主義説明を取れり。ルーテル教會は中央日耳曼を中心として、北方スカンディナヴィア地方に擴張し、後米國にまで及べり。此派の教義標準はアウグスブルグの信仰告白にして、米國の教會は祖國の教會よりも神學上一層自由なれ

宗派

共同之を離れず、プロテスタント教會は初めツヴァンゲリイの下に在りてツヴァンゲリイを中心とし、後カルヴァン出づるに及びて、其中心ツヴァンゲリイに移り、其本國西の外に日耳曼の各部、英、蘇、蘭、米諸國に擴張し、『ツヴァンゲリイ』及び『セルマン』、『プロテスタント』の二派に分るゝに至れり。尤も米國にては此二派相合せり。此派教義の標準はハイデルベルグ問答書、ドルト議會の告文等也。英國教會(English Church)は英國に於ける宗教改革の結果として生れ出でたる者にして、プロテスタント教會の系統に屬すれ共、教父の權力を過重し、舊時の儀文を保存し、監督政治を固守する等保守的傾向を有するは此派の特色也。教義の標準としては三十九箇條及びウェストミンスター信條を有す。此派米國に入りて『プロテスタント』、『ユニバーサル教會』(Protestant Episcopal Church)となる。英國教會は又高教會派、低教會派、廣教會派の三に分る(各々其條を見よ)。我國の日本聖公會と稱するは、英、米二國の監督教會が我國に傳道せるを併稱せる者也。英國教會に反對し、其監督政治及び儀文、服制等を廢止し、教會に幾分共和制度を布き、其禮拜法を使徒時代の單純なる形式に復歸せんとせる者を長老派(Presbyterian Church)となす。此派の神學はカルヴァン派に屬す。蘇國に於ける此派は、教會政治に關する議論より、一八四三年分派して二となれり。米國の長老教會も一八三七年新舊二派に分派し、後兩派の合併行はれたれ共、神學二様の風は依然として存せり。我國の日本基督教會と稱するは、長老派及び其他の數派の一致して我國に傳道せる者が發達して遂に獨立教會を爲せる者也。長老派よりも更に甚しく英國教會に反對し、個々の

宗派

教會の自治制を主張せるを獨立派(Independents)又は會衆派(Congregational Church)となす。此派の神學も亦カルヴァン派に屬す。此派米國に渡り新英州に於て大なる發達を爲せり。我國の日本組合教會と稱するは、米國會衆派の我國に傳道せる者が發達して、遂に邦人の手に移りし者也。ユニヴァーサル派は(Untarian Church)は新教徒の大派以外に在り、宗教改革の曉より其萌芽を發し、ヨーロッパ、トランシルバニア、和蘭、英國等之に代表する者ありしが、其最も盛なるは米國新英州に於て起りたるそれ也。此派は基督教の神性を否定し、三位一體の教義を拒否し、惟一神を信するを以て其教義となす。其教義ユニヴァーシアン派と同じく、而して萬人皆同一に救はるべしとの教義を重視せる一派をユニバーサリスト派(Universalist Church)となす。皆濟派の義也。我國にては初め宇宙教會と稱したりしが、近時同仁教會と改稱せり。バプティスト派(Baptist Church 浸禮派と譯す)は浸禮を主張し、小兒のバプティスマに反對す。其初めは英國に起りしはチャールス一世の時代に於て、米國に渡り頗る隆盛を極む。其中にアルメニヤン派の神學を奉する者も、カルヴァン派の神學を奉する者もあり、ために普通バプティスト、特殊バプティスト等數多の分派を生ぜり。クイーカー派又はクワンクワ派(Quakers or Friends Church)は儀式式例に反對して起り、極端に内部の光明を重する宗派也。故に此派には洗禮、晚餐等一切の儀式なく、神祕説の精神の發表として見るべし。メソヂスト派(Methodist Church)は第十八世紀に於て英國教會を改革せんとして起り、遂に英國教會より分離したる者也。アルメニヤン派の神學を奉じ、

シの部

終末論

英國教會の三十九箇條を修正して廿五箇條となし、ウエスレーの新約全書註釋及び五十二の説教を併せて其教義の標準となす。此教派は後米國に渡りて頗る勢力を占む。日本メソヂスト教會は米國南北メソヂスト、エヒスコパル教會及び加拿大メソヂスト教會の我國に傳道せるものが、後合同して一となり獨立せる者也。

以上は新教諸派の中なる宗派の起源を示したるに過ぎず。此外宗派の数は頗る多く、米國合衆國に在る宗派の数は三十箇以上にして、更に之を細別すれば百廿有餘の小派に分る(亞米利加合衆國の條を見よ)。歐米諸國の傳道會社より我國に宣教師を送り傳道せる宗派の数は三十箇以上に及びりといふ。以上記載の外に其重なるものを舉ぐれば、福音教會、基督同胞教會、メソヂスト、プロテスタント(美稱)教會、デナイプルス教會(日本にては基督教會と稱す)、アドヴェンチスト教會、クリスチアン教會等也。各宗派の詳細に關しては各々其餘を見よ。

終末論 又は末事論 Eschatology. (Theology, the last things.) 聖書に示されたる教義として、人間及び世界終末の状態を論ずる者を終末論又は末事論といふ。人間及び世界終末の状態に關する思想は、歴史は道徳的過程にして一目的に向て動きつゝありとの他の思想に其根據を有す。聖書は此道徳的過程を以て、殊に神の立て給ふ隨順的過程となし、神自ら即ち人類向進の目的にして、人の完全は神との完全なる交通に在り、而して此の完全なる交通は、隨順に依り世界の狀態の一新せるに由りて得らるべしと論ず。此見地よりメソヂヤ的思想及び希望は、終末論の重要な要素となることなれ共、舊約、殊に其早期時代の者に在

終末論

りては、此思想未だ充分に發達せず。願主は神自らにして(詩三)もしメソヂヤを以て願主となすものあらば、此は唯之を以て神の顯現となせるのみ(賽九の二一七)。

【舊約の終末論】 舊約の終末論は國民の終末論、個人の終末論の二項に分ちて之を論ずるを得べし。前者は地上に於ける神の國完成の教義にして、後者は靈魂不滅の教義也。

(一) 國民の終末論 以色列人が國民として存在せるは、出埃及以後のことなれ共、舊約は此以前より宗教的使命の既に彼等に依託せられたりしことを記し、附するに世界の終末に關することを以てせり。尤も此等の言は何れも概括的にして、其意義及び其起るべき時に至ては多く漠然たるを免れず。其最も早きは、婦の毒蛇の頭を砕かんとの約束にして(創三の十五)此約束は人類全般に關す。均しく人類のなれ共其意義の稍や明となれるは、アブラハムに與へられたる「天下の諸の宗族に依りて福を得ん」(創十二の三)との約束にして、此約束はアブラハムの子孫に依りて神を知るの智識萬民に及ぶべしとの意なること、思ふに漸く明となりしことなるべし。アの祝福(創九の廿五以下)は尙ほ世界的なれ共、ヤコブ及びモーセの祝福(創四十九、申卅三)は國民的也。而して彼等の用ゐたる「終りの日」なる語は、彼等の眼界の達する最も遠き將來を云へる者にして、使用者に依りて其意義同じならず。即ち創四十九の一は迦南に於ける以色列民族最後の排置を云ひ、賽二の二は人類最後の狀態をいふ。申卅二は以色列國民勝利の希望を以て終り、デビダは其最後の語(後廿三)に於て、其王室の下に義の王國起るべきことを云へり。

終末論

【エホバの日】 前八世紀に於て以色列人民の信仰は殆ど完成せり。アモスは神は義也との事を教へ、ホセアは神は愛也との事を、イザヤは神はシヤンに其國を立てたる王にして、神の靈に満ちたる平和の君を教へたり。然れ共イザヤの此メソヂヤ的終末論の外に、彼の早き時代に關する他の終末論あり。彼は之を「エホバの日」と稱せり(賽二、三)。彼は此二者を明に結合せざりしと雖も、此二者は同一の審判を云へる者にして、一は其暗黒の方面を示し、他は其光明の方面を示したる者に外ならず。「エホバの日」なる語の初めて記されたるは亞摩西書(五の十八以下)なれ共、其觀念は早くより之れあり。一般の人々は之に依りて、彼等の神エホバが彼等を救はんため彼等の中に立ち給ふ日を意味せり。而して其所謂致なる者は主として外部の抑壓よりの救の義なれ共、又其中には内部の社會的災害よりの救の義をも含蓋せり。一般の人民は唯抑壓災害を感じ、之より救はれんことをのみ望みたり共、預言者の立場より見れば、エホバは倫理的な存在なれ、以色列及び諸國民の道徳的統治者にして、以色列及び諸國民の罪惡はエホバの制裁を要することなれば「エホバの日」は先づ審判の日ならざる可らず。然れ共審判其事は目的に非ずして、隨順に至るの道なれば、審判の日の後には常に救の日ある也。而して「エホバの日」なる語は、何れの審判の日をも指せるには非ずして、最終の普遍的審判の日を指せる也。又「日」なる語は、神が審判の具として用ゐ給ふ敵の存在を暗示す。即ち或る時は此日にはエホバの長るべき審判の光輝に伴ふて天地震動すべしと云ひ(賽二の十一、十二)又或る時はエホバの怒るべき諸國の民を

シの部

終末論

用ゐて其審判をなすしめ給ふべしと記さる(賽十三、番)。預言者は又「エホバの日」の來るを以て近きに在りとなせり(賽十三の六、一、十五、二の二)。是れ彼等は當時國民の腐敗甚しきを見て、神の審判近からざるべからずと思ひ、又は内外外患の交々至れるを見て、神の審判の顯はるゝ徴となしたりしに由りて。彼等は宗教的眼光を以て凡ての物を見、世界の將來は神の手中に在りしと確信、斷乎其希望の實現せんことを待ち望みたりしことなれば、斯く思惟したりしも致て性むを要せず。而して彼等が審判の及ぶべき範圍に就て考へたる處は時代に依りて同じからず。即ち左の如し。(一) 舊約以前の預言者は「エホバの日」を以て主として以色列の上に来るべき審判也とせり(歴三の二)。此審判は國民的の解體也。然れ共此解體は更に新なる國民を改造せんがために外ならず。此日には以色列の中の罪人は滅され、實しき者と謙る者とは遺さるべし(番三の十一、賽二、三、何四の三、二の十八以下)。(二) 舊約と共に以色列の審判は應驗せられたりしが故に、舊約中及び以色列恢復の時代に於ては「エホバの日」の審判は異邦人の上に来るべく、而して其結果以色列は顯はるべしと信ぜられたりき(賽十三、基、亞一八)。(三) 然れ共以色列恢復の後、依然其國民の中に不和争闘及び其他の諸惡行はるゝを見るや、預言者は又「エホバの日」の審判あるべきを説けり(馬三の二以下)。然れ共此論を論ずれば、舊約以後の文學は、審判は異邦國民の上に来るべく、其結果以色列は救はるべしと云ひ、此思想晩出の詩篇を一貫せり。

要するに「エホバの日」は、エホバが自己を顯現し、自己の性質を示し、其驚くべき業を地上に爲すの日にして、舊約に示されたる國民終末の思想を約言すれば、即ち左の如し。(一) 神は自己を顯現す。(二) 神は世界の民を審判す。(三) 審判の後以色列は救はれ、エホバの完全なる王國なる、而して世界萬民も亦其國に依る。(四) 此狀態は最終、永遠にして救はれたる人民の福は彼等の中に神の現在し給ふことに依りて成立すとの事也。

及び未來の希望に關する其理は、各日之を自己に應用するに至れり。個人の終末論に關し二箇の區別すべきものあり。第一は宗教を信する者と信ぜざる者とに拘はらず、以色列人の均しく有したりし死及び死者の狀態に關する觀念にして、此等の觀念の中には別に道徳的意義なし。第二は救度なる人々の心に有したりし滿仰心、直覺若くは推論にして、是れ適當に舊約の教訓と呼ばれ得べき者也。此滿仰心及び直覺は智識的若くは感情的、倫理的若くは宗教的なることを得べしと雖も、其根本的觀念は道徳的也。即ち神と人とは道徳的存在にして、彼等の關係は道徳的也、宇宙は道徳的組織にして、神は愛に其義を顯はるゝ、人は愛に依りて神を見ることを得、正義は必ず勝利を得べく義人は永遠に生くべしと云へる思想にして、此思想は約百記及び詩卅七、四十九、并に七十三篇の根柢を爲せり。此點に關し講究すべきは、死及び死者の狀態、生命、及び死生の調和の三事也。(一) 死及び死者の狀態 舊約の示す處に依れば、人は死に於て滅絶するに非ず、陰府(Sheol)に於て尙引續き存在す。然れ共陰府に在りては死ありて生命なきが故に、其存在は影の如くして弱し。又陰府は凡ての死人の住所なれば、義者不義者の間に運命の相違あるなし。舊約は陰府に在る者を魂又は靈と呼ばず、然れ共彼等は生前有したりし人格の影の如き外形を有せりと思惟せられたりしが如し(詩六、卅、賽十四、卅八、卅九、十)。然れ共此等の思想は前記に云へる如く、適當に舊約の教訓といふべき者に非ずして、其教訓の起脚點となりたる當時の人々の通俗的信仰なるに過ぎず。(二) 生命 舊約の生命も死と同じく、吾人が生命と

終末論

終末論

シの部

終末論

呼ぶ所のものと謂にして、身體と靈魂との一致せる完全なる人格の存在をいふ。人の存在の重要な部分に身體にして、生命は身體に於ける生命也。故に約百は「人もし死なば復た生きんや」と云へり(伯十四)。然れ共人の生命は神より生命の靈の與へらるるに依りて生じ、死は此靈の人より去るより來るものなるが故に、此等の靈は道徳的觀念の下に來り「生命」とは神の恩恵に依れる道徳的生命的意義するに至れり(詩廿三)。「義の道に生命あり」とは死より救ふこといふが如し、舊約は専ら此世の生活に於ける人の状態を論じ、人は神に對し如何なる精神を有するも、此は常に此世に於て顯はるる者にして、死は此等の關係を變化する者に非ざるのみならず、却て之を暴露する者也とのことを教ふ(詩廿七、七十三)。

(ハ) 死生の調和。生命に關する此觀念は死の事實と衝突す。而して靈魂不滅に關する舊約的教義は、敬虔なる人々の信仰に依りて死の事實に對する努力也。此努力に二種あり。其一是死の事實に反する不死の要求、生ける人の神との交通は、死の事實に依りて妨げられ得べからざるの確信に基く者にして、詩十六篇に「我れ常にエホバを我が前に置けり、エホバ我が右にいませば我れ動かざる」と云へるべし、汝我魂を陰府に棄て置給はず、汝の聖者を墓の中に朽らしめ給はず」と云へるは即ち是にして、作者は彼エホバとの關係は離す可らず、神に於ける彼の生命は無窮也とのことを確信せる也。

第二は前や之と異り、死する事に反對するに非ず、死を以て死に非ざる思想にして、即ち聖徒に在りては死は世人の考ふるが如く神より離れて其自ら降ることに非ず、生時より神との交通は既に其自ら生命にして、此關係は死するも尚繼續する者也との

終末論

の信仰也。此信仰は詩四十九、七十三及び或る意味に於て伯十九に言ひ顯はる。

陰府(シ)。「陰府」に關する舊約的言語は通俗的信仰を示せる者にして、積極的價值少し。舊約の中には死を以て絶對的存在の終極に達したる者となすが如き言語なきに非ず(詩廿九の十三、百四十六の四、伯十四の七以下)。然れ共此等の言語は單に其生命の途に最後に近づけるを悲しめる者に外ならず。「陰府」の思想は以て之を隠すべし。「陰府」(シ)なる原語は「空虚」と云へる語より出でたりとの説あれ共、其語源明ならず。兎に角光明及び生命の境の反對、即ち暗黒の境にして、伯十の廿二には之を形容して「此地は暗くして晦冥に等しく死の陸にして區分なし、彼處にては光明も黑暗の如し」と云へり。其位置は明ならざれば、地の下又は水の下に在りと思はせらる(伯廿六の五)。然れ共之を以て蓋し同一視すべからず。陰府は死の往く場所にして、此處に父祖あり、故に人は死して此處に父祖と相會する也。然れ共死は生命の靈の去るより來る者なるが故に、陰府に在る人は弱くして陰影の如し。此處は「幽寂處」(詩九十四の十七)又「忘失の國」(八十八の十二)と稱せられ、此處に在る者は何事も知らずと云はる(傳九の五、伯十四の廿一)。又陰府は萬人の悉く往くべき所にして(伯三十七)賞罰の場所に非ざるが故に(傳九の五)此處には善惡の區別なし。人死すれば再び地に歸ることを能はず、又地上に起れる何事も知ることを能はず(伯七の九、十四の十二)。故に陰府は生ける者の世界との間には何等の關係あるなし。又死に依りて神との交通止むが故に、陰府と神との關係も斷絶する也(賽廿八の十八)。

終末論

個人の終末に關する聖句は詩十六、十七、廿二、廿七、四十九、七十三、及び約百記を以て其重要な者となす。多くは詩的にして、或點に於ては其意義明ならず。神の顯現、其審判、及び完全なる神の王國に於る國民の救済は、此等の聖句に顯はれたる作者の信仰にして、此信仰は前八世紀以後に顯する者也。而して彼等は「エホバの日」來りて國民の運命に大なる變化起るべく、個人も亦之に與るべしとの事と、義人は惡人の如く陰府に落つることなく、無窮の生命を得べしとの信仰を述べたり。略言すれば舊約聖徒不死の信仰は正義は永遠無窮也との道徳的觀念に其根據を有する也。

(舊約の終末に關する思想を研究せんとする者はホッ、オレリイの『王國終末の預言』アルゲルの『未來生活教義の批評的歴史』メルソンの『靈魂不滅』シユルキーの『死後の生活』サレモンドの『靈魂不滅に關する基督教義』等を見るべし)。

【經外聖書の終末論】此項下には、前二百年頃より後百年頃迄の間に出でたる經外聖書の中に含まれたる、猶太人の終末に關する思想の概略を叙す。而して彼等の此思想の發達を助けし他の思想あり。即ち(一)第一は神を以て萬物の創造者、世界の道徳的統治者となすの思想にして、此思想の發達と共に「陰府」に關する舊約的觀念は變化せざるを得ざりき。エホバを以て單に以色列の福祉のみを謀る種族的神となせる間は、陰府はエホバ統治の範圍外に在り、道徳的制裁の及ばざる處也と思はせらる。世界は得べしと雖も、エホバにして萬物の創造者、世界の道徳的統治者也とせば、斯る思想は長く成立すべからず。初の間は此矛盾せる思想も尙數百年間隔々相存在したりしが、マッカビ二書初の時代に至り

シの部

終末論

て、陰府は道徳的懲罰の行はる場所也と思はせらるるに至れり。又之と共に審判の思想も擴大せられ、萬民の運命の決せらるべき最後の世界的審判の思想發生するに至れり。然れ共猶太人は異邦人に對しては何處迄も偏狭の思想を有し、異邦人の受くる審判は即ち刑罰也と思惟したりき。

(二) 次は個人に關する思想にして、個人的懲罰の教義は既に舊約の中に在りて發達せり。即ち初代の以色列人は家族、種族、又は國民運命の思想を有し、此思想は後に至り個人の責任を家族又は國民の責任と同一視し、頗る奇特性なる結論を構成するに至りしが、エスキエルは此思想を攻撃し、其結果遂に種族的個人主義まで唱へ出すに至れり(十八)。當時の思想に從へば凡ての災厄は神の刑罰にして、凡ての福祉は神の恩恵也。斯くの如く人の行為の結果を現世にのみ限りしが故に、所謂天道是耶非耶の疑起らざるを得ず。約百記及び傳道の書は即ち此問題を解釋せんがために書かれたる者にして、當時の此誤りたる思想は併れ、一方に於てエホバの忠實なる僕は、現世に在りても來世に在りても神の愛より離るること能はず、陰府も彼に對しては其手を伸ぶること能はずとの確信を有するに至り、他方に於て以色列の宗教的思想家は、神の正義は現世に於て其完全なる結果に達せざるが故に、來世に於て之に達せざるを得ずとの考より來世懲罰を教達し、來世に於ける幸福なる個人的存在の觀念は宗教的思想の假定說となるに至り、斯くて陰府に關する舊思想は道徳化せらるるに至りしが、此は舊約時代に於てせずして、其以後の時代に於てせり。

(三) 次はメッシャ降臨の希望の盛なるに至りし事也。舊約時代に在りては以色列人の觀念は單に地上

終末論

に限られ、敵國外患亡びて以色列王國の永遠に建設せられんことを其唯一の希望なりしが、晩代に至りて彼等は今の世と後の世との間に大なる差異を設け、遂に今の世は惡魔の支配する處にして、メッシャ直接の統治下に無窮の幸福を享けんことは、後の世の事也と思惟するに至れり。

以上の如き思想に基き、此間に猶太國民の發達せる終末に關する觀念の概略を示せば左の如し。

(一) 最後の災厄。メッシャ王國の來る前大なる騷擾の時あり。此時猶太國民は救はるべしと思惟せられたり(但十二の一、マッカビ二書五の二、三)。

(二) メッシャ(イ)「エテオヒヤ、エノク書」には、メッシャを以て單に受動的の人格の如く記し、天のエルサレムを其王國の中心となし、變貌の以色列を統御する者也として顯はせり。紀元第一世紀の文籍にも亦此思想二回見ゆ。(ロ)「神聖的託宣」(Silyllae Oracles)及び「ソロモンの詩篇」には、メッシャを以て其手にて其敵を殺す勇士として顯はせり。又後者及び「パタクの黙示録」エノク第四書にはメッシャをデビアの裔となせり。而して以上の書にはメッシャ王國を以て一時的の者となせり。(ハ)「ソロモンの詩篇」には又メッシャを以て其口の言葉に依りて其敵を殺す勇士也として顯はせり。「エノク第四書」にも同一の思想あり。(ニ)「エテオヒヤ、エノク書」の他の部分には、メッシャを以て人類永遠の統治者、審判者とし、超自然的存在として顯はせり。此思想は正統以外の猶太文學に於て發見する最も崇高なる思想也。

(三) メッシャ王國。此點に關しては三箇の思想猶太人の中に行はれたり。即ち(イ)メッシャ王國を

終末論

以て永遠の國となす者(ロ)之を以て單に一時限り地上に現出する者となす者(ハ)所謂メッシャ王國なる者なしとする者也。

(四) 猶太人の歸國。神は以色列人を俘囚より歸還せしめ給ふべしとの約束は、舊約及び經外聖書の多くに記さる。

(五) 再生。再生に關する猶太人の思想は一ならず。即ち(イ)前二世紀頃には以色列人悉く蘇るべしと思惟せられたり(但十二の一三)。(ロ)「エテオヒヤ、エノク書」は同時頃の作にして、此書は、義人のみ蘇るべしとのことを説けり(ハ)「同世紀の終の作者は、最後審判の後義人の靈魂は永遠不滅の幸福を享受すべしと説けり(ニ)」。又他の作者は義人は死後直に靈魂不滅の幸福を享受すべしと説けり。(ホ)而して又他の文籍には、最後の審判に先ち人類悉く蘇るべしとの思想あり。

(六) 審判。審判に關する思想も亦一體ならず。然れ共概して論ずるに、世界最後の審判には二階段ありとなせり。最初の審判は人間——以色列の聖徒の如き——の行ふ處の審判にして、之を經る審判又はメッシャ的審判といふ。第二の審判は最後の審判にして神自ら之を行ひ、又はメッシャをして之を行はしめ給ふ者として記せり。

(此時期の終末論の參考書としては、前項に記せるもの外、ドラモンドの『猶太のメッシャ』スタントンの『猶太及び基督教のメッシャ』等の書を推す)。

【新約の終末論】新約の終末論は、舊約及び經外猶太文學の思想より發達し來れる者にして、之より離しては領解し得べからざる雖も、新約には又新約特有の思想ありて、粗雑猶太にして且非精神的なる要素を有す猶太教の思想と同一ならず。去れ共之

シの部

終末論

を顯はすに方りて組織的に説示したるに非ず、又形而上學若くは神學の言語を以て顯はしたるに非ず。耶穌及び其使徒等が必要に應じて述べたる語が此處彼處に散在するに過ぎず。且之を述ぶるに方り

(イ) 耶穌の終末論、耶穌の終末論が新約終末論の基礎をなせるや論なし。其觀福音書に依れば、神の國は耶穌思想の中心にして、耶穌は神の國を建設し其基を開きたれ共、此國は發達のの者にして、遂に完成すべき者なれば、彼が此國將來の發達及び其完成に就て沈黙すること能はざりしは當然の事にして、從て彼の神の國の觀念に終末論の伴ふは論理上自然の結果也(神の國に就ては其條及び「耶穌教訓」の條を見よ)。

終末論

なれば或時は之を以て歴史的過程の如く語り、又最時は之を以て世來の現象なるが如く語り、何れを以て耶穌本來の意義也とすべきか之を決定せんこと極めて難ければ也。思ふに初代の弟子等は主再來を以て末日に在りて爲したるが如く、神の審判も亦末日に在りて爲し、耶穌が審判の精神として語りたる者をも、世來審判の日に就て語りたる者なるが如く思惟し、之を混交するに至りしなるべし。

(ロ) 世界の審判、世界の審判に關する言語も、亦耶穌の教訓中に屢々發見せらるべしと雖も、再來に關する言語と同じく之を解説せん事頗る難し。何と

終末論

又之を以て異邦人の審判に就て語りたるなりとなす者あり(アルイス・ゲメント)而して彼等は何れも之を以て末日審判に就て語られたる者也となせ共、耶穌が特にタラスチオン若くは異邦人なる一階級の審判に關し此の如く語りたりとは思惟すること能はず。又之を以て全人類の審判に就て語りたる也と假定するも、凡ての人の運命が唯善の一事に依りてのみ決定せらるべきものも思惟すること能はず。されば福音記者が之を以て末日審判に關したる者也と思惟したりや否やは何れ也とすも、耶穌本來の意義は、神の審判の精神を説明したる迄にして、即ち愛心より出でたる行爲は假令小事と雖も神

第四福音書の審判に關する耶穌の言は、其再來に關する者と同じく、明に現在に行はるる主觀的審判を意義せり。例之「彼を信する者は審判をせず、信せざる者は既に審判されたり、蓋神の生み給へる獨子の名を信せざるに由る」と云へるが如し(三の十七、十八、十二の廿七、廿八參照)。斯の如く耶穌の教訓中には「世界の歴史は世界の審判也」と云へる言の如く、審判の精神及び過程を説きたる者多しと雖も、此過程は末日の審判に於て其終極に達せざるべから

シの部

終末論

す。換言すれば世界の終末に於て、生ける者と死せる者と共に神の審判に立ちて其審判を受けるの日なる可からず。此客觀的審判の思想は第四福音書にも之れなきに非ず。例之「末日に之を審判すべし」と云ひ(十二の四十八)「又人の子たるに由りて之に審判するの權を賜へり、之を審する勿れ、そは基に在る者皆其聲を聞きて出づる時來らんとすれば也」と云へるが如し(五の廿七、廿八)又其觀福音書に「兩眼ありて地獄の火に投げ入れられんよりは、一服にて神の國に入るは爾のために善き也、彼處に入る者の爲つす火きえず(可九の四十七、四十八)と云ひ(此等の者は究りなき刑罰に入り、義者は究りなき生命に入るべし)と云へるは(太廿五の四十六)歴史的過程の終極即ち世來に於て最後の審判あるべきを語りたる者なること殆ど疑なし。然れ共審判の方法、結果等に至りては耶穌評に之を語らず。

(イ) 耶穌の終末論、福音書以外の新約の文籍にも亦組織的の終末論あるに非ず。又其詳細の點は作者の異なるに從て相同じからずと雖も、基督の再來、身體の誕生、義しき審判、及び最後の賞罰等の教義に至りては皆相一致せり。

爲の善惡に應じてなるべき者なることを説けり(哥後十の十)審判主は業より神なれ共(羅十四の十二等)又基督を以て審判主として顯はせる處あり(哥後五の十、黙一の十七、六の十六、十七等)又神は基督に依りて人を審判くとも記せり(羅二の十六、徒十七の廿一等)。

終末論

終末論

純粋絶対我は知的直覺に依てのみ思議し得べしと論ぜり。フイヒテに従へば世界の道徳的秩序が即ち神なり。青年シェンケルは其の柔らかな心にて此の道徳的汎神論に酔ひぬ。されど幾何もなく彼は其の獨特の途に就けり。

(二) 『自然哲学』及び『超絶的唯心論』時代 シェンケルが其の獨創的知識を以てカント哲学に代る所の教義を案出し、偏遠哲学に一新時期を開きたるは實に此の時代なり。フイヒテ哲学にては自然は唯だ個人の道徳的媒介たるに過ぎざりしも、シェンケルの如き外界の印象に對して敏なる心は、自然を此の地位に止むる能はざりき。以爲らく自然は絶対我並に睿智の顯彰の一形式なり。自然は有形の心、心は無形の自然なり。自然の最高目的は全自然に顯彰せらる。而も唯だ人に於て提へらる。人の中に



観の全然的無差別となし、其の存在の最高法則は絶対の同一(一)なり。存在する凡ての物は此の絶対自身なり、此の外に何物も存せず、故に宇宙自身にして宇宙の原因に非ず、主観客観共に絶対の中に存するが故に、絶対は自らを主観と客観とに

なり、其の中何れか過重なることもあるべし、されど絶対意志は兩者に共に含まる、斯かる途にて絶対は一方に心を保ち、地方に自然を保つべし。心と自然の此の差別にて主観客観生ずと云へり。シェンケルは此に宗教及び基督教を持ち込み、宇宙に於ける現實と理想、自然と歴史の對立に應じて歴史自身に又同じ對立あり。古代世界と古代宗教は自然の過重を示し(多神教)基督教にては理想が神秘の中に顯はさる、歴史の進歩に三時期あり、一は自然の時期にして希臘宗教及び詩に於て精華を發し、二は運命の時期にして古世界の末に關し、三は攝理の時期にして基督教に由て來れり、神は基督教に於て始めて客観となり、此の化身は一時的存在なり、其の行爲なり、基督教に其の期に於て有限を超越せし、此の聖靈の降來に由て新世界の光たるに達せしめたりと論ぜり。

(四) シェンケルの説の變遷前の時代 此の時代は神祕的に傾き、ヤコブ、ヘーメの感化の最も著しきを見る。シェンケルが以爲らく、カント兼フイヒテ唯心論は實在主義に根據を置かざるが故に、人の自由といふことに就て十分なる解釋を供せず。然るに自己の哲學は實在主義なり、何となれば『根柢たる神』と『神の中の自然』とを區別せり。

此の『神の中の自然』即ち暗昧盲目の意志は自己を産出せんとする永久の切望なり。このもの吾人の存在の根柢にも横はれり。然れども神は自らの中に自らの認覺を産出す。此れ即ち理解にして其の切望の表彰なり、されば永遠の切望と理解と共に神の中に在り。人に於ては兩者合體せり。暗昧の意志の方は人自身の意志なり。之と共に人は理解力を賦せらる。此れ宇宙意志の機關なり。兩原理の分離は善惡を在り得るものたらしむ。これは人間の自由意志あることを示す。人の特殊の意志が力を得れば善なり。人の善に向ひてする決定は行爲なるが、此は永遠の行爲なり、何となれば時といふものより前に爲されればなり。神に由てのみ特殊の意志と一般的意志とは再合せざるを得。而して此は天啓即ち神が人の性を取ることに由て爲さるるなり。

(五) シェンケルの運命論の說 此にて意と宗教論を大成す。先づ消極哲學と積極哲學とを區別し、ヘーゲルの哲學は實在に就て十分の知識を興ふる能はざるものにて消極なりとし、絕對者を見出だすは人間理性の要求又眞哲學の目的なるが故に、神の眞實の三能を區別して一に可能存在、二に可能存在なき純存在、三に前兩者なき其の一致即ち客観主観たる絶対自由存在となし、三者は何れも存在自身にはあらず、一の絕對者たる一般的存在の三屬性なりとなし、此の絕對者は自己の外部に存在するの自由を有し、其の三能に従ひて世界の中に自己を顯現し、世界の『カワサ、マテリアリス』材料原因『カワサ、エフィカダス』動力原因『カワサ、フイナリス』終局原因たり、唯だ世界創造に由て神は十分に自己を知り得たり、此の創造は自己の性質に非ず、自己の意志の行爲也と云へり。シェンケルは自己の神に就ての

觀念は原始第一神教の觀念なりと信じ、其の神に於ける三能説より出發して基督教の三位一體説を立てたり。曰く三位一體の三人格は創造者としての父、父より生れたる子、及び聖靈にして、父は造物に材料を供し、子は形式を興へ、聖靈は創造を完うす。而も子も聖靈も神の中に在り、人は神の肖像なるが、其中に同じ三能と同じ自由でありて、此の自由は三能を分離せしむ。此の分離は人類墮落の時實際となれり。此の調和回復のため墮落せる人々世界を神に歸らせんとし、子自身とならざるべからずと。シェンケルは其より神話論を立て、進んで神話より天啓の時代となれることを説き、基督教の人格は基督教の中心なりと言ひ、最後に教會史を論じ、之を三時期に分ち、一を彼得時代即ち加特力主義、二を保羅時代即ちプロテスタント主義、三を約翰時代即ち未來の教會とせり。

シェンケルは一方に於て時代の哲學や詩の運動と提推し、時代の熱望を表彰せしと共に、他方には運命論の哲學にて基督教義を近世哲學にて説明せんと試み、其の思想は近世獨逸神學の上に大感化を興へたり。獨逸國民は其の全力を擧げて宗教を求む、然れども其の特性に従ひ知識と結合し科學に根據せる宗教を求む。之は彼の言なるが、彼の哲學は此の精神を以て立てられしなり。

根本的教訓(一八七七)『マリアンナ』(一八六八)等を著す。其最も著名なるは『那羅の性格』(一八六四)にして英譯あり。巧み流麗なれども、深大の印象を興ふるものには非ず。

シェンケル ヨハン ハインリッヒ Schopenhauer, Johann Heinrich **人名** 一七七〇—一八二六 獨逸の哲學者。普魯士軍醫の子。メムルに生れ、十五歳の時ケーニヒスベッセルにて商店に奉公せし、直ちに商家を去れり。暫く預備教育を受けたる後、一七九二年同市大學に入りて神學を修め、更に轉じて形而上學を修め、カント説の立ち難く、人の不滅と其の未來に關する思想を講ずる能はざるを感じ、自然界と理性と聖書の教との調和を謀るため自ら獨立の研究をなし、一八〇四年『神の啓示の勝利』を公す。彼は社會の教に反すとして集會の妨害を企し者ありしが、而も一八一四年の教職會は彼の説を却て有益なりと賞告したり。彼は所々の大學にて講義せし、其の説明非組織的なるに由りて望を教授に絶ち、六年間の私教教師たりし後、一八〇〇年ケーニヒスベッセルに歸り、己が好める問題に就て私の講演をなし、スピッテルカフにて死せり。死後其の哲學は彼と共に直ちに世に忘れしが、十年ほど経て世の風潮は一變し、彼の説し問題に悉く活問題となり、多くの出版現はるゝに至りたり。

シオン Zion **地名** 母後の七一九、王上八の一、代上十一の五一—八、代下五の二等にシオンとデビダの色を同一と爲せり。古昔のエルサレムは南北に延びせる二個の嶺と相連行せる丘上に在り。基督教會の傳説はシオンを西の高き丘と同一視

この部

シエリ

シエン

シエンシオン

シの部

シオン、死海

すれ共、學者の中には之を東の低き丘也となす者ありて何れが是なりや明ならず。舊約には『シオン山』(詩九の十一等、賽八の十八等)とあり、シオンを以てエホバの住所、エホバを拜むべき處也とせり。新約に天の國聖とせしるも此意也(來十二の十八、廿二、黙十四の二)。而して又シオンを以てエルサレム全體の稱としたる處もあり(詩百廿六の一、百四十六の十、賽一の廿七、十の廿四等)。

シオン主義運動

Zionist movement. 『猶太人の條』を見よ。

シオン派

又はザイオン派 『クリスチヤン』、カトリック派の條を見よ。

死海

The Dead Sea. 『地名』アカバ海より北、ヨルダンの隘谷に達する最低地に在る有名なる湖也。『死海』の名は聖書に在り。初めて此名を希臘語(Biblos script)にて用ゐたるは、パウサニアス及びカレンシテ、拉丁語にて用ゐたるは、ユスナマセ也。舊約には『死海』(創十四の三、申三の十七)及び『アラバの海』(書三の十六)と記され、又地理上より『東の海』と稱する(創四十七の十七、耳二の廿)。ヨセフスは其西海岸の隘谷に地産物の發見せらるゝより之を『地産物の海』(Asphaltites)と稱し、後又生物の生息せざるより『死海』の名之に與へられたりと云へり。此海に生物の生息せざるは、鹽分を多量に含めるためなるより、寧ろマダチシウム(硫化物)を多量に含めるに依る。亞利比亞人が此海を『ロトの海』と呼べるは、ロトの子孫が此海の沿岸に住したりしこの傳説に基く(創十三の十



死海の圖

一)死海はヨルダンの隘谷に連する一線に沿つて南北に横はり、其長さ四十七哩、其幅最も廣き處にて十哩あり。北よりヨルダン河、南よりエルベツシ、エルヤイ及びエルフイタレーの諸川、東よりカラク、アルノン、セルカマインの諸流、西よりキドロン其他の小河之に注ぐ。死海は出口を有せざるが故に、之に入る水は水蒸氣となつて蒸發す。四月の交はレバノン山脈の雪解け、ヨルダンの河水氾濫するを以て、此際死海に注ぐ水は頗る多量ならざるを得ざれ共、此地方の空氣は一般に乾燥し、且太陽の熱度頗る高きが故に、僅に數呎を増水するのみ。

死海の水は大津の水より更に低きこと、今日昔く人の知る所なれ共、此事實は長く心付かれず。一八三六七年の交シユエルト(Hevo Shukert)及び教授ロツス(Prof. Roth)パレスチナに往き、ヨルダン河に於て氣壓上の觀測をなしたりし時初めて之を發見し、續てワイルソン大佐及び

シの部

シガル、シギス

の地が死海の中に沈みたるに非ず。今日の死海の地城はアラバム、ロト當時の死海の地城と異なる處なしとの事均しく確實也。而してトリストラム(Christam)ラルテット(Carter)ケル(Hull)及び其他の學者の研究に依り、死海はアカバ海よりヨルダン、アラバの隘谷に沿ひ、ヘルモン山麓に至る一帯の地層の地中により地殼の陥落せる部分に當れりとの事、今日已に確實として一般に信ぜらるゝに至り。

シガルニー

リディア ハウアルド ハントナー Sigourney, Lydia Howard Huntley 人名 一七九一—一八六五 米國の女流著作家。コネチカット州ノルウィチに生る。一八〇九年ノルウィチに、一四年ハートフォードに私立學校を起し、一五年同地の一人人と結婚す。彼は七歳にして詩を作り、一八一五年『散文的及び韻文的道徳断片』を公にし、四年其の中の詩のみを集めて論議より出版す。著はす所凡て五十九冊。大抵は詩にして宗教及び道徳の事を願とす。米國女詩人中の第一流を以て目せられしこと久し。其の讚美歌も種々の集に入れらるゝもの多し。されど著しく愛讀せらるゝものはなし。

シギスムンド

シギスムンド E. Ben Sigismund, Johann. 人名 獨逸フランケンタル運使。(一六〇八—一八九九在位)。ルテラ主義の教育を受けしが、レフキルド派に轉じ、始めて一六一三年のタリスマス日に伯林大會堂にてレフキルド派規定に従ひ、其兄弟及び英國公使と共に聖職に與かる。やがて信仰告白を公にしてハイデルベルグ告白及び『コンフェシオ、アウスタナ』を奉ずれど『フキルトムラ、コンコルディア』及び種々のルテラ主義道

加、例之基督の神性の受苦、其の人性の全能、基督の肉體の遍在等をば信ぜずと宣言せり。國內の或る地方にては人民嚴密なるルテラ主義を奉じ、カルダインを大に稱するを常とし、牧師等は易くレフキルド派教義の、惡魔の發明せしものより惡しき取柄三百條以上を列挙し得る勢なりしかば、選侯の取りたる方針は固より危險なるものなりしなり。而も彼は次第に人民の激動を静め、レフキルド派を以てルテラ派と相並んで國內に立たしめ、死する前にレフキルド派神學者をオアル河畔フランクフルト大學の教授に任命したり。

シクストス第四世

Sixtus IV. 人名 羅馬法王。(一四七二—一四八四在位)。原名フランソワ、ダラポコラ、ラゴエルの卑賤の出。一四一四年サダボナに近きチエレンに生れ、八四年羅馬にて死す。フランシスコ派に入りて管長となり、パウル三世よりカルデアナルとせられ、終に法王に選ばる。美術及び教會建築に熱心に、又僧徒の利益を謀りたる法王の一人なりしが、又野心と熱情強く、以太利に血を流し、教會に混亂を來たし、時代の悔蕩を招きたり。彼は其の一族の出世を謀り、家族の五人をカルデアナルとせし、其の實子と信ぜられし不徳漢ヒローニモスをもカルデアナルとせし、其の世襲を立てんと苦心し、メアチチ家を編み、パツサ、ワイレンチエ聖ラマタ教會にてウエリアノ及びローレンツ、メアチチを殺さんせし陰謀に與みたりしが、ウエリアノは殺されしもローレンツは輕傷のみにて免れ、ワイレンチエ人は暗殺者を怒り、之に與みせし僧侶數人を死に處したり。シクストスは令を發して此等陰謀者に反對するものを高く賞賜せんと言ひ、ワイレンチエ全市に禁令を與へたり。同市の僧侶は

此に於て之を世界會議に訴へ、合同會は四八年法王に激烈なる書を贈り、アレクサンデルニシは法王を教徒に同置せりと宣言し、佛蘭西王ルイ十一世は使を羅馬に遣はし、法王は職を刺激したりと責め、世界會議召集を請求す。法王は會議召集を拒みし。四九年シオンの佛蘭西監督會議は再び之を請求し、諸王侯又賛意を表せしかば、一方に土耳其人侵入の恐を抱ける法王は、終にワイレンチエと和議を結じたり。彼は土耳其人を恐れてアビヨンに遷宮せんせしし之を決するに至らず、幸ひに事なくして止むの直ちに又陰謀を回らし、一族の利益を謀り、フエララのエステ家の領地をワラモ、リミオに得させんとし、ウエネチエを合してフエララに對する同盟を結びたり。フエララの同盟たりしフエララナンド玉がリミオと條約を結びし時は、法王はウエネチエに命じて其の征服を止めしめんとし、ウエネチエ及び諸者の利を謀りて起したる戰爭のため高僧等に十分一税を課し、又教職を賣ることなせり。彼は自己の名を命じたる會堂を建て、教會を築せし、馬を大建築にて飾り、ワイベル河に橋を架せしが、其の功は罪を償はざりき。彼は又七七年にはマリア無垢懐胎祭を奨励し、ドミニコ派フランシスコ派の特權を兩ながら認可せり。

シクストス第五世

Sixtus V. 人名 羅馬法王。(一五八五—一五九〇在位)。以太利に移住してモンタルトに止まりたるスラーグ人の子孫にして、原名フエリクス、ベレッタイ。一八五一年グロツテ、ア、マールセイ村に生る。フエララ及びボローニヤの大學を卒業し、一五四四年リミニにて、四六年エナにて教會法の教授せらる。フランシスコ派に

シクス

シクス

シケル

シケル

シケル

シケル

閣下。エナより羅馬に行き説教者として著はれ、勢力ある人々に交はり、五六年ゲネチナエに行き、自派中の高位に就く。パウル四世彼を受し、六五年法王代理に從ひて西班牙に行き、説教してフイリッパ二世の信任を得。パウル五世又彼を受し、フランシスコ派司牧長となす。次でアガタ、ア、ゴージェイの監督せられて治績あり、僧侶の道徳改善に勉む。七〇年カルデアイナルとせられ、モンタルトに退き慈善に盡し、アマプロシカ文書の發行を準備し、無私謙遜の生活をなせり。諸カルデアイナルは之に感ぜ、アレゴリス十三世の死後彼を法王に選ぶ。法王に選ばるるや、彼は別人の如く嘔吐として其の權を握り、政法を仰へ法律を勵行し、商業工業を奨励し、八七年の法書にてカルデアイナルより成れる十五の會を造りて事務の敏捷を謀り、カルデアイナルの數を七十と定め、監督はみな三年毎に一回必ず羅馬に出頭すべしと命じたり。行政は頗る經濟的にして法來はために利便を告げぬ。彼は又羅馬を飾るに勉め、聖彼得教會の圓屋根を造り、角尖柱塔を現在の地位に置き、アララン宮殿を作り、ゲアチカノ圖書館を新しき好地に移し、七十人譯聖書の出版を命じ、ゲルガタ(拉丁譯聖書)の出版を受納せり。政治上にも關係し、ユージェノ一極同盟の主唱者ギース侯を助け、ナツアルのアソルを異端と宣告し、佛蘭西のアソル三世を宣現し、王がドミニコ僧クレメンツに殺されし時は此の發行を賞讃し、フイリッパ二世をば褒めし、エリザベスと戦はしめ、而もフイリッパが佛王安リ四世を宣現せんことを請ひし時に之を拒みたり。されど羅馬人はシケルを大僧の僧みの。講官がカピトルに立てたる彼の記念碑は彼等の例す所となれり。シケルは羅馬法王勢力復

興者の一人にして、法王中の大なる者の一人たりしは争ふべからず。
シケル **人名** 一六九三—一七五九 英國の福音主義傳道者。ホイットフィールドの同僚者。劍橋のクレーア、ホールにて教育を受け、英國教會内にて就職せんせし志を得ず、其の外に傳道す種々の説教及小冊子を公にし、又一七四二年五十の讚美歌を公にする。我が國に於て天の御國に立ち向ふ(Rise my soul, and stretch thy wings)は其の一なり。
シケム **地名** ヒベ人の君主ハマルの子をシケムと稱す(創三十三の十八、九)。地名としてのシケムはエブラムの山國中セフに與へられたる領域にして、ヨルダン河の西、直にゲリツムの山下に在り。ヨセフの云ふ所に從へば、シケムはゲリツム山とエブラム山との間に在りしと云ふ。シケムはヨコバの支那に在りてヒベ人の市なりき。シケムはヨコバの東に天幕を設け、其の後ハマルより土地を購ひてセフの子孫に譲りたり。此にハコバ、エホバの祭壇を築き、彼の家族と家畜との爲に井を掘り、遂に彼れ又此に葬られたり。此の地は律法の宣傳に重要な關係を有せし處也(申廿七の十二—十四、書八の卅三—卅五)。而してヨシヤアの晩年神と契約の再新せられし以來、以色列の總ての種族は此の處に集められ、證の爲に大なる石建てられたり(書廿四の一、廿五、廿七)。ヨシヤア此の地を遊獵地となし、之をレビに與へたり。イスラエル王エロガバは、其位置中央に在るの故を以て之を其首都となせしが(王上十二の廿五)後ナハ

ザ及びサマリア之に代れり。後羅馬帝ゲエヌシアン之を再建し、フラゲイア、ニアボリスと名けたり。現今ナブラスと稱するは之より來れり。サマリヤ人は此地を以て聖地となせり。ユスチニアヌスの生れたるは此地也。
シケル **地名** 古代猶太國の金銀の量にして、金の一シケルは其價我國の拾圓位に相當し。銀のシケルは六拾圓位に相當す。
私語告白 其語體の條を見よ。
士師 **Judges** **術語** 士師と稱するは舊約の時代、ヨシヤアの死後サムエルの時に至るまで、以色列人民を治めたる勇者にして、其數十二人あり。即ちオタニエル(Othniel)、エホド(Ehud)、シャムガル(Shamgar)、デボラ(Debora)、バラク(Balak)、ギアオン(Gideon)、トラ(Trish)、カイヤ(Cair)、エフタ(Ephthai)、イタナ(Ithan)、エホナ(Elon)、オアダン(Aldan)及びサムソン(Samson)也。此等の人々の歴史は舊約聖書士師記二の六—十六の節に記さる(士師記)及び各其の條を見よ。
士師記 **The Book of Judges** **經名** 舊約聖書中の一書。希伯來語聖書の區分に依れば預言の部に屬す。之を士師記と稱するは以色列人を治めたる士師の物語此書を中心と爲せるに依る。此書三部より成る。即ち(一)緒言(一の一—二の五)士師時代の初に於ける以色列國民の状態を示す。(二)士師の物語(二の六—十六の卅一)。(三)補遺(十七—廿一章)ダンの支派の一部が北方に移住せし事、及びギアアの事より以色列人がベニヤミンの支派と戦ひし事を詳記す。
此書に記されたる士師の數は十二人にして、アビメレク(士師と稱せられたる)を加へて十三人とす。

此書に記されたる年代に從へば、士師時代は四百十年にして、之に曠野漂泊の四十年、ヨシヤアに率られて勝利を得たる若干年、エリ統治の四十年、サムエル統治の四十年、ソロモン王治世の若干年、デビダ王治世の四十年、ソロモン王治世の四十年を加ふれば、少くとも五百五十四年以上となり、王上六の一に出埃及よりエルサレム神殿設立に至る年代を四百八十年とせざるに符合せず。故に士師時代の四百十年は一般に長きに過ぐと想像せらるる(舊約の年代)の條第三項を見よ。
此書を組成せる三部分は其結構、特質頗る相異れり。故に各別に之を論ずるを要す。
(一) 緒言 一の一—二の五 此部分には以色列人が各支派個々の努力に依りて(ヨシヤア統率の下に全力を併せて非ず)迦南に勝つたる古き物語の断片より成る。此断片にはユダ及びシメオン(一の一—廿)并にヨセフの族(一の廿二—廿六)のみの勝利を記し、之に次ぐにマナセ、エフライム、セブルン、アセル、ナフタリ及びダン支派が迦南人を捕縛すること能はざりし次第を以てす。此書冒頭の「ヨシヤアの死たる後」なる語は、此部分に記されたる出来事を以て、約書記終りの記事以後の時代に起りたる者の如くなせり。此語は編輯者の附加したる者にして、此記事は約書記の續きに非ず、少くとも其一部分は之と並行せる記事なるべしこの事は、長く疑問の中に在り。吾人の今有する約書記は迦南全土が以色列人に依りて征服せられ、其各支派に依りて分有せられたる次第を叙せり。然るに此書第一章に依れば、以色列人に尙ガエル又はエリヨ附近に在り、約書記の初に記されたる如く、彼等は之よりヨルダンの溪谷を出て、中央パレスチナ

の高原に上らんことあり。此の如く記されたるを見れば、此書の此部分が約書記の續きに非ざるは殆ど明也。而して此部分の記事は約書記(十五—十七)の記事と文體の類似せる者ありのみならず、同々言語文字の全く同一なる者あり。去れば此部分が約書記の記事と共に古き迦南戦記の抜萃にして、一は之を約書記の物語に適合せしめ、他は之に「ヨシヤアの死たる後」なる語を加へて、士師時代の緒言となしたる者なること殆ど疑なし。
(二) 士師の歴史 二の六—十六の卅一 此書の最も重要な部分を占め、後の編輯者が古き物語を集めて、其必要と思惟せる者に緒言及び緒語を加へたる者にして、編輯者は著し中命記の精神に感染せるを見る。而して編輯者の附加せる言語、彩色は此書の他の部分と異り、諸處に同一の言語あり、其文體亦多くは相同じ。例之六次士師(オタニエル、エホダ、バラク、ギアオン、エフタ、サムソン)の物語を各別に記するに方り、其細目の叙述は精や異れ共、大體の點は相類似し、先づ以色列人のエホバの前に誓を行ひしことを記し、次に之がためエホバの怒に觸れ、他の民族に征服せられたる事、次にエホバに援を求めし事、次に救はれたる事を叙し、其言語多くは相同じ。去れば此書の部分がもて獨立したりし物語なりしを、編輯者が士師時代の年代及び士師のほたらきを示さんため、一の輪廓に入れたる者なること明也。六次士師の場合(シヤムガル、トラ、カイヤ、イブサン、エロン、アブダン)に在りては其細目蓋し編輯者の手に出たる者に非ざるべし、從て其物語極めて短し。
二の六—十三の六は此書の此部分即ち士師の歴史の緒言也。此緒言の一部分が編輯者の手に成りたる者な

ること明なることなれ共、全體悉く編輯者の手に成りたる者に非ずして、古き材料より取りたる者なることは、二の六—九が約書記廿四の廿八、卅一、廿九、卅二の語句が相同じく、且其立脚地の異なる者あるに依りて明也。
此部分の中最も古きは三の一—三にして、此處には以色列人が他の國民と接觸することに依りて戦争を學びたりしことを記す。此三節は元來一章の續きに於て、二の廿二は三の五と接續すべき者なりしと假定せらる。而して此場合に在りては二の廿三は此三節の緒言として、三の四は二の廿二の一般的思想と、其續きなる三の五、六の思想とを回顧せしめんと目的より附加せられたる者として見るを得べし。
此書の此部分が中命記の精神を有せりとの事は前既に云へる如くなれ共、各士師の歴史を初めて集めたるは中命記の精神に染める編輯者に非ずして、彼は既に一書に編輯せられたる物語に基きて今の士師記を作りたる者なるべし。元來士師なる者は地方的勇者にして、或る年限の間或る特殊の地方に在りて或る特殊の支派を治めたる者に過ぎず。例之バラクは以色列の北、ギアオンは中央、エフタはヨルダン河の東、サムソンは極西南の地を治めたりしが如し。然るに此書は士師を以て常に以色列を全體として治めたりしが如く記せり。斯く士師の地位、勢力を概括せるは、思ふに中命記の編輯者の前の編輯者にして、彼は先づ各士師の歴史を集めて此書の此部分の材料を作りたりし者なるべし。
(三) 補遺 十七—廿一章 此書の此部分には其性質又前の部分と同じならず。此處には士師の事業を記さず、此時代に起りたる二箇の出来事を記す。其一

士師記

士師記

士師記

士師記

此書に記されたる年代に從へば、士師時代は四百十年にして、之に曠野漂泊の四十年、ヨシヤアに率られて勝利を得たる若干年、エリ統治の四十年、サムエル統治の四十年、ソロモン王治世の若干年、デビダ王治世の四十年、ソロモン王治世の四十年を加ふれば、少くとも五百五十四年以上となり、王上六の一に出埃及よりエルサレム神殿設立に至る年代を四百八十年とせざるに符合せず。故に士師時代の四百十年は一般に長きに過ぐと想像せらるる(舊約の年代)の條第三項を見よ。
此書を組成せる三部分は其結構、特質頗る相異れり。故に各別に之を論ずるを要す。
(一) 緒言 一の一—二の五 此部分には以色列人が各支派個々の努力に依りて(ヨシヤア統率の下に全力を併せて非ず)迦南に勝つたる古き物語の断片より成る。此断片にはユダ及びシメオン(一の一—廿)并にヨセフの族(一の廿二—廿六)のみの勝利を記し、之に次ぐにマナセ、エフライム、セブルン、アセル、ナフタリ及びダン支派が迦南人を捕縛すること能はざりし次第を以てす。此書冒頭の「ヨシヤアの死たる後」なる語は、此部分に記されたる出来事を以て、約書記終りの記事以後の時代に起りたる者の如くなせり。此語は編輯者の附加したる者にして、此記事は約書記の續きに非ず、少くとも其一部分は之と並行せる記事なるべしこの事は、長く疑問の中に在り。吾人の今有する約書記は迦南全土が以色列人に依りて征服せられ、其各支派に依りて分有せられたる次第を叙せり。然るに此書第一章に依れば、以色列人に尙ガエル又はエリヨ附近に在り、約書記の初に記されたる如く、彼等は之よりヨルダンの溪谷を出て、中央パレスチナ

の高原に上らんことあり。此の如く記されたるを見れば、此書の此部分が約書記の續きに非ざるは殆ど明也。而して此部分の記事は約書記(十五—十七)の記事と文體の類似せる者ありのみならず、同々言語文字の全く同一なる者あり。去れば此部分が約書記の記事と共に古き迦南戦記の抜萃にして、一は之を約書記の物語に適合せしめ、他は之に「ヨシヤアの死たる後」なる語を加へて、士師時代の緒言となしたる者なること殆ど疑なし。
(二) 士師の歴史 二の六—十六の卅一 此書の最も重要な部分を占め、後の編輯者が古き物語を集めて、其必要と思惟せる者に緒言及び緒語を加へたる者にして、編輯者は著し中命記の精神に感染せるを見る。而して編輯者の附加せる言語、彩色は此書の他の部分と異り、諸處に同一の言語あり、其文體亦多くは相同じ。例之六次士師(オタニエル、エホダ、バラク、ギアオン、エフタ、サムソン)の物語を各別に記するに方り、其細目の叙述は精や異れ共、大體の點は相類似し、先づ以色列人のエホバの前に誓を行ひしことを記し、次に之がためエホバの怒に觸れ、他の民族に征服せられたる事、次にエホバに援を求めし事、次に救はれたる事を叙し、其言語多くは相同じ。去れば此書の部分がもて獨立したりし物語なりしを、編輯者が士師時代の年代及び士師のほたらきを示さんため、一の輪廓に入れたる者なること明也。六次士師の場合(シヤムガル、トラ、カイヤ、イブサン、エロン、アブダン)に在りては其細目蓋し編輯者の手に出たる者に非ざるべし、從て其物語極めて短し。
二の六—十三の六は此書の此部分即ち士師の歴史の緒言也。此緒言の一部分が編輯者の手に成りたる者な

ること明なることなれ共、全體悉く編輯者の手に成りたる者に非ずして、古き材料より取りたる者なることは、二の六—九が約書記廿四の廿八、卅一、廿九、卅二の語句が相同じく、且其立脚地の異なる者あるに依りて明也。
此部分の中最も古きは三の一—三にして、此處には以色列人が他の國民と接觸することに依りて戦争を學びたりしことを記す。此三節は元來一章の續きに於て、二の廿二は三の五と接續すべき者なりしと假定せらる。而して此場合に在りては二の廿三は此三節の緒言として、三の四は二の廿二の一般的思想と、其續きなる三の五、六の思想とを回顧せしめんと目的より附加せられたる者として見るを得べし。
此書の此部分が中命記の精神を有せりとの事は前既に云へる如くなれ共、各士師の歴史を初めて集めたるは中命記の精神に染める編輯者に非ずして、彼は既に一書に編輯せられたる物語に基きて今の士師記を作りたる者なるべし。元來士師なる者は地方的勇者にして、或る年限の間或る特殊の地方に在りて或る特殊の支派を治めたる者に過ぎず。例之バラクは以色列の北、ギアオンは中央、エフタはヨルダン河の東、サムソンは極西南の地を治めたりしが如し。然るに此書は士師を以て常に以色列を全體として治めたりしが如く記せり。斯く士師の地位、勢力を概括せるは、思ふに中命記の編輯者の前の編輯者にして、彼は先づ各士師の歴史を集めて此書の此部分の材料を作りたりし者なるべし。
(三) 補遺 十七—廿一章 此書の此部分には其性質又前の部分と同じならず。此處には士師の事業を記さず、此時代に起りたる二箇の出来事を記す。其一

閣下。エナより羅馬に行き説教者として著はれ、勢力ある人々に交はり、五六年ゲネチナエに行き、自派中の高位に就く。パウル四世彼を受し、六五年法王代理に從ひて西班牙に行き、説教してフイリッパ二世の信任を得。パウル五世又彼を受し、フランシスコ派司牧長となす。次でアガタ、ア、ゴージェイの監督せられて治績あり、僧侶の道徳改善に勉む。七〇年カルデアイナルとせられ、モンタルトに退き慈善に盡し、アマプロシカ文書の發行を準備し、無私謙遜の生活をなせり。諸カルデアイナルは之に感ぜ、アレゴリス十三世の死後彼を法王に選ぶ。法王に選ばるるや、彼は別人の如く嘔吐として其の權を握り、政法を仰へ法律を勵行し、商業工業を奨励し、八七年の法書にてカルデアイナルより成れる十五の會を造りて事務の敏捷を謀り、カルデアイナルの數を七十と定め、監督はみな三年毎に一回必ず羅馬に出頭すべしと命じたり。行政は頗る經濟的にして法來はために利便を告げぬ。彼は又羅馬を飾るに勉め、聖彼得教會の圓屋根を造り、角尖柱塔を現在の地位に置き、アララン宮殿を作り、ゲアチカノ圖書館を新しき好地に移し、七十人譯聖書の出版を命じ、ゲルガタ(拉丁譯聖書)の出版を受納せり。政治上にも關係し、ユージェノ一極同盟の主唱者ギース侯を助け、ナツアルのアソルを異端と宣告し、佛蘭西のアソル三世を宣現し、王がドミニコ僧クレメンツに殺されし時は此の發行を賞讃し、フイリッパ二世をば褒めし、エリザベスと戦はしめ、而もフイリッパが佛王安リ四世を宣現せんことを請ひし時に之を拒みたり。されど羅馬人はシケルを大僧の僧みの。講官がカピトルに立てたる彼の記念碑は彼等の例す所となれり。シケルは羅馬法王勢力復

興者の一人にして、法王中の大なる者の一人たりしは争ふべからず。
シケル **人名** 一六九三—一七五九 英國の福音主義傳道者。ホイットフィールドの同僚者。劍橋のクレーア、ホールにて教育を受け、英國教會内にて就職せんせし志を得ず、其の外に傳道す種々の説教及小冊子を公にし、又一七四二年五十の讚美歌を公にする。我が國に於て天の御國に立ち向ふ(Rise my soul, and stretch thy wings)は其の一なり。
シケム **地名** ヒベ人の君主ハマルの子をシケムと稱す(創三十三の十八、九)。地名としてのシケムはエブラムの山國中セフに與へられたる領域にして、ヨルダン河の西、直にゲリツムの山下に在り。ヨセフの云ふ所に從へば、シケムはゲリツム山とエブラム山との間に在りしと云ふ。シケムはヨコバの支那に在りてヒベ人の市なりき。シケムはヨコバの東に天幕を設け、其の後ハマルより土地を購ひてセフの子孫に譲りたり。此にハコバ、エホバの祭壇を築き、彼の家族と家畜との爲に井を掘り、遂に彼れ又此に葬られたり。此の地は律法の宣傳に重要な關係を有せし處也(申廿七の十二—十四、書八の卅三—卅五)。而してヨシヤアの晩年神と契約の再新せられし以來、以色列の總ての種族は此の處に集められ、證の爲に大なる石建てられたり(書廿四の一、廿五、廿七)。ヨシヤア此の地を遊獵地となし、之をレビに與へたり。イスラエル王エロガバは、其位置中央に在るの故を以て之を其首都となせしが(王上十二の廿五)後ナハ

ザ及びサマリア之に代れり。後羅馬帝ゲエヌシアン之を再建し、フラゲイア、ニアボリスと名けたり。現今ナブラスと稱するは之より來れり。サマリヤ人は此地を以て聖地となせり。ユスチニアヌスの生れたるは此地也。
シケル **地名** 古代猶太國の金銀の量にして、金の一シケルは其價我國の拾圓位に相當し。銀のシケルは六拾圓位に相當す。
私語告白 其語體の條を見よ。
士師 **Judges** **術語** 士師と稱するは舊約の時代、ヨシヤアの死後サムエルの時に至るまで、以色列人民を治めたる勇者にして、其數十二人あり。即ちオタニエル(Othniel)、エホド(Ehud)、シャムガル(Shamgar)、デボラ(Debora)、バラク(Balak)、ギアオン(Gideon)、トラ(Trish)、カイヤ(Cair)、エフタ(Ephthai)、イタナ(Ithan)、エホナ(Elon)、オアダン(Aldan)及びサムソン(Samson)也。此等の人々の歴史は舊約聖書士師記二の六—十六の節に記さる(士師記)及び各其の條を見よ。
士師記 **The Book of Judges** **經名** 舊約聖書中の一書。希伯來語聖書の區分に依れば預言の部に屬す。之を士師記と稱するは以色列人を治めたる士師の物語此書を中心と爲せるに依る。此書三部より成る。即ち(一)緒言(一の一—二の五)士師時代の初に於ける以色列國民の状態を示す。(二)士師の物語(二の六—十六の卅一)。(三)補遺(十七—廿一章)ダンの支派の一部が北方に移住せし事、及びギアアの事より以色列人がベニヤミンの支派と戦ひし事を詳記す。
此書に記されたる士師の數は十二人にして、アビメレク(士師と稱せられたる)を加へて十三人とす。

シの部

使徒會議

第ヤコブも使徒と稱せられ、アテロニコ。ウニヤは使徒等の中に在りて名聖ある者也と呼ばれ(羅十六の七)たりしが、シルバノも亦思ふに使徒なりしなるべし。尤もテモテ及びアコロは使徒とは呼ばれざりき。

使徒たるべき第一の資格は「主を見たる」ことなり(路廿四の四十八、徒一の八、廿二、哥前九の一)。使徒たる者の第一の務は基督の復活の證をなすに在りたることなれば、此資格が第一に來りしは當然の事也。マツテア。パウロ及びヤコブが此資格を有せしは明也(哥前十五の七)パルナバ。アテロニコ。ウニヤも皆最初の弟子なりしが思ふに此資格を有したりしなるべく、シルバノも亦然りしなるべし。第二の資格は所謂「使徒の證」にして、即ち休職と奇跡と妙用とを以て人々の中に多く忍び(哥後十二の十二)且多くの人々を悔改に導く事也(哥前九の二)。第三の資格は神の直接の召也(哥前十二の廿八、弗四の十一)而してパルナバとウニヤは更に教會の委任を受けたり(徒十三の三)。使徒の職は教會を宣傳すること(哥前一の十七)基督の使者となること(哥後五の廿、弗六の廿)斯くして萬國民の證となり(路廿四の四十八)全世界を其傳道の區域となして、基督の弟子を得んこと(太廿八の十九)是也。故に使徒は教會全體に關し、一地方の教會に屬せず。彼の生活は一所不住の生活にして、南船北馬靡靡たる暇あらず、危難を恐れず困苦を厭はず、教のために働き、人々に觀玩にせらるるを常とせり(哥前四の九)。

使徒會議 エルサレムに於ける Apostolic Council at Jerusalem. 『ハヤサレム會議』の條を見よ。

使徒行傳 The Acts of Apostles. 經名
新約全書中の一書。基督の使徒等の行跡、初代教會の建設せられたる次第を記す。

【作者】 使徒行傳と名けられたる書が、第三福音書と同作者の手に依りて成りたることは、其緒言に於て作者自ら之を第三福音書と連貫せしめ、テロヒロなる人に獻じたることに依りて推斷すべし。而して此推斷の確實なることは同書の文體同一なること、又古代基督教會が之を同一作者の書として受納したりしこと、に依りて證すべし。故に第三福音書の作者は路加なりとの證據は悉く移して以て本書作者の路加なる證據となすべし。而して之を爲すに於て吾人は一の困難を見ざるのみならず、更に之を確實ならしむる許多の證據あるを見ず。即ち本書中『吾傳』と稱せられたる部分は、本書の路加に依りて書かれたるを證する最良の材料也。『吾傳』章とは本書の後半、作者自ら書中の人物となりて語れる部分にして其初めで起れるは十六の十也。第一章より此處に至るまで、作者は常に第三者の地位に立ちて使徒等の行爲を叙し來りしに、爰に至りては自ら書中の人物となりて第二者の地位に立つに至れり。曰く『彼れ(保羅)が如く之を見し後、我傳に主の我傳をしてマケドニア人に福音を宣べしめん我傳を召し給ふことを推量りて、直にマケドニアに往かんこと。即ち作者がトロアスに於て保羅の一行に加はり、其ヒロビを去る途彼と共に在りたりしを知るべし。而して此『我傳』なる文字は、後六七年を経て保羅がヒロビに歸るに至るまでは(廿の五)書中に顯はるることなく、而して此時より保羅のエルサレムに到着するに至るまで(廿一の十八)及び保羅が羅馬に向て航海するまで(廿七章)其羅馬に到着する

使徒行傳

使徒行傳

の期限に於て使徒若くは教會に報告すべしと要求せられたりしと假定せざるべからず。而して馬太が此時集會者の一人なりしとせば、彼は必ず此等の報告を最も精細に檢閲したりしとせらるべし。而して此等の報告は將來參考の爲め注意して保存せられたりしなるべし。路加は蓋し此等の文書を蒐集して本書著述の材料となしたりしなるべし。

グアイスは更に一步を進めて以て爲らく、本書の初めに記載せる使徒等の演説なるものは、文書に依りて傳へられたるものを作者の利用したる者也。即ち曰く『此等の演説は蓋し作者自ら聞き得たるものにあらず、又事實、口傳を以て傳へられ得べきものにも非ず。故に、作者は其初め部分に記するに當り、一の文書を用ひず、唯口傳の示す處に従て之を記したりとせば、其演説なる者は唯其大要を示したるものたるに過ぎず。然れ共作者が其福音書を著すに方りて、口傳に依りたりしと思惟すること能はず』と。然れども本書の材料に關しては、作者は使徒彼得を初め雅各、約翰、馬可、ヒロビ及び其他本書に關係ある人々より直接聞き得たるものを編纂したる也とは多くの批評家の一致する所也。

【本書の目的】 作者は如何なる目的を以て其目前に横はれる材料を採擇したりしや。是れ古來少からざる議論のある所にして、本書の作者は保羅を猶太的興味を帯ぶる一派の批難より救はんとの目的を以て、此書を書けりとは、一七九八年に博士パウラスの首唱したる所也。後四十三年を経てパウラスの説を敷衍したるは、ジュネブツンブルグにして、彼以爲らく、此書の初めに於て彼得保羅の先驅者として、又保羅の意見を發表するものとして記されたり、

るまで(廿八の十六)又此文字の再現するを見る。然らば即ち本書の作者がトロアスより保羅の一行に加はりたるものなること論を要せず。然れ共トロアスに於て保羅と共に在りしものは、唯に路加のみならずして、シラスも彼と共に在りたり。テモテも彼と共に在りき。之を以て或は本書の作者を以てシラスに擬するものあり、又之を以てテモテに擬するものあり共、ヒロビに於ける事件を叙するに方り、作者はシラスを第三者の地位に置けり(十六の十九、四十)。シラスもし作者なりとせば此の如きことあるべき者なし。又『我傳』記者は或所に於てテモテの一行と『我傳』の一行とを區分せり(廿の四、五)。以て作者のテモテに非ざるを知るべし。然らば即ち作者の路加なること亦論を要せず。然れども此『我傳』章は路加實に之を書きたりとするし、之に依りて本書全體を以て同一人の手に成りたりと論斷し得べきや。ウニヤン派の批評家は之に答へて曰く、『吾傳』の目的に投合せしめん爲め、第二世紀の或作者が自己の材料を補足せんため、使徒保羅の旅行記を採用したるもの也と論ぜり。保羅の旅行に關する本書の部分が、目撃者の手に依りて成りたるものなるは甚だ明瞭なる事にして、殆ど論ずるを要せず。其『我傳』章の事實を記する詳密にして且活動せるが如きものあるは之を證して餘りあり。然れども彼等は曰く『是應、我傳』章の早き時代に書かれたるを證するのみにして、本書全體の同一人に依りて書かれたるを證するに足らず』と。然れ共本書の作者が此等の章を改削せしこと能はず、何となれば本書を詳細に研究するときは、其緒言、其文體、全書を通じて同

シの部

使徒行傳

一にして、其初め部分の特色は又其終りの部分の特色なれば也。故に本書を以て第二世紀に成りたりとなすものは、不本意ながら、卓越なる文才を有せる本書の作者を以て『我傳』章を己の書中に挿入するに方り、不作法にも『我傳』の文字を『彼等』と改作するを怠れりと論斷するの止むを得ざるに至れり。然れ共此の如き論斷はレナンの如き文學的批評家の承認せざる處にして、彼は明白に斯る想像の爲し得べからざるものなるを云へり。彼は謂はらく、疎忽なる編纂者に在りては或は『我傳』の文字を改作するを忘るべき如きことあるべしと雖も、使徒行傳の作者に斯の如き拙劣を責はするが如きことは爲し得べきこと非ず。而して彼は論斷して曰く『故に吾人は此書の後部を書きたる者は、前部にも書きたり、此書前部の作者は其所謂『我傳』章に於て『我傳』と云へる者なることを論斷せざるべからず』と。而して其『我傳』と云へる者路加也とせば、本書作者の路加なることを論を要せず。而して其第三福音書に於ける關係は作者の路加たるを證するの外他なし。

【著作の材料】 路加の本書を著すは、自己の記憶に依れるの外、更に他の材料を有したりしなるべし。而して其材料の或者は文書なりしなるべし。宣教師が其爲したる事業の報告を、自己を派遣したる教會に向て爲したりしと假定するは當然の事にして、當時初代の教會に在りて、甲の教會より乙の教會に附りたる文書、若くは種々の事柄に關する諸教會の議決なるもの、文書に依りて保存せられたるものありしなるべし。例之エルサレムの教會に於て經濟の分配に關し異論ありて、其不平の原因を撤去せんため執事を運みたりし時、吾人は執事なる者其受納したる金額及び其分配に關する方法を、或る一定

使徒行傳

使徒行傳

の期限に於て使徒若くは教會に報告すべしと要求せられたりしと假定せざるべからず。而して馬太が此時集會者の一人なりしとせば、彼は必ず此等の報告を最も精細に檢閲したりしとせらるべし。而して此等の報告は將來參考の爲め注意して保存せられたりしなるべし。路加は蓋し此等の文書を蒐集して本書著述の材料となしたりしなるべし。

グアイスは更に一步を進めて以て爲らく、本書の初めに記載せる使徒等の演説なるものは、文書に依りて傳へられたるものを作者の利用したる者也。即ち曰く『此等の演説は蓋し作者自ら聞き得たるものにあらず、又事實、口傳を以て傳へられ得べきものにも非ず。故に、作者は其初め部分に記するに當り、一の文書を用ひず、唯口傳の示す處に従て之を記したりとせば、其演説なる者は唯其大要を示したるものたるに過ぎず。然れ共作者が其福音書を著すに方りて、口傳に依りたりしと思惟すること能はず』と。然れども本書の材料に關しては、作者は使徒彼得を初め雅各、約翰、馬可、ヒロビ及び其他本書に關係ある人々より直接聞き得たるものを編纂したる也とは多くの批評家の一致する所也。

【本書の目的】 作者は如何なる目的を以て其目前に横はれる材料を採擇したりしや。是れ古來少からざる議論のある所にして、本書の作者は保羅を猶太的興味を帯ぶる一派の批難より救はんとの目的を以て、此書を書けりとは、一七九八年に博士パウラスの首唱したる所也。後四十三年を経てパウラスの説を敷衍したるは、ジュネブツンブルグにして、彼以爲らく、此書の初めに於て彼得保羅の先驅者として、又保羅の意見を發表するものとして記されたり、

而して其後半に於て保羅は多くの點に於て彼得に近よりつゝありしとして記されたりと。更に此論を敷衍せるは、ウニヤン派の先輩パウロにして、彼は此書を以て保羅派、彼得派の調和を謀らん爲め書かれたるものなり、猶太的基督教會と異邦的基督教會を以て益々相接近せしめんとの苦心は、本書作者の取りたる所也と云へり。シラセルは更にパウロを祖述せるものにして、其説に依れば、保羅の宗教と彼得及び其他の使徒の宗教との間には、甚だしき距離あり。此距離は漸次増大して、遂に凡ての目的に於て全く相反せる二箇の基督教會を代表せる二箇の教會を形成せるに至れり。使徒に次ぎて來れる時代の最も苦心したるは、此兩派の分裂を防がんとの事にして、之が爲め種々の計劃が爲されたり。使徒行傳と稱する著作は即ち其一にして、紀元百廿年頃を以て著され、兩派調停の爲め最も成功ある結果を成就したり。此書に或る異邦基督教會の作にして、作者は猶太的基督教會の甘心を買はん爲め、猶太教に大なる誤歩を爲したり。即ち作者は保羅を以てエルサレムに在る使徒等と交情濃なるものとして、又異邦基督教會の問題に關し彼等に訴へ彼等の同意を求めたりとして顯はしたり。又保羅は許多の場合に於て猶太教の律法を守りたりと顯はされたり。テモテに對しては守りたりと云ひ、其髮を剃りたりと云ひ、猶太教の節制を守りたりと云ふが如き是也。而して作者は又一方に於て彼得が異邦人を教會に受け納れたりとの事を記したり。之を要するに本書は保羅と彼得とを兩々相並行して記したるもの如し。見よ、彼得第一の奇跡は、神殿の門前に於て跛者を醫したりとの事也。而して保羅最初の奇跡も、赤リストラに於て跛者を醫したりとの事也。彼得はエルサレム

シの部

使徒行傳

使徒行傳

使徒祭

に於て奇跡的に牢獄を逃れ出たり。保羅も亦ヒロ
 ビに於て之を同一の經驗を有せり。彼得はアナニヤ、
 ナツビラの二人を死せしめたり。保羅は魔術者エリ
 マスを盲目ならしめたり。彼得はマビタを蘇生せし
 めたり。保羅はエウチカスを蘇生せしめたり。此の
 如き比較は教會内の兩派を調和せんため構造せるも
 のにして、蓋し歴史的事實にあらずと。
 以上はナツビゲン派の使徒行傳に對する批評也。
 然れども彼等の説は全體として歴史的事實に其根據
 を有せざるのみならず、之を使徒行傳に應用するも
 亦誤れり。今假りに彼等の唱ふるが如く、作者は猶太
 的基督教と異邦的基督教とを調和するの目的を以て
 此書を書きたりしとせば、彼は何が故に此書の初
 より終りまで、斯くも明に猶太人の不信を暴露した
 りしや。若し作者の目的猶太的基督教と異邦的基督
 教の相違を展すに在りせば、彼は何が故に保羅に
 對する猶太人の嫉妬に向ひ、斯くも深く讀者の注意
 を喚起せしめんたりしや。猶太的及び保羅的基督
 教の調和を謀らんとして第二世紀に出でたる作者
 が、猶太的教會の發達に關しては其説く所甚だ詳な
 らず、而して殆ど其全力を盡して異邦的教會の發達
 を叙したりしこの事は果して信に得べき事なりや。
 於是近世の批評家は、多くはナツビゲン派の説を
 棄てて取らず。オグエルベックはツェンレルの説を排
 撃すると共に自己の説を述べ、使徒行傳は異邦的
 基督教徒の著作にして、自派の教會に於ける地位を
 明にし、異邦的基督教は元來保羅の創設せるものに
 非ずして、初代使徒より出で來りたる正統基督教也
 との事を示さんとして書かれたる者也云へり。ド
 ヴァンも亦之を均しき説を有せり。其説に曰く「使徒
 行傳は、事實の點に於て、保羅の基督教は初代使徒

より發生せる正統基督教也との事を示せるもの也。
 然れ共作者は特に異邦的基督教の地位を明にし、辯
 論せんとの目的を以て此書を書きたりしやは其疑
 ばし。蓋し作者の目的は彼が此書の初めに於て述べ
 たるが如く(一〇一八)其福音書に於て既に録し
 たる耶穌基督の事業が、漸次發達せる有様を叙する
 に在りし也。彼は如何に基督はエルサレムを初め、
 猶太全國サマリヤ及び地の極に迄宣へ傳へらるゝ
 に至りしやを示さんとして此書を書きたる也。彼は
 蓋し保羅の事業を辯護せり。而して彼は又福音の
 勢力の範圍は、原因結果の法則に従ひ漸次に擴充せ
 らるゝものなる事、及び教會の増加は偶然の出來事
 にあらずして自然の成長なりとの事を示したり。彼
 は保羅の伴侶にして、異邦人の間に傳道したりし事
 なれば、主として彼が自ら關係したりし教會の發達
 に就て叙したりしは免るべからざる事也。然れ共彼
 は是れが爲に全く基督教の他の方面を忘るゝことな
 せざりき。彼は基督教の傳はりたる各方面の跡を索
 めることなせず、唯保羅が傳道したりし跡を索れた
 り。是れ蓋し最も緊要なりし所のもの也。彼が教會
 發展の歴史を叙するに方り、異邦的基督教を辯護せ
 るに自然の事也。此説は最も平易にして、蓋し最
 も正しく作者の目的を顯はしたるものといふべし。
 【本書の結構】 本書の結構は即ち此著作の目的に
 従へるもの也。之を分ちて三部とす可し。即ち著
 者は先づエルサレムに於ける教會進歩の状況を示し
 (一〇一八の四)次に基督教の猶太より異邦に遷
 移するの過程を叙し(八の五—十二の廿五)而して
 最後に保羅異邦傳道の次第を録したり(十三の一—
 終)。
 【著作の時代】 或批評家は之を以て紀元八十年頃

の作也となせり。然れ共本書著作の年代を解説せ
 る鍵は其結果の突然なるに在り。作者は何か故に
 斯くも卒然として本書を終りしや。即ち彼は保羅の
 羅馬に上り、二年の間其處に留りて擲ちずして神の
 國を宣へ、主耶穌基督の事を教へて妨げらるゝこと
 なかりしこの事を述べて此書を終へたり。若し作者
 にして保羅の死後之を著したりしとせば、彼は必ず
 此事に關して數言を録したりしなるべし。而して一
 言の之に及ばざる所以のものは、蓋し彼の之を著し
 したるは保羅が羅馬に在留せる二年の終りなりし事
 殆ど疑を容れず。果して然らば本書の成りたるは紀
 元凡そ六十一年の頃なりしなるべし。
 【参考書】 聖書中使徒行傳、クラウターの
 『パイアル、クラウス、ハンドブック』中の使徒行
 傳、ホルツマンの『使徒行傳註釋』(一九〇一第三版)
 パールの『最初三百年の教會史』(一八七九年英譯)
 ラムゼーの『旅行者及び羅馬市民たる使徒保羅』(一
 八九五) マックギブソンの『使徒時代の基督教
 史』等。
使徒祭 Apostles' Day 使徒記念
 の祝節にて、羅馬教會は左の日に於て之を行ふ。
 即ち馬太は九月廿一日(希臘教會にては九月廿六
 日)彼得及び保羅は六月廿九日、トマスは十二月廿六
 日(彼得及び保羅は十月廿六日)ヒロヒ及びヤコブは
 五月一日(希臘教會にては十月九日)カサンのシモ
 ン及びユダは十月廿八日、ヨルトロマイは八月廿四
 日(希臘教會にては八月廿五日)アンデレは十一月
 卅日、マツチアは二月廿四日(希臘教會にては八月
 九日)セベタイの子ヤコブは七月廿五日(希臘教會
 にては四月卅日)是也。

シの部

使徒信經

使徒的兄弟派

使徒的傳承

使徒信經

又は使徒信條 The Apostles' Creed

福音の十二使徒がステパノの殺
 害に續きて起れる迫害に依り、諸處に散亂するに方
 り、エルサレムに於て一般信徒の信仰の標準として
 作り、彼得が羅馬に携へ來れる者也との傳説に基き、
 使徒信經と稱せられ、新舊諸教會信仰の基礎となり、
 一般に尊重せられ來りたる者なれば、今日何人も明
 なる事實として承認する所也。爾來往々萬國の民
 にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の者に入れ
 て弟子とせよ(太廿八の十九)の語と密接の關係
 を有し、當時の教會が一般に信奉したりし教義の概
 概が、受洗候補者の信仰告白として使用せられたり
 しば、極めて早期時代より此告白は「洗
 禮式告白」(Baptismal Formula)又は「信仰の標準」
 (The Rule of Faith)と稱せられ、地方に依ては多少
 の相違あれ共、大體に於ては相同く、僅少の修正を施
 せるのみにて其後久しく行はれたり。此等信仰の標
 準は、福音書に記され又は傳説に依りて傳へられた
 る使徒の教訓より成りたりとの理由に依り、使徒信
 經と稱せられたりしやも知る可らずと雖も、イレニ
 ワス、テルチウリアヌス及びヨリゲヌス、其書中に
 言へる所の「信仰の標準」なる者は、基督教の重要な
 事實を記載せる極めて簡短なる者にして、蓋し今日
 日の所謂使徒信經とは同じからず。兎に角此等信仰の
 標準は使徒より出でたりと思惟せられたりしが故
 に、教會は一般に之を尊重し來りしが、アリウス及び
 ナストリウス等の異端起るに及びて、所謂ニカヤ、コ
 ンスタンチノーブル信條なる者作成せられ、簡古な
 る此信條は自然不用に歸するに至りたり。然るに
 後此等の異端消滅し、所謂正統教義なる者勝利を得

るに及び、教會は洗禮式の告白及び問答法教育の基
 礎として使用せんため、簡短なる信條の必要を感ず
 るに至りしが、彼等は古き信仰の標準を用ひず、新に
 簡短なる信條を作れり。是れ實に第九世紀の頃に
 して、吾人が今日「使徒信經」と稱する者は即ち是也。此
 信條は直ちに四教會一般に廣まり、遂に十二使徒
 が各一箇條づつ書きて此信條を作れりとの傳説に
 へ生ずるに至れり。然れ共希臘教會は此信條を承認
 せず。初めて此信條の使徒より起りたる者に非ざる
 を疑ひたりしは、ロウレンチウス、グアラ及びエラス
 ムスとなす。今日吾人の有する使徒信經は左の如し。
 我は天地の造主能はざる處なき父なる神を信ず。
 我は其獨子我等の主耶穌基督を信ず。彼は聖靈に
 よりて孕みし處女マリアより生れ、オンテオピラ
 トの時苦を受け、十字架につけられ、死して葬ら
 れ、三日目に死人の中より甦り、天に上り、能はざ
 る處なき父なる神の右に坐し、彼所より生ける人
 と死せし人とを裁判せんがために來り給はんを信
 ず。我は聖靈を信ず。我は聖公會、聖徒の交、罪
 の赦、身體の甦、限なき生命を信ず。アーメン。
 此の條を見よ。

使徒的兄弟派

Apostolic Fathers (Fathers Apo-
 stolic) 廣義に於ては使徒直接の弟
 子を總稱し、狹義に於ては文籍を遺せる使徒直接の弟
 子のみを指す。分ちて二となす。即ち保羅の弟子
 及び約翰の弟子にして、羅馬のクレメント及びヘル
 マスは前者に屬し、イゲナチウス、ポリカルプ及び
 パピアスは後者に屬す。テオニシウスも保羅の改
 宗者として使徒的教父の中に數へらるゝことあれ
 共、更に晩代に屬す。彼等は生ける傳説を有し、使徒

の作也となせり。然れ共本書著作の年代を解説せ
 る鍵は其結果の突然なるに在り。作者は何か故に
 斯くも卒然として本書を終りしや。即ち彼は保羅の
 羅馬に上り、二年の間其處に留りて擲ちずして神の
 國を宣へ、主耶穌基督の事を教へて妨げらるゝこと
 なかりしこの事を述べて此書を終へたり。若し作者
 にして保羅の死後之を著したりしとせば、彼は必ず
 此事に關して數言を録したりしなるべし。而して一
 言の之に及ばざる所以のものは、蓋し彼の之を著し
 したるは保羅が羅馬に在留せる二年の終りなりし事
 殆ど疑を容れず。果して然らば本書の成りたるは紀
 元凡そ六十一年の頃なりしなるべし。
 【参考書】 聖書中使徒行傳、クラウターの
 『パイアル、クラウス、ハンドブック』中の使徒行
 傳、ホルツマンの『使徒行傳註釋』(一九〇一第三版)
 パールの『最初三百年の教會史』(一八七九年英譯)
 ラムゼーの『旅行者及び羅馬市民たる使徒保羅』(一
 八九五) マックギブソンの『使徒時代の基督教
 史』等。
使徒祭 Apostles' Day 使徒記念
 の祝節にて、羅馬教會は左の日に於て之を行ふ。
 即ち馬太は九月廿一日(希臘教會にては九月廿六
 日)彼得及び保羅は六月廿九日、トマスは十二月廿六
 日(彼得及び保羅は十月廿六日)ヒロヒ及びヤコブは
 五月一日(希臘教會にては十月九日)カサンのシモ
 ン及びユダは十月廿八日、ヨルトロマイは八月廿四
 日(希臘教會にては八月廿五日)アンデレは十一月
 卅日、マツチアは二月廿四日(希臘教會にては八月
 九日)セベタイの子ヤコブは七月廿五日(希臘教會
 にては四月卅日)是也。

自ら彼等に口傳せる教訓を宣へ傳へたりしと雖
 も、彼等の言語と使徒の言語との間には、殆ど種類
 を異にせりと思はるゝ程の相違ありて、兩者
 は面白き對照を爲せり。蓋し此等の二人は敬虔
 にして、且基督に就て深く學びたる人々なれば、其
 云ふ處何れも平凡にして、吾人をして新約全書は神
 聖ならしむ、彼等の文籍は人より出でたるを疑はざら
 ざらしむ(個人々々に就ては各々其條を見よ)。
使徒的傳承 Apostolic Succession 廣義
 監督、司祭(又は長老)及び執事の三階級は、使徒
 より、故に又耶穌基督より、現時に至るまで、按手
 禮の斷へざる連鎖に依りて繼承し來れる者也云へ
 る説に名けたる語にして、此説は、斯く使徒より斷へ
 ざる連鎖に依りて繼承したる按手禮を受けたる教職
 は、使徒の有したる凡ての權力と特權とを有し、直接
 に基督を代表せる者也とのことを主張す。此説の源
 源とする處は太十八の十八等にして、羅馬教會、希
 臘教會(露西亞教會及び其他之と同一教義を有する
 東方教會を含む)及びアンタキヤ教會は此説を取
 り、更に此説は歴史的に證明し得べく、且教會に於
 て確實なる教職を傳承するは必要缺く可らざる事也
 とのことを主張し、此等の教會に於て按手禮を受け
 たる教職を一切否認す。會衆派、長老派、メソヂス
 ト派及び其他の新教各派は之に反し一般に、太十八
 の十八には使徒的傳承を教ふるが如き特殊の意義な
 き事、及び僧職階級の起源は第四世紀以後に在り
 たる事を主張す。之に關し詳なる事を知らんと欲せ
 ば、ハッチの『初代基督教の組織』(一八八〇)パン
 プトン講義)及びライフトの『勝利比書』(一八
 六八)等を見よ。
使徒的教訓 『十二使徒の教訓』の條を見よ。

シンド

シート。シンド

シンド。支那

支那

シートン、エリザベス、アン、Seaton, Eli-

zabeth Ann. 人名 一七七四—一八一

米國に於ける慈善婦人團の設立者。紐育市に生れ、廿歳にしてウイリアム、シートンに嫁し、一八〇三年夫を喪ひ、〇五年天主教會に入り、〇六年より〇八年まで自活のためバルチモアにて學校教師をなせしが、教師サミュエル、クーパーの遺産八千弗を受け、慈善婦人エリザベスシートンと共にて、慈善婦人エリザベスシートンと共にて、一八〇九年エリザベスシートンに慈善婦人團を立つ。二年には團員二十人となり、神母シートンは其の長なり。彼の死に於ては其の遺産五十に上り居たり。同團は一四年ヒラデルヒア孤兒院を引き受け、一七年にはメリーランドの立法院より法定せられたり。

シドニー、フィリップ、Sidney, Sir Philip

人名

一五五四—一八六、英國の基督教士。セントのペンシルバニアに生れ、シロウズガリー、牛津、劍橋にて教育を受け、五七年外國へ行き、危くも聖バルトロマイ島の船に乗り込んで逃れ、宮廷官及び外交官となり、一五八三年結婚して伯爵に叙せられ、八五年ドレークの第二遠征隊に加はらんとせしが、エリザベス所謂己が國の實を失はんとことを恐れて之を禁じ、フッセンガの知事、騎隊の長となす。八六年九月廿二日フッセンにて致命の傷を負ひ、名高き話となれる如く、重傷せる部下の一兵卒を憐れみて己に持來れる水を之に與へしめしといふ逸事あり。彼は人格の美しきことに斯くの如きと共に、宗教に於ても亦深き生命に通じ、『我を去れ』と終には塵に歸する愛よ (I leave mine, O love which reachest but to dust) といふ歌や、姉妹たるハムプロック伯爵夫人と共にせる詩篇の譯等あり。

詩才は非常に優れたり云ふにあらざり、又凡を披

けり。

シオン、シオン or Zion. 地名

往古此の

都會はベレタスの南に在り、其の競争者なるツロの北に在り。小海角の背後に在り、ツロ及びワヤアの如く、其の貿易市場たりし原由は、海岸に接して一帯の岩石横はりし便宜に在り。シドンはフェニキヤ人の最も古き都會なりしと思惟せらる。其の貨幣はシドンのヘッセル、シテアム、及びツロの母たるを示し、シドンの名は紀元前一千五百年頃埃及人の記録に存したりといふ。創十の十九に此の名あり、而してヨセフはカナン(創十の十五)の長子より此の名を起れり云へり。又一説に、ガラヤのベツサイアの如く魚漁場たるより來れり云へり。此はシドンの魚は砂の数の多きが如く多しと云へる説に一致せり。シドンは地中海の中部及び東方に在る諸國間に産業的交易の發達を嚮導せし者の如し。ホルメルの詩中に云へる織物、真鍮、及び奴隸等のフェニキヤ商業はツロの商業に非ずしてシドンの商業をいへる也。

支那 China. 地名

左に記するは支那に於ける基督教傳道史の梗概也。

【唐時代に於ける基督教】基督教の支那に傳はりしは極めて早き時代にして、キリストの一派は早くより波斯、印度に道を傳へたりしが、夫れより支那に入り、唐初には既に中原に其の威を振たりしが如し。然れ共當時基督教が如何程遠く傳はり、如何程遠く人心を支配したりしと正確なる記録の微すべし者なし。當時支那に行はれたる宗教的文書は其断片も発見せられず。聖書の部分も古代教會の物語も當時の傳道に就て明白に證明せる者なし。吾

人が當時の事蹟に就て僅に微光を認むるを得る唯一の證據となすべき者は、一六二五年陝西中昔長安と呼び、今西安府と稱する處にて地中より掘出したる『景教流行中國碑』と題せる碑文あるのみ。此碑文は唐の代宗の建中二年(七八)に大善寺の僧景淨が景教(景は宏の義にして、基督教を敬美し、斯くは名けし者なるべし)の支那に傳はりし由來を述べたる者にして、之に依れば、基督教の初めて支那に入りしは、唐の太宗の貞觀年間即ち紀元六二七年より四九九年に至る迄の間にして、『大秦國大德阿羅本、涼州經像、來獻上京』と云ひ又『太宗謂、遣大秦寺一所、度僧二十一人』と云へり。而して解後之皇帝基督教を庇護し、諸所に教會を建て、僧侶を度し、一時基督教大に行はれ、鄧子儀の如き又自ら之を信仰したりしと云ふ(『景教』)の條を見よ。然るに後漢ならずして基督教は一時全く支那に其跡を斷ちたりし者の如し。其故如何にせざれば、當時唐の西に回紇と云へる國あり、初めは其勢力微々たりしが、唐の天寶年間(七四二—七五五)に至り漸次強大となり、東は黑龍江の附近、南は戈壁沙漠、西は中部亞細亞に至るまで其勢力を伸張し、昔時匈奴と稱したりし地を略取し、唐宗の時(七五六—七六二)に至りて支那と回紇を結べり。然るに此回紇は回紇國にして、喇嘛教の支那に入る途に當りしかば、景教の支那に入るを妨げ、且自ら回紇を支那に輸入し、長安に寺院を立て、之を末尼寺と稱し、盛に其宗旨を擴張したりしのみならず、景教を迫害したり。斯く外に在りては回教の爲めに西亞の交通を斷たれ、且其道を蒙りしと共に、内に在りては聖書の翻譯さへなされざりしを以て、信徒の智識を鈍め其生活を指導するの道なく、宗教は單に外部的儀式となり、次

支那

支那

支那

支那

々に迷信と不相分争を以てし、漸く第十四世紀頃に至りては、一時盛大な極めし景教も全く地を拂ふて消滅するに至れり。

【羅馬教の傳道】景教の全く其姿を失ひし少し以前に、羅馬教會は支那に傳道を開始せり。即ち法王ニコラス四世はヨハン、ド、モント、コルグイノ(Johan de Monte Corvino)を宣教師として支那に遣はしたりしに、彼は元の世宗の至元廿九年、即ち紀元一二九二年を以て北京に着し、爾後十一年間單身にて傳道したりしが、法王グレゴリウス五世は彼の熱心と成功を聞き、彼を大監督に任じ、且七人の補助者を彼に送れり。彼は詩篇及び新約全書を蒙古語に翻譯し、其死する時は(一二二八)凡そ三萬人の改宗者を得たりといふ。其所謂改宗者とは如何なる者なりしや今日より明に之を知ることは不可能なり。一三六九年蒙古王の支那より逐放せられたりしに、此等多数の改宗者の殘存せる者一人もなかりしと云へば、其時かれたる種子が地に落ちたりし者なることは疑ふ可らず。

次に支那傳道を企劃したりしはフランシス、ザヴィエロ(Eraund Xavier)也。彼は日本に傳道中、日本の文學、政治、道徳、宗教に關する思想の支那に適應する者あるを見て、もし先づ支那に基督教を弘布するを得ば、日本を教化すること易きと思ひし、支那傳道の計劃を立て、百難を拂して之を實行し、一五五二年四月印度のゴアを發し、馬拉加を経て支那に向ひ其八月香山島に到着せり。是れ即ち明末世宗の嘉靖卅一年に當る。然れ共彼は本土に達すること能はずして、熱病に罹り、其十二月を以て死せり。後葡萄牙人の澳門に居留地を得しより、イエズイ

派の僧侶も其處に教會を建て、屢々支那に入國せんことを企てたりしが、容易に其志を果すを得ざりし。是れ支那政府が當時外國人の入國を禁じたりし分のならず、葡萄牙の商人も亦、もし強て入國し支那政府の意を損する者ある時は、結局外國人は放逐せらるることとなり、貿易上に至大の損害を與ふべしと思惟せしより、イエズイ派僧侶の入國を妨げたるに依る。東洋諸國傳道監督たりしイエズイ派僧アレンキヤンドル、マニヤン歐洲より日本への船運澳門に滞在中(一五七四)又は五年支那傳道を計劃し、適當の人物を此方面に派遣せられたりし事を、印度宣教監督ゲインセント、ローデヴィックに申し送りしに、其建議に基きマカオ、ロケト(Macau, Lapa, etc.)なる者印度より澳門に派遣せられたり。彼は一五七九年七月澳門に到着し、先づ支那語を研究し、葡萄牙船の廣東に入港する機會に乗じて市内に入ることを得たり。是れイエズイ派が支那に入國するを得たりし發端にして、忽ち其地方官吏の厚意を得、後二年にして肇慶府に居住し、爰に初めて天主教會堂を建つるの許可を得たり。是れ即ち一五八三年明の神宗萬曆十一年のことにして、此時マテオ、マテオ(Matthew Ricci)も亦ロケトと共に入國の許可を得たりしが、彼ロケトは歐羅巴に歸りしを以て、支那に於ける基督教の基礎はマテオに依りて確立せられ、一六一〇年マテオ死してハグ(Abbe Hug)支那の傳道を經營し、事業益々進歩せり。此の如くイエズイ派僧侶は最も困難なる支那入國の目的を達し、傳道に大なる成功をなすことを得たりしが、抑も彼等は如何にして此結果を得るに至りしやといふに、彼等は支那に入國傳道するために

は、先づ支那を知るの必要なるを悟り、獨り支那語を學びたりしのみならず、支那の學術をも研究したりしが、彼等は非常なる忍耐と勤勉とに依りて凡て此等に精通し、自由に支那人と談話し、又之と共に經籍に就て議論を闘はし、又巧に漢文を草することを得たり。彼等は又勉めて支那の風俗習慣に適合せんことを心掛け、之がため支那風の姓名を用ひ、支那風の僧服を着し、以て支那人の甘心を來るるを請ふせざりし。而して又彼等は勉めて支那人の思想を衝突することを避け、儒教に所謂上帝又天と稱する者は、基督教の所謂神又は天主と稱する者と同じ也と説き、且基督教を説くに先づ倫理的方面よりし、道徳の實踐に依りて漸次に人心を感化せんを努めたり。彼等は又西洋の學術を輸入し、其知識に依りて尊敬を得たり。即ちユークリッドの幾何學、アリストテレスの倫理學は彼等に依りて翻譯せられ、地理學、萬國地圖等も彼等に依りて出版せられ、マテオ、フェルビースト、アダム、シャール等は天文學を以て用ゐられ、其他音樂、美術、工藝等もイエズイ派僧侶に依りて傳へられ、斯くて彼等は獨り道徳聖固の聖僧のみならず、又深奥の知識を有する碩學也として尊敬せらるるに至りたり。而して又彼等は皇帝を初め高位大官の厚意を得るに努め、其命令に依りては如何なる俗務にも服するを躊躇せず。明末には滿州人助業のために大砲を鑄、又葡萄牙人の砲手を雇入るること應力し、康熙帝が吳三桂の根據地なりし雲南地方を征伐せし時、アダム、シャールは命を受けて携帶に便なる山砲を鑄造したりしといふ。其他彼等は天文臺の事務にも服し、外交談判にも當り、勉めて政府官吏の甘心を買ひ、斯くて支那傳道の方法を達せんとしたりしが、以上

シの部

支那

の手段は著々成功して傳道に大なる効果を得た。...

入らんとせしが故に、葡萄牙の商人等は此等の宣教師にして...

支那

支那

基督教の所謂創造主宰の神に非ずと云ひ、又祖先崇拜に關して...

ト教の傳道は、ロバート・ヘンリー (Robert H. H. Henry) が倫敦傳道會社の宣教師として...

シの部

支那

しかば、イエズイット派も其反對派も各々自派の主張を固持して下らず。...

支那

支那

を受けるも斷乎として信仰を守ることの布告を發せり。...

ト教の傳道は、ロバート・ヘンリー (Robert H. H. Henry) が倫敦傳道會社の宣教師として...

支那

が、是れ即ち現今の『基督教文學會社』の前身也。教育事業も亦此頃より初まり、馬拉加に英清學校なる者設立せられたりしが、此學校にて教育を受けたる十人の青年は、後支那政府に仕へて有用の器となれり。支那に於て初めて醫學傳道を開始したりしは、亞米利加傳道會社の宣教師ヒュー・パーカーにして、彼は一八三四年新嘉坡に施療院を立てたりしが、其翌年之を廣東に移せり。婦人傳道事業はニコレル(後のグエラッパ夫人)が馬拉加に五箇の女學校を創立したりしに初まりしと雖も、最初の組織せられたる婦人事業は、一八三四年倫敦の婦人等が創立したる支那、印度及び東洋に於ける婦人教育會社に依りて企てられたるそれ也。此年には又ハットフィールド神學校設立せられ、支那に於けるプロテスタント傳道史上に一新紀元を劃したれ共、直接傳道の道が開かれたりしは、一八四二年阿片戦争後五箇の開港場に十二箇の傳道會社代表せらるるに至りし。改宗者の数は一八五〇年迄は殆ど皆無なり。五八年政府は更に九箇所の港を開き、後又自由内地に入りて傳道することを許可したりしが、是より漸く改宗者を生じ、六〇年には凡そ千二百人の信徒を有するに至り、第十九世紀の終には十萬以上に達したり。而して日清戦争、北清事件、及び日露戦争は支那國民を警醒せしむるの機會となり、其結果基督教傳道の門戸大に開け、支那政府は一九〇七年勅令を發して宣教師を保護し、支那人基督教徒の宗教的迫害を防禦すべしとの保障を與へたり。現時支那に在る傳道團體は六十餘派あり、其中最も有力なるはカトリック、プロテスタント(Hudson Taylor)の創設したる『支那内地傳道會社』にして、此會社は内地

支那

の開拓的旅行を爲すに與りて大に力あり。一八八五年『銀橋七士』が英國上海社會の子弟を以てして、此會社に屬して支那の内地奥深く入り込みしことば、全英國を震駭せしめ、當時微小のものなりし此會社發達の動力となり、又一般傳道會社に好影響を與へたり。此會社に屬する宣教師現今凡そ二千人に達し、支那に於ける宣教師總数の殆ど四分の一を占め、又三萬人の改宗者を有せり。之に次げるは『教會傳道會社』及び『米國傳道會社』にして、共に福建に傳道す。長老派は滿州に傳道し、米國聖教會は揚子江流域に傳道す。其他大小の各派各々便宜の地に其本據を設けて傳道す。其間、今一々に之を擧げ難し。此等各派宣教師の總数は四千以上にして、改宗者の總数は凡そ四十萬人に達せり。直接傳道の外プロテスタント教會を採用したりし方は、概れ一八三四年に其基を置きたりし者にして、現今何れも大に發達したり。即ち文學の方面に在りては現今凡そ一千有餘種の基督教書籍を有し、又聖書は其部分的翻譯を合せて廿七種の異譯を有す。プロテスタント派の事業中最も見るべき者は、各派の合同に成れる傳道會社にして、此會社廿四年以來の努力は今日に於て三百人の傳道者、五千人の支那人助手、二百五十箇處の病院及び小病院となり、年々二百萬人の患者を治療す。就中最も完備せる病院及び醫學學校は、北京に於ける英米二國四教派聯合經營の協和醫學堂にして、三十萬弗を以て成り、各科の教授員を有す。南京武昌の二醫學堂に次ぐ。醫學の翻譯事業も傳道會社本部の重要なる事業にして、最近數年間の刊行は既に一百種を越え、其醫學辭典の如きは一萬五千語を集めたり。教育事業は幼稚園より高等學校に至り、此外職業學校あり、近時

シナイ山

又師範學校及び大學校設立の企あり。基督教青年會も亦頗る活動し、全國を通じて凡そ四十餘箇所の支會を有せり。近時著しく顯はれたるは各派協同の精神にして、一九〇七年上海に開かれたるプロテスタント傳道百年紀念大會に於ては、各派の教旨と特色とを實行に便なる程度に遂一致せしめ、各派の小事業を合併して驅りたる大事業となすべしとの決議を爲せり。然れ共支那人改宗者の多數は農工階級に従事する比較的無教育の者にして、智識を有し、富を有する者の數は甚だしく、政府の官吏は殆ど教會に近づき難き状態に在り。從て支那人中に有力なる傳道者少く、プロテスタントの傳道開始以來百年を過ぐるも傳道の牛耳を取る者は尙依然として外國宣教師也。上海、天津等には多少自給獨立の教會なきに非ざれ共、全體として之を見れば九牛の一毛にも過ぎず。支那教化の前途は尙遠道也といふべし。

シナイ山 Sinai Mountain 地名 昔て以色列の子孫が埃及を出でカナンに歸らんことを欲して深泊せし當時、モーセ神より諭命を受けし所として傳ふる聖山なれ共、之れが所在に就ては諸説紛々として一定せず。モイスはシナイ山の位置を以てシナイ半島外、ミアンの地に在りさせり。此説の論據は(一)聖書の記事に於てシナイ山はミアンの地と密接の關係を有す。即ちモーセはパロの忿怒を避けて此地に逃れ、此地に在りて牧業に従事せし際、此處の山中に神の顯現を認めたり。又彼の妻と聖の親戚はミアン人なり。(二)此説は以色列人が海に沿ふてなしたる軍營に就て新解釋を與ふ。即ち此説は之を以てアカバ灣頭と爲せり。(三)此説は從來論争せられたるエーモンの地位を古のエーモンのアイ

シナイ山

ンに於て發見す。四此説はエーモンに於ける燧燭の樹井に鼻に關して注意深き筆を下したる記者が、何故にフエランの美麗なる谷に就て語る所なきの理由を説明すといふに在り。然れ共此説は聖書の傳説の自然的説明と兩立し難し。故に吾人は暫く之を捨き、聖書の傳説に従てシナイ半島内に於て其の地位を決定せざるべからず。而して吾人は先づモーセ五經中に記されたる、一見ホレバとシナイとを混同せるが如く見ゆる點を明白ならしむるを要す。或る場合に於て『神の山』はホレバと同一視され、シナイ即ちホレバなるが如く、實際に之を交互に用ひたり(出三の一、王上一一九の八)。此説話の材料を尋ねれば、ホレバはエーモムと申命記律法に於て使用せられたる語にして、シナイはエーモムと祭司典に於て使用せられたる語也。故に此の材料によれば、エーモム禮拜の中心は北方種族に従へばシナイにありし、南方種族に従へばシナイにありし、ことを知り得るなり。而して此の上ホレバ(單に荒野を意味す)の地理に就ては明白なる一の説明あるなし。レブシヤス、エーモム其他の學者はフアイランの沃地に築ゆるセルバル山を以て聖書のシナイ山と同一也と思惟せり。此説はレヒティム(フ



シナイ山の景

アイランの谷)がシナイに在りし聖書記事と、フアイランは初代基督教徒生活の中心なりしとの事實より、多くの人々の承認する所となりしが、近時發見せる古代の文籍はシナイ山を以てエーモム、ミアンの前面に在るエーモム平原と同一視せるより、今日に於てはシナイ山はエーモムカテリナ、エーモムサ等を含める處に之を求めざるべからざるに至り。口傳のシナイは北の方エーモム平原に在り、此に峻峭として登へ、其の東西に各々谷あり、東の谷をエドテアと云ひ、西の谷をエーモムレサと云ふ。前者は其名(修道院の谷の義)を山の斜地に在る聖カマリナの有名なる修道院に取る。西の谷には四十人の殉教者の修道院の遺蹟あり、而して通常此の谷よりエーモムサの西南に横はるエーモムカテリナの登山をなす。エーモムサの最も北方の嶺をラス、エスサフサフエ(柳の頭の義)といふ。以色列人の律法の發布せられたる場所として一般に知られる處にして、其位置之行ふに甚だ便宜也。此の山の高は六千九百三十七呎に達し、南方の頂は多少低し。此の南方の頂は希臘井に亞利比亞人の傳説が眞に神聖なる場所なりとせしめし處也。

シナイ山

詩篇 The Book of Psalms. The Codex Sinaiticus. 『聖書の寫本』の條を見よ。

詩篇

詩篇

詩篇

詩篇

【經名】舊約聖書中の一書にして、智慧文學に屬す(智慧文學に關しては其條を見よ)。舊約聖書は大...

【希伯來の詩歌】希伯來詩歌の源流は最も古代に溯ることを得べく(創四十九、民廿一の十七、十八、廿七、廿八、廿九等)...

となし、一句に於けるよりも寧ろ一節に於て思想の進歩を對せり。希伯來詩歌に於て最も著しき特色は...

【二】反意的對句 第二句に於て反對の思想を表明し、即ち第一句の思想を強め、若くは確むる者にして、即ち左の如し。

の事にして思想上の事に非ず。例之左の如し。我れ我が王を、我が聖山に立てたり。(詩二の六)

【三】四句の詩 通常第一句と第二句と並行し、第三句と第四句と並行す。然れ共四句を結合するに非ざれば思想を完成せず(創四十九の七、賽四十九の四等)...

詩篇

詩篇

詩篇

詩篇

四の八等。詩歌の主眼となる者に三あり、自然、人間及び神也。希伯來詩歌の中には自然の美妙を歌ひ、若しくは義士英雄の功績を稱揚せるもの全くなきに非ず...

示さんため、一は作者の名を示し、又時には其作られたる場合を顯はさんため、一は此等の詩篇が如何に禮拜の時音楽に用ゐられたるかを示さんため也。然れ共吾人は一々此等の標題に信賴すること能はず。

なれば(イ)デビダの作として(清神、肉體的の愛を缺き、且同々後代詩人の作たるを暴露するものあり(六、廿一、廿五、四十、八十六、(ロ)デビダより後代に用ゐられたるアラマイク語を用ゐたるものあり(百三、百廿二、百廿四、百廿三、百廿九、百四十四、百四十五)...

詩篇

以上の理由に由り、吾人はダビデの作也として認へられたる詩篇の多數を以て、彼の作に非ずと断言せざるを得ず。

詩篇

の櫃の前にて歌ふべき音楽を供給したりしこの事は決して在り得べからざる事に非ず。然れ共歴史志略の史家が之に關して記したる記事は、其當時存在し

詩篇

觀察なるものは畢竟主観的にして、詩篇以外にダビデの詩調を判断する標準となすべきものは、前既に云へる如く唯僅に母後一の十九一廿七、三の廿三及

詩篇

るを得べく、又所屬者を指定せりとも解するを得べければ、之を以て直ちに作者を指定せる者也と断定す可らず。

詩篇

に推せざらんや。試に詩篇を以て預言者に比するに、後者は前者に比して一層創始的也。換言すれば詩篇は預言者の宣傳せる真理を適用し之を踏襲せる也。

詩篇

和して歌ふよりも寧ろ讀誦し記憶すべき者あり。左れば詩篇編輯の目的は單に禮拝用のためにあらず、一は之に依て古來幾多詩人の作りたる聖歌を集めて之を保存し、一は之に依て宗教的敬虔の念を養ふ材料となさんためなりし事明也。

詩 篇

十三篇十四篇、七十篇、四十篇の十三十七、百八...

此等の詩篇の編輯せられたる精密の時日は明ならず...

マツラレン(エキスコワトル、パイブル中)カート...

物名 地は食物に味を加ふる物にして、人類の生活上必要なる要素なり...

シ ー ベ リ ー

地もし其の味を失はば何をも以て之に味を加んや...

シ ー ベ リ ー 人名 一七二九-一七九六 米國最初の...

シ ー ベ リ ー

が、シーベリーは之を取らず、凡て革命といふものを...

シ ー マ ン 人名 一六七五-一七五九 英國の博識なる...

シ ー ム ン

シ ー ム ン 人名 三九〇頃-四一〇頃 五九 ストラス...

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

十八。路加は『セロテ』と云へるシモン』と記せり(六の十五)、『セロテ』とは蓋し宗派の名也(其餘を見よ)。カナンシモンと云ふは思ふにカナンに生れたるがためなるべしと雖も、此人の事に關しては福音書に何事をも記さざれば明ならず。(此條の第七項参照)。(四) 耶穌の兄弟シモン(太十三の五十五、可六の三) 彼がエルサレムの監督たりし耶穌の兄弟ヤコブの後を繼承せしと傳へられたるシモンと同一の人物なるや否やは、其だ疑はし。(五) オンと同一の人物なるや否やは、其だ疑はし。(六) 耶穌を招きて共に食せんことを請ひし或るパリサイ人(路七の三十六) 此の席に於て耶穌が婦人耶穌の足に香膏を塗りたり。(七) イスカリオテのユダの父シモン(約六の七十一、十三の二、廿六) 此等の句に於て此のシモンは希臘原文にシモンのユダと稱せらる。彼が耶穌を賣りし者に關係を有せし否やは不明なれ共、シモンの子ユダと稱することば恐らく正しからず。イスカリオテのシモン(約六の七十一、十三の廿六)とカナンシモンと同一人物となすことば甚だ覺束なし。(八) 耶穌の十字架を負はされたるアレキサンダーのシモン(太廿七の三十二、可十五の廿一、路廿三の廿六) 彼は使徒馬可によりてアレキサンダーとアルファの父として記載せられ、初代基督教會中有名なる人物たることを表す。(九) 使徒彼得はヨッパに滞在し居り(使徒一、六) 居り(徒九の四十三、十の六、十七、三十二) フルネの Simon of Tournay 佛蘭西の中世神學者。十三世紀の初、巴黎大學の哲學神學の教授たり。始めてアリストテレス哲學を神學に適用したる人なり。彼は之に由

て翻譯者は室に溢れしが、又處女心のために心亂されたり。マテウ、パリの傳ふる所によれば、シモンは或時『耶穌よ我にしてみよ汝の説を破壊せん』と欲すれば飽くまで之を爲し得たりしを、汝の説を堅固にするために何をなさんぞとトリ所なきぞかし』と叫びしが、其後は演説の力を失ひ、文學を再び學習せざるを得ざるに至り、辛うじて信仰簡條及び主の新を鏡字し得るに止まりたりと云ふトマス、カンテラフレンシスは『モーセと基督とマホメットとを三欺騙者と稱したりと云ふは彼の事なり』と記せり。去れどセントのアンタは是れ此等の物語のこゝを記すことなし。シモンの書は一も印刷せられ居らず。其説は教會の教義と全く調和せりと言はる。

シモン・バン・ヨカイ Simon Ban Yock、**人名** 蘭太のラビ。一般より『シモン』の著者と信せらる。第二世紀の人。パルコケの兵の失敗後ラビ等はナムニアに集り、一學校を立て、シモンを遊りて羅馬に行きアントニウス、セラスに請ひ、同教者禮拝就教に一層の自由を興へんことを求めしむ。彼は愛せらるるよりも恐れられ、嚴にして酷に、學問あれど海流の人なりしが、而も秘典なる知識を有すてふ名聲異教徒間にまで聞え居りしかば、使命には成功せり。されど歸りて太く羅馬の宗教や制度を非難し、之がために彈劾を受け死に宣告せらる。免れて多年を隱居して洞中におこし、アントニウスの死後出で、テオアにて教師たり、後テベリオに移れり。『シモン』は『シモン』に書きたるものと言はる。勿論後人の加へたる所もあれど、しも彼の作たりしは疑ひなきが如し。

び、イアナナウスはサモンの初生子と呼び、中世教會の最偉事たる教職實質は彼の名に因みて『シモン』と呼ばれたり。シモンの事蹟書中には使徒行傳八章に在り。魔法をなし人民に信ぜられ、神の大なる能力なりと言はれしが、ペリポの説教と奇蹟とに感じてバプテスマを受けし、奇蹟の力を金錢にて買はんことを彼得に乞ひて告められ、彼得の取償の所を求めたり。されど多くの註解者等は彼の最後の言は唯だ自己の有せぬ力を恐るゝ心の仄見ゆるのみにて、悔い改め居らざるを示せることを説けり。教會の傳説にては彼は教會を腐敗せんと努めし凡ての異端の祖となり居れるが、實際彼は後に彼得に反對し、サマリア人の猶太人に對する反對を煽動し、或は又自らメシヤと稱したることも眞なるが如し。彼に就ては師父等様々の事を言へり、之を專記せんに、

(一) シモン、一身上の事、聖書以後の書にて始めてシモンの事を記せるはエゲシヨボスにして、シモンは猶太宗に屬し教會の腐敗のより起るを、サマリア人申すの如き宗派の中に屬する者あるを言へり。ユスタクスは自らサマリア人なるが、シモンのサマリアのギットンに生れ、國人の多數よりいさ高き神と崇められ、其の信者にしてモシロの遊樂に在りしエリナ彼の『エンノヤ』たり、彼はクラウデアの世に羅馬に行き、魔術に由て知られ、講官や人長は彼を神とし拜し、聖なる神シモンと記せる言を立てたりといふことを記せり。クレメンヌ説教集にはシモンの兩親の事を記し、又もバプテスマのヨハネの三十人の弟子中の一人なることを記し、彼はエリナと共に周遊し、自己をば造物主よりも大なる至高の力と稱し、エリナをば天より降りたる者、凡て

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

シモン

の人と智慧その母なりと稱し、或は石像を歩ましめ、火中を過ぎ、自ら蛇や山羊に身を化し、錠鎖したる戸を開くなどの事をなし、彼得とはカイザリアストラトニスにて三日間討論し、所々を巡りて彼得の稱の種を奪き散らし、何時も彼得より追ひ行かれ、終つてアンタオにて彼得に迫られて己が基督と合同せらるること、彼得が基督の眞使徒の權あることを告白したりと傳へたり。他の傳説にてはシモンが羅馬に滞在し、彼得と對抗したることを言へど、テルツリアヌスはシモンに就てユスタクス及びイレニウスの傳へたる所に從ひて記し、羅馬にて彼得と會へる事をば記さず。降つて第三世紀の文書となれば、總更に異り、ヒッポリタスはシモンの羅馬にて彼得、保護と論争し、其の及ばざるを見て自らを生きたがら、彼がんとを乞ひ、三日後に復活せんぞ唱へしかば、使徒等其の言の如くせしに蓋を開けば死に居たりと言ひ、シモンの羅馬滞在をネロの世とし、ユスタクスの言ふ所とは異り居り。其の後の文書は彼得とシモンの羅馬會合の譯とクレメンヌ文書の譯とを和合して、シモンは羅馬より免れ、彼得より追ひ行かれしとし、其の死狀に就ては標々に記せり。或は天に飛ばんとし實際飛び行きしが、彼得の祈にて止められ、地に落ちて死せりと言ひ、或は恥を慚愧せに堪へず、岩より身を投ぜりと言へたり。

(二) シモンの教 師父等はシモンを異端の長、教會腐敗の源とし、ユスタクス以後の文書はシモンを首領と認め神として拜する一派のことを語り、イレニウスも亞歷山のクレメンヌも、テルツリアヌスも、オリゲナスも、又ケルソスも、シモン宗の事を言ひ、エヒファニウスとユウセビウスとは其漸減を言ひ、テオドレトは其の漸減を言へり。シモンの宗

教は次第に念の入りたる、ノストラタ派説の形を取リ、シモンは最高の力、凡の物の上にある父、エレナは所産多き母なり、エレナは造物使及び大天使を生み、彼等世界を造り、此等諸天使及び父を知らず、而して嫉妬より母を囚ふ、幾世紀間、經る内此の母は女性となり一人、次々に生れ、終つてシロの遊樂に於て見出されたり。シモンは天より降り、迷へる羊を自由にし、己を信する者を世界と之を造りし天使の手より解放すと言へり。是れ諸師父の見たるシモン教なり。

シモン宗の起源と發達を學問的に考ふれば、多分シモンはも爲メシヤなりしに、サマリア人の一派之を神として拜するに至り、其の一身の物語を種々の傳説にて組織し、又神話的分子と基督教的分子を混じたる一派のノストラタ派説之を基として組織せられしなるべし。パウルはシモンとエレナの神話はフェニキヤ神話の變化したる者なりと言へり。フェニキヤ神話にては日の神と月の神ありて男女たり。之より萬物生ずといひしなり。

派圖書部にて東方文書の日録を遺るべきを命ぜらる。是れ彼には適任にして其の聖書研究に大利益を興へたる所なり。然るに聖書理論の大著作をなしては、またも其派中にて快からず、去て郷里に歸り餘生を退隱して文學に従へり。『聖約聖書の批評的歴史』は一六八五年に出でたるものにて、『新約原文の批評的歴史』、『新約聖書譯本の批評的歴史』、『新約聖書の重なる註解の批評的歴史』之に續けり。初の方の部分は檢査官を通過せし、王へ捧呈するため出版遅延せし間に寫本の流れ出でし行はるる者起り、之が人の注意を引き、ボジューエーのワッセン派の運動に由て終に發行を阻害せられ、寫本みな破毀せられしが、僅に數部の寫本私人の手に殘るものあり。其だ正確のものなりしも、之よりアマステルダム、オーペア、ド、ゲルセルの之を拉丁譯せり。然れども八五年に至りて著者自らロッテルダムより正本を匿名にて出だし、其の後の著者は皆匿名して出せり。此等の著述は、始めて聖書文書を文學的產物と見て其の歴史を書きたるものにして、後年陸續に赴きし此科の學問の先驅をなせるものなり。勿論當時のこゝろで材料も乏しく、凡て不完全極まるものなる上に、著者自身の偏見私情特賞等のために支配せらるる事も多きは免れざる所。されば其時より批評は暗の如く集り、著者も全然愛すべき性質の人ならぬものから、一々之に對争したり。猶太人の改宗者ワイルはメツより、普蘭士公使スパンハイムは倫敦より批評せしが、殊にイザク、フォックスやワッセル、クレア等の批評に主客の間の大論争となれり。以上の書に續いて一七〇二年匿名にて聖書翻譯四冊を出だせしに、著者は直ちに發見せられ、ボジューエ

シの部 象形文字。證據論。小冊子

「象形文字」を以て最真とす。

象形文字 Hierarchy of Phines. 象形文字とは物體の形を書して文字となすもの、謂にして、繪文字と稱せらるる漢字及び古代の埃及文字は則ち此類也。例せば漢字の鳥てふ字は一見して鳥の形より出でたる文字なるを知るべく、馬の字も古字は其形能く馬に似たるを見る。人、家、田、男等の文字の如き一として形より出でたる文字ならざるはなし。漢字は多くは象形文字に外ならず。埃及の古代文字も亦然り。太陽を表はすに圓形の中心に一の點ある形を畫き、禮拜てふ事を表はすに人が兩手を差上げたる様を畫きたるの類にして、一として象形文字ならざるはなし。象形文字は文字中の最古のものにして、最古の文字は象形文字なりしなり。アルファベットも固く象形文字なりしもの、漸次に變化し來りしものなるや疑なし。象形文字の一二を示せば左の如し。



(埃及古代文字)

證據論 「證據論」の條を見よ。

小冊子運動 Tractarians. 「牛津運動」の條を見よ。

小冊子會社 Tract Societies. 「結社名」多數の人民に基督教の大切な教訓を領解せしめんとすの目的を以て立てられたる者にして、此目的を達せしむるに努むる者なり。

シヤウフレル ウィリアム ゴットフリート Schaeffer, William Gottlieb, D.D., L.D. 人名 一七九八—一八八三 宣教師又聖書翻譯者。スワットガートに生れ、一八〇四年父に従つて南露西亞オテッサに移り、十五歳にしてルーテル教會にて堅信禮を受け、廿二歳にして轉心して宣教師たる決心をなせしが、教育尙低くして望みなきやうなりしに、一八二六年有名なる宣教師ワッセル、ウォルフに會ひ、コンスタンチノープルに伴はれ、同市にて宣教を育み、其よりリスムルナに行きヨナス、キングに認められて米國に行き、五年間アンドーバーにて修學し米國に歸化し、アメリカン・ボードに聘せられて一八三一年コンスタンチノープルに遣はる。彼は同市に住して特に猶太人の改宗に盡力し、彼等の助によりて三九年より四二年迄希伯來西班牙語にて舊約聖書の訂正發行をなせり。されど其の大事業は聖書全體をオスマン土耳其語に譯したる事なり。同語は教育ある土耳其人の國語にして、此の事業のため十八年を費せり。六七年ハルムより神學博士號を贈られ、又外交的調停をなして六一年普魯士王ウィルヘルムより勳章を贈られ、七七年にはプリンストン大學より法學博士を贈らる。彼は十九國語に通じ、獨、以、佛、英、西、土六語に於ては即座説教をなし得たり。

小冊子者 The Minor Prophets. 「結社名」何西阿、約耳、亞摩士、阿巴底亞、約拿、米迦、拿番、哈巴谷、西番雅、哈基、撒加利亞、馬拉基の十人爲め小冊子を編輯、印刷し、之を頒布するを以て其事業と爲す。ジョン、ウィックリフが書きて其趣同傳道者等をして配付せしめたる「通俗小冊子」は其一例也。宗教改革以後此種の會社は多く設立せられたり。其中最も重なる者は「基督教知識増進會社」(一七五〇)、「貧民の基督教知識増進會社」(一七五〇)、「宗教小冊子會社」(一七九九)等にして「大英及び外國聖書會社」及び「國民聖書會社」(蘇國)の如きも又同様の働きをなせり。我國にて「福音會社」又は「福音會社」と稱するは、即ち此小冊子會社にして、英國又は米國に於ける會社の分社也。

聖書の Chapters and Verses of the Bible. 「新約聖書」の條「新約聖書の外形」の項を見よ。

昇天 Ascension. 「復活せる基督」の條「其弟子より全く離れ去りたるを指せる語にして、徒一の九—十一に記さる。舊約にてはエノク及びエリヤの此世を去りたるを記すに同一の語を以てせり。然れども、基督の昇天を記せるは如き記事なし。尙基督の昇天に就ては「耶穌基督の條」見よ。

小兒のバプテスマ Infant Baptism. 「結社名」小兒のバプテスマに就ては、プロテスタント教會の中に異説を唱ふる者あり。バプテスマ派は其最も重なる者にして、彼等は(一)基督は小兒にバプテスマを授けべきことを命じたる、ことなく、使徒等も亦之を行ひたる、ことなき、(二)且同心及び信仰の告白はバプテスマに先だつべき者なれ共、此は小兒に望むべからず、故に小兒のバプテスマはバプテスマ其のものゝ觀念に背けりとの理由に依り、之に反對せり。然れ共此の議論に對しては左の如く答ふるを得べし。即ち(一)萬國の民にバプテスマを施すべしとの命令の中には、小兒のバプテスマをも含みせりとの解釋を得べし。又ヘンリコスタの日にバプテスマを受けたる三千人(徒二の四十一)及び後バプテスマを受けたるの事を記されたる五家族(徒十の四十八、十六の十五、廿三、廿四の十六、十六の十五)の中には、思ふに小兒をも含みたりなるべく、罪の赦と聖靈の賜との約束を信する者其尙に爲されたるを見れば(徒二の廿八、三の廿五)使徒等は小兒にバプテスマを施したりしと推定するを得べし。(二)耶穌は曾て小兒を視し、天國に入る者は此嬰兒の如き者也と云へり。若し小兒が神の國に入る表徴としてバプテスマを受くる能はずとは信じ難し。(三)バプテスマは基督教會に入るの儀式にして、新なる契約の印證なること、割禮が舊き契約の印證なりしが如し(羅四の十一)。

章節。昇天。小兒のバプテスマ

「象形文字」を以て最真とす。

小兒のバプテスマ Infant Baptism. 「結社名」小兒のバプテスマに就ては、プロテスタント教會の中に異説を唱ふる者あり。バプテスマ派は其最も重なる者にして、彼等は(一)基督は小兒にバプテスマを授けべきことを命じたる、ことなく、使徒等も亦之を行ひたる、ことなき、(二)且同心及び信仰の告白はバプテスマに先だつべき者なれ共、此は小兒に望むべからず、故に小兒のバプテスマはバプテスマ其のものゝ觀念に背けりとの理由に依り、之に反對せり。然れ共此の議論に對しては左の如く答ふるを得べし。即ち(一)萬國の民にバプテスマを施すべしとの命令の中には、小兒のバプテスマをも含みせりとの解釋を得べし。又ヘンリコスタの日にバプテスマを受けたる三千人(徒二の四十一)及び後バプテスマを受けたるの事を記されたる五家族(徒十の四十八、十六の十五、廿三、廿四の十六、十六の十五)の中には、思ふに小兒をも含みたりなるべく、罪の赦と聖靈の賜との約束を信する者其尙に爲されたるを見れば(徒二の廿八、三の廿五)使徒等は小兒にバプテスマを施したりしと推定するを得べし。(二)耶穌は曾て小兒を視し、天國に入る者は此嬰兒の如き者也と云へり。若し小兒が神の國に入る表徴としてバプテスマを受くる能はずとは信じ難し。(三)バプテスマは基督教會に入るの儀式にして、新なる契約の印證なること、割禮が舊き契約の印證なりしが如し(羅四の十一)。

社會學 Sociology. 「學科名」社會學なる名稱を始めて用ひたるは佛國のアヴィグニスト、コムトにして、彼は其有名なる大著述「實驗哲學」第三版の第四卷第八十五頁に於て、始めてソシオロジー即ち社會學と文字を用ひたり。而して此第三版は一八三八年の出版なれば「社會學」なる名稱の始めて世に現はれ出でしは、今を距る僅かに七十二年前の事なりとす。而して此の名稱と學問とを英語社會に紹介したるはハーバート、スペンサーなりとす。社會學はそも如何なる學問なりやと云ふに、こは社會の種々多量の現象を考究して一定の法則秩序を發見叙述するの科學にして、米國のギッティンクスは之に定義を下して、社會を科學的に研究する學也と云ひ、伯林大學のランメルは、社會構造の勢力、形式、及び發達を研究する學也と云へり。而して社會

小兒のバプテスマ

「象形文字」を以て最真とす。

社會學 Sociology. 「學科名」社會學なる名稱を始めて用ひたるは佛國のアヴィグニスト、コムトにして、彼は其有名なる大著述「實驗哲學」第三版の第四卷第八十五頁に於て、始めてソシオロジー即ち社會學と文字を用ひたり。而して此第三版は一八三八年の出版なれば「社會學」なる名稱の始めて世に現はれ出でしは、今を距る僅かに七十二年前の事なりとす。而して此の名稱と學問とを英語社會に紹介したるはハーバート、スペンサーなりとす。社會學はそも如何なる學問なりやと云ふに、こは社會の種々多量の現象を考究して一定の法則秩序を發見叙述するの科學にして、米國のギッティンクスは之に定義を下して、社會を科學的に研究する學也と云ひ、伯林大學のランメルは、社會構造の勢力、形式、及び發達を研究する學也と云へり。而して社會

社會主義 Socialism. 「學說名」社會主義とは同類を有する個人、即ち社會的人類の集合なれば、社會學の要諦は(一)社會的個人は如何なる者なりやを記述し(二)社會的個人の活動進行する所を調査し(三)其活動の結果如何を研究し(四)此間に行はるる法則を發見して之を説示するに在りといふべし。參考書としてハスペンサーの「社會學原理」サッパイの「社會學原理」カスター及びウェルズの「社會學及び社會の進歩」ギッティンクスの「社會學原理」及び「社會學階梯」浮田和良の「社會學講義」諸部著書の「社會學序論」等を推薦すべし。社會主義 Socialism. 「學說名」社會主義とは同類を有する個人、即ち社會的人類の集合なれば、社會學の要諦は(一)社會的個人は如何なる者なりやを記述し(二)社會的個人の活動進行する所を調査し(三)其活動の結果如何を研究し(四)此間に行はるる法則を發見して之を説示するに在りといふべし。參考書としてハスペンサーの「社會學原理」サッパイの「社會學原理」カスター及びウェルズの「社會學及び社會の進歩」ギッティンクスの「社會學原理」及び「社會學階梯」浮田和良の「社會學講義」諸部著書の「社會學序論」等を推薦すべし。

シの部 シヤウ。小預言者

小預言者 The Minor Prophets. 「結社名」何西阿、約耳、亞摩士、阿巴底亞、約拿、米迦、拿番、哈巴谷、西番雅、哈基、撒加利亞、馬拉基の十人爲め小冊子を編輯、印刷し、之を頒布するを以て其事業と爲す。ジョン、ウィックリフが書きて其趣同傳道者等をして配付せしめたる「通俗小冊子」は其一例也。宗教改革以後此種の會社は多く設立せられたり。其中最も重なる者は「基督教知識増進會社」(一七五〇)、「貧民の基督教知識増進會社」(一七五〇)、「宗教小冊子會社」(一七九九)等にして「大英及び外國聖書會社」及び「國民聖書會社」(蘇國)の如きも又同様の働きをなせり。我國にて「福音會社」又は「福音會社」と稱するは、即ち此小冊子會社にして、英國又は米國に於ける會社の分社也。

社會學

社會學 Sociology. 「學科名」社會學なる名稱を始めて用ひたるは佛國のアヴィグニスト、コムトにして、彼は其有名なる大著述「實驗哲學」第三版の第四卷第八十五頁に於て、始めてソシオロジー即ち社會學と文字を用ひたり。而して此第三版は一八三八年の出版なれば「社會學」なる名稱の始めて世に現はれ出でしは、今を距る僅かに七十二年前の事なりとす。而して此の名稱と學問とを英語社會に紹介したるはハーバート、スペンサーなりとす。社會學はそも如何なる學問なりやと云ふに、こは社會の種々多量の現象を考究して一定の法則秩序を發見叙述するの科學にして、米國のギッティンクスは之に定義を下して、社會を科學的に研究する學也と云ひ、伯林大學のランメルは、社會構造の勢力、形式、及び發達を研究する學也と云へり。而して社會

社會主義

社會主義 Socialism. 「學說名」社會主義とは同類を有する個人、即ち社會的人類の集合なれば、社會學の要諦は(一)社會的個人は如何なる者なりやを記述し(二)社會的個人の活動進行する所を調査し(三)其活動の結果如何を研究し(四)此間に行はるる法則を發見して之を説示するに在りといふべし。參考書としてハスペンサーの「社會學原理」サッパイの「社會學原理」カスター及びウェルズの「社會學及び社會の進歩」ギッティンクスの「社會學原理」及び「社會學階梯」浮田和良の「社會學講義」諸部著書の「社會學序論」等を推薦すべし。

シの部 赦罪

的労働てふ統一せる組織によりて生産に従事せんと欲するものなり、此共同生産組織は現時の競争組織を一掃するものにして、之に従へば生産事業は、共同の支配の下に置かるべく、共同の生産物は各人の生産力の多少に準じて分配せらるべきものなり。...

赦罪

Indulgences. 價例 教會の權威を以て罪を犯せる人々の當りに受くべき刑罰を赦すの義にして、羅馬教會特有の制度也。...

シャツフ

の目的のため金銭を出す等の事をなして以て赦罪を得るに至りしが、十字軍の起りし時代には、神の榮光のため不信者と戦ふ勇士は、其犯せる罪の如何に拘はらず、充分なる赦罪を得たりき。...

シャツフ ヒリツ Selah, Philip

人名 一八一九一三 暹羅の神學者。一八四二年伯林大學の講師となる。...

シャフツベリ

アンソニー アシレー クーパー Shafsbury, Anthony Ashley Cooper, Third Earl of 人名 一六七一一七一三 英國の著述家。...

シャープ ジェームズ Sharp, James

人名 一六一八一七九 蘇國の監督。アベルティンにて教育を受け、一六四〇年聖アンドリュース市聖レナード大學の教授たり。...

シの部

シャープの寫本

られしが、而も此の刺客は彼を殺さんとする意向ありしに非ず、其の下僚カルクエラを殺さんせしより起れり。 シャープ グランヴィル Sharp, Granville 人名 一七三四一八二一 英國の博愛事業家。...

シヤム

を以て戦ひしことによて其名を高くす。殊にナンテ令の出づる前に最も論戦に力めたり。シヤムイイ、イヌイイカイ等論争的著書數種あり。 シャムイイ Shanmyi 人名 一八〇二 一八二二 暹羅の有力なる議員の一人なり。...

シャルマンチ

シャルマンチ Charlemagne. 人名 七四二一八一四 フランク人の王。羅馬帝。獨逸語にてカール大帝、英語にてチャールズマンチと稱す。...

シャル

シの部

シャーレン

シャーロック

主のシユク

は、彼に取つては地上に於ける基督の有形的代表者たりしのみならず、又文化の機關、政治の道具なりき。此を以て時として此の道具を其の勝手に使用したることあり。例之サキソニア人を強制し、殘酷なる壓迫を加へてプロテスタントを受けしめし其の一なり。然れども教會を以て同民族史の一勢力たらしめ、又之を以て封建制度の軍隊的壓制を牽制する對策たらしめしは、唯だ彼の獨り能くせし所なりき。教會との關係に於て彼の特色といふべきは、靈的權力と世俗的權力との區別を全く思ひ知らざりしことなり。法王をば或場合に基督の代表者と認めしに拘はらず、七九四年のフランクフルトの會議にては全く之を無視して、教皇禮拜に關する第二ニカラ會議の布令を非難し、又八〇九年のエータスラシャール會議にては極めて輕き手續を以て西班牙教會の『フィオナタ(子よりの義)』をニカラ信條中に入れたり。又ラゲエナ領をば法王領に寄進し、對する所の教會及び僧院に多くの所領を與へ、新領土を異取すれば、先づ數區を定め教會を建て傳道所を開く等の事をなし、自由にて其成長を放任し、而して教會成長すれば之に絕對の服従を要求したり。主監督は法王よりパトリウム(懸け組)を受けし、皇帝の承認を要し、監督は唯だ彼に由て選定任命せられぬ。彼の政治思想は神治政治なりき。されど教會が國家を併呑するてふ一般の同思想と異り、國家が教會と同一とされるものを其なりとした。當時の大人物はシャーレンマンの周圍に引寄せられたり。アルタイン、レイドワデー、アンゲルハルト、エギンハルト、アゴバルド、パスカシウス、ラドヘルトス、ラボニス、マワルス、スコトス、エリクナ。ボンタマルの徒は、或は教師として或は學生

として、彼が宮中に立てたる學校に集まり、之を中世に於ける大學の萌芽たらしめぬ。彼等は皆神學者たりしも、尙多くは同時に語學、修辭學、哲學、古典學等の大家たり。シャーレンマンは之を各地に遣はして監督等よく其の分を盡せるやを觀察せしめたり。彼は其の政教一途の思想より、監督等の責任は宗教と共に教育司法に負ふ所なるべからずと考へしなり。之がために教職は彼の治下にて財産を得、野心を達するの地位として視らるゝに至れり。

シャーロック ウィリアム Sherlock, Will. 一六四一頃一七〇七 英國の神學者。一六五七年劍橋大學に入り、之を出で、倫敦聖ヨルグ教會司長、聖保羅教會受給師、ハーフトールドのサーフィードの司長に歴任し、八四年テムブルの長となる。革命の時新立憲を拒んで一時停職せられしが、後法律に従ひて復職し、之がために個人的非難を受けること多かりき。之より先きウィルムス二世よりは法王に反對して説教せしめて咎められ、收入の一部を奪せられしことあり。八四年には『至上權抵抗の書』、聖書の教義に據りて議論解決すを、九〇年には『三位一體及び神子體現の教義』を出だして論を蒙り、前者のために政治的攻撃を受け、後者のために博士サワスの如き神學者等と論争を開けり。其説にては三位は三つにして共通の意識なる相互自意識なるものあり、故に實質は勿論數に於ても一なり。サワスは之を嘲り此れ三神論なりと言ひ、シャーロックはサワスをサマウス説なりと言ひ、シャーロックは非常な動亂にして凡て六十種以上の著作をなし、死に就て未だ來の審判に就て神の擧げに就て『等有名なり。九一年聖保羅教會の『アイーレン』となる。

主 Lord. 新語 此語聖書には三箇の意義あり。英語欽定譯及び改正譯は、三種の文字を以て之を顯はせり。即ち LORD Lord, 及び Lord 是也。

(一) 英語聖書に LORD と記せるは、以色列の神エホバ(יהוה)を示せる者にして、希伯來人がエホバなる名を唱ふるを恐れ、アドナイ(אדני)なる名を代用せるより、英譯は之を顯はすため『主』の名を用たり。其の感情は何時頃より起りたりしや明ならざれば、七十人譯に Adonai, 『主』の義)なる語を用たるを見れば七十人譯以前より行はれたりしこと明也。尤も邦譯には何れもエホバなる名を用たり。(二) 英語聖書に Lord と記せるは、アドナイを譯せる者にして『神』の義を表す。又間々神を指せりや人を指せりや明ならざる場合あり(創十八の三、十九の十八)。又主エホバ(創十五の二、三、賽廿五の八)主我が神(詩八の十五)と連結せることあり。出廿三の十七には『主』を『主』と譯し、但二の四十七、五の廿三にはアラメイタ語の Adonai を『主』と譯せり。新約にては Kyrios なる語を直接に神又は基督に應用する場合に『主』と譯せり。又 Antheos なる語をも『主』と譯せり(路二の廿九、徒四の廿四、彼後二の一、論四、黙六の十)。(三) 英語聖書に Lord とせる希伯來語に十箇あり。『卓越』の義を表し、王、統治者、預言者、父、主人等を指すために用ゐらる。

シウエケレル アルベルト Schwegler, Albert 人名 一八一九一五 獨逸の歴史家、神學者、神學者。ケルテンベルグのミケルバッハに生れ、シエントハル及びナウエンゲンにて學び、事ら教會歴史を研究し、殆ど一年間バーメンハーヴェンの牧師たり。一八四三年ナウエンゲンの哲學科講

シの部

シユウ

シヨール

祝節

師となり、四八年羅馬文學及び古學の教授となり、死する少しく前古代史教授となる。ナウエンゲン大學中にてはマルクに次で有名なる人にして、ヘーゲル哲學の熱心なる研究者たり。四一年『第二世紀の本山主義及び基督教』を著し、ストラウスの『耶穌傳』其他に由て自ら教會の教を意見を異にするに及び、四六年『使徒後の時代』を出し、マルクの初代教會に關する説を更に極端に進め、且つ聖書文書の起原の正しさを否認し、初代基督教は純然たるエビオン主義なりとし、之を基礎として其の初代教會史を組織せり。四七年『クレメンテ説教』を、五二年『ユウセビウス文書』を出版す。又四七年『クリストテレスの形而上學解釋』四八年『哲學史』五三年より五八年迄『羅馬史』三冊を著しせり。

シウエックフェルト カスバルフォン Schwenkfeld, Kaspar von 人名 一四九〇一五六一 獨逸の神學者、シウエックフェルト派(Schwenkfeldian)の創立者。シレンシア貴族の家に生れ、宗教改革時代の神學家中最も敬虔なる人として名高し。初め熱心にルーテルの改革事業を助けたりしが、後其説のルーテルと異なるに従ひ、公然之に反對せり。一五二八年其故郷を追放せられ、ストラスブルヒに往きしが、此處にても改革者の反對を受け、一五三四年スラビヤに往きしが、此處にても亦劇しき反對を蒙りたりき。此の如く彼は至る所に改革者と戦ひ、自己一派の説に従て改革の事業を進げんと謀れり。彼の説に従へば、ルーテルが聖書を以て無條件的教権を有するものとなすは、文字を崇拜する也。人心の内部に於ける神の靈の言は、聖書に於ける外部の言に優れり。此の如く彼は最も強く教會の外部的制度に反對せり。彼は又稱義と

成聖を同一視し、是れ即ち信徒の中に於ける基督の化身也と説けり。彼は又小兒のバプテスマに反對し、新生したる人は罪を犯さずして生活し得べしといひ、主の晚餐に於けるパンは基督が靈魂の眞の食物也との靈的眞理を表するものに過ぎずと云ひ、約六の五十一に最も重を置き『是れ我體也』の語を顛倒し『我體は是也』我體は永生に至るパン也の意となせり。彼の死後彼の徒はルーテル派のため劇しき迫害を蒙りたりしが、其數は漸次増加し、一七二五年彼等はサキソニヤに移り、一七三三年其或るものは北米合衆國ペンシルバニア州に移住し、其處に教會を立てたりしが、最近の調査に依れば、合衆國に在る此派の教會八箇、信徒七百四十人(一九〇七年調)其教義は頗るフレンド派のそれと相似たり。

シヨール サムエル Sewall, Samuel 人名 一六五二一七三〇 英國の司法官。英國ビショップストークに生れ、一六七一年ハーバード大學を卒業し、神學を研究し暫く説教せしが、七六年ハンナ、ハルと結婚して財産を得、法律に志し九二年裁判官となり、一八年マサチューセツ最高裁判所所長となる。彼は自ら進んで印度人間に福音を傳ふる事業に貢献し、九九年英國の新英州福音宣布會社の委員に擧げられ、間もなく其の書記と會計とに擧げらる。亞非利加人奴隷に同情すること深く、一七〇〇年『モセの贖買』てふ小冊子を公にし、黒人の權利を唱へ、奴隷制度せらるゝまでは教化に進歩あるべからずといへり。其の慈善の行は頗る大にして、其家は慈善の目的のために用ひられたり。著書も多少存す。

祝節 又は祝日 Festivals, Festivals. 祝節とは或る喜びしき出来事を記念するの日にして、古來何れの國民も皆之を有す。希伯來人の祝節は(一)安息日。(二)贖罪日。(三)新年節(イブリン)。(四)掃蕩節(五)五旬節。(六)逾越節又は除酵節。(七)安息年にして、俘囚以後之に(一)プリーム節。(二)修殿節。(三)献木節を加ふ。此等の祝節に就ては各々其條を見るべし。

基督教の祝節は日曜日、復活節及び降誕節を其最も重なる者とし、新舊教徒共に之を祝す。羅馬教會は此外尙多くの祝節及び聖季を有す。即ち左の如し。

(一) 耶穌基督に關する聖季及び祝日。
 第一季 耶穌降誕前後の節。
 一 待降節 耶穌の降誕を待つ節にして、降誕節前第四の日曜日より初まる。
 二 降誕節 十二月廿五日(其條を見よ)。
 三 割禮節 一月六日。耶穌の割禮を祝す。
 四 公現節 一月六日。東方より博士來りて耶穌を拜したること、耶穌の受洗及びカナにて爲せる最初の奇蹟の三事跡を祝す。
 五 奉獻節 二月二日。生後四十日耶穌がエルサレム神殿に獻けられしことを祝す。

第二季 耶穌復活前後の節。
 一 七旬節 四旬節前の三週間を云ひ、受難節の準備節といふべきもの也。
 二 四旬節 耶穌復活前四十日間苦行をなす時を云ふ。初めの日を灰の式の水曜日と云ひ、灰を信者に塗附するの式を行ふ。
 三 受難節 復活日曜日に至る前二週間を云ひ、耶穌の受難を記念す。
 四 聖木曜日 羅馬教會に於て此日には耶穌が聖體の秘跡を定め且司祭の位を立てたりとて、之を祝す。

師となり、四八年羅馬文學及び古學の教授となり、死する少しく前古代史教授となる。ナウエンゲン大學中にてはマルクに次で有名なる人にして、ヘーゲル哲學の熱心なる研究者たり。四一年『第二世紀の本山主義及び基督教』を著し、ストラウスの『耶穌傳』其他に由て自ら教會の教を意見を異にするに及び、四六年『使徒後の時代』を出し、マルクの初代教會に關する説を更に極端に進め、且つ聖書文書の起原の正しさを否認し、初代基督教は純然たるエビオン主義なりとし、之を基礎として其の初代教會史を組織せり。四七年『クレメンテ説教』を、五二年『ユウセビウス文書』を出版す。又四七年『クリストテレスの形而上學解釋』四八年『哲學史』五三年より五八年迄『羅馬史』三冊を著しせり。

シウエックフェルト カスバルフォン Schwenkfeld, Kaspar von 人名 一四九〇一五六一 獨逸の神學者、シウエックフェルト派(Schwenkfeldian)の創立者。シレンシア貴族の家に生れ、宗教改革時代の神學家中最も敬虔なる人として名高し。初め熱心にルーテルの改革事業を助けたりしが、後其説のルーテルと異なるに従ひ、公然之に反對せり。一五二八年其故郷を追放せられ、ストラスブルヒに往きしが、此處にても改革者の反對を受け、一五三四年スラビヤに往きしが、此處にても亦劇しき反對を蒙りたりき。此の如く彼は至る所に改革者と戦ひ、自己一派の説に従て改革の事業を進げんと謀れり。彼の説に従へば、ルーテルが聖書を以て無條件的教権を有するものとなすは、文字を崇拜する也。人心の内部に於ける神の靈の言は、聖書に於ける外部の言に優れり。此の如く彼は最も強く教會の外部的制度に反對せり。彼は又稱義と

成聖を同一視し、是れ即ち信徒の中に於ける基督の化身也と説けり。彼は又小兒のバプテスマに反對し、新生したる人は罪を犯さずして生活し得べしといひ、主の晚餐に於けるパンは基督が靈魂の眞の食物也との靈的眞理を表するものに過ぎずと云ひ、約六の五十一に最も重を置き『是れ我體也』の語を顛倒し『我體は是也』我體は永生に至るパン也の意となせり。彼の死後彼の徒はルーテル派のため劇しき迫害を蒙りたりしが、其數は漸次増加し、一七二五年彼等はサキソニヤに移り、一七三三年其或るものは北米合衆國ペンシルバニア州に移住し、其處に教會を立てたりしが、最近の調査に依れば、合衆國に在る此派の教會八箇、信徒七百四十人(一九〇七年調)其教義は頗るフレンド派のそれと相似たり。

シヨール サムエル Sewall, Samuel 人名 一六五二一七三〇 英國の司法官。英國ビショップストークに生れ、一六七一年ハーバード大學を卒業し、神學を研究し暫く説教せしが、七六年ハンナ、ハルと結婚して財産を得、法律に志し九二年裁判官となり、一八年マサチューセツ最高裁判所所長となる。彼は自ら進んで印度人間に福音を傳ふる事業に貢献し、九九年英國の新英州福音宣布會社の委員に擧げられ、間もなく其の書記と會計とに擧げらる。亞非利加人奴隷に同情すること深く、一七〇〇年『モセの贖買』てふ小冊子を公にし、黒人の權利を唱へ、奴隷制度せらるゝまでは教化に進歩あるべからずといへり。其の慈善の行は頗る大にして、其家は慈善の目的のために用ひられたり。著書も多少存す。

祝節 又は祝日 Festivals, Festivals. 祝節とは或る喜びしき出来事を記念するの日にして、古來何れの國民も皆之を有す。希伯來人の祝節は(一)安息日。(二)贖罪日。(三)新年節(イブリン)。(四)掃蕩節(五)五旬節。(六)逾越節又は除酵節。(七)安息年にして、俘囚以後之に(一)プリーム節。(二)修殿節。(三)献木節を加ふ。此等の祝節に就ては各々其條を見るべし。

基督教の祝節は日曜日、復活節及び降誕節を其最も重なる者とし、新舊教徒共に之を祝す。羅馬教會は此外尙多くの祝節及び聖季を有す。即ち左の如し。

(一) 耶穌基督に關する聖季及び祝日。
 第一季 耶穌降誕前後の節。
 一 待降節 耶穌の降誕を待つ節にして、降誕節前第四の日曜日より初まる。
 二 降誕節 十二月廿五日(其條を見よ)。
 三 割禮節 一月六日。耶穌の割禮を祝す。
 四 公現節 一月六日。東方より博士來りて耶穌を拜したること、耶穌の受洗及びカナにて爲せる最初の奇蹟の三事跡を祝す。
 五 奉獻節 二月二日。生後四十日耶穌がエルサレム神殿に獻けられしことを祝す。

第二季 耶穌復活前後の節。
 一 七旬節 四旬節前の三週間を云ひ、受難節の準備節といふべきもの也。
 二 四旬節 耶穌復活前四十日間苦行をなす時を云ふ。初めの日を灰の式の水曜日と云ひ、灰を信者に塗附するの式を行ふ。
 三 受難節 復活日曜日に至る前二週間を云ひ、耶穌の受難を記念す。
 四 聖木曜日 羅馬教會に於て此日には耶穌が聖體の秘跡を定め且司祭の位を立てたりとて、之を祝す。

シの部 祝節

- 五 聖金曜日 耶蘇の受難、死去を記念す。
- 六 聖土曜日 耶蘇の葬られたるを祭る。
- 七 復活日曜日 耶蘇の復活を祝す。
- 八 復活の期節 羅馬教會にては唯復活日曜日を祝するのみならず、三日間之を盛大に祝し、又八日目の日曜日までは他の祝祭を廢して復活のみを祝す。尙三位一體の日曜日に至るまで五十六日間復活の期節を稱へ、喜の中に之を送る。
- 九 昇天節 復活日曜日後四十日に耶蘇の昇天を祝す。
- 十 聖靈降臨日曜日 耶蘇復活後五十一日に聖靈使徒等の上に降りしを祝す。
- 第三季 聖靈降臨後の祝節。
 - 一 三位一體の祝日 聖靈降臨後の第一日曜日を以て三位一體の祝日とす。
 - 二 聖體の大祝日 聖體を特別に敬拜するために三位一體の祝日に次ぐ木曜日を祝す。
 - 三 聖心の祝日 耶蘇の心を拜するに於て聖體の大祝日より八日目の金曜日を祝す。
- (11) マリアに関する祝日。
 - 一 マリアの懐妊の祝日 十二月八日
 - 二 マリア誕生の祝日 九月八日
 - 三 マリア御告の祝日 三月廿五日
 - 四 マリア訪問の祝日 七月二日
 - 五 マリア清淨の祝日 二月二日
 - 六 マリア昇天の祝日 羅馬教會はマリア昇天の傳説を作り、八月十五日を以て之を祝す。
 - 七 マリア深き心の祝日 マリアの深き心を特に崇むるの日に於て、昇天後第二の日曜日に之を祝す。

祝禮のシヨシヤン

八 聖きロザリオの祝日 ロザリオとはマリアを崇むる爲に定められたる口誦數珠の一種にして、十月第一の日曜日に之を祝す。

(二) 天使及び諸聖徒に関する祝日 (イ) ミカエルのヨハ子誕生の祝日 (六月廿四日)。(ロ) 耶蘇の父ヨセフの祝日 (三月十九日)。(ニ) 彼得及び保羅の祝日 (六月廿九日)。(ホ) 使徒及び福音書作者の祝日 (六月廿九日)。(ヘ) ヨコブ (七月廿五日)。(ト) アンソレン (十一月廿七日)。(チ) パルトロマイ (八月廿四日)。(リ) マタイ (九月廿一日)。(ニ) トマス (十二月廿一日)。(ヒ) お及びヤコブ (五月一日)。(フ) グラディ及びシモン (十月廿八日)。(マ) マテア (二月廿四日又は廿五日)。(ヨ) ヨハニス (五月廿五日)。(ルカ) (十月十八日)。(ニ) 殉教者の祝日 (四月廿五日)。(カ) (十月十八日)。(ニ) 殉教者の祝日 (二月二日及び七月七日)。(ト) 守護聖徒の祝日 (日本の羅馬教會は十二月三日フランシス、ザグレイエーを祭る。羅馬教會は十一月一日在天の諸聖徒を祝す)。

祝禮 Benediction. 新語 教師が禮拜の時に會衆のためになす祝福の祈禱にして、通常午後十三の十四に記されたる語を用ゆ。祝禮の時起立して首を垂るゝは古代の習儀也。羅馬教會に在ては祝禮は最も厳肅なる行作にして、僧侶は僧服を着け、十字架の符號をなして之を宣言す。

シナヤン Shushan. 地名 希伯來語にてはササと云ひ、數世紀前エラムと呼ばれし國の首府なりしが、其の後波斯國の三首府の一となり、ユアスピス河或はユララス河畔に存在したりしと稱せらる。ササの古跡は前世紀の半ば頃遺出されたる

出埃及記

が、東西の長さ六千呎、南北の廣さ四千五百呎に亘る土地にして、其の土地の大部分は波斯の建築物を以て覆はれたりしといふ。

出埃及記 Exodus. 經名 舊約聖書中の一書にして、モーセ六經の第二卷。猶太人は巻頭の語より「エグプト」を呼ぶ。Egypcusは希臘譯也。ヨセフの死より出埃及の第二年にモーセが幕屋を建てたる時に至る迄の以色列國民の歴史を記す。此書の結構は大體に於て創世記と同じく、且同一の材料即ち祭司典、エホバ古典、エロム古典等を用ひて之を編纂せり(此等の事に關しては「モーセ六經」の條を見よ)。此書の記事之を左の三項に分つべし。(一) 以色列人が埃及より救ひ出さるゝに至る迄の記事(一―十一章)。

一、二章には、ヤコブの子孫が埃及に於て斷々繁殖したりし事。ヨセフが曾て埃及に爲したりし功績を知らざる王の出づるに及びて、以色列人の増殖を止めんとすに之に苛役を課し、且其男子を根絶せんとしたりし事(一章)。並にモーセの出生、教育及び彼が埃及よりエホバの地に連れられたりし事(二章)を記す。

三、一―七の十三には、モーセが其民以色列を埃及より救ひ出すべしとの使命を蒙りたる事、及び彼が其使命を果さんために先づ以色列人に謀り、且パロ王に埃及退去の許可を請ひたりし事を記す。第三章の記事は主としてエロム古典より來り、之にエホバ古典より來れる短き句を交ゆ。四の一―六の一は之に反し、重なる説話はエホバ古典より取り、之にエロム古典より取れる短き句を交ゆ。六の二―七の十三は祭司典より取りたる者にして、之を全體としてエホバ及びエロム古典に比するに、此は三の

シの部 出埃及記

一―六の一の續きを記したる者に非ず、之と同一事を記し、モーセの使命及び彼が以色列國民救済のため取りたる最初の過程の精や異りたる次第を示したる者也。

七の十四、十一の十には、埃及人の受けたる災厄の事を記す。此處にも材料の異なるに従ひ記事にも相違あるを示せり。即ち祭司典より來れる記事に依れば、アロンはモーセの共働者にして、エホバ、モーセに命じて「汝アロンに言へ」と云ひあり(七の九、十九、八の五、十六等)。災厄は以色列人を救はんとの目的に依り行はれたりと爲すより、寧ろエホバの力の體證として行はれたりと爲す者の如く、且災厄を記すや簡略にして二三節に出づる者少し。又特に埃及法術士の成敗を記し、又パロの心を頑固にせるを記すには「強くなれり」の意義を有する語を用ひ、結ぶに「パロの心頑固にして彼等に聽くことをせざりき、エホバの言ひ給ひしが如し」との語を以てせり(七の十三、廿二、八の十五、十九、九の十二等)。

之に反しエホバ古典より取れる記事に在ては、モーセのみ獨り(アロンの伴ふことなくして)パロの前に出づべしとの使命を蒙り、彼れパロの前に出でては常に「エホバ我を汝に遣して言はしむ、吾民を去らしめて曠野にて我に事ふることを得せしめよ」(四の廿三、五の一、七の十六、八の一、九の一、十三、十の三)パロもし之を聽かずんば災厄に繼いで至るべしと云ひ、而して其災厄の至るや、或は更に人の仲介なくして至れりとなし(八の廿四、九の六)或はモーセの合圖に依りて至れりとなせり(七の廿、九の廿二、十の十二、廿二)パロとの會談を記するや詳細にして、時にはパロ、モーセとアロンとに人を遣はして、エホバに災厄を送る勿らんことを請はし

出埃及記

めたりと記せり(八の八、廿五、九の廿七、十の十六)パロの心頑固にされるを記すには「重くなれり」の意義を有する語を用ひたり。概して論ずるに、此部分の記事は祭司典より來れる者よりも繪畫的にして變化多く且對話に充てり。災厄の記事中以上二典より出でざる者は、エロム古典より來れる者也。

(二) 最後の災厄及び以色列人埃及を出でシナイに旅する事(十二の一―十九の二)。

十二、三章には過越節、及び除酵節の設立、埃及初生児の死及び以色列人がラメセスよりサユスに至る旅路、初生児の奉獻に關する律法及び以色列人が曠野の境に沿ひサユスよりエタムに至りし事を記す。此處には二種の記事最も明に見ゆ。即ち(十二の一―十三)過越節、十四―廿(除酵節)廿八、廿七、四十一―四十二、五十一(祝禮)四十三―五十四(過越節)廿九―卅六、卅七、卅八(祝禮)十一の四―八の續き(卅九、十三の三―十(除酵節)十一―十六(初生児)にして、前の説話は祭司典より取り、後の説話はエホバ、エロム古典より取りたる跡明也。

十四、五章には紅海を渡る事、モーセ勝利の歌、及び以色列人がメウ及びエタムに至る事を記す。

十六の一―十九の二には、以色列人がエタムよりシナイに至る旅路の事(十六章、曠野にて獨及びマナの天より降りしことの記事を含む)ヒタムにて不思議に水を得し事并にアマレク人と戦ひし事(十七章及び廿二章)エタムに達し其諷言を用ひし事(十八章)を記す。十八章は歴史上重要な記事の一にして、モーセ立法の次第を叙す。民の中に争あり、モーセに來りて之を裁判せんことを求む、モーセ之をさばく、其裁判を名けて「神の法度と作法」と云ふ。從

出埃及記

來政治及び宗教の事に關して争訟ある時之を定むるは祭司の職なりしが、モーセ斯く争訟を定めたるより希伯來律法の基礎確立せり。

(三) シナイに於ける以色列人(十九の三―四十の卅八)。

此部分に記されたるは(イ)十誡(廿の十一―十七)及び國民の社會的生活及び宗教的儀式を規定せる法律(廿の廿三―廿三の卅三)即ち「契約の書」(廿四の七)に基きシナイに於て神政體を建設したる事(十九の五―八、廿四の三―八)。(ロ)幕屋の構造及び之に關する器具の製作、アロン及び其子孫を祭司に聖別する事、及び必要なる技工をなさんためベザレル并にアホリアアを遣ふ事に關する指導をシナイ山に於てモーセに與へたる事、及び律法の二の板をモーセに與へたる事(廿四の十二―卅一の十八)。(ハ)以色列人が金牛を造りたる事、モーセ民のために執成の斯を爲せる事、及び契約を新にせる事(卅二―卅四)。(ニ)卅五―卅一章に記せる指導に従ひ、幕屋及び其附屬物を造り、出埃及第二年の初日に於て之を建てたる事(卅五―四十)是也。

此處に記せる十誡がエロム古典記者が當時既に存在せる材料より取りたるものなること疑なし。而して此處に記したる者は又申命記(五の六―廿一)にも記され共、兩者の間には著しき相違あり(十誡の條を見よ)。「契約の書」中に含まれたる律法(廿の廿三―卅三)は二箇の要素より成る。即ち「言」(Words Commands)及び「典例」(Tulminat)にして、後者は廿一の一―廿二の十七、廿五、廿六、廿三の四、五を占め、前者は廿三の六―十九に在り、廿三の廿一―卅三には約束を加へ、此律法書に「契約」の性質を賦與せり。律法夫れ自らの形狀は、

シの部

出埃及記

エホバ古典とエロヒム古典とを集めて一とせしめたる編纂者の手に成りたる者なるべしと雖も、既に存在したりし材料より取りたる者なること明也。『出埃及記』の要部(廿一の―廿二の十七)の形状は變更せられざりし如しと雖も、批評家は一般に或る部分の多小變更せられたる者なるを承認す。

此律法は社會の單純なる状態、殊に農業を營みし時代に生息せる人民の生活を律せんために立てられたる者にして、之を區分すれば即ち左の如し。(イ)偶像彫刻の禁及び祭壇建設の規定(廿の廿一―廿六)。(ロ)男女奴隷に關する規定(廿一の二十一)。(ハ)重罪(廿一の二十七)。(ニ)生命又は肢體に對して加へたる害(廿一の十八―廿二)。(ホ)怠慢に對して起りたる危險及び懲罰(廿二の七―十七)。(ヘ)宗敎上道徳上の種々な戒訓(廿二の十八―廿三)。(四、五)。(チ)誠實及び裁判の公平(廿三の二―三、六―九)安息年、安息日、年三回の参詣、及び犠牲(廿三の十一―十九)。(リ)終結の勳賞(廿三の廿一―廿三)以上の規定は一方より見れば文化の稍や進歩したる社會のために設けられたる者なるを示すと共に、他方に於ては其敎訓の頗る幼稚なる者あるを見らる。

主の祈

四十六)を記す。(イ)昔、祈一章は(イ)香を焚く壇(廿の十一)。(ロ)公拜を行ふ事(廿の十一―十六)。(ハ)調の洗盤(廿の十七―廿一)。(ニ)聖油(廿の廿二―廿三)。(ホ)香物(廿の廿四―廿八)。(ヘ)ベザレル及びアホリアアの任命(廿一の二十一)。(ト)安息日を守る事(廿一の二十二―二十七)に關す。廿一の十八―廿四の廿八には金の牛の物語を記す。廿五―四十章は廿五―卅一章の續きにして、モーセに與へられたる敎訓の實行を記す。

【参考書】 ドライデネルの『舊約文學精論』アアイスの『モーセ六經の文學』ワルムハレンの『モーセ六經の組織』シュルツ、エーレル、ヴィアの『舊約聖書神學』カリス、シエの『出埃及記註釋』ペーコーンの『出埃及記三章の傳説』
主の祈 Lord's Prayer. 衛 太六の九―十三、路十一の二―五に記さるる祈禱にして、之を『主の祈』と呼べるは耶蘇が自ら之を用ゐたりしがために非ず、彼が其弟子及び吾人のために祈禱の模範として之を教へたりしに依る。此二箇處に記されたる祈は其形狀稍や相異なり、且耶蘇が之を教へたりしと云へる場合亦同じならず。即ち馬太は山上の説敎中に耶蘇が自ら之を教へたる者の如く記し、路加はガリラヤ傳道の際に方り、弟子の一人の求に應じて之を教へたる者の如く記す。此祈にしてもし單に一回教へられたりしのみとせば、路加の記す處の場合を以て歴史的なまざる可らず。故に近代の最良なる批評家は、大抵馬太に記せる祈の地位を以て非歴史的とせり。耶蘇は必ずしも一回之を教へたりしのみと断定し難く、馬太の記せる場合と路加の記せる場合と二回之を教へたりしやし知るべからず。又假令耶蘇は路加の記せる場合に唯

主の祈

一回之を教へたりしのみとせざるも、路加の記せる祈の祈を以て原始の形狀を存せりと假定し難し。耶蘇はもとアラメイック語に於て語りたりしことなれば、馬太に記す處も、路加に記す處も、此意義に於ては共に原始の形狀也といふ可らず。思ふに兩記者は同一の希臘語材料を使用したりしなるべし。而して此祈の教へられたる場合を記するに於ては馬太は之を誤れりと雖も、祈の形狀を記するに於ては、彼は一層精確に之を傳へたり。今兩記者の傳へたる所を示せば左の如し。

天に在りて我々の父よ。願くは爾名を尊ばせ給へ。爾國を臨ませ給へ。爾旨の天に成る如く、我々に成させ給へ。我々の日用の糧を今日も與へ給へ。我々に眞債ある者を我々が免す如く、我々の眞債をも免し給へ。我々が試探に遇せず、惡より救ひ出し給へ。爾の權榮は宛りなく爾の者なれば也。アーメン。(馬太傳)
天に在りて我々の父よ。願くは爾名を尊ばせ給へ。爾國を臨ませ給へ。我々の日用の糧を今日も與へ給へ。我々に眞債ある者を我々が免す如く、我々の眞債をも免し給へ。我々が試探に遇せず、惡より救ひ出し給へ。爾の權榮は宛りなく爾の者なれば也。アーメン。(馬太傳)
天に在りて我々の父よ。願くは爾名を尊ばせ給へ。爾國を臨ませ給へ。我々の日用の糧を今日も與へ給へ。我々に眞債ある者を我々が免す如く、我々の眞債をも免し給へ。我々が試探に遇せず、惡より救ひ出し給へ。爾の權榮は宛りなく爾の者なれば也。アーメン。(馬太傳)

シの部

主の晩餐

『我僕に罪を犯す者』云々を改めたるは、異邦諸者をして領解し易からしめんがためなるべし。然れ共路加が『爾旨の天に成る如く、地にも成させ給へ』及び『惡より救ひ出し給へ』の二項を省略したるは何故なりや明ならず。

【参考書】 『福音の神學』(Koyakko shingon)と呼ばれたるは、新約に唯一回のみの(前十一の廿)然れ共此語はクリソストム及びアウガスチンを用ひ、英國教會の『新約書』及びプロテスタント諸派の宗敎書籍亦多く之を用ひ。保羅が『コリント』前十一の十六と云ひ、又『主の杯』(十の廿一)と云ひし、主の晩餐を指したる者なること疑なし。Eucharistia (ἑὐχαριστία) 『感謝』の義なる語を特殊の意義にて主の晩餐に適用したるは、蓋し新約以後のことなるべしと雖も、最も早期時代より一般に用ゐられたる如く、使徒の敎訓(Didache)及びイアナテウスの書翰に於て此意義にて使用せらるるを見らる。Holy Communion なる語も亦通常晩餐の意義に用ゐられ、インニウス早くより之を用ひたり。蓋し此語は保羅が『我僕が祝ふ所の祝杯は同じキリストの血を享くるに非ずや、我僕が祝ふ所のパンは同じキリストの體を享くるに非ずや、パンは唯一也、多くの我僕も亦一體也、蓋し一のパンを同じ享すれば也』(哥前十の十六、十七)と云へるに基ける也。Oratio (προσηύχθη) 『供物』の義なる語も比較的早期時代より主の晩餐に適用せられたれ共(クブリアマヌス及びエルサレムのクリソストムを用ひ)元來此語は聖机の上に具へられたる供物の義を表せるもの也。Eucharist なる語も亦早くより主の晩餐に適用せらる。元來 Eucharistia なる語は、羅馬帝國の軍隊が一體に結合するため取所の宣誓の義にして、主の晩餐は神と人との間に成立する聖なる契約也との意より之に適用せられたる者也。Eucharist (Missa) なる語は羅馬教會及びアンケイカン教會内の一派が、主の晩餐を指すために用ひ。此語の使用は頗る古く、アムブロシウスの書翰に發見せらる。トマス、アタイナスも亦此語を説明し、聖徒の感謝が天の使の奉仕に依りて神に上るの義也と云へり。然れ共プロテスタント教會は一般に此語を以て羅馬教會の教義を伴へりとし、之を排斥して用ひず。

主の晩餐

主の晩餐

【起源】 此禮典の設立が耶蘇最後の晩餐に基くこと、聖書及び傳説の均しく證明する所にして、其設立の次第は共觀福音書(太廿六の廿六―廿九、可十四の廿二―廿五、路廿二の十七―廿)及び哥前十一の廿三―廿五に記さる。此中最も早く記されたるは哥前にして、共觀福音書に記されたる者は蓋し後に成りたる者也。此四書の記事は多少相異れり。之を學びたりしこと、此は我が體也と云ひたりしこと、及び杯のこを記せること也。此禮典が遺傳的と關係を有することは疑なく、耶蘇は蓋し洗禮を以て對禮に代へし如く、晩餐を以て血の犧牲に代へたる也。

【教義】 教會歴史の中に在りて、晩餐の教義に關し争論の結果互に相違せし程甚むべき出来事は少し。初め數百年間教會は單に聖書の記事に基きて主の晩餐を守り、其秘義を享け來りしが、時の移るに従ひ、漸く之に解釋を加へ秘義を附するものを生ずるに至れり。争論の主眼となりたるは『此は我身なり』(太、可、路、哥前)『これ新約の我身なり』(太、可)及び『此杯は我血にして立つる所の新約なり』(哥前)とある『なり』原語は 'est' にして、英語の 'is' 即ち『あり』の義也の意義にして、之を如字的に解説し、所謂化體説(Transubstantiation)なる者を唱ふる者あり。化體説とは即ち主の晩餐のパンと葡萄酒とは葡萄酒に依り實に基督の血肉に變化すといふ説にして、第九世紀の頃バスキアス、ラドバリス之を唱へ、ラナンの宗敎會議(一一一五)に於て之を教會の定説となせり。宗敎改革の時代に在りては、此問題争論の點となりしもの恐らくは他に之れなかるべし。羅馬教會に在りては、化

主の日

リしが、其中には安息日を守るべしとのことを記す(徒十五の廿九)。されば當時既に少くも異邦人信徒の中に在りては、割禮と共に安息日を守ることを要せざりしなるべし。紀元五十八年頃書かれたる保羅の書翰(加四の九、十)には「日を守る」ことを以て「弱く賤しき小學にかへる」こととして之を責め、其後書かれたる書翰には明に安息日を以て「來らんとするもの影」也と云へり(西二の十六)。是れ猶太教の教師が基督信徒をして強て安息日を守らしめんとせるに對して言へる者にして、素より宗教上の目的の爲めに一日を聖別するに反對したるには非ず。亦以て當時基督教會に於ては猶太教の安息日の漸次廢止せられたるを知りしを知るべし。

シュマルカルドの戦争

を取ることを禁じ、後又此日に練兵をなすことを禁じたり。中世に至りては日曜日に於ける禁制益々嚴重となり、此日に於ては凡ての職業をなし、又一切の遊戯を爲すを禁ぜられたり。ルーテル、グラインギー、カルヴァン、クランメル及びノックス等の改革者等は日曜日の守りに關して寛大の方法を採用したりしが、第十六世紀の後半に至り、清教徒の英國に勢力を得るに至り、日曜日を以て「基督教安息日」と稱し、十誡の第四誡を之に適用し、頗る嚴重に之を守りたり。然るに過去二十年以來日曜日に對する思想及び行爲大に變化し、最も嚴重に之を守りたりし英、蘇、米諸國の如きも、今日に至りては日曜日に電車、電車、自轉車等自由に行來し、公開音樂會、美術展覽會、博物館等の公開するを見るに至れり。然れ共以上の諸國に於ては國法を以て日曜日に平常の職業を爲すを禁じ、犯す者は罰せらる。而して國民の多數は教會に出席し禮拜を守るを常として、教會の集會は大抵朝夕二回にして、朝は主として信徒の禮拜のためにし、讀美、新講、説教、集會等より成り、プロテスタント教會は一般に説教に重きを置けり。夜は主として傳道のためにし。此外午後には日曜學校を開き小兒及び青年男女に宗教上の教育を與ふ。書翰を讀めて音問を通じ、又は親戚、朋友、殊に病者を訪ふて慰撫を與ふが如きことは、此日に於て爲すべきこととして許せらる。(安息日の條參照)。

シュマルカルドの戦争

れば之を容赦す可らずとの念益々固くなれり。彼が一五三〇年のワグスマルカの國會、及び一五四一年のフラスゴンの會議に於て試みたる新舊二派の調和の失敗せしより、平和の手段は最早無益也と思惟せし際、ヘッセル重婚事件(シュマルカルドの同盟)の條を見よ)のため新教徒の間に分裂を生ぜし事あり。續てケールンの大監督及びライオン伯の改宗に依り舊教徒と戦端を開き武力を以て之を壓抑せんは早く新教徒と戦端を開き武力を以て之を壓抑せんは準備ありたり。斯る中に一五四五年十二月トレントの宗教會議開かれたりしが、新教徒は或る議定を以て開かれたる此會議の決議に束縛せられん事を恐れて出席を拒みたりしかば、カルルは新教徒が年來要求せし大會議に出席せざる剛愎を鳴らし、之を以て開戦の口實となさんとしたり。而して彼は先づ新教徒の中に同盟者を作らんとせしめ、サキソニアのモウリッを説きて同盟に加はらしめ、フランケンアルク選擧侯を初め數名の諸侯をして中立を守らんことを約束せしめ、舊教徒の中に帝に快からざる者をも説きて善意的中立を承認せしめ、土耳其と休戦を約し、法王バロワ三世に援兵を出すことを約束せしめ、斯くして準備全く整ひたるも、滿を引きて未だ容易に放たず。ルーテル死して間もなく、新教徒侯の毫も敵の計略を知らず、全く戰備なきに於て開戦せり。然らば則ち勝敗の數知るべきのみ。一五四七年四月廿四日のミウセルヒヒの戦にフリードリッ選擧侯敗れて敵に虜にせられ、一戦の夫人シビラ尙兵を督してワイテンベルクを守りし、遂に敵手に落ちたり。モウリッ即ち選擧侯に任ぜられ、且領土を加へらる。五月廿日フリードリッ伯も最早降参なき者となし、ハルルを守りしアルバ將軍の

シュマルカルドの同盟

陣に降れり。斯くてシュマルカルド同盟の主力は全く破壊せられ、カルルは獨逸の宗教問題を意の儘に解決し得る地位に立つに至れり。

シュマルカルドの同盟

し、フラスゴンの兩派の代表者を會合せしめたりしが事ならず。此失敗を政治上に於て取りかへさんとし、宗教上の信仰よりも寧ろ政治上の利害を重んずけるフランケンアルク侯及びヘッセル伯を誘ふて、餘るに自己の味方せしめしが、此際更に帝が利用し得べき強固の事件出來たり。それは所謂ヘッセル重婚事件なる者にして、ヘッセル伯フリードリッはサキソニア侯の女を娶り既に七人の子を有せしが、彼は元來多情なる者なりしかば更に他の妻を娶らん欲し、ルーテル、メランタリオン及びプーケルは一方を斷り重婚の可否を問ひたり。此等の改革者は一書を贈り重婚の斷の制度を以て基督の旨に通へる者也と唱へ、年々、他方に於て秘密に行ふべしとの條件を以てフリードリッに重婚を許可したりしかば、フリードリッは身分賤しき一婦人マルガレタと重婚せり。此事件の暴露するや羅馬教徒は此機に乗じて大に新教徒の勢力を挫つんとし、カルル帝はフリードリッを招き之を提攜し、サキソニア侯フランケンアルク侯及びフリードリッを扶け、斯くて十年來獨逸に雄視したりし鞏固なるシュマルカルドの同盟は内部の分裂によりて潰滅し初め、爾後種々なる葛藤起り、プロテスタントの發達に一頓挫を與へたり。『シュマルカルドの戦争』の條參照。

シュマルカルドの同盟

に於ける。然れども極端な宗教の方面に於て大なる感化あり。同じ學校のフェルゲル、クリスチアア及びドルネルを出して終に勝を占めたり。其の新約神學は好著にして長く其の地位を有すべし。

シュミエーテル Paul Wilhelm 人名 一八

Schmiedel, Paul Wilhelm 人名 一八

近傍に生る。一八七八年エナ大学の講師となり、九〇年迄勤続、同年よりフワリヒ大学の教授となる。

ホルツマン其他の人々と共に『蘭島註釋書』を編輯し、九四年グライナルの『文典』改正を出し、又『Encyclopaedia Biblica』に寄稿せり。

シュムツケル Samuel Simon, D. D. 人名 一七九

一七九一—一八七三 米國のルーテル派神學者。一八一七年ケンシルバニア大學を卒業し、ブリンストン神學校を出で、二〇年ルーテル教會教職に入られ、二六年迄バーウニア州ニウマーケットにて教師たり。二六年の大會議組織及びフラスゴナルク神學校組織に重なる活動者なり。同校の最初の教授に選ばれ首席たり。六四年辞任す。博士號は一八三〇年ニウセルシー州ラットンチャーヌ學院でハンシルバニア大學より同時に贈られたるものなり。四六年にはタルツ及びモリス兩博士と獨逸を訪ひ、若し能ふべくば獨逸の教會と米國のルーテル派との交通を開かんとし、又神學校圖書館のために圖書を得んとしたり。彼の神學はルーテル派獨特の信條に拘泥せず、プロテスタント共通の教義主義を重んじしるを特色とす。彼はフラスゴナルク告白をば容れし、コンコルド形式をば厭ひぬ。プロテスタント諸派の

シュマルカルドの同盟

シュマルカルドの同盟 The Schmalkaldic League. 事蹟 一五三〇年五月開かれたるフラスゴナルクの國會に於て羅馬教會の爲したる決議は、プロテスタント教徒の立場を危からしめたりしかば、彼等は自衛の策として同年十二月と翌年の二月新教徒及び諸市をシュマルカルドに會合し、防禦同盟を結びたり。是れ所謂シュマルカルドの同盟なる者にして、サキソニア選擧侯ヘッセル伯外二三の諸侯と十一市之に調印せしが、フランケンアルク侯ガナルク伯ニコルンベルグ市とに調印して之に加はらざりき。然れ共此同盟は後漸次其同盟者を増加して勢力愈々強大となり、プロテスタント教徒は一宗派たるに止まらずして一大政黨となり、單に獨逸國內に於て自家の主張を貫かんせしのみならず、英國、丁味、ゲニス、佛國等をも提携せんとするの勢を示したり。獨逸皇帝カルル五世は此間に立ちて獨逸羅馬教の勢力を恢復せんを劃策せりなりしが、エルテンベルグ侯アルトリヒ一五三四年を以て新教に改宗し、後久しくユルテンベルグ及びスツピア兩派の争點となりたりしフランフルト、ハンブルグの諸市、及びゴメラニア、パノーヴェルも亦相續して此同盟に加入し、一五三九年に至りて、フランケンアルク選擧侯ヨハム二世及びサキソニアのハインリッヒ侯新教に改宗し、久しく羅馬教の重鎮たりしブレスラウ、ラチスゴンの兩市も亦新教に加はり、ラインの諸侯伯も亦新教に傾きたりしかば、新教の勢力は其頂點に達し、シュマルカルドの同盟大に振ひたり。於是カルル帝は新舊兩派の調停を謀らんこ

シュマルカルドの同盟

シュムツク Christian Friedrich 人名 一七九四—一八五二 獨逸の聖書學者。フリンゲンに神學を修め、一八一八年同大學の私教教授となり、二年特別教授となり、二六年正教授となり、神學博士とせらる。聖書解釋及び實際的神學を教ふ。最も著述なる者にして、公著少し。『新約聖書神學』(英譯あり)、『基督教道徳』は死後の出版

シンの部

シュモルケ

シュライエルマツヘル

シュライエルマツヘル

互に相重んじ協同活動せんことを彼の強き願なりき。福音同盟會の組織に道を開きたる一人にして、一八四六年の倫敦に於ける同會第一回會合に出席したり。彼は多年間ルーテル派の首領の一人にして、又他派の人にも最も多く知られたり。其の傳道者たるべき青年を教育したる者四百人以上にして、其の寓己の勞苦と基督的熱心とは大に人の崇む所なりき。去れど弟子中には師の神學說を棄てて更に嚴密なるルーテル派の說に走りし者もありき。彼の教職に入りし時は、ルーテル派は殆ど獨逸人のみにして稍偏したる狀なりしを、彼は之を英國化することを努め、終に後代の進歩の基を開けり。著書中『ストル及びフラット』聖書神學の英譯(二冊)『平民神學の要素』基督教合同に就き米國諸教會へ贈る友情的論文(心理學)重なる割割に就て米國ルーテル教會の歴史の教義的實際的表明(『福音的聖書の原理』ルーテル派的要義)ルーテル派記號(福音的聖書の原理)教會大會議に發せざる前即主の教會(『基督の教會の第一教』)等が主要なり。

シュモルケ ヨハンヤン Schmolke (or Schmolke), Benjamin 人名 一六七二—一七三七 獨逸の讚美詩作者。ライプツヒヒ大學に入り、四年後其の父の副教師となり、一七〇二年シュライドニツの教師となり、一四年最高教師となる。其の教職は大にして且つイエズイット徒の反抗あり、地位困難なりしが、彼の天性の誠實にして優美なるよく會員の心を惹き、又イエズイット徒をも服従するを得たり。三五年急性癩癩性の病にかゝりて厭厭し活潑界より退き、終生小さき讚美歌集を引き續き出版し、大に全國邊に行はれたり。歌は敬虔と熱情とにて溢れ、簡なれど感服ある體にて書かれ、平夷なる間に基督に對する熱き愛情溢るる『我主耶穌愛の御手に』(Mein Jesus, wie du willst)は我國の讚美歌にも入れり。フニオン、ホルスワイク女史の英譯より取りしものと見ゆ。

シュライエルマツヘル フリードリヒ Daniel Ernst Schläiermacher, Friedrich 人名 一七六八—一八三四 獨逸の哲學者、神學者。ドレスダウに生る。父はシュレンクエン職階附教師にして、レフホルムD教會に屬し、母は情剛敬虔の婦人にして、夫の不在時なる中に甚だ善く其子の幼年教育を施せり。十歳より十四歳まで携へられて田舎に移り、兩親及び一教師より注意深き教育を受く。其頃より彼は既に一種の懷疑に發はれ、凡ての古文書は疑ふべしとしたり。彼は之を肉に在る特殊の制と稱せり。一七八三年兄弟及び姉妹と共に上ルサチアのニエスキニ在る有名のモラヴィア派學校に送られ、二年後パービのモラヴィア學院に入る。小兒の如き敬虔、善く相合せる教育と遊戯、及び田舎風の静寂は深く彼の心に印象し、彼は長く此の時を追憶し、其の姉妹フヤトロッテ及び同級の親友アヴィアンスのフォン、アルベルナニ(後の同級教會の監督又有名なる讚美歌作者)を通じて社交を續けたり。彼の信仰が基督に對する熱情に富み、其の教義の組織が基督論的に傾きたるは、實にモラヴィア派の型を受けたるものといふべし。一八〇三年の『基督論』といふ書には、基督を凡ての信仰の中心とせり。去れど其の天性の懷疑は常に身を逼り、一時其の教師及び父とさへも不和となりし事あり。父子の間の書翰は兩方とも美はしきものにて、子は孝心より出づる敬と愛とを表現して、而も權威に盲従すべからず、一個の判斷

る間に基督に對する熱き愛情溢るる『我主耶穌愛の御手に』(Mein Jesus, wie du willst)は我國の讚美歌にも入れり。フニオン、ホルスワイク女史の英譯より取りしものと見ゆ。

及び研究の權利あるを主張し、父は其子の獨立を心開きを同情尊敬したり。終には全く相和して父の同意を得てパービーを去り、一八〇七年ハルレ大學に入る。研究は断片的にして獨逸神學の祖たるヘムメルや、希臘學者たるワッセルの講演を聴き、近代語及び數學を修め、スヘンザ、カント、フイヒテ、ヤコビ等の書を讀み、其の鋭敏なる心は是等を感じせしむ、而も何れにも服する能はざりき。時しも唯理的の時代にして、獨逸神學は根本的に革命をなし居たり。居る事二年にして意見定まらざるも尙何物を得べき望をば有するを得て大學を去り、九〇年説教者たる准九を得、ドーナ伯爵家の教師となり、三年を過し、九四年按手禮を受け、其の叔父なる一教師のマルタ河時ランツベルヒにて老練牧會に堪へたり。一病院附教師となり、六年間勤職し、其間文學的活動に従ひ、一時兩シュレーゲル、テイク及びノフアリス等の代表せしロマンチク詩派に加はりたり。九年始めて『宗教論』を出す。是れ實に神學者の時代の交代を兆し、又冷なる哲學的の時代が積極的の信仰の時代に一變せんとするを示したるものなりき。彼は此書にて當時の教育ある人々の思ひ如く宗教は知識と獨立せざる者に非ず、却て人間に普遍的のものにて、知識にも實行にも非ず、無限に對する關係に就ての神聖なる感情にして、凡ての能力を高くし清くする者也と論じたり。其の敬虔はスピノザの汎神論に染められ居たり。一八〇〇年『モノローゲン』出づ。〇二年文學的關係を絶ち、ゲマニアのストルムに行きて二年間宮廷説教者となる。僅れて伯林にてフリードリヒ、シュレーゲルと謀りてブラウトマンの翻譯を此にて始む。此書は一八〇四年より二六

シンの部

シュライエルマツヘル

シュライエルマツヘル

シュライエルマツヘル

年迄に亘りて繼續大成せられ、彼をして希臘學者の名を得せしめたり。従來の倫理學の凡ての組織の批評も〇三年に著はしたるものにて、倫理學に一新生面を開けり。〇四年ハルレの哲學神學特別教授に選ばれ、〇六年中一時の停職に遭ひし後、暫く、モーゲン島にて過し、次で伯林に歸りて三一教會の教師となり、〇九年親友ワイレルヒの意婚と婚し、父と女とほどの年齢の差ありしも、終まで幸福に生活せり。一八一〇年設立せられ伯林大學の組織には彼れ與りて力あり。最初の神學教授兼三一教會牧師とせられ、死に至るまで兩職に在り、日を逐ひて人望を得せり。半世紀の間彼と其の初弟子、後の同僚ネアンデルとは神學界の大勢力たり、伯林文學界の中心なりき。彼は又公共の事にも趣味を有し、普蘭士の地位の劣等なる時に講壇より國民的感情を刺激し、ナポレオンの壓迫より脱出すべき戰爭を奨励し、一八一五年の維納會議の後には自由政治主義に賛し、危くも友人デ、ウエッテ及びモリソン、アルントと共に追放せられんとしたり。フリードリ



ヒ、ワイレルヘルム三世とは曾て相合はざりしも、死する前には王より赤色勳章を受けたり。されどルーテル教會とレフホルム教會とを合同せんとする熱心にては王と一致し、此事は一八一七年宗教改革第

年の伯林新讚美歌編纂者たり。同書は試験ありしに拘はらず善く讚美歌を一新せり。彼は又斯かる多忙の中にも社交を怠らざりき。三四年二月の初寒氣に冒され脚を傷め數日にして歿す。臨終には家族を集め、靜に塵埃を守り、自ら麵包と葡萄酒を分ち、基督の救主なる事を、其の死の力あることに於ける信仰を告白したり。全獨逸は此人の死に由て大く感動したり。基督教の哲學者ステッフェン、同僚ストラウス及びヘーゲル派哲學者にして學說上の敵手たるマルハイネーの葬式演説は一般の感情を代表して尊敬と哀悼を表はせり。彼は一子に先だたれ自ら感懐無限なる葬式演説をなしたる事ありしが、之にも基督の復活と生命とに由て望を繋げることを願はせり。彼は體弱小きく、少しく體質なりしが、頗る氣品高く熱誠あり、區別明かにして冷嘲と親切とを表はし、眼は鋭くして火あり、舉動は敏速にして活潑なりき。老いては、頭髮白く古聖の俤ありしも、心は少壯の氣を失はざりき。彼は自己を創するに

三世紀會にて行はれたり。シュライエルマツヘルは基督こそ教會の源泉、凡ては彼より出で、凡ては彼に歸ると云ひて、深く諸教會の合同を志さし、教會政治の上には長老制を入れたり。彼は又一八二九

長じ、其の哲學神學が正統派より唯理派より攻撃せられし中に、常に冷靜にして個人的論争に入らず、已れと著しく説の異なる人よりも尊敬せられたりき。

シの部

シュライエルマツヘル

シュライエルマツヘル

シュライエルマツヘル

性格と著書 シュライエルマツヘルは多方面の人に於いて、知力的道徳的事には種々の方面に活動し、公衆教師たり、著者たり、説教者たり、古典語學者たり、哲學者たり、神學者たり、學校教師としては稀なる引力を有し、學生は彼に引き寄せられ、又自己等の心を引き出されたり。彼は通例一日二時間講義し、初めの時間には舊約及び黙示録を除ける神學の諸分科を、後の時間には哲學の諸分科を講じたり。草稿は短く、講義内にて與の來るに委せて講じたりしかば、遺稿は皆な断片的の筆記に基礎を置きたるものなり。説教者としては毎日曜日學生、教授、官吏、上流社會の人を引寄せ、ワイルヘルム、フォン、フンボルトは彼の著者より説教の力方ありと云へり。彼は自ら聖書の句と題詞と思想の見出しの外は説教を筆記せざりし、人の筆記するを許し、自ら訂正して之を出版せり。神學者としては古今の最大人物の一人たり。其の感化は凡ての學派の人々の文書中に現はる。神秘主義と批評と宗教感情と懷疑的精神とは不思議にも又無比の權にて彼に於て結合したり。彼は頭にては疑ひつゝ心にては信する人なりき。哲學者としては汎神論者なりしが、所ある基督信者としては有神論者なりき。歴史家として破産せし所をば、神學者としては建設し、而も如何にして此等を調和すべきかを多少知り居たり。プラトーン、スピノザ、カルヴァン、フイヒテ、シェリンガ、ヤコビを學びて之を消化し、自己のものとして創案したり。彼をば唯理派に超自然論者に對して神祕者にも入るゝ能はず、其等の凡てより幾分を取れり。三位一體論、基督論、インスピレーション論、教會法典論に就ては正統派を否定し、カルヴァン派選拔派より出發して、人類の終局回復を教へた

り。批評には大膽にして、史的な文書を思ふまゝに剪裁し、福音史中の奇跡分子をば信仰實質に非ざるものとして殆ど皆犠牲とし去りしが、而も基督をば唯く史的な事實となし、無罪完全なる唯一の人、神性の十分に住みたる人、之より彼の力出で、代々國々に及ぶと主張せり。是れシュライエルマツヘル神學の中心、功績の在る所に於て其の勢力を得し所以なりしなり。其の弟子ネアンデル、トウエステン、ニツチエ、リョック、プレーゲ、ワルマン、ユリウス、ミュレル等は師より出で、益々福音的信仰の方に進めり。

シュライエルマツヘルの著書は倫理、論理、心理、政治、審美、教育、教義、基督論、解釋學、聖書批評、耶穌傳、教會史に亘り、又哲學、聖書解釋、批評論文、説教等、哲學神學のあらゆる方面にわたれり。去れど自ら出版したるもの最も善く、殊に一八一一年神學研究の論文を一體書として出したるもの、及び二二年出た『基督教義』を最とす。此はカルヴァンの『インスピレーション』に次で神學上の大作なり。實際經驗と神に於ける絕對的依歸の意識とを基礎として福音主義信仰の體系を新築せるものにて、凡ての哲學系統より獨立なれど、而も極めて哲學的に組み立てられ立論せらる。

其の神學 『宗教論』は時代に對する有力の議論にして、又最も時勢に適したり。當時獨逸には萬事興隆の氣運勃々たりしに、獨り宗教のみは思慮ある社會より矛盾のものとして棄てられんとしつゝありき『宗教論』は即ち其の矛盾を非ず、唯だ哲學のみが教育として導ぶものは教育に非ず、唯だ哲學のみ、宗教として教しむるものは宗教に非ず、其の影のみ、人民は宗教を以て唯だ國家及び個人の道具のやうに

思へど、宗教はざる物ならず、宗教は人が自己の運命を含み居れりを見する此の宇宙の感情なり、人が自己を包みて不滅とせざるを見する至上力の感情なり、人が神の存在を其中に見する至上力の現在の感情なり、宗教は人性の一部なり、何人も宗教を有し、其の眞理を認めざるを得ずと論じ、人々をして宗教に冷淡なる能はざらしめたり。『モノローグ』には前者を補ひたる如きものなり。批評神學的論文、殊に有名なる一八一一年の『神學研究小解説』はシュライエルマツヘル學說の變遷の過渡を成せり。聖書解釋者としては彼は善長なる言語學者、又秀でたる翻譯者なること明なり。舊約には殆ど同情なく、新約との關係をば理解せざりしが如し。一八〇七年の『提摩太前書解釋』は研究徹底し、教會書翰相互の關係の甚だ密なることを明にし、二二年の『路加傳批評的研究』は一層善く路加傳が既在の材料より取りて編みしことを示さんとし、之に由て福音書の起原及び成立の問題に學者の趣味を集めたり。『ヒエラス文書』に關する彼の學說も大に用ひられたり。『神學研究小解説』は其の神學上の立場を明にし、彼は基督の根本事實は哲學的議論にて獲得したるものに非ず、基督の意識に於ける事實たるが故に之を承認せざらば、此の諸事實と其の相互の關係を明にせんことせり。之に次で二二年『福音的教會の主義に據れる基督信仰』二書出でたり。此書初より世の耳目を聳動せしが、次第に哲學的宗教的熱心の表徴として其の勢力を増し、終にカルヴァンの『インスピレーション』に次ぐものとなり。此書にては宗教は絕對に神に依歸する感情なりと定義を下され、諸教義は此の感情を試石として檢せられざるべからずとせられたり。『惡魔』は使徒傳説に善惡の

シの部

シュラッテル

シュラッテル

シュラ○主理説○シュル

問題を決する助とならぬのみか、却て之を煩雜にするの故を以て否定せられ、奇蹟は少くも自然法を破り、而して基督教教義に必ずしも之を要せずとの故を以て又否定せらる。而も科學と宗教とをば相争はざらしむると共に、又全く相別れて混同せざらしめたり。神學系統の中心には基督と基督が教のためになしたる事を置き、エビオン派とドクイーン派との間の基督論、ヘラクリス派とマニカイ派との間の人論を立て、教の力は教會を教へに非ず、基督と信者との間の一致が救なりと論ぜり。彼の神學は一體に混一主義と敬虔主義とを結合せり。即ちカトリックとプロテスタントとが代表して一致の極なりし兩傾向をシュライエルマツヘルに於て結合したるなり。倫理上の説は種々の小論文にて之を補へり。(彼の全書三十卷は一八三四一六四年に、書翰四卷は一八六〇一三年に出版せらる。タイトル『シュライエルマツヘル傳』を見よ)。

シュラッテル

人名 一七一六—九〇 獨逸の宣教師、米蘭に於ける獨逸レフォルム教會大會の創立者。獨逸聖ガールの名家に生れ、其地の大學預備校及びヘルムステットにて學び、和蘭にて教職となり、一七四五年放國のワイゴリアンゲンの副牧師となり、四六年和蘭の北部西部の大會より米蘭へシテ、バニヤにある獨逸諸教會を訪ひ、牧師職を起し、又出來べく大會を組織するの使命を托せられ、同年八月一日米蘭に着し、其の年の内にヒラテルヒアの牧師とせられ、之に應じつゝ非常の精力を勵まして其の特別の使命を果すを勉め、四七年より五一年迄大洋上の路を除き八千哩以上を旅行し、六百三十五回説教せり。彼自身の計算によれば、當時ヘンツェルバ

ニヤには獨逸レフォルム教會の信徒三萬人あり、五十三の小教會を有せしが、定まれる牧師としては四人のみなりしと云ふ。シュラッテルは教會を有牧師教會に組織し、四七年九月二十九日自ら牧師及び長老をセラテラヒアに召集して、此に始めて獨逸レフォルム教會の大會を作らぬ。五年歐洲に行き米蘭の微弱なる獨逸レフォルム教會のために助けを請ひしに大に成功し、殊に和蘭にては基本金集まれり。五二年六人の青年傳道者を伴ひて米蘭に歸り、七百部の大聖書を齎られ、歸りて之を教會及び家族に頒布せり。歐洲洲在中和蘭語にて其の宣教事業の報告書を發し、且つ之に由て在米獨逸人のために訴ふる所ありしに、之は獨逸語にも譯せられ、更にアマステルダム在住の英國牧師デビッド、トムソンに由て英語にも譯せられ、英國に於ける在米獨逸人學校設立運動の大なる奨励力となれり。資金の委員の手に集まるもの二萬磅なりしが、其の横文同情を求むるに急にして、在米獨逸人窮苦の状態を除くに極度に形容したるため精神高き獨逸人の感情を害し、五年シュラッテルは教會を辭して其の對策せる『慈善學校』の長となれり。然れども此は過らざる。何となれば此頃既に此の運動は政治的の臭味を加へ、クニーカー派と獨逸教會派とは其までには密に結び居りしを、之を離間して獨逸派を政府黨の助となさんとする計行はれ居りたればなり。有名なる獨逸人印刷業者クリストファー、ザウエルは其の大なる助力を用ひて慈善學校に反對し、是れ國立教會を造るものなりと論ぜり。ルーテル派及びレフォルム派の牧師等は一時シュラッテルの事業を助けし、一較の感情は終に抗し難く事業は全然失敗に歸せり。五七年シュラッテルは王室米蘭附牧師としてノ

グアノチア領に從軍し、ハイヌアガ古銅の時に参加したりしが、後セラテラヒアに近きチエヌトナットセルに退隱せり。革命戰爭の時には熱心に愛國派に屬し、英國軍隊從軍牧師たるを肯んぜずして一時投獄せられしことありき。

シュラッテル 人名 エルバルト Schuler, Erhard 一八三六 獨逸の東邦語學者。アルンズウィックに生る。一八六三年ゾウリヒ大學、七〇年ギエン大學、七三年エナ大學の神學教授に選ばれ、七五年柏林大學東邦語學教授となる。彼の専門はアッシリヤ學にして、其重なる著書は『聖書歴史の批評的註釋的研究』(一八六二)、『アッシリヤ、巴比倫の標形文字の註釋』(一八七二)、英譯あり(イヌセルの地獄行)、『一八七四標形文字の註釋』(一八七八)、『古代巴比倫文化起源の研究』(一八八四)等也。

主理説 Rationalism. 教義 合理説、唯理説、純理説又は獨理説とも譯す。『獨理説』の條を見よ。

シュルテンス

人名 アルベルト Schultens, Albert 一六八六—一七五〇 獨逸の近世希伯來文法學者。ケレンゲンに生れ少時より神學者たるべき教育を受け、聖書の原語希伯來語希臘語を研究し、後カルデア語、西利亞語、ラビ用語をも研究す。十八歳の時アッセイラスと討論し、希伯來語を知るに亞利比亞語の必ず缺くべからざるものなるを主張す。研究を果たせし後ライデン及びワットロトに遊び、レランドと相知り、一七〇九年神學博士に擧げられ、一一年ワッセルにて牧師となりしが、間もなくフランクフルト大學の東方語教授となり、二九年ライデン神學校教授となりて死する時に

シヨワの頌歌

及ぶ。彼が言語學に於ける功績は偉大なり。彼は希伯來語の神の與へたる最初の言語に非ず、唯だセミチマツ語の一分派にして之を知るには亞利比亞語の知識無くべからずと論じ、希伯來語文法及び東方研究に一新生面を開きたり。『希伯來語起源』今日の希伯來語の缺點を希伯來本語の組織を希伯來語正道『約百記新譯』『ソロモン箴言』以上何れも拉丁語等の著あり。又原稿のまゝ現れるものも存す。

シュレック ヨハン マッティアス

Schreck, Johann Matthias 人名 一七三三—一八〇八 境太利の教會歴史學者。維納に生る。父母はプロテスタント教徒なり。一七五一年グラツゲン大學に入り、モスハイム及びミカエリスの感化を受く。多年叔父にしてライプツヒ教授たるカール・フントアス、ベルと共に文學的事業に従ひ、且つ講師として講義せしが、六一年教授とせられ、後ライプツヒベルに聘せられて詩學教授となり、七五年同大學史學教授に轉ず。一日三時間受持學科を教へ、之に加へて著作をなし、勤勉極まり、最後に圖書館にて圖書を取らんとして梯子より落ちて死せり。『基督教會全史』四十五冊は彼の大作にして、其の無限の勤勞の紀念なり。チルネル之を補ふ。記述十八世紀間に入り、全體の教會史としては未だ比を見ざる良書なり。教會小歴史も著しし生存中五版を重ね。『植物の條(四)』の項を見よ。

棕櫚日曜日 又は 聖枝の主日 Palm Sunday 行事

基督教復活祭の前の日曜日にして、大通又は聖週(耶穌苦難の週をいふ)の第一日に當る。之を棕櫚の日曜日と稱するは、耶穌が此日羅馬に歸りエルサレムに入りしに、群衆歡呼して棕櫚の

シヨワの頌歌

枝を擡げ、其道路に衣服を布きたりしに依る。聖週には罪人を赦し、又は法廷を開演するの習慣ありしより、聖エロームは又之を「赦罪日曜日」(Indulgence Sunday)と呼べり。

シュワルツ クリスチアン フリードリッ

Schwarz, Christian Friedrich 人名 一七二六—一八九八 印度宣教師。普蘭士ンケンブルに生れ、ハルレにて神學を修め、自らラティン語を研究して之に通じ、一七五〇年ヨハン・ハーゲンに丁誼宣教師より宣教師としてトランタパーに遊られ、六七年倫敦の基督教知識増進會に入り、七九年印度タンゴールに轉任し、印度人間に多くの團體を起し、ハイデル、アムン戦争の間には大なる感化を有し、歐洲人の信用を土人間に高くし任地にて死す。

Doxology 衛 語

神の榮光(Doxologia, gloria, adoration)を頌する歌に附したる名にして、元來新約書翰中に記せる使徒の祈禱の結末の語(羅馬十六の廿七、猶廿五、弗三の廿)殊に馬太傳に記せる『主の祈』の結末の語に適用せられたる者也。聖書の十四に記せる天使の歌(Celestia, Excelsa)は聖書以外の語を附せられ、他の頌歌の基礎となれり。此歌は式文上『大頌歌』と稱せらる。『小頌歌』(Cantus, Ant.)は聖書に基礎なし。頌歌は音樂と共に、又は音樂なしに、普く公衆に用ゐらる。

シウベンハウエル アルツクル

Siebenhauer, Arthur 人名 一七八一—一八六〇 獨逸の哲學者。デンツァッヒの一家に生る。初め父の職を嗣業に従事せしが、父の死後初めて學問に従事する機会を得、廿二歳にしてゲッティンゲン大學に入り、プラトーン及びカントを研究し大に

シヨウ

其思想に敬服せり。廿三歳の時柏林大學に轉じ、フイロ及びシウライエルクマールの講義に侍し、初めは之を傾聴せしが、後次第に之に懐疑たらざるに至り、柏林の學海又師とするに足る者なしと壯語して、退きて自ら哲學の研究に従事せり。一八一三年ライプツヒに退隱し、其處女作『十全理性の原理の四根源』を公にす。彼は又ゲーテの勸告に従ひ其注意を色彩の研究に向け、一八一六年『視覚及び色彩』を著し、當時又古代印度哲學の研究に指を染め、邊門教及び『ウパニシャッド』の哲學を學び、深く自己の懐抱せし思想と契合する者あるを喜び、熱心に之を研究し、遂に其哲學を構成して、一八一八年其大著『意志及び觀念としての世界』(Welt als Willen und Vorstellung)を出せり。然れ共此書は世人の注意を惹くに至らず。一八二〇年柏林大學の講師となり、ヘーゲルの勢力を壓倒せんと試みたれ共其功を奏すること能はず、快々として失意の生活を送りし後、一八三一年遂にフランクフルトに遷居し、愛に孤獨平和の生涯を送れり。此間公にしたる著作に『自然に於ける意志』(一八三六)『倫理學上二箇の根本的問題』(一八四一)及び論文集(一八五一)あり。彼の價値の漸く世人に認めらるるに至りしは一八四五年頃よりのことにして、爾後彼の名聲漸く高まり、一八五八年其古稀の壽辰には地方より來れる賀狀机上に堆積するに至れり。シウベンハウエルの哲學はカントに其起點を有すれ共、其達したる結論はヘーゲル哲學のそれとは大に異れり。彼れ哲人の知識を論じ以て爲らく、哲人の知識は時間空間及び因果といふ三の形式に由りて活動する者にして、此等の形式はカントの云へる如く哲人の心に具はれる見解なるが故に主観的なる者

シヨウ

也。故に此三形式の中に入り來る世界は吾人の觀念に外ならず。而して吾人の主観(我)は觀念する者として、客觀に對する者即ち能觀者也。然れ共吾人には尙他に我を知るべき道あり、直接に我を知る内觀的知識即ち是也。此知識に從へば、吾人は我の意志(Wille)なることを知る。而して我の意志といふことより推して、天に運行する日月星辰より地上の風水土石草木禽獸に至る迄一切の萬物悉く意志の發現に外ならざるを知るべく、換言すれば世界は即ち意志也。而して意志は盲目的にして、唯無究に求むることを知りて飽くことを知らず。其發現の求むる人間に於て殊に然りとなす。然れ共意志は求むれば未むる程不満足を増し、不満足を増せば増す程又未むることを増す。是れ煩悩に動かざる者の状態にして、煩悩は凡ての存在、及び存在に伴ふ一切の苦痛の根源也。殊に人間に於ては意志の神佛として知事存在するがために一層多くの不満足を誘起し、從て又多くの苦痛を感じ、此世界を苦難の世界と見る也。是れシウベンハウエルの所説にして、其哲學の聖世哲學と名けらるる所以實に此處に在り。知事は斯くの如く吾人をして一層不満足を覺え苦痛を感じしむる者なれ共、其苦痛の甚しきに至りては、又吾人をして厭離の心を生ぜしめ、解脱の道を求めしむるもの也。解脱の道は煩悩を去り忘れり境に入り、更に進みて一切利己の念を棄て、只管他の苦痛を憐れみ、慈悲の眼を以て一切衆生を視る。之に於て之に迷すべく、更に進みては此世の歡樂の假樂に過ぎざることを悟り、全く名利の念を去り、意志を根絶し、枯木死灰の如くなるに至りて最も高尚なる解脱に入ることを得。是れ即ち意志が自ら滅したる状態にして之を稱して涅槃に入るといふ也。亦

聖書の Epistola (epistolary)

聖書の Epistola (epistolary) 衛 語 聖書に書翰と稱するは、廣く目的を有し、公會に於ける演說又は説教の如く、種々なる、多くの人々に語らんとする言信の謂にして、通常言信(Verbal)と稱する個人間の消息とは稍ち異れり。言信は最も初代の書翰に適用し得べき名なれ共、初代に於ては言信を著くことも少數の人に限られ、私信よりも公書多し。舊約に依れば以色列人民が王國を建設せし以前に在りては、唯口頭的言信を有せるのみにして、初めて文字に著きたる言信の例は、ダビデがウリヤに關しヨアアに贈りたる書に於て之を見るべし(母後十一の十四、十五)。エレミヤは巴比倫に在る俘囚の民に書を贈り(耶廿九の一)僞預言者シャマはエルサレムに在る民に書を贈りたりしと云へば(廿九の廿五、卅一)俘囚の境涯は書信の用に大なる刺激を與へたりしものなるべく、而して此時より以後『書翰』の文字新に用ゐられたりしが如し。

新約全書は四福音書、使徒行傳及び約翰默示録を除き、其他の文書を『書翰』と稱す。然れ共此等の書翰の中には、書信的の性質を有する者あり、前に述べたる區別は凡ての文書には適用し難し。基督教が書翰の多岐に依りて其經典を組成せるは、蓋し世界の宗教中稀有の例也。當時基督教は使徒等に依りて各所に創立せられたりしが、尙幼稚にして許多の困難を有し、唯に教義上に於てのみならず、實際

聖書の Epistola (epistolary)

實踐上の有様に至りては、使徒の教訓指導を要し、該聖典を要する者ありき。於是使徒等は事情の必要に應じ書翰を書きて彼等の設立せる教會に贈り、或は教へ或は誨め或は勵ましたり。是れ即ち此等の書翰の書かれたる起源也。當時使徒等は其道を傳へんとして東奔西走に忙しかりしのみならず、教會を建設し、信徒を養ふ爲めに經營勞働たる苦心を費しつゝありしことなれば、書を著して其思想を述べんとするが如きことは、殆ど夢想たること能はずりし處なるべし。吾人其書翰の如きも單に事情の必要に應じて之を記したるものにして、廣く之を天下に公にせんとするが如き目的は之にあらざりし也。但し保羅が哥羅西及びラオアキア二教會に贈りたる書翰は、交互之を熟讀すべきことを勧めたりしと雖も是等稀有の例也(四四の十六)。又保羅の記したる書翰中には、議論的にして一見論文の如き顔を見せるものありと雖も、是れ又或る特別の場合に方りて或る特別なる教會若しくは事情の實際の必要に應じ、實際的教訓を與へんとし此等の書翰を草したるりしことなれば、其宗教、倫理の教訓に於て組織的ならざるも自然の事也と云ふべし。

今此等の書翰を其宛名の種類に從て分類すれば、左の如し。
一個人に贈りたる書翰 六通即ち
『提摩多前書』 『提摩多後書』 『ヘブライ人書』
『約翰第二書』 『約翰第三書』
地方教會に贈りたる書翰 十通即ち

書翰

書翰

書 翰

ヨハネ前書、ヨハネ後書、羅馬書、...

此等の書翰は其著者の異なるに從て、其思想も一様ならず。例之雅各書は基督教の實際的典範を示し、...

職位、贖罪論

代の教會に與へられたる教訓を一々に採用するの義務なし。...

職位 Holy Orders

監督教會に於て、教師の職務及び權利を指示するたため用ひたる言葉にして、此二教會に於ては教師の三職位を認む。...

贖罪論 The Doctrine of Atonement

贖罪とは、神の子耶穌基督が人類のために十字架にかけられて其身を献げ、以て世の罪を贖ひ、...

贖罪論

なる語を用ひたれ共、彼等は之を基督の事業に用ひず、基督自身に適用し、基督の事業が挽回の祭物を爲せりと云はず、...

贖罪論

向て無報なること能はず。於是彼は自ら罪の道を立て、人類を招きて其處に依らしめんとし給へり。...

贖罪論

由りて得らるべしと云へる事を反復教へたるのみにして、何處にも未だ曾て耶穌が罪人に代りて死するに非ざれば、神は人類の罪を赦し給はざるべしと云へるが如きことを教へたることなきを見れば、...

贖罪論

が贖罪なる事實なるを認めしのみならず、耶穌が曾て彼に来るは多くの人のために其生命を與へ贖とならん爲也と云ひ、又其血は多くの人のために流すもの也と云ひし事や、...

シの部

贖罪論

神は罪の故に人類を憎み給ひ(羅五の十、十一の廿八)人は又神に敵する者となり(羅八の七、四一の廿一)斯の如く神と人とは相互に敵たれば、之を和げんためには、單に人の方面に在りて、神に對する敵意を棄てざる可らざるのみならず、神の方面に在りても亦人に對する其態度を改め、其怒と憤とを棄て給はざる可らず。而して神は實に自ら基督に依りて此二重の和解を企て給へり(哥後五の十八、十九、西一の廿、廿一、弗二の十六)即ち神は基督の死に依りて、人をして神と斯なる關係を結ぶを得せしむるの道を開き、斯くて神の怒は慈と變じ、人の悔は服従と變するに至れり。詳言すれば、基督の死に依りて神の義は充分に表明せられ、人類の罪に對する神の怒は完全に掩蔽せられたるを以て、神は罪人に對する怒を和げ、其罪を赦し給ふを得る也。神は罪を誦らざる者我佛のために罪人となせり(哥後五の廿一)。換言すれば基督は神の義を掩蔽し満足せしむるために、自ら罪の結果を経験せる也。基督流血の意義に關して、保羅は更に「神は其血によりて耶蘇を立て、信する者の挽回の祭物とし給へり(羅三の廿五)」と云ひ「今其血に頼りて我佛とせられたり(五の九)と云ひ、又基督の死は人の罪を赦さんため拂はれたる價也と云へり(哥前五の廿、七の廿三、加三の十三、四の五)。此等の言に依りて之を見れば、保羅が代贖的觀念を有したりし事明也。尤も保羅は吾人の期待せし程多く犠牲制度の言語に依りて此觀念を説明せざりしか(弗五の二、哥前五の七、羅八の卅二、加二の廿)基督の死を犠牲に比したり。犠牲制度が基督の死の意義に關する保羅の思想に暗示を與へたりしは明なる事にして、基督を以て犠牲となせる點に於てのみ、保羅は其死を以て代贖的也と

贖罪論

思惟したりし也。保羅は又他の處に於て基督の十字架に特殊の重きを置き「基督既に我佛のために置はるゝ者となりて我佛を贖ひ、律法の罰より脱れしめ給へり。蓋凡て木に懸る者は置れし者也と置されれば也(コリ一の三十三)」。律法は神の聖き性質より起る所の要求を法典に記したる者にして、律法の裁断は起る所の罪に對して宣言せられたる者也。故にもし罪にして其罰を免れんには、刑罰に對する律法的要求を満足せしむる方法他に是れなきべからず。換言すれば神は其性質聖きが故に、罪實に罰せらるゝに非ざれば、之を赦し給ふこと能はず。是れ神が基督の死に依りて其義を顯はし、律法的要求を満足せしめ給へる所以にして、基督は罪人に代りて苦難を受けたる也。然らば即ち保羅は基督の苦難を以て神の刑罰也となしたりしや。此は「刑罰」なる言語の意義に依りて如何に答へらるゝことなきべからず。嚴密なる意義を以てすれば、此は刑罰といふべき者に非ず、唯刑罰の性質を有すといふべきのみ。夫れ刑罰と云へば罪罰の義を含めども、基督は曾て罪を知らず。故に其苦難を以て嚴密なる意義にて刑罰也となすこと能はざれ共、保羅は之を以て刑罰の目的を達し、世の罪に對する刑罰の代りとなれりと思惟せり。換言すれば、保羅は基督の苦難を以て代表的刑罰、若しくは刑罰の結果を含める者となせり。然れ共罪罰の此法律的觀念は保羅の教條に關する教義の全體に非ず。彼は之と共に、救済及び其救の人類に及ぼす關係は單に消極的に止らずし、基督等の中に住み、彼等基督の中に住むと云へるが如き密接の關係を有する者とならざる可らず。基督と共に罪に死し、彼と共に斯なる生命に蘇らざる可らずとの事を

贖罪論

教へたり。彼が「基督の愛我佛を助せり、我佛思ふに一人凡ての人に代りて死たれば凡ての人既に死たる也。其凡ての人に代りて死しは、生者をして此後己がためならで己に代りて死し者のため世を過ぎしめんこと也(哥後五の十四、十五)」と云へるは即ち此意にして、後世の基督の死に關する神秘的倫理的解説は此處に其源を有せり。(四) 希伯來書記者の觀念、以上云へる如く、保羅は基督の死を以て神の義の要求より起る必要に基ける者にして、罪の價として受くべき死に代はれる者もとなしたり。希伯來書記者は之に異り、基督を以て犠牲として神に獻げられたる祭物也となしたれ共、其死を以て代贖也とせざる可らず。此書の中には、基督は民の罪のために贖をなせりと云ひ(二の十七)凡ての人のために死を嘗へり(四の九)又は多くの人を贖はんと爲めに犠牲とせられたり(五の九)の如き(九の廿八)言あれ共、保羅の中に含める代贖的的思想は同じからず。此書の記者は又基督の死の必要なる所以を説きたれ共、其理由として示せるは、保羅の云へる如く律法的要求を満足せしめ、若くは律法の呪詛を取り去らんが爲め也との事に非ずして、之を以て神に似合はしき所行也と云ふに在り(二の十)。彼は又基督の死の必要なる所以を、基督が祭司たる事實に在りとなせり。即ち曰く凡ての祭司長は立てられたるは禮物と犠牲とを獻ぐるためなるが故に、彼も亦必ず獻ぐる所の物あるべし(八の三)。「獻ぐる所の物」とは基督自己の生命の意也。而して彼は又他の處にては基督の死は斯くの爲め立つるために必要也との事を云へり(九の十五、十八)。然れ共基督の死の必要に關する記者の最も重要な觀念は、基督は祭司也と云へる事にして、彼は先づ基督

シの部

贖罪論

がレビの祭司に優れる祭司也との事を論じ、而して以爲らく、祭司は犠牲の血を獻げざる可らず、而して犠牲の在る所には流血なる可らず。基督は祭司、殊に優れる祭司也、故に彼は其職に適合る犠牲を獻げざる可らず、而して其犠牲の血は「永遠の靈」に依りて獻げられたる(九の十四)自己の血ならざる可らず。如何にして一般の犠牲、殊に基督の犠牲が罪の贖となるべき者なりやに關しては、此書の記者之を明言せず。彼は唯犠牲の效果に關して猶太人の一般に抱きたりし見解に従へり。彼等の見解に依れば、犠牲は人が神に近づき之と和ぐべき方法として神の立て給へる者也。此書の記者は此普通の見解を以て公理となし、是れ以外に往かず。彼は之を説明するにレビの制度に定められたる三要素、即ち聖祭の献物(十の十二、十八)契約の献物(九の十五、廿三)及び贖の日の献物(九の廿四以下)を以てし、此等の犠牲は均しく民の罪を贖ふ者にして、基督の犠牲を預表せる者也と云へり。要するに「血を流すことあらざれば救はざる事なし(九の廿二)」とは彼の議論の骨子にして、彼は舊約の犠牲制度を以て神の立て給へる者、從て必要なる者となし、基督は此必要に従ひて舊約の影を實にせる也と信じたりし也。(五) 約翰の觀念、基督の死の必要なる事、其救贖的價值を有する事との確信を言ひ顯はせる語は、第四福音書及び約翰の書翰にも亦散見するを見るべし。吾人は第四福音書の初に於て、パテスマのヨハネが基督を稱して「世の罪を任ふ神の羔羊」と云へるを見る(一の廿九)。基督修道の初に於て彼が「メッサヤ」として顯はれたりとの事は、共觀福音書の記事と一致せざるを以て、吾人は此物語を以て更に後に

贖罪論

思ひたる事也と思惟せざるを得ずとも、此福音書の書かれたる當時に於て基督に就て斯る思想の行はれたりし事は疑ふ可らず。神の羔羊とは逾越節の羔羊に喩はられたる者なりや、又は賽五十三に於て然に比せられたる「エホバの僕」の義なりや明ならざれば共、以上二箇の思想を結合し、贖罪的犠牲の意を附加せる者也と解するも不可なるべし。又「罪を任ふ」とは通常「罪を除く」の義に外ならざれ共、記者は更に進みて犠牲の意を表したりし解するものを得可らざることに非ず。然れ共吾人も此等の語の意義を定めんとせば、先づ此主意に關して述べられたる他の言語の意義を明にせざるべからず。此點に關し耶蘇自ら語りたる語を以て記されたる者其類に従て記さん、彼は曾て「モセ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし、凡て之を信する者に亡ぶることなくして永生を受けしめんがため也(約三の十四、十五)と云ひ、又「我もし地より擧げられんば萬民を引きて我に來らせん」と云へり(十二の卅二)。此二語が耶蘇十字架の死を云へる者にして、十字架の死が人類の救済に必要也との義を表せるは明也。然れ共十字架の死に依りて神の義満足せられたりとの義は、此二語の明示する處に非ず。次に耶蘇は「我與ふるパンは我肉也、世の生命のために我之を與へん」とし人の子の肉を食はず其血を飲まざれば爾曹に生命なし「我肉を食ひ我血を飲む者は我に居り、我も亦彼に居る」と(約六の五十一、五十三、五十四)と云へり。此等の語も基督の死に依る贖罪的義を表せる者也として解説することを得べしと雖も、其主として表せんとしたる所は、基督は人類の靈的食物也とのことにして、保羅の思想中に發見するが如き代贖的觀念は此中に明示せられ

贖罪論

ず。次に耶蘇は人のために其生命を與ふべしとのこと就きて語り「我は善牧者也、善牧者は羊のために命を捐つ(ヨハ)我れ羊の爲めに命を捐らん(十の十一、十五)我れ彼等のために自己を潔く、是れ眞理によりて彼等の聖められんため也(十七の十九)と云へり。爰に「捐つ」と譯せられたる原語 (didon) は、第四福音書記者が他の場合に「置く」と又「取る」との義に用ゐたる語にして(十一の卅四、十三の四、廿二の二、十三、十五)爰には單に「與へる」といふ程の義を有するに過ぎず。又「潔く」とは人類救済の職に聖別せられたりといふ程の義にして、以上二語は共に基督が人類の爲めに救済の事業を爲せりとの義を表するは明なることなれ共、其死に依りて神の義を満足せりと云へるが如き意義に於て贖罪的觀念を發見するは難し。又耶蘇が「一般の事もし地に落ちて死なば唯一に於て殘らん、若し死なば多くの實を結ぶべし(十二の廿四)」と云へる語の中にも、贖罪的觀念を發見せんとする者あれ共、此は其次節に「其生命を惜む者は之を棄ち、其生命を惜まざる者は之を保ちて永生に至るべし」と云へると同義にして、之を耶蘇の場合に適用すれば、彼の死は其最大なる事業となし、人類の上に至大の力を有するのために必要なる條件也と云はん程の義に過ぎざるべし。之を要するに第四福音書に記載せられたる耶蘇の語中には、其死が人類救済のために必要也とのことを明示せる者ありと雖も、之を以て神の怒を和げ、若くは其律法的要求を果せる者もなきが如き思想を發見すること能はず。約翰の書翰に至りても亦同じ。此點に關する約翰書翰の重要な語は「其子耶蘇基督の血凡て罪より我佛を潔む(壹約一の七)若し人罪を犯せば我佛のため

シの部

贖罪論

に父の前に保潔師あり、即ち義なる耶穌基督、彼は我佛の罪の挽回の祭物也、唯に我佛のためのみならず、偏く世のための挽回の祭物也(二の一)、(二)「神我佛を愛し、我佛の罪のために其子を遣はして挽回の祭物とせり(四の十)」と云へる是也。最初の語が罪惡其物より救ふの義にして、其中に律法的要求を満足するといふが如き思想を有せざるは明也。此點に於て此語は保潔の「基督は我佛のために罪人となれり」と云ひ、若くは「贖はれたり」と云へる語より、希伯來書記者が「基督の血は爾曹に活神を奉事せんがため死の行を去らしめて其心を潔むることを爲す」(九の十四)と云へるに似たり。而して又基督を以て父の前に在る保潔師と云へるは、希伯來書に基督を以て永遠なる祭司とせざるに似たり。基督を以て「挽回の祭物」と云へる語は、基督の死の救済的價値を言ひ顯はせる者なること明也と雖も、約翰は之を以て神の我佛を愛する愛より出でたりとせり。去れば吾人は此語の中にも、神の義又は愛を満足するために基督の死を必要ならしめたりとの思想を發見すること能はず。且此書論全體より之を見るに、作者の最も重する所は罪それ自らの消滅、若くは罪の力よりの救済にして、何處にも罪の法律的消滅に就て語りたる處なし。換言すれば此書は基督の死を以て罪惡より吾人を救はんため必要也となしたれ共、吾人は愛に神の律法的要求を満足せりとの意義に於ける代贖的教義を認むること能はず。

【基督教會に於ける贖罪論】 初代基督教會の師父等は、基督贖罪の事實を認め、之に對して濃厚なる感情を抱きしと雖も、之が理論を構成せしむるは努力ざりき。彼等は基督の死を以て預言、殊に賽五十三に記せる預言の應驗せる者、從て基督の使命を最も

贖罪論

能く證明せる者也と爲したりき。即ち羅馬のクレメントは基督の死を以て神の人類に對する愛の證據也となしたれ共、神の性質に對するその關係には論及せず。パルナボの書翰は希伯來書と同じく、基督の死を靈性上の言語に依りて解説したれ共、其必要若くは效果の理論を與へず。イダナチウスの著書には基督の死に於て顯はされたる愛を以て、罪を潔め生命を與ふる力となし、基督の肉と血とを以て靈魂の靈的食物也となせり。ユスチヌス及び亞歷山のタレントの書中には、第四福音書に於けるが如く、顯現の思想著しく、前者は基督は暗かりしが、照はれたる者の如く若みたりしと云ひ、後者は基督の死は眞理に忠にして受けたる殉教也と云へり。初めて「贖價」なる語を用ひたりしはテルチウリアヌスにして、彼は吾人は「悔改の報償の交換に依りて刑罰を赦されたり」と云ひたれ共、基督の死に就ては何等の理論をも提供せざりき。

基督の死の救済的意義に就て初めて立てられたる説は、之を以てサタン之力より吾人を救はんために之に拂ひたる贖價也となせるに在り。此説はイレニウス(二〇〇死)よりアンセルム(一一〇九死)に至るまで凡そ一千年間教會を支配せる思想なりき。其説に以て爲るは、人は罪を犯すことに依りて有意的にサタンの隷屬となりたることなれば、サタンは人を支配する力を合法的に得たる也。故に神は人を救ふために其力を用ひ、若くは之を欺くことを得ざりしが、人類の代表者たる基督に於て、人は自由にしてサタンの羅束を棄て神に歸ることを遂げる也。此説はイレニウスの主張したる處に在り、之に依れば、基督の贖は道徳的手段に依りて得られたる也。即ち彼の死の目的は、吾人を導き吾人を助けて、サタンとの關係

贖罪論

係を棄て神に服従せしめんとするに在り。然るに又人の神に歸ることを以て力又は欺に依りて得たる也となす者あり。即ちオリゲヌスは、サタンは人に自由を與ふることに由りて、基督を自己に隷屬せしめ得べしと思惟せしに、彼は基督の力を誤解し、爲めに基督に對しても、一般の人類に對しても其力を失ふに至れり云ひ、ニッサのグレゴリウスは、神はサタンを滅ぼすために欺騙を用ひたりと云ひ、大グレゴリウスは、サタンは基督が人となりしがために其神性を見ること能はずして之に欺かれたり云ひ、ペテロ、ロマバルドは、十字架は基督の血なる餌を有する捕獲なりし也と云へり。

然れ共他の説の萌芽も亦此時期の間に現はれたりき。即ち刑罰的報償説(Penal satisfaction theory)は之をオリゲヌス及び大グレゴリウスに於て發見すべし。前者は基督は其身を獻ぐることに依りて、神を人に和せしめたりと云ひ、後者は基督は罪人のために苦められ、其手に死すること依りて、吾人の受くべき刑罰を自ら受け以て神の怒を和げたりと云へり。道徳的感化説(Moral influence theory)の萌芽も亦之を此時期に於て發見すべし。イレニウスが基督は人を導きてサタンとの關係を斷たしめたりと云へりしこの事は前既に之を述べたり。アラウカヌスも基督は靈力より吾人を贖へり云へり云へる當時普通に行はれたりし説を信じたりしと雖も、彼の此主意に關する大體の説は、之に超越し、基督の顯現及び其死が人の心中に及ぼす力を認め「基督の此世に來りし目的は、人を以て神が如何に人を愛するのを知らしめ、而して又初より我等を愛せし神の愛に感激して、我等も亦之を愛するに至らしめ、又は我等の罪を赦しし基督の命令及び模範に從て隣人を愛

シの部

贖罪論

するに至らしめんため也」と云ひ、又「靈覺は彼等に依て人を死に至らしめたるが如く、基督は謙遜に依て人を死に至らしめたり」と云ひ、又「我等をして恐るべきものは死に非ずして不敬虔也との事を明に知らしむるは、仲保者の目的也」と云へり。此道徳感化説は中世の學者には更に明に之を認むるを得べし。即ちアラバルドは基督の苦難は愛の證據にして、之に應ずる愛を我等の中に神の子たる自由を得せりと恐怖との羅束より救ひ、神の子たる自由を得せりめたりと云ひ、ペテロ、ロマバルドは、十字架は大なる愛の證據にして、之に依て我等の心は勵まされて神を愛するに至る、此愛は救の要素也と云ひ、ペルナルドは、救は基督の代贖的愛に與るに在り云へり。

此の如くイレニウス以後凡そ一千年間、基督の死はサタンに向て拂ひたる贖價也との説教會を支配し、之と共に後世に行はれたる刑罰的報償説、道徳感化説の萌芽も亦此間に起りたりしが、アンセルム出で、基督の死は神に向て拂ひたる贖價也との説を唱へしより、之を以てサタンに向て拂ひたる贖價也となすの説は全く放棄せられ、アンセルムの説と共に教會の贖罪説出で、教會に行はれ以て今日に至れり。今左に此等諸説の梗概を叙すべし。

(一) アンセルムの交易説 アンセルムは其有名な著書「何故に神人となりし乎」(Cur Deus Homo)に於て、交易説(Commercial theory)と稱せられたる其贖罪説を明にせり。此書は二篇に分れ、第一篇は廿五章、第二篇は廿三章より成り、問答體に記さる。今其大要を記せんに、其説に以て爲るは、神が被造物の上に超越する事、及び被造物が神を愛し之に服従する義務ある事は、如何なる言語を以てする

贖罪論

も、之を償還すること能はず。神の榮光を暗へ之を保護するは被造物世界の目的にして、其他の目的の如きは皆其下に來るべき也。故に神に歸すべき榮光を之より掠奪する程世に容れざる者之れあるなし。而して罪とは凡て神に對して爲すべき服従を爲さざるることなれば、是れ神の榮光を掠奪すること也。故に神は自己に歸すべき者を保守すると同時に罪を赦すこと能はず。換言すれば、報償あるに非ざれば罪を赦すこと能はず。報償なくして罪人の罪過を赦し之を放つは、罪を犯せる者ぞ犯さざる者と同等に置く者にして、義者よりも寧ろ不義者に大なる自由を與ふる者也。何となれば若し罪に於て贖はるることなく、罰せらるることなければ、是れ律法の下に在らざるものなれば也。犯罪の條件として報償の必要なることは、人間に定められたる運命を見ても明なるべし。造物者が初め人を造りし目的は、之を以て天使の墮落に依りて生じたる缺陷を滿たさしめんとするに在りき。故に此目的を達せんには人は墮落せざる天使と均しからざる可らず。然るに人は罪を犯し、其現せる罪に向て報償を爲さざるが故に、罪を犯さざる天使と同等なること能はず。何となれば神もし之に同等の地位を與へなば、是れ不當の處置を爲すことなれば也。斯くの如く神の性質、被造物と神との關係及び神の目的は、罪を赦されんには罪に對する報償を要す。然れ共罪人は自ら報償を爲すこと能はず。何となれば人は時々神に全力の服従を爲すの義務あれば、其以上何事をも爲すこと能はざれば也。故に過去の罪惡は人の自ら償却すること能はざる一の負債として存す。然らば則ち此負債は神に非ざれば之を償却すること能はず。然れ共之を償却すべき者は人ならざる可らず。故に報償

贖罪論

を爲すべき者は、同時に完全の神にして又完全の人ならざる可らず。何となれば眞實の神に非ざれば之を爲すこと能はず。眞實の人に非ざれば之を爲すべき者に非ざれば也。化身の基督は完全の神、完全の人として顯はれたり。彼は自ら罪なきが故に死すべき義務なし。而して彼は自ら甘じて死したるに依り一の功徳を立てたり。而して此功徳は其性格に適應するの功徳にして、以て充分に人類の罪惡を消滅するに足れり。

以上は即ちアンセルム議論の大要にして、彼は基督任意の死を以て其贖罪事業の中心となせり。彼は基督の模範より來る勢力を看過せざりしと雖も、之を重すること左迄大ならず、之を以て救の最初の準備と爲すよりも寧ろ救に與かりし結果と爲せり。而して彼に依れば、基督は直接に罪人のために法律違反の刑罰を負ふことに依りて、神の公義に對する報償を爲したるに非ず、間接に功徳を立つることに依りて報償を爲したる也。換言すれば基督が人のために立てたる功徳は、移りて人に歸し、以て犯罪の妨害となれる神の公義的要求を満足せしめたる也。

アンセルムは其書中に於て屢々罪の罰せられざる可らざることを述べたれ共、彼に依れば、基督に依りて爲されたる報償は刑罰に非ずして、刑罰に代はるべき者也。此點に於て宗教改革時代及び其以後の神學はアンセルムに異れり。宗教改革者はアンセルムの如く罪を以て神に歸すべき榮光を掠奪せる者となすのみに非ず、又之を以て神の定めたる律法を犯す者と見たり。故に單に神の威嚴を擁護するの必要あるのみに非ず、又罪を罰すべきの必要あり。於是改革者等の問題は神の榮光の問題に非ずして、神の公義の問題となり、從て單に報償の問題に非ずして、

贖罪論

贖罪論

贖罪論

贖罪論

ませば、其著『贖罪の性質』を以て次に教授モーペルに於て、彼は基督の死を以て其生涯の頂點に達したる者也なし、生に於ても死に於ても基督は有意的痛悔者の地位を取り、己を犠牲として献ぐることに依り、神の義と全然一致せりと云ひ、又有効なる贖罪は完全なる痛悔と完全なる聖潔を要する云ひ、而して『もし過去の罪に對する余の悔改にして完全なるを得べくんば、斯る悔改は余の人格の全く義と一致せるを示す者にして、斯る一致は若し眞に出来得べくんば、余が過去と眞に矛盾する者也、而して是れ贖罪にして、余は愛に於て再び眞に義たることを得べし』然れ共斯る贖罪を経験することは、實際に於て吾人の爲し得べからざる所にして、基督のみ實に我等のために之を爲したりと論ぜり。『贖罪と人格』次に『ダグリーワ、エル、ウァーカ』にして、彼は其著『十字架と神の國』に於て、十字架は神が其父なる心より人類の罪を赦し給ふべしとのことを表白せる者にして、赦免の原因といふよりも寧ろ結果也と論じ、基督の事業は人を神の國に入れ己と交らしめ、以て其聖き愛の目的を達するに依りて、神の道徳的完全を満足せしむる者也とのことを示せり。最後に『フエーアベルン』にして、彼は其『基督教哲學』に於て、神の審判の目的は刑罰の若くは報復的に非ずして、矯正的、懲戒的也とのことを説き、十字架は即ち神の赦すべきことを知らしめ、神と共に之を情むる心を起さしめ、斯くて罪に對して神と同一の態度を取らしむるに至るもの也、是れ即ち贖罪也と論ぜり。

(五) 近代に於ける道徳感化説 基督の事業は人の神に對する態度を變化すれ共、神の人に對する態度を變化する者に非ず、神と和ぐべきものは人にし

て、神は人と和ぐを要せず、而して此は神より出で、其性情を表はす者にして、神の上に働く者に非ざれば、其感化を受ける者は人にして神に非ずと論ずる者、之を道徳的感化説 (moral influence theory) 又は主觀的贖罪説 (subjective theory) と稱す。

獨逸に於て初めて此説を唱へたるはシェライエルマッヘル (一七六八—一八三四) となす。彼は基督の苦難は贖罪的也との思想と、基督の義は移して以て吾人に歸するを得べしと云へる説を否み、基督の贖罪的價値は其死に存せず、其有する神の意識に存す、此意識は吾人が信仰に依りて分有するを得べく、其處に喜悅と平和とを發見し得べき者也とのことを論ぜり。彼に依れば、基督は完全なる人とし、又人類の代表者として、我等と共に、我等のために、我等の罪の結果を其身に負ひ苦難を受け、斯くて人類は彼に依りて其罪を贖はれたれ共、基督の事業は神の挽回に非ず、之に依りて人類が基督に於て罪に死し、新生を得るに依り、其真心をして主觀的贖罪的價値を爲さしめんとする方法なる也。此思想を更に發達せるはカール、エムマヌエル、ニツチエ (一七八七—一八六八) 及びリチャード、ローテ (一七九九—一八六七) にして、前者は基督の國、事實及び死を以て見、之を以て悉く神の國の建設に關する者也とし、基督は其受けたる苦難に於て吾人と一となり、斯くて吾人に罪の惡るべき事と神の惡さを知らしめ、其同情に於て世の罪の刑罰を負ひたり、即ち基督の事業は吾人に光明、靈感と與へ、道徳的革新を促すの事業なる也と云ひ、後者は其苦難に依りて吾人の罪の結果を受けたれ共、彼は底なき生活を送りて世に歸り、吾人に同様の勝利を得べきことを示せり、故に神は凡て基督と共に人々の罪を

犯すことなかるべきを豫見し、世の罪を赦し給へり、換言すれば罪は基督に於て可能的に減ぼされたるが故に赦さるる也と云へり。アルブレヒト、リッテ (一八二二—一八九〇) の贖罪説も亦此派の中に加ふべし。其説を概括すれば左の如し。即ち (イ) 神の怒は世の終末に至りて尙熾冥にして悔改めざる者に向てのみ顯はるべし。人は今神の怒の對象に非ず。(ロ) 聖書に所謂『公義』又は『義』といふは、罪を罰せんとする神の性質をいふに非ず、神が恩恵を與へんことを固守するの名也。(ハ) 故に赦免の條件として、刑罰的の意義に於て公義を満足せしむるに非ず、神の公義の満足は其永遠なる愛の目的を現實するの謂に外ならず。(ニ) 基督は其生活と死とに於て神との完全なる交通を保持せり。彼の事業の一大目的は、人を導きて神の愛と其父なる事とに就て基督と同一の意識を有せしめ、基督自らの享有したる同一なる神との交通を有せしめんとするに在り。(ホ) 此目的は地上に神の國を建設することに依りて實現せらる。神の國は神子の自覺の生活に於て基督の精神を有する人々の團體也。(ヘ) 基督の苦難と死とは、彼が神を顯はし、完全なる生活をなさんとする義務の途上に於て遭遇したる經驗也。(ト) 彼は人を導きて彼が神に對して有したりし同一の關係を有せしむるに依りて、罪の赦免を得せしむ。(チ) 彼は聖き生活を顯示し實現することに依りて、罪の罰たることを其情むべき者なることを示せり。斯くて彼は完全なる善の光明に依りて罪の惡しき者なることを示し、以て其罪を定めたりと是也(『贖罪及び和解』)。

佛蘭西及び瑞西に於ても神學上之と同様の運動あり。

贖罪論

贖罪論

贖罪論

植物

り。此運動に最大なる感化を與へたりしは、アレキサンデル、グイネー (一七九七—一八四七) にして、現今の思想家中此説を代表する者は、ウエネゲアの神學教授アウギニスト、アウギエ (一八二六—一九三三) 及び巴理の神學教授アウギニスト、サパチエ (一八三九—一九〇一) 也とす。アウギエは、サパチエは和解、贖罪及び永生の賜なる三語に於て之を説くべし、和解は其人格より之を離す可らず、彼の人格は人の状態に於ける神的生活の完全なる模範也、且基督は人は義しき聖治を受くべき者なることを教へたり、而して彼は信仰に依りて彼と一致する者に惡を棄つる力を與へ、斯くて罪の力より彼等を救ひ、又其聖くして愛に満てる人格に依りて神的生活を人類中に再興し、凡て彼を信する者に永生を與ふる也と云ひ、サパチエは、神は誠實なる悔改の外他の報償を要せず、耶穌は人類の救済を得んために神と折衝したるに非ず、神は人と和解するの必要なし、唯人が神に歸る必要あるのみ、而して罪の赦免は悔改むることに依りてのみ得らるべく、基督の事業は神と和ぐことを要する個人及び人類一般に痛悔の念を起さしむるに在りと論ぜり。

此説を代表する英國の學者としては、フレデリック、テイソン、モリス、ワロン、ケーアド、及びベンジャミン、ワウエットを數ふべし。モリスは基督は人類と合一せりとの思想より發展し、基督の受けたる苦難と死とは刑罰的に非ず、代表的也、而して彼の全生活と經驗とは神の心と意志とを完全に實現せる者なりしが故に、完全なる報償也と云ひ、『神學上の論文』を見よ。ケーアドは其『オールド講義』に於て、基督の道徳的苦難は吾人のものとなるは、信仰に依れりとのことを論じ、『信仰に依りて義とせら

る』ことばは、信仰は吾人をして基督と生ける一致を有せしむる靈的連鎖なること、故に吾人は不條理的な想像若くは律法的假定に依りて非ず、道徳的生活の根本的原理に従て實に彼と一なるべしとのことを意味す、基督の死は罪惡に對する報償にして、之に依りて其苦難に於て罪惡に對する報償が、塵埃に歸せられたる虚偽假説の性質を脱するを得るは、唯基督の生命の重要な原理は、信仰に依りて吾人の生命の重要な原理となるべしと云へる觀念に依りてのみ也と云ひ、『基督教の根本的觀念』を見よ。ワウエットは贖罪の教義を神の愛の光明に依りて解説し、基督の苦難及び死の目的は、之に依りて神の愛を示し、以て人心を神の方に吸引せんとするに在りとなせる道徳説は、最も能く吾人の道徳的感情を満足せしむる者也と論ぜり(其『論文集』を見よ)。

米國に於て道徳感化説の代表者として最も能く知られたるは、ホレス、アッシュネルにして、彼は其『代理的犠牲』に於て、基督は吾人の罪の刑罰を受けたりとの説、及び神の怒は基督の死に依りてなだめられたり(通常の意義に)と云へる説を排斥し、基督の事業は徹頭徹尾神の性質と目的とを顯はせる者にして、即ち基督に於て神が人を罪より救はんとする聖き愛と慈ある性情とを顯はれたり、基督の事業は報償に依りて刑罰を免れしむることに非ず、其道徳的感化力に依りて人の性格を改造し、以て罪より救ふに在りとのことを論ぜり。エリシヤ、ムクルフォード、ワイリヤム、ニワトン、クラーク、ワルツ、ゴルドン、ヘンリー、キング、ワロン等に於ても亦吾人は道徳感化説を發見すべし。

【參考書】 以上所々に引用せる書の外に、グアイ

ズ、バイジラッダ、ホルツマン、スチーヴンス等の新約聖書神學、シールドン、フィッシュャー等の教理歴史。ワロンの『贖罪論』アムチーの『贖罪と近代の人心』ワウエットの『信仰の神聖紀元』ハント、キングの『神學の再建設』グイニストの『神の共和政治』クラークの『基督教の根本的觀念』スチーヴンスの『救済の基督教義』等を見るべし。

植物 植物の聖書 Vegetables in the Bible.

植物 初めて聖書植物研究の道を開きたるはラウルフ (Rauwolf) 也。彼は一五三七年パレスチナに赴き、西利亞其他にて三年間植物を採集せり。之に補う科學的分類法を試みるに至りしは第十七世紀の終りにして、佛國のソルチエール (Tournefort) 及び英國のレー (Ray) 等の功也とす。而して聖書の植物に關する書にして舊派に屬する者は、英國の醫士ワエストマコット (Westmackett) の一六九四年に公にしたる『聖書本草』を以て最後とす。科學上より聖書の植物を説かん企てたる最初の學者を、瑞典國ウプサラ大學の神學教授オロフ、セルシウス (Olof Celsius) とす。彼は五十年間研鑽の結果一七四一—一七四七年『聖書植物學』二巻を著せり。彼の門下に有名なる生物學者リンネあり。リンネの弟子ハセルグイスト (Hasselquist) 其師の常にパレスチナの生物の知られざるを數けるを聞き、一七四九年聖地に赴き植物を採集せり。アワケル、エロイ (Aucheron) は一八三〇年及び三五年パレスチナ及び其他の地方に採集を試み、コッチョイ (Kochy) は三六—六二年に數回の探險をなし、カルコット女史 (Lady Calcott) は四二年『聖書本草』を著し、ホルセル (Horsfall) は四六年パレスチナに入り、六

植物

七年『東洋植物』第一巻を公にせり。カノン・トリス...

七年『東洋植物』第一巻を公にせり。カノン・トリス...



杉の一種

木は王たる地位は王上四の世三に見え、アビメレフ...

上六の十五、世四、代下三の五、結七の五。英譯...

植物

伯來人の知りたる植物中最も巨大なる者にして、主...



柏

木は王たる地位は王上四の世三に見え、アビメレフ...

上六の十五、世四、代下三の五、結七の五。英譯...

植物

の葉に於けるなり。此科の植物に属するは、古昔の猶太人が其の區別をなしたりとは考ふべからず。又パレスチナには近代の意味にて云ふ如き整へる牧場ありしを以て、牧場に蓄はるる家畜に草枯るれば濃汁の質を食ふを常とせり。従て聖書に草とあるもの、或は此を指し、或は彼を指せり。パレスチナ及び西利亞に産する禾本科植物には、牧草として其好なる葉のつたびあり。又さばしから屬あり。わびら屬あり。すいめいのちびき屬あり。しますいき屬あり。其大なるものには甘蔗屬あり。西洋だんご屬あり。西洋だんごはホルダン河邊や、同じ河水の出入する湖や、死海の周圍に發生す。丈二間に達し尾花なす穂の姿見事にして、そよ吹く風にさへ動くなり。パレスチナの草は是也。以賽亞書に『傷める蘆を折ることなく』とあり(四十二の三)。耶蘇が『風に動さるる草なるが』と云ひし(太十一の七)。これなるべしといふ。

(ロ) 櫻、希伯來語ドカン(一三) 結九の四。邪譯には葉とし、漢譯には、葉とせり。櫻とすを可とす。葉の長四五尺、疎なる穂を少しく覆れたる植物にして、聖書に記されたるは此處のみ。葉も穂の地に産す。是もドカンと呼ばれて櫻に似たり。蜀黍亦同じ名に呼ばる。

(ハ) 小麥、希伯來語クイター(一三) 創世の十四、詩八十一の十六等。希臘語シトス(Sitos)。太三の十二、十三の廿五、廿九、卅、路三の十七。邪譯は、麥とせ共、小麥とすを可とす。聖書中廿四巻は此字を載す。特に此文字を記され共、アブラハムが饑饉を避けて埃及に至りしといふは(創十

植物

二の十) 彼地に小麥の麥に實りたれば也。創廿七の廿八及び四十二の二以下に『穀物』と云ひ、廿六の十二に『種播きて』と云へるも共に小麥を指したる者なるべし。由來埃及の地は小麥を以て天下に聞ゆ。西利亞の平原は之に及ばずとも、見る限り、風に小麥の波を揚げしならん。結廿七の十七に『ミンニアの麥』とあるは、思ふに一種若長くして一莖數穂を出すものことなるべし。パロの夢に『七の實りたる住き穂一の莖に出で来る(創四十一の廿二)』とあるは蓋し此種の者なるべし。

(ニ) すべらた麥、前に述べたる小麥の外に又一種の植物あり。希伯來語クマメス(一三) 結九の二、出九の廿二、賽廿八の廿五、結四の九の三ヶ處に記さる。七十人譯は之をすべらた麥とし、拉丁譯は之を豆とし、欽定英譯は之を、とせり。ライ麥は埃及にも西利亞にも知られざれば此譯通じ難し。邪譯には櫻とせ共、櫻は小麥に屬す。改正英譯は七十人譯に従ひすべらた麥(Barley, emmer)とせり。すべらた麥は普通の小麥よりも穀實粗にして堅く、よく粉地に生ず。埃及にも西利亞にもあり。古人は小麥よりも此方を食味したりしといふ。

(ホ) 大麥、希伯來語セラー(一三) 結九の二。希臘語クイター(Cicely)にして、聖書中十九卷此文字を記す。パレスチナに栽培せらるる大麥少くも三種あり、普通の大麥、やばれ麥、及び六列の麥是也。外に野生の一種あり。古代に於て大麥は人の常食なりしが、文化の開け往々に從ひ、漸く小麥の爲めに壓倒せられたり。此種は埃及にても以色列にても他の諸國も同じく、斯くて大麥は貧民の食となり、又他の穀物と混じて食せられたり。

植物

(ヘ) 麥、希臘語サニア(ハハ)にして、太十三の廿五、廿六の唯話にのみあり。英譯之をBarley(秀又は『からすのふんどう』等の義)とし、漢譯之を神とし、邪譯之を神子とせり。からすむぎと讀ましむ。からす麥は有用なる牧草にして、まがらす麥は食用に供するを得べし。神は糧にして、水害にも旱魃にも耐えざるべし。種は糧にして、凶凶に之を種ゆ。聖書にては酸味也。邪譯の指したる植物は農家の所謂 bran にして、植物學者の Lolium temulentum と名くる者也。此草我邦には是れなけれ共、パレスチナには夥しく生じ、外觀頗る小麥に似たり。長じて穂の出づるに至りては、さびしく實少ければ小兒も之を見別くるを得べし。穂の出づる迄は熟練なる農夫も向之を識別するに苦しむ。人も誤りて之を食へば吐瀉し、下痢し、睡氣を催し、眩暈を生じ、痲痺を起し、死に至るべしとありといふ。故に之を毒麥と譯するを適當也とす。

(三) 野草科、(イ) ホルダン河其他の流に野草屬あり。希伯來語のアラー(一三) 或は是れなるべしと云ふ。此語邪譯には三處三處に譯せられたり。即ち創四十一の二は麥、伯八の十一には麥、何十三の十五には兄弟とせり。欽定英譯は創には之を bread-corn とし、伯には之を、とせり。改正英譯は兩處共に『兄弟』となせり。然れ共文意水邊の草を指すに似たり。案するに此語は濕地の草と云はん程の概稱なるべし。

(ロ) 又スーフ(一三) といふ語あり。モーセが幼時其中に置かれたりといふ草(出二の三、五)及び賽十九の六に蘆と譯し、拿二の五に海草と譯せる者是也。

植物

(ハ) 右二語の外にヨメ(五五) といふ語あり。幼きモーセを入し往の箱舟(出二の三) 賽十八の一、二に在の舟とあるもの、及び伯八の十一の麥、賽廿五の七の蘆とあるは是也。此中第一第二は正しく埃及のヨヘラス即ちやびのり(Cyperus papyrus) を云ふなるべく、約百記には埃及及の穂の描るるを見れば、是も亦ヨヘラスなるべく、イザヤの時代に於ても今の如くヨヘラスはパレスチナに生じたりしなるべし。ヨヘラスは薄の類にして高さ一丈乃至一丈五尺に達す。葉の下部は直径二三寸もあるべし。葉は穂に葉は長くして鋭く、頂上に發生す。根莖は多量の澱粉質を含むを以て埃及人は之を食ひき。葉を搗き碎き日に乾して製するものは是れ古代の紙也。

(四) 檉樹科、聖書に檉樹と稱するはセツツ(Shorea) 北亞非利加及び亞刺比亞の沙漠沃地のある處に生ず。メロに満き以色列人が往きやちてエリムに至れば水あり檉樹ありき(出十五の廿七)とあるは此沃地也とす。海濱の葉は交加をなせる種より成りて甚だ軽く、撻め易けれ共折るべからず。一定の度に達したる後は、肥大となることなくして上へ上へと長じ、時には長百尺に上ることあり。葉も頗る大にして、六尺乃至一丈二尺に達し、葉莖ありて葉に似、羽状複葉をなす。果實は滋養分を含み食用となすべし。又其者穿も食ふべし。其液は飲まると牛乳の如く、一種の酒又之れより製せらる。葉は材として用ゆべく、葉の纖維は麻とし織りし綱となす。聖書此樹を記すこと甚だ多く、義人に喩はられ(詩九十二の十二) すらりさせる佳人の立姿に喩はらる(歌七の七)。又ケルビムと相違びて神殿に彫まれ(王上六の廿九、結四十一の十九) 耶蘇エルサレムに

植物

入りし時長此樹の葉を取りて之を冠ふ(約十二の十三)。此樹希伯來名をマール(一三) と云ひ、希臘名をフアイニククス(Quercus) とす。フエニキヤと此樹に此樹あるを以て希臘人の名けたる者也。クレタ島のヒニク亦同じ。エリコが檉樹の色と呼ばれしは中世四の三、十一の十六、三の十三、代下廿八の十五に依りて知るべし。其他地名に名けられたるは、而して此樹は又女子に名けらる(創卅八の六、母後十三の二、十四の廿七)。又フエニキヤの市邑にて鑄造せし貨幣に此樹を畫き、マツカビオスの貨幣エリアデルの貨幣にも此樹の葉と實とを畫けり。猶太人に取りて檉樹は我國人に於ける菊、樹の如くなりしかば、羅馬人は紀元七十年エルサレムの没落を祝して造れる貨幣に此樹の下に婦人の泣く様を畫きて、猶太の全滅を表せり。

(五) 百合科、聖書の聖書に記さるる者三(民十一の五、一) 行者の類、邪譯には青蒜と書きて『にんにく』と讀ます。其形稍や玉葱に似て小に葉は水仙の葉の如くして先端尖り、花は夏開きて紫色也。希伯來語之をシウム(Shium) といふ。(ロ) ぼろ、邪譯にはこれとあれ共、ぼろと改むるを可とす。希伯來語はカーウル(Karul) 也。蘭葉は普通の青葱に



椰 樹

植物

前やふくらみを持たる丈にて大ならず、葉は高二尺程あり。(ハ) 玉葱、邪譯とす。然れ共此は岩標意など云ふものに非ず、玉葱也。西利亞及びパレスチナの玉葱は頗る美味にして且食ひし後口中臭き蓋なしといふ。希伯來語はベヤリム(單數は Beberim) といふ。伯には之を、とせり。改正英譯は兩處共に『兄弟』となせり。然れ共文意水邊の草を指すに似たり。案するに此語は濕地の草と云はん程の概稱なるべし。

(ロ) 又スーフ(一三) といふ語あり。モーセが幼時其中に置かれたりといふ草(出二の三、五)及び賽十九の六に蘆と譯し、拿二の五に海草と譯せる者是也。

(ハ) 石蒜科、水仙、希伯來語カマツツエレス(Campanula) にして、邪譯歌二の一にはシヤロンの野花とせし、賽廿五の一には番紅の花とす。七十人譯は歐に之を草に花とせし、賽に之を百合とし、拉丁譯、ルーナル譯之に従へり。欽定英譯は二箇處共之を薔薇と譯し、漢譯は玫瑰とせし、改正英譯はコルシカムとなせり。然れ共カルテヤ譯、亞刺比亞譯は之を水仙となす。是れ多數の學者の同する處にして、其球根と云ひ花の姿と云ひ、聖書の示す處に過す。

(七) 薔尾科、(イ) 薔尾花、薔尾花の名の聖書に記さるるは、歌四の十四のみ(賽の誤譯なる事は前に述べたり)。希伯來語はカルコム(Calcom)。亞刺比亞語に又ザフランといふ。さふらんの亞刺比亞語より出でたること知るべし。秋葉紫色の花を開く。薔尾、染料等に用ゆ。

(ロ) 百合花、何十四の六に百合の花と云ふは、希伯來語シヤン(Shyan) にして、彼斯都のシヤン(彼斯都スヤン) は此花の多きに依りて名けられたり也。此は百合科の百合屬をも薔尾科の薔尾屬をも概稱する名にして、英語の Lily も亦同じ、此

シの部

植物

伯來語は同一語を以て木を指し(傳十二の五、耶一の十一)果をも指す(創四十三の十一、出廿五の廿三、廿四、廿七の十九、廿、民十七の八)。此樹高き三丈乃至五丈に達す。枝は縱横に生じて梢や入り乱れたり。葉は披針形にして、秋落葉す。寒威尙烈しき頃、裸の木に一面白色の花を開く。希伯來語は『醒むるもの』の義を有す。即ち寒中生を復する第一の木也との義也。果實は橢圓形にして平たく、長さ二三寸あり共厚さは六七分を過ぎず。是れ又扁桃と稱せらるる所以也。葉にして程よき酸味を有す。(廿一) 豆科 (イ) あかしあ あかしあ屬はシナイに最も繁茂し、又ホルダンの谷の南部に存す。十歳を納めたる契約の標は此木にて造られ、香壇も燔祭を献ぐる壇も幕屋の板も此材にて調へられたり(出廿五、廿六、廿七、卅五章)。漢譯之を皂莢とし、邪譯之を合歡樹となしたれ共、刺楸花又はあかしあを改むるをよしとす。聖書此木を記してシツテムといふ、死海の東北なるシツテムの谷(民廿五の二)と必す此木に因む名なるべし。

(ロ) いなごめ 四時渡き緑の色を改めず、茂れる枝葉はより華る横に延びて、徑往々四丈に達す。葉の長さ五寸より一尺に至り、中に八九箇の種を藏し、その草質なせる葉の内面柔軟にして甘味あり、以て食ふべし。是れは専ら家畜の飼料に供せられるれども、貧民又之を食す。放蕩息子の噺話に、放蕩息子が食はんとしたれ共得ざりしといふ豆莢は、此樹の葉也(路十五の十六)。

(ハ) れんす豆 創廿五の廿四、母後十七の廿八、廿三の十一、結四の九に記されたるアダム(ロテ)は是也。栽培せらるる豆科植物中最も小なる者にして、高さ六七寸、五六對の種葉の先端に

植物

卷舞ある、なよ／＼したる一年生の草也。花は葉にして、葉中に大豆の如き眼れ上りたる二三の種を藏む。

(ニ) そらまめ 母後十七の廿七、廿九及び結四の九に記さる。邪譯には單に豆と譯したれ共、そらまめと譯する可とす。

(ホ) 金花 希伯來語ロテム (ロテ) にして、邪譯之を金花とす(王上十九の四) 若(伯廿の四)となせ共、單に金花と譯す可なるべし。聖書に記されたる植物中、單にして愛らしき者の一にして、高さ一丈ばかり、花は紅色にして香もなつかし。枝多く葉少なき灌木の事と譯をなすことにはあらざれど、沙漠の樹くが如き太陽を避るる唯一の場所也。

(ヘ) 紫楡 王上十の十一、十二、代下九の十、十一に記さる。邪譯は白楡木となす。オフルより運び來りしと云へば、大切な木なりしなるべく、又欄干、欄干環を造るに用せられたりしといふ。希伯來語はアルムギム (アルム) にして、マツグス、ミムレルは梵語のゲルガカカより轉ぜしならんこと云へり。ゲルガカカは即ち紫楡也。

(ニ) 亞麻科 パレスチナには普通のあまの外十一種もありといふ。古昔より栽培せられたる多年生の植物にて、纖維を生ずる植物とて古代の埃及、西利亞等の人々に重ぜられたりき。聖書にも種々の呼稱見ゆ。最も廣く用ひられたるをヒンター (ヒン) といふ。もこの植物の名なりしを轉じて、生ずる纖維、さては織物等に用ひたるに似たり。麻繩(士十五の十四、結四十の三)は此纖維を織りたる者也。又シシ (シシ) といふ語あり。邪譯には白布

植物

となす(創四十一の四十二)。バド (バド) といふ語は宗教上の儀式に著する服を指す所に見ゆたり(出廿九の廿八)。ブツ (ブツ) は王者又は高貴の衣也。邪譯には白布、細布又は文布となす(代下十五の廿七、代下五の十二、結八の十五、結廿七の七、十六)。新約の Βαβυλ (路十六の十九) も蓋し是也。サディン (サディン) はリシタルの布をいふ。はたき(士十四の十二)細布の衣(賽三の廿三、雅卅一の廿四と譯せるは是也。エトシ (エトシ) は邪譯文意となせり(賽七の十)。新約の oboly は思ふに此の希伯來語也(約十九の四、廿の五、六、七、徒十の十一)。細麻點あるを以て著はる。パレスチナに最も能く知られたるは普通の雲香にして、高さ三尺に達する紳木、葉は淡綠色にして重覆葉をなし、花は黄色にして撒房花をなす。其他野生の雲香屬ホルダンの谷又は猶太南方の沙漠に生ず。路十一の四十二に雲香と譯せるは雲香也。

(廿四) 檜科 (イ) 乳香 希伯來語レガナ



乳香

(ヨウ) 乳香樹の液にして、其佳品は球圓形若くは鐘乳石様の顆粒をなす。之を乳香と呼ぶは其形狀

シの部

植物

の乳頭に似たるに依れり。類赤色又は帶黄色にして、之を燃せばパルサムやうの烈しき香を發す。亞刺比亞の國加之を生ず。尤も一種に非ずして數種あり、何れも液を出す。此類は高さ二丈に達する木本にして、胡桃に似たる種葉を有し、樹端若くは葉腋より葡萄状花を生ず。聖書に此語の見ゆる者廿餘種、其過中は禮拜に關してなるを思へば、以色列人の古より之を用ひし事知るべし(利二四章其他。ソロモンの花園に此樹あり(歌四の六、十四) 耶蘇は其生れたる時之を受けたり(太二の十一)。

(ロ) 按察樹 希伯來語ツァー (ツァ) 創廿七の廿五、四十三の十一、耶八の廿二、四十六の十一、五十一の八、結廿七の十七等に出づ。此等の聖句の言より推せば其香高く、醫藥として激賞せられ、パルサアの商品として賣買せられし者なるを知るべし。此樹の液を亞刺比亞語にてパルサムといふ。樹は喬木若くは灌木にして我國の樟に似、葉は茂りて白色を帯び、香は雲香に類す。其果實は油あり、其皮に傷つけ、又は枝を煮、若くは果を碎きて油を取る。今はツァーを此樹よりの製品となす事定論也。故に邪譯に乳香とあるはパルサムと改むべし。

(ハ) 漢藥 希伯來語モル (モ) にして、亞刺比亞語のムル、拉丁及び獨逸語のミルラ、英語のマー何れも同源に出づ。ミルラより生ずる譯誤也。此樹は亞非利加のメーン地方、亞刺比亞及び印度に生ずる灌木也。葉は倒卵形、花は小にして花辦四個を有す。果は石果、卵形にして莢豆より稍大也。其譯誤液は形狀一ならず。赤黄色若くは赤色にして、香はパルサムに似、味へば苦くして辛し。出卅の廿三は聖き油を指すに此が用ひられしを示し、詩四十五の八は此香の貴人又は華美なる者に喜ばれしを傳

植物

へ、歌一の十三、五の五は當時の婦人のたしなみなりしを示す。此は又婦人の潔淨に於て用ひられ(結二の十二) 或は屍體に塗られ(約十九の廿九) 或は痲瘋に供せられたりき(可十五の廿三)。

(廿五) 黃楊科 黃楊の名賽四十一の十九、六十の十三、結廿七の六等に出づ。レバノン山上白蘆質の地に生ず。松杉の如き喬木には非ざれ共、時には三丈にも達すといふ。

(廿六) 漆樹科 (イ) 萬壽香 多くの聖書學者は希伯來語のエラム (ロテ) エラー (エラ) 及びエロン (エラ) を以て萬壽香となす。然れ共希伯來人は此樹を樹の區別を定かになきに似たりしが如く見ゆれば、此等の語を用ひる中に落葉する事我が情、種々の樹種を包含し居らん(解題の項参照)。エラムは賽一の廿九、五十七の五に樹と譯せらる。六十一の三の義の樹、結卅一の十四の水の邊の樹とあるも是也。エラムは創廿五の四、十六の十一、十九、代上十の十二に樹と譯せらる。何四の十三に樹とあるも是也。創十二の六、十三の十八、十四の十三、十八の一、十四の十一、九の廿七に樹、又は樹とあるはエロン也。萬壽香は樹類より少く、一本立なるを常とす。以上の三語は萬壽香とし、樹と區別し置るを安全とす。

(ロ) 阿月渾子 希伯來語パテニム (ロテ) 邪譯が英譯に似て胡桃となせるは誤れり。阿月渾子となすべし。高さ一丈乃至二丈、葉は一二對の奇數複葉又は卵形の單葉也。果實は乾果、頗る珍重せらる。

(廿七) 鼠李科 耶蘇の戴きし棘の冠とは何ぞ。體の類ならんとの説もあれ共、思ふにエルサレム附近にありふれたるさるさるの類なるべし。此灌木

植物

は枝細くして挽め易ければ、容易に冠を造るを得べし。

(廿八) 葡萄科 葡萄のここの聖書に引く、事四百餘回、選民の思想と歴史とに離れ得ざる關係を有す。其最も早き例はノアが葡萄園を作りたりと云へる事也(創廿九の廿)。サレムの王が凱旋せるアラハムを勞ひし酒(十四の十八)は葡萄酒なるべし。バロの酒人の長が夢に之を見たりと云へば、埃及にも植はられたりしなるべし(四十の九。詩七十八の四十七参照)。パレスチナは葡萄の實る、乏しき事なき地にして(申八の八)モーセが此地を偵察せしめんとして送りし者共は、エシロンを以て一房の葡萄をさき、杖に貫き、二人して之を擔ひ歸りき(民十三の廿四)。パレスチナにて葡萄を栽培する法は一ならず、或は樹を設け、或は樹によつてはらしむ、又人の身長程の支柱をいくつとなく樹つるもあり。收穫の暇はしばしば『葡萄園に誦ふ者なく、歡び呼ばう聲なし(賽十六の十)』といふ反證にて推すべし。收納れたる葡萄は或は速にならべ、日にあてて乾葡萄となし(母前廿五の十八、歌二の五) 或は絞つて酒とし、又は糖蜜となすには更に大釜にて煮る也。聖書に酒樽をふむとあるは酒を造るをりないふ。アッスリアの彫刻に王と女王とが葡萄の下陰に之より造れる美酒を仰ぐ者存す。此下陰に似ふは庶民和樂の姿にして(王上四の廿五) 此樹の甜み賣るは邪家滅亡の兆也(賽十六の八)。イザヤは以色列の家をエホバの葡萄園に喩へ(賽五の七) 耶蘇は天國を葡萄園に喩へ(太廿の二) 又自己を眞の葡萄の樹に喩へたり(約十五の一) 之を室家に喩へしは詩百廿八の三也。

(廿九) 錦葵科 聖書に記せる此科の植物は葱綿に

シの部

新英州神學

レムの南方に在る王の間の邊に在りてあるの外、聖書にはシロアムの位置に關して記す處なし。ヨセフ・アスは明にシロアムの泉はエルサレムの上町の丘陵と下町の丘陵との間に在るヲヒロソンの橋谷の間に在りての事を記せり。此記事はエロソンの記事と符合せり。紀元第四世紀及び其以後のエルサレムを論ずる者はシロアムを以てエルサレムの中央を流るる橋谷の口に近しとせり。現時のアイン、シロソン及びピルケット、シロソンの在る處は蓋し古のシロアムの在りし處なるべし。

新英州神學 The New England Theology.

【學派名】 第十八世紀の中頃より第十九世紀の初めに至るまで凡そ六十年間、米國新英州に起りたる有名なる神學者等の唱へたる、最も峻烈なるカルグイニ主義の神學にして、ジョン・サットン、エドワルド・キーンランド、ヘンリー・チャップマン、エドワルド・キーンランド等たり。當時米國に於ては英國アルミニウス派の神學者、殊にホイットビー及びジョン・テロールの著書の著く愛讀せられたりしに拘はらず、ジョン・ドッドの如きカルグイニ派の神學者は其勢力甚だ振はざりしが、エドワルドは一面アルミニウス派の神學に反對し、一面無力なるカルグイニ派神學に代ふるに峻烈なるカルグイニ主義を以てし、神學の改善を謀らんとして、是れ新英州神學の起りたる所以にして、初め此派は「エドワルド派」或「新光明の神學」又は「新神學」と名けられ、後ホプキンス出で多少の修正を加ふるに及びて「ホプキンス派」(Hopkinsonian or Hopkinsonian)となり、エドワルド・ホプキンス、ウエスト、マサチューセツ州のベルグシアに住せるより「ベルグシア神學」(Berkeley Divinity)と呼ばれ、アンドロウ、フリー

新英州神學

ラル、ロバート、ホール、及び其他の英國神學者が此神學を採用するに及びて「返米利加神學」と呼ばれた。

【教義の梗概】 此の如く此の神學はエドワルド以後多くの神學者に依りて奉ぜられ、改善せられたるを以て一様に論じ難しと雖も、今日多くの學者が新英州神學の特色也として承認する所の梗概を示せば左の如し。

(一) 聖潔及び罪の性質、聖潔又は真正の徳とは大にして且高尚なる善を備ふの謂にして、有意公平の仁愛也。罪とは之に反し小にして低き善を備ふの謂にして、換言すれば神よりも自己又は此世を愛する事也。故に聖潔も罪も共に受動的の有様ならず、意志の自由の動作にして、人は神の律法に従ひ若くは之に背くことを得べしとの事を含む。換言すれば、人は道徳的動作者にして罪を備ふ自然の能力を有する也。而して神の道徳的屬性は凡て仁愛の中に含まる。正義は神の根本的屬性の一なれ共、此は一般的幸福のために神の特に備へ給ふ一箇の形状に外ならず。最初の新英州神學者は、神の至上權、預定及び永遠の刑罰に異常の重きを置き、凡て神のなし給ふ所は其最も、萬物の最大最高善なるべき者に外ならずと爲せり。

(二) 意志及び生得の感情、新英州の神學者は、道徳的性質を以て意志及び選擇に在りてなしたる共、彼等は意志を以て單に企て、志し、決定する能力也となさず、此等の能力は選擇を豫想し、選擇に繼ぎて起る者にして、意志は即ち選擇の能力也と云ひ、選擇の過程を遂行する過程とし、又生得の感情も異れりと爲せり。初代の新英州神學者は、意志と感情

新英州神學

を區別したりしが、明白には之を區分せず。彼等は是れを道徳的性質を以て心情に屬し、欲望を以て意志に屬せる者となし、而して之を實際にはならしむる事と生得の感情とを區別し、自然の感情には道徳的價值なしとせり。

(三) 人の自由の動作、其不測の憑依、人は神の超自然的感化なしと雖も、普通の感化力に依りて其罪を悔ゆる力を有する者なれ共、實際に於ては決して之を用ゐざる者也。人の生得の能力は聖靈の特別な干渉に憑依することを聊かも減する者に非ず。人は此干渉なくしては善を備ふ道徳力を有せず、實際善を備ふ者に非ず。新英州の神學者は中ラウカリス説に對して、人の善を爲し得る力と其蓋然性との區別を明にし、人は生れ乍ら善を備ふ力を有する者なれ共、凡て聖善なる選擇は神の超自然的恩寵に憑依することに依りてのみなし得べき者なるが故に、新に生れざる人は決して善を備むるに非ずと説けり。彼等は又新に生れたる人が信仰より離れ得ること、離るることとを區別し、彼は何時にても墮落し得る力を有すれ共、超自然的の力に依りて斷へず罪惡より遠かるが故に、決して墮落することなしと説き、罪人の新生と聖徳の耐忍とは人の力と神の力と結合せりとのことを明にせり。

(四) 全然墮落と原罪、新に生れざる人の道徳的行為には凡て全く聖潔なく、全體として論ずるに罪也。而して其此の如く全然罪惡に満てるは其性質の腐敗せるに由れり。即ち人は生れ乍ら墮落せる者にして、聖潔なく、神と異り神に反する者なるが故に、神の靈に依りて新にせらるるに非ざれば、其道徳的行為も亦神の性質と榮光とに反する也。而して斯く人が生れ乍ら罪ある所以のものは、アダム墮落

シの部

新英州神學

の結果に外ならず。吾人は蓋しリアダムの犯せる罪のため刑罰を受ける者に非ず、吾人は吾人の罪に依りてのみ刑罰を受ける者なれ共、アダムの犯せる罪は、吾人が道徳的選擇を初むるや否や直ちに罪を犯すが如き状態に吾人を導けり。新英州神學者の中には、孩兒は生るよ否や罪を犯すと説く者も、生るよ否や罪を犯すと非ず、罪を犯し得るや否や罪を犯す也と説く者あり。原罪なる語は彼等の好まざる所にして、彼等の中には全く之を排斥して用ゐざる者あり。

(五) 新生、新英州の神學者は、凡て新生を以て聖靈の超自然的干渉に依りて起る變化也とせり。而して或る人々は之を以て意志の變化也とし、他の人々は性質の變化也とし、更に他の人々は意志并性質の變化也とし、此二者は離るべき者に非ずと云へり。彼等の中多くの人の説に従へば、新生せざる人々も新生せる人々と同じく善を備ふ力を生れ乍らにして有し、其真心彼等をして善を備はしむ。然れ共善を備む以前の選擇は凡て罪惡也。故に彼等に罪惡の行為をなすべからずと勸むるよりも、直ちに新なる心を作るやう働かざる可らず。此説は彼等の中に在り熱心に論争せられたり。

(六) 神の至上權と命令、新英州神學の最大目的は神の至上權を明にし、神が宇宙を支配し給ふ永遠の計劃を覆美するに在りき。其説に依れば、神は無上の權威を有する君主にして、其爲さんとする所の者を覆ひ給ふ、而して彼の選擇は無限の仁愛にして、宇宙の最大最高の幸福を求め給ふ也。アンドロウ・アル信條に曰く『我は神が其聖意に従ひ、其榮光のために、其將に來らんとする凡ての事を預定し給へる事、自然及び道徳世界に於ける凡ての存在、動作及び出來

新英州神學

事は悉く神の攝理の下に在る事、神の命令と人間の自由と、神の働と人の働と、人の神に於ける憑依と其責任との間には全き一致ありとの事を信す」と。此の如く新英州の神學者は一方に神の働を認め、他方に人の働を許せり。彼等に依れば、人の道徳的行為は神の攝理の行為、無限の仁愛より出づる神の命令の結果なれ共、神は其命令を行ふに方りて、其命令なきと同じやうに人を自由に放任し給ふ也。

(七) 贖罪論、基督の苦痛、殊に其死は犠牲也。律法の刑罰には非ざりしが、それ均しきもの、それ代はれるものなりき。律法の要求は之に依りて満足せられざりしが、律法の體面は、還まれたる者に律法的刑罰を蒙らしむることに依りて其體面の高めらるるに依りて高められたりき。神の分配の公義は之に依りて満足せられざりしが、其一般的公義は十分に満足せられたり。基督の柔順は其聖潔の點より見れば、吾人の代りとして遂行したる餘功には非ず、故に又吾人に歸せらるべき者に非ず。贖罪は神が福音的信仰を有する凡ての人々を救ひ給ふこと、一致し、且之を望ましくなす者也と雖も、之がため凡ての人々を救ふは神の義務也といふ可らず。贖罪は何が故に或る人々は新生し或る人々は新生せざるの理由を明にする者に非ず、之が理由は唯神の無上の聖意の中に發見し得べきのみ。

【エドワルド以後の神學者】 前云へる如く新英州神學はエドワルド以後、多くの神學者を出で、更に之を變化發達せり。今其最も重なる神學者を略ぐれば、先づ第一はサムエル・ホプキンス (Samuel Hopkins, 一七二一—一八〇三) にして、彼は無條件的忍從 (Unconditional resignation) の義務を説き『ホプキンス派』の祖となれり。彼の論理的に表明せる

新英州神學

神の聖意に對する服従の教義は、其實に於て神學派の抱きたりし意見と異らざる。彼は凡ての罪惡を自己主義に在りてなし、悔改せざる人の凡ての行為、其祈禱さへも罪惡也と云ひ、悔改を以て人間第一の義務也となせり。故に彼に依れば自己の悔改を祈らんことを人に勧むるは誤れり。又彼は罪を以てそれ自ら聖也と思惟したりし、こゝ明なれ共、彼は又之を以て最大善に達する必要の手段也と思考したり。此説を巧に辯護せるはジョセフ・ペラミー (Joseph Pelham, 一七一九—一七九〇) にして、人は悔改め、神を愛し、基督を信する生得の力を有すとのことを明にせるは、ジョン・スモレー (John Smalley, 一七三四—一八二〇) 也。小エドワルド (一七三四—一八〇一) は政治的贖罪説を説き、ナサニエル・エマンス (Nathaniel Emmons, 一七四五—一八四〇) は「無條件的忍從」其他ホプキンス派特有の説を數言せり。アサ・バルトン (Asa Burton, 一七五二—一八三六) は新生は靈的趣味に於ける變化にして、之に依りて神聖なる事物に對する嗜好心興へられ、聖き意志之れより生ずと説き、エール大学の校長テイモシー・ドライット (Timothy Dwight, 一七五二—一八一七) はアダムの罪の其子孫に歸せらるる事、人の生得の力の無能なる事、及び贖罪の及ぶ範圍に制限ある事等の教義を排斥せり。彼は又バルトン及び小エドワルドと共に、新生は新なる靈的趣味の興へらるることとを説き、ホプキンス及びエマンスに反し、悔改めざる人のために其悔改を祈るは正當のこととこのことを主張せり。而して彼は又徳は利用の點に在りてなし、最上の徳は最高の幸福を遂げる傾向に存せりと説けり。新英州神學に更に大なる變化を施せるはドライットの門人ナヤ

シの部

新エルサレム教會

ニエル、テローキ (Nathaniel W. Taylor, 一七八六—一八五八) にして、彼は神の恩恵の干渉なき人...

新エルサレム教會

The New Jerusalem Church. (Emmanuel Swedenborg) の唱へたる教義を奉ずる人々の宗教的團體にして、彼の説は其本國にては推賞者比較的少かりしが、英國マンチエスター聖...

信仰

は之に次ぎ最近の統計に依れば、教會の數七十箇、信徒七千人あり、其外佛、獨、奧、以、瑞西、諸...

信仰 Faith (Fides)

は贖罪の觀念の發達に從ひ、舊約の間に歴史的發達ありしと雖も、之を外にしては二者の間に相違あることなし。又新約聖書記者の信仰に關する觀念も、其重視する方面の相異なる外緊要の相違あるなし。愛には信仰に關する聖書の觀念の梗概を示す。愛には信仰の主觀的性質、希伯來書記者が「大れ信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を過激とするもの也(十一の二)」と云へるは、信仰の定義として見るを得べし。故に信仰は明に知識の要素を含む(來十一の六) 又行為に於ける結果を含む(十一の八)。然れ共信仰とは單に同意又は服従の意に非ずして、地在る者を念はず、天に在る者を念ひ(四三の二) 凡ての善き者の造主なる見えざる神に信頼するの義也(來十一の廿七) 來十一に引きたる例證は、所謂信仰とは單に神の存在、正義、善美、若くは其言語約束の眞實にして信すべき者なることを信するの義に非ずして、試惑も以て之を動すに足らず、威武も以て之を屈するに足らざる程の信任を以て、神の誠信なることを信するの義なることを顯はせり。故に聖書の思想に従へば、單に知識のみの信仰は未だ以て眞の信仰也と云ふ可らず、更に之に兼るるに行

信仰

を以てせざる可らず(推二の十四以下)。換言すれば信仰とは心全體の活動にして(羅十の九、十)之に反對なる不信が無智の意に非ずして不従順の義なるが如く(來三の十八、十九、約三の廿六、羅十一の廿、卅等) 又知識の缺乏より生ずるよりも、寧ろ強しき心を働きて神の御より離れ(來三の十二) 不義を好む(撒後二の十二) より起るが如し。略言すれば信仰とは人の心がそれ自らを出でて神に往き、全く之に信任するの義也。而して聖書に依れば、人は皆罪人なるが故に、神に對する此信任は、罪の赦を蒙り其救に與からんことを要求より出づる謙遜なる信頼となり、神を以て唯一の教主となし、凡てを棄てて全く之に自らを任ずること也。

(一) 信仰の對象 神を以て廣く生命、光明及び幸福の源にして、弱き人類の憑依すべき者也として見るも、又價値なき罪人が依るべき唯一の望なる救の主也として見るも、信仰の對象は常に恩恵の神にして、救の事業の性質に關する知識は前後相同じからず、從て神に對する信仰を言ひ顯はせる言語の形式は相異なるも、信仰の此對象は聖書の初めより終りまで皆で變化せしことなし。即ち人類の始祖がエアムンに於て信頼せし神は、結のために蒙りたる誓を意さんと約束し給へる恩恵の神にして、それより其約束の中に含まれたることは若くして救の事業に顯はれ、遂に吾人信仰の對象は基督に在りて世を己と相しがめ給へる神なるに至れり(哥後五の十九) 斯かる信仰の中には救の神の凡ての約束を信するの信仰、及び神に關し啓示せられたる凡ての眞理を信するの信仰を含むこと疑なしと雖も、聖書に於て大切な信仰は約束其物に於ける信仰に非ずして、約束者其者を信するの信仰也換言すれば、信仰

シの部

信仰

の對象となる者は、神は人を救はんとする聖意を有し、且斯る恩恵を垂れ給ふべしといふ言語又は約束に非ず、又基督の神性、其權力、若くは其事業の眞實及び完全なる事にも非ずして、救主自身也。故に初めには含蓄的に約束し給ひ、而して終に最も明白に示されたる信仰の對象は、贖主なる神耶穌基督にして、保羅は明に「人の義せらるるは耶穌基督を信するに由る」と云へり(加二の十六)。(二) 信仰の力 斯く信仰の力を教ふ力は信仰それ自らに在るに非ずして、信仰の對象なる全能の教主に在り、聖書が信仰に由りて救はるべしといふは、心の働かしての信仰に非ず。換言すれば人を救ふは信仰に非ず、耶穌基督に於ける信仰也。基督以外の教主に於ける信仰、又は此れ若くは彼の基督に於ける信仰(四二の十六、十八、提前四の一) 若くは耶穌基督の福音以外の福音に於ける信仰(加一の八、九) は人を救ふこと能はざるのみならず、斯る信仰は寧ろ阻はるべき者也。眞正の意義を以て之を云へば、救は基督に於ける信仰にあらざらずして、信仰に依りて救ふ處の基督に在り、人を救ふ力は信仰の働にも、信仰の態度にも、又信仰の性質にもあらざらずして、全く信仰の對象に在り、斯く聖書は信仰を以て單に教へたる手段となせり。

れたる者なるが故に(後一の一、二) 三人は之に向て神に感謝せざる可らず(四の一、二) 故に救はるべき者は、太八の十三、九の廿九等に暗示せられ、推一の六、八には、疑ふ者は何物をも得ること能はずと記されたり。然れ共耶穌は信仰すべき者をも尚柔和に取り扱ひ、其使徒等も亦其信に徴へり(太六の廿八、十四の卅一、十六の八、十七の廿、路十二の廿八、十七の五、可九の廿四、羅十四の一、二) 信仰の效果は又其之に信する目的如何に從て異なるべしと雖も、譲りて全く救の神に其一身を任ずる者は、尋しめらるることなく(羅九の卅三、十一の十一) 信仰の効即ち靈魂の救を得たりとの確信を有するを得べし(彼前一の九) 即ち先づ信者は信仰に基きて己が義を棄て、神より出づる義、即ち基督を信するに由れる所の義を有す(腓三の九) 斯く信仰に由りて義せられたれば、彼は神と和らぎ、神の子となりて凡て神の子の受くべき特權を有す。是れ所謂靈魂の救にして、是れ信仰の吾人に與る効果也。

信仰の條件 信仰の條件は必ず之を出せる團體の承認したる者にして、教權を有する者ならざる可らず。信仰簡條は信仰に先だたずと雖も、信仰を預想す。信仰簡條は、教會外部の狀態に關係することなく、内部の生活より發生す。故に假令教義に關する爭論なくとも尚成立するを得べし。信仰簡條は實に靈的生活の衝動より起る所の者也。信仰簡條は素より教會の基礎に非ず、然れ共或る意味に於て、建物の石と石とを結合する膠也。教會の基礎は唯一なれ共、之を建つる者は多し。故に信仰簡條なる者も亦多くありて、各相異れりと雖も、其異れるは唯詳細の點に於てのみにして、根本的眞理に至りては何れも相同じ。信仰簡條の作られたる次第は各相同じからず。例之或る特殊の創作者なく、或る特殊の時代に於ける教會の一般的生活より生じたる者あり、使徒信經の如き是也。全世界宗教會議の結果として生じたる者あり、ニカヤの信條の如き是也。或る特殊の教會會議の結果として生じたる者あり、ドルトの會議の告文の如き是也。其目的のため特に教會の委任を受けたる神學者等に依りて作られたる者あり、英國教會の三十九箇條の如き是也。或る一人が教會若くは宗派の機關となりて作れる者あり、メランクトンがウガスブルグの告白及び辯證論を作らるるが如し。又教會の教師に依りて作らるる者あり、會衆派及びバプテスト派の信仰簡條の如し。羅馬教會及び希臘教會に於ては、聖書及び傳説を以て同一の權力を有する者也とせざども、プロテスタント教會に於ては、信仰簡條を以て常に聖書に從屬し、天啓に依りて示されたる眞理を説明せる者に過

信仰簡條

信仰簡條

の部

信仰告白

キリスト教の故にプロテスタント教會の信する處に依れば、聖書に關する教會の知識進歩し、基督教の經驗之を要求するに至れば、信仰簡條は唯に改正せらるべきなるのみならず、又改正すべき者なる也。此の如く信仰簡條を以て聖書に從順し、其眞理を説明する者もなす時は、信仰簡條なる者は聖書の教義の摘要として、信者を結合し、又教義の標準として、虚偽若くは誤謬の教義及び行為に對して眞理を保護することを得べし。然れ共信仰簡條を編纂して聖書の研究を拒み、真心の自由を妨げ、若くは各人自由の判断を禁ずるが如きことを爲す時は、其結果爲善、頑迷、偏執等を生ずべし。是れ信仰簡條の奴隷となる者にして、プロテスタント教の主旨に反す。基督教の信仰簡條を分ちて四種となすを得べし。其第一種は全教會の共に信奉する者にして、主として神學に基督教の教義に關する者也。即ち使徒信經、ニカヤの信經、カルセドンの信經及びアタナシウスの信經是也。第二種は希臘教會特有の信仰を表白せる者にして、此信經の特色は羅馬教會に對し、聖靈の發出及び法王に關する教義を明に在り。第三種は羅馬教會の信經にして、トレントの會議(一五四三—一五六三)及びヴァチカンの會議(一八七〇)に於て議定せる信經を含む。第四種は福音主義教會の信經にして其數最も多し。此等の信經は重なる教義に於ては相一致すれ共、預定の教義及び聖禮典の性質及び効力に關しては相異れり。第四種の中最も重なる信仰簡條はアラウカブルの告白、ハイデルベルグの問答書、英國教會の三十九箇條、ドクトリンの告白文、ウェストミンスターの信經、ヘルベチア會の告白等也。此等の信經に就ては各々其條を見よ。

信仰告白

Confession and Confession of Faith.

信仰告白

英語「Confession of Faith」は、希臘語「homologeo」の同義にして、三語各々二箇の義を有す。即ち一は言語又は行為を以て神の存在若くは其權威を承認するの義にして、他は自己の罪を承認し告白するの義也。(第二の意義に就ては「罪の告白」の條を見よ)神を彼等の神となし、眞の神として告白することは、以色列人が尙未だ一個の國民とならざりし時に於て要求せられたる處にして、アブラハムはエホバの名を呼びて此要求に答へ(創十三の四等)彼及び彼の子孫は又割禮を行ふことによりて其信仰を表白せり。然れ共時の移るに従ひ此告白は單に外部的となり、國民的意識の發達はエホバと其民との個人的關係を強調せしめたりしが、後個人主義の發達するに及び又此信仰を復活し(詩六十三の一、賽四十四の五)以賽亞書の中には此信仰の告白が、犧牲の或る行為に依りて件はれしことを證する者あり。又以色列國民の國歩艱難に際するに及びは、彼等の悔改が國民的信仰告白に依りて顯著にせられたるを見る(王上八の廿五、代下六の廿六)。

信仰の擁護者

それらに於けることよりなり。耶蘇復活後に至りては、此信仰告白の中には基督教の歴史的事實に於ける信仰をも含むに至りしが、又其種の發生するに及び、耶蘇を神の子と信す云へる神學的信仰をも含むに至りしが、如し(徒八の卅七、壹約四の十五)。然れ共當時尙未だ後世の所謂「信仰簡條」なる者は之れあらざりき。然るに信仰告白(Confession of Faith)なる語は、後漸次「信仰簡條」(Creed)と同意義に用ゐらるるに至り、教會歴史上に在りては、信仰告白も信仰簡條も共に、教會又は教派の公に承認したる説又は教義を表明せる者の義となるに至り、而して二者異なる處は、信仰告白は信仰簡條より後世の者なること、及び其文言信仰簡條に比して長き者なること、の二點に存す。何れも教義上争論の結果として生じたる者に於て、聖書の教訓を説明し其要を約説し、以て一致と平和を得んとする目的より成りたる者也。故に常に宗教上の改革と密接の關係を有す。古來重なる信仰告白は「アラウカブルの告白」(一五三〇)、「ヘルベチアの第一信仰告白」(一五三六)、「ワグタットの第一信仰告白」(一五六七)、「蘇格蘭信仰告白」(一五六〇)、「佛蘭西信仰告白」(一五五九)、「白耳義信仰告白」(一五六二)并に英國に於ては英國教會の「三十九箇條」及び「ウェストミンスター信仰告白」也。

信仰の擁護者

The Defender of the Faith (Fidel Defensor).

英國王の有する稱號。一五二一年十月十一日法王「フランス」(François I)が「亨利八世」(Henry VIII)に反對せんとすたる書(Diplém Sacermental)の功績を認め、フランス

の部

神學

世に與へたる稱號にして、後クレメント七世は更に之を承認せり。レオの勅書は現に英國博物館に保存せらる。法王は後「ヘンリー」を廢し、且其稱號を破ひたれ共、英國教會は之を回復し、爾後之を以て永く英國王稱號の一部となせり。

神學

Theology. 學科名 神學を譯せられたる語は、初てプラトーンの「共和政治」及びアリストテレスの「形而上學」に於て、神及び神の事に関する論説又は教義の意義に於て用ゐられ、神及び其行動を論じ、又は記述せる人々を神學者(Theologos)と呼べり。聖書の中には神學又は神學者なる語なしと雖も、約翰黙示録の標題には「Theologia」なる語を加へ、神學者約翰の默示録となせり。第三、四世紀頃に於ては、神學者なる語は通常ローマの神性を辯護する人々の稱となり、此理由よりアタナシウス及びナウアウスのクレメニウスは特に「神學者」と稱せられたりき。而して神學なる語は尙神に關する教義の意義を失はず、一般に直接に神の存在、性質及び事業に關する問題を論ずる學也として領解せられたりき。神學なる語が初めて宗教的眞理及び信仰の凡てを包容するに至りしは、第十二世紀に於てアベラールが「基督教神學」を編輯せし時に於て、之れより稍や後の頃哲學者は、一般に基督教の神學の大要を神學綱要と名けたり。中世紀の神學家は神學の眞理を以て神を直覺すること、に在りしと雖も、宗教改革者及び其直接の繼承者の中にも亦此說尙行はれたりしが、彼等は之と共に晩代の煩瑣哲學者等の間に行はれたりし此語の客觀的應用をも採用し、後遂に神學とは唯に個人心に固有し其生活に起る或る種の知識を指すのみならず、組織せられたる眞理、換言すれば一箇の科學の義となるに至れり。

神學

り。斯くして神學に議論せられ應用せられ、從て分類せられ得べき者となるに至りしが、第十七世紀に至り種々の原因より分類の必要起り、第十七世紀及び第十八世紀初の神學者は其所説の立場及び議論の方法を示すため「神學」なる語に理論的、實際的、教訓的、破格的、獨斷的、積極的、比較的等の形容詞を附したりき。神學なる語の範圍は、久しき間聖書より來る知識のみに限られたりしが、後更に廣く意義に之を用ゆるに至り、即ち第十七世紀より第十八世紀にかけて、神は自己を自然に於て顯現せりとの思想發達するに及び、所謂自然神學なる者起りたりしが、之と共に基督教以外の宗教も亦研究の對象となり、所謂比較神學なる者起り、天啓の知識以外に神學を認むるに至り、斯くて「自然神學」基督教神學の區別を生ずるに至り、然らば則ち神學なる語の一般の意義如何。之に就ては尙異説あるを免れず。殊に神學は神を論ずる學なりや、若くは宗教を論ずる學なりやとのことに關しては、學者の間に議論あることなれ共、今日多數の神學者は後説を探り、神學に定義を下して、神學は即ち宗教學也と云へり。此定義は第一に神學は宗教を豫想し、宗教は神學に先づきたることを含む。宗教の神學に先だつたは言語の文典に先だち、推理の論理學に先だつたが如し。此定義は又神學は唯に宗教に次で起るのみに非ず、學問と稱せられ得べき眞理の系統之より發達せざる可らずとのことを含む。故に神學は宗教學として宗教的事實及び原理を、其最も普遍精微なる形狀、其內的關係、其有機的一致及び組織的獨立に於て表明する者なることを宣言す。人は其他の事に於けるが如く、宗教的現象に於ても、其中に行

神學

はるる法則、秩序及び關係を求むるものにして、之が系統を立て之を組織するに非ざれば満足すること能はざるもの也。神學は即ち此宗教的現象を科學的に組織したる者にして、思想ある宗教信者には必要不可欠ならず。左れば何時の世如何なる國民の中に在りても、思想ある人々が其宗教的の信念を思ひめぐらし、之が根據を求め、之を調和し之を組織せんとし、基督教が長き間神、基督、聖靈、救等の問題を研究、討論したりしものは決して偶然に非ず。人の宗教的經驗には尙明白になすべき者あり、人類の宗教的歴史には矛盾せるが如く見ゆる者あり、又多くの困難なる問題あり、而して聖書は組織ある神學の書に非ざるが故に、人は合理的存在者として、凡て此等の現象を研究し之を統一ある科學的系統に組織せんと企てざるを得ず。是れ神學の起る所以にして、神學は此の如く一科の科學なれば、其研究の方法も亦他の科學と同じく科學的なるべきはいふ迄もなし。而して其研究の材料となるものは、聖書の外人間及び宇宙是也。現今基督教神學と稱するものは、種々に分類せらるるを得べしと雖も、之を釋義的、歴史の、組織的、實踐的、比較的の五科に分類するを以て最も便利也とす。而して此五科は更に左の如く區分せらる。即ち(一)釋義的神學は(イ)聖書釋義學、(ロ)聖書註釋、(ハ)聖書總論、(ニ)聖書神學にして、此四科は又各々舊約、新約の二科に區分せらる。(二)歴史的神學は(イ)舊約歴史、(ロ)新約歴史、(ハ)教會歴史、(ニ)教義歴史、(三)組織的神學は(イ)組織神學、(ロ)基督教哲學、(ハ)基督教倫理學、(四)實踐的神學は(イ)說教學、(ロ)牧會學、(ハ)禮拜學、(ニ)教會條例、(五)比較的神學(比較宗教)は(イ)印度の宗教、(ロ)支那

神 學 校

神 學 校

神 學 校

神 學 校

の宗教。(一)同教。(二)被斯の宗教。(三)埃及、ア...

神學校 Theological Seminary. 神學 古

代の希伯來人にもサムエル時代以後預言者の學校ありて、青年を公衆教育者たるやう訓練したり。祭司の子等は神殿にて祭司たるべき教育を受けぬ。後の世には會堂は猶太人の學校なりき。使徒等は初はバプタスマのヨハネの學校にて教育を受け、次で基督の學校にて之を受けたり。保羅は獨りラビ的教育を受く。基督教會にては早くより禮拜のためのみならず、護謄に反對し殊に異教に反對するため、特殊の教育の必要なるを感じ、初は各地方教會にて其の監督等が教育を授けたるが如くなれ共、第二世紀の終には亞歷山に神學校あり、學生等に基督教辯證學を教へ、聖書の研究を指導せり。亞歷山問答學校とは是なり。其の當初の目的は洗禮準備のため求道者を教ふるにありしが、次第に發展して信徒をも教ふるに至れり。名を冠せる最初の校長はパンテオモスなるが、最も有名なるはクレメンヌ及びオリギナスなり。初には教師は一人なりしが、後二人又は其以上となせり。定まれる俸給も特殊の校舎もなかりき。富める學生は謝儀を呈せしも屢々謝絶せられし事あり。教師は自宅にて教育し、古代哲學者の流儀を襲へり。オリギナスはカイザリアにも同種の學校を立てて、亞歷山の教會分離するに至り、此の學校も失せ去れり。是れ第四世紀の末の事なり。アンテオケの學校は亞歷山の學校に次で重きを爲せり。此は二九〇年頃長老ドロテオス及び長老ルキア

モスの起せるもの。亞歷山の空想的聖書解釋に反對し、嚴密なる文法歴史的解釋を主義とし、クリソストモス、モプスエスナアのテオドロス、ネストリウス等を出せり。エテウツにてもエフレム、スーロス(二七八死)學校を起し、アンテオケの流儀に従ひメソボミア及び被斯へ送る傳道者を養ひたり。西方教會にては僧侶は廢室及び監督私私にて訓練を受けたりしが、羅馬教會は此の方法を變じて組織せり。大バシロス、グレゴリウス、ナウアンセン。アウガスタヌスの如き學者的師父は、初め異教の學校にて學び、後に隱遁するが、又は有名の教會教師に従ふがして神學を修めたる者なりき。中世にては廢室學校は學問の唯一中心たりしが、やがて巴理、牛津、ケルン其他に大學起り、其の中に神學ありて最上位に置かれ、他科を支配するに至れり。英國にてはウイン、ワイツタリツフ(一三八四死)牛津にて神學校を立て、後ラツターウケルス同地に之を立て教しき僧侶を教育し、彼等は全國にロルラード派を散布せり。宗教改革等は初れも大學教育を受けし人なりき。プロテスタント派の教會の教師は大抵教育に於て秀でたる人なり。歐洲大陸にては諸科の神學生は大學の一部として教へられ、神學生は他科學生と同等に取扱はる。教授等は大學總科の中にあれど、而も一分科を成せり。大英國諸大學にては聖職に入らんと志願する者は、或る教授に就て讀書し、監督附教師より試験を受け、別に神學分科なし、唯だ神學教授は存す。されど大學以外に英國教會と關係せる十八の神學校あり、何れも監督の管下に在り。蘇格蘭にては國立教會はグラスゴウ、エダンバラ、聖アンドリュウ、アペルティーン四大學に各神學分科あり。自由教會はエヤ

ンバラ、グラスゴウ、アペルティーンの三市に各一の「神學館」を有せり。同國一致長老教會はエダンバラに一館を有す。英國の長老教會は倫敦に神學院を有す。愛蘭の長老教會はベルファストにテアローに之を有す。ウエスレアン派は大英國に七校を有し、會衆派は十四校、浸禮派は九校、天主教徒は廿六校を有し、何れも寄附金にて支へらる。米國の神學校に至ては殆ど擧げて數へ難きは多し、何れも寄附金に由りて支へらる。有名なるは會衆派のアンドーグアル神學校(今はなし)、ニウヘヴン(エール大學)神學校、オバリン大學神學校、コンネクチカット神學校(一名ハートフォード神學校)、シカゴ神學校、バンゴル神學校、長老派のプリンスストン神學校、紐育市ユニオン神學校、オーバーン神學校、グアルウニア市ユニオン神學校、西方神學校、レイン神學校、コロムビア神學校、西北神學校、和蘭レフォルムド教會のニウブルンズウイック神學校、獨逸レフォルムド教會のランカスター神學校、ハイアールベルグ神學校、ワルシナス學院神學校、メソサスト派のグアランドビル神學校、ドルフ神學校、ガレツト聖書館、浸禮派のニウトン神學校、シカゴ浸禮派一致神學校、クローザー神學校、ハミルトン神學校、ローチエスタル神學校、南方浸禮派、監督派のグアルウニア監督教會神學校、紐育市一般神學校、パルクレイ神學校、マツサチューセツツ監督神學校、ルーテル派のゲツタイスブルグ神學校、聖ルイス市コンコルディア神學校、ヒラデルヒア神學校、ユニテリアン派のハーグアード大學神學校、ミッドウイック神學校、ユニヴァーサリスツト徒のメソサスト神學校等あり。我國の神學校は尙多くは外國傳道會社の維持經營に

神 學 校

神 學 校

神 學 校

神 學 校

係り、基督教主義學校の一分科を爲す者之專偏に存在する者との二種あり。其中大なる者は專門學校令に據りて文部省の許可を受け、徵兵訓練の特権を有せり。現存する神學校は左の如し。同志社神學校(京都に在り、何れの宗派にも屬せず)、明治神學院(東京白金、長老派)、青山學院神學部(東京青山、メソサスト派)、三一神學校(東京築地、米監督派)、東京神學社(東京市ヶ谷、植村正久經營、東北學院神學校(仙臺、レフォルムド派)、關西學院神學部(神戸、メソサスト派)、聖教社神學塾(東京麻布、英監督派)、福音教會神學校(東京築地、福音教會)、聖學院神學校(東京澁之川、基督派)、浸禮教會神學校(横浜、浸禮派)、聖三一神學校(大阪、英監督派)是也。

神學士 Theologian. 神學博士 Doctor of Divinity. (D. D.)

神學士は規定の學科を修め試験を経て及第したる者に與へられ、神學博士は其學力若くは功績を表彰するために與へらるる名譽學位也。此等の學位は元來容易に與へられたりし者に非ず、今日にても英、蘇、獨等の諸大學にては尙然りと雖も、米國合衆國に於ては適當の意義に於て大學と稱すること能はざる設備不完全の學校に於て、諸種の學位を濫與するの風あり。故に同様に於ける諸種の學位は近來著しく其價値を減少したり。

新教 Religious Liberty. 制度

新教の自由は、國家が其法律に依りて、國民が如何なる宗教を奉じ、如何なる禮拜を行ふも、其自由を保障するをいふ。

「信教自由制度の沿革」 上古及び中世に在りては政教合一主義行はれ、信教の自由なるものあらざりしが、國家主權論研究の結果、プロテスタント教分盟の趨勢、教會の專横に對する原因、及び政治上に於ける自由主義の流行等諸種の反動相集りて、近代に至り信教自由制度を實現するに至れり。而して直接に起源となりし者は佛國の革命にして、一七九〇年革命黨が民政憲法を制定するや、佛國に在る羅馬教會の組織を一變し、僧侶に對して國憲遵守の宣誓を命じたりしが、百三十五名の監督中四人を除き餘は皆宣誓を拒みたりしが、彼等は或は國外に放逐せられ、或は斷頭臺に上りて其生命を失へり。於是教會の權勢地に落ち、獨り設の流行を見るに至りしが、是れ實に歐洲に於ける信教自由制度の嚆矢也とす。一七九一年同時に北米合衆國は其憲法(一七八七年九月十七日公布)に於て「宗教上の宣誓は合衆國の官職に任じ、若くは公の信用を維持する要件となすことを得ず」と宣言し、一七九六年トリゴス國王と締結せる條約には「合衆國の政治は如何なる意義に於ても、基督教を以て根本とすることなし」と云へり。歐洲に於ても自由主義は益々其勢力を逞ふし、各國の憲法何れも信教自由の主義を採用せり。即ち一八〇八年制定せるバイエルの憲法には「信仰の自由は何人とも之を有す。私宅の禮拜は如何なる宗教と雖も之を禁ぜず、王國內に在る三派の基督教徒は若同一の市民權を有す。基督教に非ざる教徒と雖も信仰の自由を妨げらるることなし」とあり。一八一九年制定せるウエッテナアルの憲法には「各人は國內に於て宗教の如何を問はず、全く本心の自由を享有すべし。市民權は信奉する宗教に關係せざるものとす」とあり。其他白耳義憲法(一八三二年制定)

「信教自由制度の内容」 信教自由制度の内容は二箇の原則を以て成る。即ち(一)國家は其領土内に存在する凡ての團體に對して統治權を有す。從て教會も亦國家主權の下に立つもの也。(二) 臣民は其信する所に從ひ宗教を選擇することを得べく、又國家の秩序を害せざる範圍内に於て、宗教上の儀式を行ひ、若くは集會をなし、結社を爲すことを得べしとのこと也。前者を國家の教會統治權の原則と云ひ、後者を臣民信教自由の原則と云ふ。(一) 國家の教會統治權の原則 國家の教會統治權とは、憲法及び法令の範圍内に於て、國家が其領土内に於ける教會を監督し、教會の宗務に對して監督權を執行し、及び他より侵奪せらるるを保護する統治權の作用をいふ。而して此統治權の正常なる發達と行動とは、獨り立憲諸國に行はるる信教自由制度の下に於てのみ之を見るべきのみ。信教自由制度が國家の教會統治權を基礎としたる結

シの部

信教の自由

果として、教會は左の事を務めざる可らず。
(イ) 國家の安寧秩序を妨げざる事 國家は人民に對して信教の自由を許すに際し、教會の教義又は其教徒の行爲が國家の安寧秩序を亂す、或る時は之を黙殺すること能はず。故に各國の憲法は一方に信教自由を許すと共に他方に其旨を宣言せり。明治廿二年二月十一日を以て發布せられたる我帝國憲法第廿八條に「日本臣民は安寧秩序を妨げず、及び臣民たるの義務に背かざる限に於て、信教の自由を許す」と規定せられたるが如し。

新月祭

て二重の保障を受く。
(ロ) 教會の自主權 教會をして自己の組織及び行政に就きて獨立且自治たらしむべしとせば、信教自由制度を採用する立憲諸國の均しく唱ふる所也。然れ共教會の自主權は教會をして國家より獨立せしむるに依り、國家の統治權の下に於て、或る範圍内に於て教會をして獨立して自己の事務を行はしむべしといふに在り。而して教會の自治に任ずべき事項の範圍に關しては、國に依り多少異なる所あるべきも信仰の範圍、教義の範圍、及び教會の行動に必要な設備は一般に自治を容認せらるるもの如し。

箴言

聞くべしとの事を記せり(四十六の一)。彼は第一月及び第七月兩度大新月祭のために、特別なる燔祭の備を爲し、又普通の新月祭にも供物の備を爲した(四十五の十八、廿、四十六の一、七)。門は黄昏迄開かれ、民は君(蓋しエセキエルを指す)を待たずして門口に入ることを許されたり。結四十六の六に依れば、新月祭の燔祭には僅なき小羊、小羊六頭、及び牡羊(安息日の燔祭は之れより少額なり)を供へたり。燔祭は牛の爲に一エバ、牡羊の爲に一エバ、小羊の爲に其手の及ぶ程を備へ、一エバに油一ヒンを加へたり(七、八)。民廿八の十一に從へば、燔祭は僅なき二の小羊、一の牡羊、及び當歳子の七の小羊にして、清き麥粉、油、酒等は程よく調和されたり(十二、十四)。而して罪祭として山羊を供へたり。此處にも以西結書に記さるる如く、燔祭は安息日の爲めの供物よりも更に重要な者なり(民廿八の九、十)。信すべき説によれば詩(八十一の三)に「新月と満月と節會の日とラツツを吹き鳴らせ」と記さるるは、普通の新月祭に關してのことなりといふ。

シの部

箴言

れ、才賦的の短き言語に言ひ顯はさる。箴言の中には又謙、哀言、嘆語等を含むことあり。要するに箴言は道徳的詩歌にして、人の常識を離れず能く實行し得る宗教的倫理を教へたる者にして、家庭、田園、市街、實業、政治及び軍事にまで應用して之を説けり。而して智慧は人の理想にして、之を得るは哲學的推論に依るに非ず、唯之を實行せば可也といふは此書教訓の要也。

箴言

最も著しかりし危険を指示するに在りし事明也。作者は十章以下に記載せる箴言集の編輯者と同一人なりしや否明ならざれ共、彼は兎に角此等の箴言を熟知し、其中より種々の言語を取りて之を自己の言語となせり。當時此書の讀者が殊に陥り易かりし過失は、張疊(一の十一、十八、四十四、四十七)淫逸(二の十六、五の三、廿、六の四、廿四、廿五、七の五、廿七、九の十三、十八)にして、六の十二、十九に更に他の過失に陥るならんことを戒めたり。又六の一、五には朋友のため保護を爲すことの輕率なることを述べ、六の六、十一には動勉の貴重なることを説けり。八章及び九の一、六に智慧を擬人化するは殊に注目すべく、此處には世界にはたらく思想を神より抽象して人格的動作者となし、之を神の傍に在りて創造者となり、歴史に入りて王侯に最良の思想を鼓吹し、世の人を喜び、其指導に従ふ者に溢るる報賞を約する神の家子として顯はせり。而して三の十九、廿、及び八の廿二以下に記せる言は、後に至り發達せるロゴス教義の萌芽として見るべし。斯くて智慧は許多の賜を設けて人を招けるに(九の一、六)『愚なる婦其家の門に坐して智慧なき人を其道に誘惑せり』とのことを以て(九の十三以下)之を諷へり。

箴言

此處に記載せられたる箴言は其内容頗る雜駁なるを以て、詳細に其性質を指示し難しと雖も、概して論ずるに、此集の箴言を以て次の集に記載せる者之比較するに、其調一般に快活にして光明を有す。勿論此處にも善惡、貧富共に顯はれざるに非ずと雖も、人生の幸福なる方面最も著しく顯はれ、徳は報められ、善者は榮ゆるを見る。此中には最も美しき宗教的箴言あれ共、其概括は多く俗生活より來り、而して或る特殊なる行爲又は品性に伴ふべき幸福を描けり。而して此等の宗教的箴言は主としてエホバの全能者又は全智を稱言し(十五の三、十一、十六の二、四、十七の三、十九の廿一、廿の十二、廿四、廿一の二、廿、廿一、廿二の二)又エホバを畏るるより來る福祉を示し(十五の十六、廿九)エホバの

16の部

箴言

『聖むべき者』を描き、義は犠牲よりも神の喜び給ふ所也との教訓を記載せり(廿一の三)。又人は此世に於て其行ふ所の行為に従て報いらるべしとの精神は、此集全體に渡れり(十の二、三、六、七、廿五、廿七、卅、十一の四、五、六其他)。智慧ある者と思なる者、彼等の目的及び其受くる運命は愚者對照せられ、富者と思ふ者、勤めばたらく者と思ふ者(十の四、五、十二の廿四、廿七、十三の四等)及び戯論者(十三の一、十四の六、十五の十二等)も亦屬せり記載せらる。所謂『愚者』とは其薄志弱行なるがため、又は其心頑固なるがため、人生を正しく送るに必要なる理解力を缺き、從て其同胞の嘲笑輕蔑を蒙るを免れざる者といふ。富は其所有者を益すれ共(十の十五、十三の八、十四の廿、廿四、十九の四、廿二の七)不義にして之を獲(十の二)又は之に頼らんとする者に在りては然らず(十一の廿八)。驕傲に關しては十三の十、十六の十八、十九、廿一の四等に記され、貧者を憐れむべきことば十四の廿一、十七の五、十九の十七に記さる。言を慎むべきことば就ては箴言の大部分之を記し、輕忽に保證者となるべからずとのことば十一の十五、廿の十六に之を教ふ。賢き妻は神の最良なる賜として記され(十二の四、十八の廿二、十九の十四)慎みなき婦、争を好む婦は嘲弄的に描かる(十一の廿二、十九の十三、廿一の九、十九)。父母の權威の貴重なることは承認せられ(十三の十四、十九の十八、廿二の六、十五)父母を敬はざることは嚴責せらる(十三の一、十五の五、十九の廿六、廿の廿五)王は其義しきことば正義を愛する(十二の十四の廿五、十六の十、十二、十三、廿の八、廿二の十一)其智慧(廿の廿六)其仁慈(廿六)其實(廿の廿八)及び其神の導に従ふ事(廿一の二)に依り

箴言

て讀めらるべく、其榮は民の多きに在り、民の多きは義を行ふに在り(十四の廿八、卅四)と云ひ、王の事を記するや常に編註と光明を以てし、此集には暗黒たる陰翳の之に伴ふ者なし。

(三)第三集(廿二の十七、廿四の廿二)廿二の十七、廿一の三は此處に記せる箴言集の緒言にして『智慧ある者の言』として次に記さる語を聽くべしとのことを讀者に促せる者也。此集の緒言は概して論するに、第二集よりも形式に拘泥すること少く、二句の對句は僅に之れあるのみ、大抵四句にして、又三句、五句、六句、七句、八句をなす者さへあり。又此集は第二集の如く、個々の箴言を集めたりといふよりも、實際的目的を以て成る一個人(我子)なる語を用ひ)に向ひて述べたる箴言を集めたる者にして、此格言の中に箴言を交へ、多少連續せる議論となしたる者也といふべし。其第一集の緒言と同じく勸勉的の類共、其之を異るは彼に在りては主として單一なる主意、即ち智慧を説くことに限られたるに在り。此處に記せられたる箴言は多くは實際的性質を帯び、人のため保證をなす勿れ(廿二の廿六、廿七)食り食ふこと勿れ(廿三の二、三)富を得んと思ひ煩ふ勿れ(廿三の四、五)酒に耽り肉を嗜む者と交る勿れ(廿三の廿二、廿九、卅五)等の諷諭を擧げたり。

(四)第四集(廿四の廿三、卅四)『此等も亦智慧ある者の箴言也』の標題を有す。第三集の補遺として二句、三句、六句、十句、廿句等の箴言を有する處相似たり。情者に關する十句(卅一、卅四)は作者の經驗より來れる短き訓話也。

(五)第五集(廿五、廿九)『此等も亦ソロモンの箴言也』と解す可し。且此集に記せたる箴言の文體及び内容は後代の作なるを示せり。第二集は明に『ソロモンの箴言』の標題を有すれ共、之れさへ其全體を以てソロモンの作也と信じて難し。何となれば此集中には同一の箴言、又は其一部分同一なる箴言の繰り返りかへさるること少からざるのみならず、同一の思想を異りたる言語にて云ひ顯はせるものも亦少からざるることなれ共、同一作者が、あることをなしたりしとは信じて難きことなれば、此は蓋し多くの智者の言語を録したるものなるべし。又爰に記されたる箴言の中には、ソロモンの地位及び品性に適合せざるもの頗る多し。例之王に關する箴言は人民の感想を述べたる者にして、王者が自己又は其他の王者に就て有する感想を述べたる者に非ず。又富を排斥し、一妻主義を稱揚せる箴言の如きは、ソロモンの口より出でたりと信ずること能はず。去れば第二集は王政時代に出でたる多くの『賢者』の箴言を集めたる者にして、其中心は王上四の卅二に記せる傳説の如く賢王の作なりしと推定するを以て、最も真に近き説也とせざる可らず。但し何れの箴言がソロモンの作なりやは今日之を定むるを得ず。而して此集が文體に於て終始一致せるものあるは、思ふに初めソロモンに依りて創始せられたる者なれば、後他人のやが之に倣ひたるに由るなるべし。第五集も『ソロモンの箴言』也との標題を有し、且ヒセキヤ王の時代には既に古き者として知られたりしと云へば、是亦第二集と同一の性質を有する者なるべし。然れ共其全體若くは多數を以てソロモン自らの作也と断定し難し。

【参考書】 エラドの『ソロモンの書の説明』ヒツタツダ。アリツナ及びノラツツの『ソロモンの箴言

箴言

の箴言也、ユダの王ヒセキヤに關する人々之を撰めたり』の標題を有す。第二集の補遺にして、此處にも對句あれ共、第二集の如く規則正しからず、又同々三句、五句、十句、廿句等の者あり。此集の緒言は第二集の如く、提唱法(廿五の八、九の『聖』十一、十二の『金』の如し)に依りて集められたる如く見ゆる者あれ共、同一の主意に従て集められたる者更に多し(廿五の一、七は王、廿六の三、十二は愚者、十三、十六は情者、廿三、廿六、廿八は酒飲者に就て云へるが如し)。又第二集に在りては反意對句多數を占むれ共、此集に在りては反意對句は唯廿八、廿九章に在るのみにて、廿五、廿七章は大抵比較對句也。比較對句とは自然又は人生の成物と比較して說明するの謂にして、此比較は時として明白に言ひ顯はさる事あり。例之『榮華の盛なる者に適はざるは、夏の時に雪ふり、樹木の時に雨ふるが如し』(廿六の二)といふが如し。又時として二句の觀念を並置するのみにて、讀者の推論に任ずるあり。例之『遠き國より來る好き消息は、渴きたる人に於ける冷なる水の如し』(廿五の廿五)といふが如し。廿八、廿九章の箴言は第二集の箴言と頗る相似たる處あれ共、全體より之を見れば、此集の箴言は社會の變化せる状態より起りたるが如し。此處には王は第二集に於けるが如き光明を以て記さるることなく、廿五の五には『王の前より惡者を除け』とあり、廿八の二には王位を脱履する侯伯多しとあり、其意をほのめさせり。宗教的箴言は此集には唯稱に之れあるのみ(廿九の十三、廿五、廿六)國家の要素として預言者の緊要なる事は明言せられ(廿九の十八)『愚者』は嘲笑的攻撃の衝となり(廿六の一、三、十二)情者は嘲けられ(廿六の十三、十六)

17の部

箴言

勸勉は教へらる(廿七の廿三、廿七)。

(六)第六集(卅章)『マケの子アアルの語なる箴言』の標題を有す。二、四節は神は知り難しといへる懷疑家の言を記し、五、六節は神は自らを顯現し給ふこと云へる作者の言を記し、而して七、九節に於ては、世の幸福に誘はれ神を棄つるが如きこと勿らしめ給へとの祈を記す。十一、十三節は九箇の箴言より成る。即ち疑義に對する戒、聖き世類の四箇、四の箇くことを知らざる者、不孝なる者の運命、四の不可議物、四の耐へ難き物、四の賢き動物、四の善く歩む者及び争論に對する戒にして、斯く四の教の使用せらるるは著しき特色也。

(七)第七集(卅一の二、三)『シムエルの言、即ち其母の彼に教へし箴言』の標題を有す。即ちシムエルの母が彼に向ひて、酒食に耽ることなく、貧窮者を憐れむべきことを教へたる言を載せたる者也。

(八)第八集(卅一の十一、十二)『標置なし。賢き婦人を描きたる者にして、希伯來語にては各節いはば順に排列せらる。』以上示したる如く、此書は其性質を異にせる幾多の集より成りたるものなれば、此書が漸次一冊の書となりたる者なることは甚だ明也。普通の説に従へば、最古に成りたる者は第二集(十の廿二、十六の卅三)也。第二集が何時頃成りたる者なりや精密に之を決定し難しと雖も、其中に記されたる箴言の含める社會の狀態、殊に王に關して云へる所の者より之を推すに、王政の黄金時代に成りたる者の如く、アリツナはエホシヤハット王の治世なるべしと云ひ、エラドは前第八世紀の初めなるべしと云へり。此の最古の集に先づ加へら

箴言

れたる者は、第一集(一、九章)及び第三集(廿二の十七、廿四の廿二)なりしなるべし。而して第一集の作者の目的は既に云へるが如く、第二集の箴言に勸勉的の緒言を附するに在りたることなれば、彼が第二集の公刊者なりしこと殆ど疑なし。第一集の時代に關しては、エラド、アリツナ、ノラツツ及びチエリ共之を伴ひたる少く以前に在りたる爲す。第三集は第二集と同じく勸勉的の類共、其文體多くの點に於て同じからざるを見れば、第一集と同一作者の手に成りたる者には非ざるべし。然れ共『我子よエホバと王を畏れよ』(廿四の廿一)とあるを見れば、此亦併因以前に成りたること疑なく、而して之が補遺たる第四集(廿四の廿三、卅四)が併して廿五の二、廿四の廿三に在る標題は共に『此等も亦』の文字を有するより、第五集(廿五、廿九章)も亦第四集と同一作者に依りて附加せられたる者なるべしと想像せらるる共明ならず。第六、七、八集中の箴言は何れも併因以後の作なれば、此書が現代の形狀を爲すに至りしは併因以後の事なることいふまでもなし。

然らば吾人は此書をソロモンの箴言と呼ぶを得べきや。第三、第四、第六、第七、第八集は其標題よりするも其他の點よりするも、ソロモンと何等の關係を有せざることを明なることなれば、吾人の愛に考察すべきは唯第一、第二、第五集のみ也。一の二に『デビヤの子イスラエルの王ソロモンの箴言』とあるは、此書全體又は第一集の標題に非ずして、ソロモンの箴言の價值を説き、遂に第二集を指示せる最初の數節(一、二、三)と關聯せる語に過ぎず。故に之を以て第一集がソロモンの箴言なることを示した

箴言

る者也と解す可し。且此集に記せたる箴言の文體及び内容は後代の作なるを示せり。第二集は明に『ソロモンの箴言』の標題を有すれ共、之れさへ其全體を以てソロモンの作也と信じて難し。何となれば此集中には同一の箴言、又は其一部分同一なる箴言の繰り返りかへさるること少からざるのみならず、同一の思想を異りたる言語にて云ひ顯はせるものも亦少からざるることなれ共、同一作者が、あることをなしたりしとは信じて難きことなれば、此は蓋し多くの智者の言語を録したるものなるべし。又爰に記されたる箴言の中には、ソロモンの地位及び品性に適合せざるもの頗る多し。例之王に關する箴言は人民の感想を述べたる者にして、王者が自己又は其他の王者に就て有する感想を述べたる者に非ず。又富を排斥し、一妻主義を稱揚せる箴言の如きは、ソロモンの口より出でたりと信ずること能はず。去れば第二集は王政時代に出でたる多くの『賢者』の箴言を集めたる者にして、其中心は王上四の卅二に記せる傳説の如く賢王の作なりしと推定するを以て、最も真に近き説也とせざる可らず。但し何れの箴言がソロモンの作なりやは今日之を定むるを得ず。而して此集が文體に於て終始一致せるものあるは、思ふに初めソロモンに依りて創始せられたる者なれば、後他人のやが之に倣ひたるに由るなるべし。第五集も『ソロモンの箴言』也との標題を有し、且ヒセキヤ王の時代には既に古き者として知られたりしと云へば、是亦第二集と同一の性質を有する者なるべし。然れ共其全體若くは多數を以てソロモン自らの作也と断定し難し。

【参考書】 エラドの『ソロモンの書の説明』ヒツタツダ。アリツナ及びノラツツの『ソロモンの箴言

シの部

心象研究。神人協同論。神人同感説。新生

新生

神聖

心象研究 Psychical Research. 雜語

言「チエー子の『約百及びソロン』ドライヴエルの『舊約文學緒論』註釋としてワイルデアール及びトイを推す。

神聖

記者は一般に此比喩を用ひて神の生命の人の靈魂に於ける起源を表す。例之『再び生る』と云ひ(彼前

神聖

えざることなれば、其働きそれ自らを知ることは到底出来難きことなれば、新生の何物なりやは神及び基督の關係に於て之を見ることを得べし。

シの部

神聖

神聖

神聖

に限りて用ゐらるゝを得るの義也。而して此觀念は原始の宗教より起り、以色列人の宗教に傳へられたるものにして、吾人が舊約の中に古代セミチツク的異教の觀念の殘存する者あるを發見するは敢て驚くに足らず。今左の順序に依り舊約に於ける神聖の觀念を叙述すべし。

ア 神文中の「神聖なる神」及び第四の八、九、十八、五の十一に記せる異邦人の口に置かれたる同一の語も共に此廣き意義に於て用ゐられたるが如し。第九の十、神の三には神聖なる文字の複数を殆ど神の固有名稱たるが如くに用ひ、第四の廿五、廿六の十、哈三の三には其單数を同様の意義にて用ゐたり。左れば此語は神の凡ての性質を含めて用ゐられ、其義(神格divinity)といふに同じ。而して此語が神に適用せらるゝに至りしは、神は世界より「分離」せられ、其上に超越たりとの思想に基けるものにして、一言を以て云へば古代の宗教は、神を以て人の容易に近づき可らざるものとしたり。以色列の宗教も亦此思想を繼承せる者にして、神の性質に關する思想は漸次發達したる「近づきしむ」といへる根本的觀念は常に聖なる神の思想を離れず。舊約の神を顯はす者「神聖」なる語と關係を有するもの三あり。即ち左の如し。

るが如き、何れも「神聖」といへる語に偉大、權力、尊嚴の觀念を附したる者にして、此思想は舊約以前に於ては「神聖」といへる語に於ては至大なる權力を有せる尊嚴より外に他の意義なし(廿の四十一、廿六の廿四、廿八の十六、廿三等を見よ)。

神聖

しめたり(六の五)。彼が「聖なる神は正義に依りて聖とせられ給ふべし」(五の十六)と云へるも亦神聖と

られたるも蓋し此意義也(王下四の九、耶一の五)。又以色列國民はエホバに聖別せられたりとの意義を以て全體として聖き民と稱せられたり(出十九の六、民十六の三、五、七、申七の六、十四の二)等。

神聖の觀念は又或る規則を守ることを含む。例之祭司及びナザレ人が或る特殊の生活を要求せられたりしが如し。然れ共此觀念の最も著しき發達は、以色列國民全體に此語を適用せられたる場合に於て之を見るべし。エホバは其民として特に以色列國民を選び之を聖め給ひたれ共、彼等は又エホバの意志及び性質に適へる要求に従ひて自らを聖めざる可らず。此等の要求は主として物質的の汚れを免るための外部的儀式を行ふことに在りし雖も、其中には又道徳的意義を含み(利十九等)以色列國民の神聖は神の律法に従ふことに依りて初めて維持するを得べしとせられたり(民十五の四十)。此點に於て神聖の觀念は又倫理的意義を有するに至り。而して詩篇の靈的宗教のみならず、外部的神聖の意義消失して全く倫理的意義のみなるに至り(詩十五、及び廿四の三以下)。神學上の立脚地より云へば、神聖に關する舊約教義の最も大切な興味は、此觀念の漸次變化せられたる點に存す。思ふに此語の倫理的方面は先づ神に於ける適用に初まり、而して神を禮拜する人に及びたるなるべし。然れ共舊約に於ける此發達は中途にして止まり、基督が外より入る者は人を汚さず、内より出づる者を汚すといふの原理を明かに至りて、初めて神聖なる觀念の道徳的要素外部的形式の關係を脱するに至り。【新約に於ける觀念】新約は「神聖」なる觀念を表するに「聖」なる語を以てす。此語は希伯來語の「qados」と神と同義にして、七十人譯は此希伯來語

神聖

我歡喜の心的状態にありとす。此エグゼクシオンの心狀は靈魂が五官の生活を離れて向上する最高至極の境界なり。去れば此境界に達するは極めて困難の事にして、又之を常性ならしむるは更に困難の業なりとす。但し人心が此境界に達するに非ざれば、神の正智に到達する能はざるなり。

神聖の觀念は又倫理的意義を有するに至り。而して詩篇の靈的宗教のみならず、外部的神聖の意義消失して全く倫理的意義のみなるに至り(詩十五、及び廿四の三以下)。神學上の立脚地より云へば、神聖に關する舊約教義の最も大切な興味は、此觀念の漸次變化せられたる點に存す。思ふに此語の倫理的方面は先づ神に於ける適用に初まり、而して神を禮拜する人に及びたるなるべし。然れ共舊約に於ける此發達は中途にして止まり、基督が外より入る者は人を汚さず、内より出づる者を汚すといふの原理を明かに至りて、初めて神聖なる觀念の道徳的要素外部的形式の關係を脱するに至り。【新約に於ける觀念】新約は「神聖」なる觀念を表するに「聖」なる語を以てす。此語は希伯來語の「qados」と神と同義にして、七十人譯は此希伯來語

神聖同盟

をするに此語を以てせり。此語の根本的觀念は「分離」にして從て其道徳的意義は「聖」より離れ、神に聖別すといふに在り。故に基督教は此語に最高の倫理的觀念を與へ、罪惡の世界より離れ、神と調和すと云へる意義を附し、主として之を性質に適用せり。故に此語は「外部的に神と結合せる神聖」の義を表はせる「qados」の義を表せる「sanctus」値ある。又は「尊敬すべき」の義を表せる「venerabilis」及び「清潔」の義を表せる「purgus」より高く大なる意義を有す。即ち此等の語に比すれば一層積極的、包括的にして更に高大純潔なる倫理的、靈的意義を有し、神の如きこと、換言すれば完全の義を表す。今此語の新約に用られたる類例を舉ぐれば、約十七の十一には之を神に適用し「聖父」と云へり。而して其意十七の廿五の「義しき父」といふに同じく、共に神の性質の道徳的一致を表す。黙四の八には「聖きかな聖きかな聖きかな」とあり、神の凡ての稱讃を受くべき者なることを表す。又新約は此語を神の靈に適用し「聖靈」と云へり(聖靈に關しては其條を見よ)。又耶穌に之を適用して「聖耶穌」と云へることあり(徒四の卅)。基督教徒は一般に「聖徒」と稱せらる(「聖徒」の條を見よ)。又非人格的物象に此語を適用せるものあり「聖き石」(提後一の九)「聖約」(路一の七十二)と云へるが如し。其何れの場合に在りても全然倫理的意義を有するは新約觀念の特色也。

神聖同盟

The Holy Alliance. 事蹟 露西亞、境大利及び普魯士三國君主の間になされたる、内政及び外交共に基督教道徳を基礎とせる高尚なる主義に依りて行ふべしとの條約にして、露西亞皇帝亞歷山一世が草案を作り、一八一五年九月

シの部

神聖政治。新年。神秘説

巴理に於て調印せられたり。是れ熱心なる神秘家マダム、デ、カール、アチルが當時亞歷山一世に大なる感化を與へたりしがためにして、此同盟の成りしは主として此婦人の力に依り。 神聖政治 Theocracy. 術語 王治政治、民主政治、貴族政治に對し「神の統治」を意味し、始めてヨセフ・アラスに由り獨太獨特の政體を表はす語として用ひらる。モーセの律法は神意の直接影響たると同時に、人民の政治的法律なりしかば、神は實際獨太國家の治者たりし也。されど此名は何れの人民にても政治的發展の同一段階に在るものに適用するを得べし。即ち政治と宗教とに未だ區別を立つるに至らざる國家の政治體をかく言ひ得べし。 新年 New year. 時令の條を見よ。 神秘説 Mysticism. 學派名 神秘説とは神は思案によりて正當に領會し得るものにあらず、唯智識を超越する直接なる直覺(見神及び神人感合)によりてのみ、其正智に達し得べしとなすものにして、換言すれば道徳上の精進をも智力上の活動をも擧げて一の直觀、妄我、接神などいふ恍惚境に達する一方便に過ぎざるなし、寧ろ頓悟直觀を奨励する學派の義也。 神秘説は宗教上にありては最も古代より世に存するものなりしが、之れに哲學的見解を與へしは、第三世紀に於ける新プラトーン學派の哲學を以て嚆矢となす。勿論第一世紀に當りて亞歷山のフィロンが神秘説を主張し、同時代の哲學的宗教思想も亦神秘説に傾向せざるに非ざりしと雖も、新プラトーン學派は最も能く此思想に哲學上の價值を與へたるものと云ふべし。新プラトーン學派に従へば、人心が直覺によりて神と一致し得るは、エクスタシス(無

神秘説

我歡喜の心的状態にありとす。此エグゼクシオンの心狀は靈魂が五官の生活を離れて向上する最高至極の境界なり。去れば此境界に達するは極めて困難の事にして、又之を常性ならしむるは更に困難の業なりとす。但し人心が此境界に達するに非ざれば、神の正智に到達する能はざるなり。

神秘説

く受動的となりしと説けり。エックハルト(Eckhart)は更に思想的、獨創的なる神秘説を主張したる人にして、煩瑣哲學的影響以外に獨立せるはいふ迄もなく、當時の正統神學の傳統を脱し、其感化の及ぶ所宗教的なる獨逸派の神秘説を發生し、ルーテルの大に稱讃する所者となれり。世界及び有限物を脱離するは一般神秘説の特長なるが、エックハルトは更に此點を高調し、全然自己を脫離超越することを理想として之に精進しき。彼は個人の靈魂をして實在者たる神と隔離せしむるは、一に自己あるが故也と見たる也。斯くして彼は神の外には何をも知るまじく、何をも意識すまじく、何をも考ふまじきを理想となし、一切の道徳此中に在りて考へたりき。 煩瑣哲學と近世哲學との中間に在りて神秘説を主張したりしはヤコブ・バウメ(Jakob Böhme)に於て、獨逸神秘派の流に於て最も之を得る一種の宗教的哲學に加ふるに、自然界の秘密を探求する傾向を以てしたるは彼が神秘説の特色也。彼は己の宗教的實驗の上より考察して、自然の性を生まれりたる性との相對することを發見し、斯の如く凡ての活動凡ての存在は自ら相對する者に分るることによりて起る、神も相對する者に分るることによりて、其智慧輝き初め、眞に活動する神生れ出づ、即ち神が自らを見ることに於て父と子とに分れ、而して神の子を見る働の出づる是れ聖靈也と説けり。此説は近世哲學史上に其感化を及ぼし、カント以後の獨逸唯心哲學者の時代に至りても尙思想界に影響する所少からず。ウイリアム・ローの神秘主義がバウメの感化を襲ひしは争ふべからざる事實也。 近世哲學史上に於ても神秘説は跡を絶たざるには非

神聖的託宣。新プラトーン學派

す、往々に見受くる所なれども、有名なる哲學者に於ては、特に神聖論者と稱すべき人あらず。

神聖的託宣 The Stylian Oracles.

【書名】 舊約經外聖書の二書。『經外聖書』の條を見よ。

新プラトーン學派 Neo-Platonism.

【學派名】 上世哲學の末期に於て、文化の中心希臘より亞歷山に移り、東西の文化此處に接觸せし時に當りて、プラトーンの思想を復活して、之に東洋思想を加味せし中世哲學宗教的思想也。

申命記

學者の務となしたりき。然るに此學派に至りては更に一步を進め、現世の缺陷を感ずることを甚だしく、所謂無定形物を以て第一要とし、之れより派生したる者を第二要即ち肉體となし、而して人心の百態皆此二派より來ると觀じき。

申命記 Deuteronomy.

【經名】 舊約聖書モイセ六經中の一書。拉丁名 Deuteronomium は希臘語 δευτερονόμιον を音譯せる者にして、此希臘語は七十人譯申十七の十八に在り。

此書はモーセが其死する前に方り、モアブの平野に於て語りし最後の言を記せる者にして、其歴史的地位は簡短なる緒言(の一―五)と結文(卅四)とに示さる。

申命記

【此書の内容】 此書はモーセが其死する前に方り、モアブの平野に於て語りし最後の言を記せる者にして、其歴史的地位は簡短なる緒言(の一―五)と結文(卅四)とに示さる。

申命記 Deuteronomy.

【經名】 舊約聖書モイセ六經中の一書。拉丁名 Deuteronomium は希臘語 δευτερονόμιον を音譯せる者にして、此希臘語は七十人譯申十七の十八に在り。

此書はモーセが其死する前に方り、モアブの平野に於て語りし最後の言を記せる者にして、其歴史的地位は簡短なる緒言(の一―五)と結文(卅四)とに示さる。

申命記

と同じく、其中心を爲せる原作の敷衍せられ、改正せられ、増補せられたるもの也。蓋し五―廿六(廿七の九、十)廿八章は、其全體若くは一部分此書の原作にして、五―十一(十一の九、十)廿八章は其起原の全く異なる材料より成れる者にして、其中には古代の諸伯來歌集より取りたる者あり(卅二の二―四、卅三、卅三章)。又其根源祭司法典と同じと思はるる者あり(卅二の四、卅三、卅三章)。

申命記

【此書の法典】 此書の法典は左の順序を以て記さる。(イ)宗教的義務(十二―十六)。(ロ)政治上に關する制度(十七―廿)。(ハ)社會的及び家庭的生活上に關する規則(廿一―廿五)。

申命記

【此書の内容】 此書はモーセが其死する前に方り、モアブの平野に於て語りし最後の言を記せる者にして、其歴史的地位は簡短なる緒言(の一―五)と結文(卅四)とに示さる。

申命記

申命記

申命記

申命記

一 國民的宗教生活。
 (イ) 公拜。
 (一) 聖所は一所なるべしとの律法(十二の二一―二八)。
 (二) 非偶像禮拜に關する律法(十二の廿九―十三の十九)。
 (ロ) 宗教的義務。
 (一) 個人人の清潔なるべき事(十四の一―廿一)。
 (二) 愛(十四の廿二―十五の十八)。
 (三) 宗教的儀式―犠牲及び祝節(十五の十九―十六の十七)。
 二 國家行政に關する律法。
 (イ) 政治上の役人。
 (一) 士師(十六の十八―廿、十七の八一―十)。
 (二) 國王(十七の十四―廿)。
 (ロ) 宗教上の役者。
 (一) 祭司(十八の一―八)。
 (二) 預言者(十八の九―廿二)。
 三 刑法。
 (イ) 殺人(十九の一―十三、廿一の一―九)。
 (ロ) 財産(十九の十四)。
 (ハ) 證據(十九の十五―廿)。
 (ニ) 戰爭(廿、廿一の十一―十四)。
 四 其他の律法、即ち長子相続權、誘拐、離婚(廿一の十五―廿一、廿二の十三―廿、廿四の一―五、廿五の五―十二)貸借及び利息に關する律法(廿三の廿、廿一、廿四の六、十一―十三)。

【著作の時代及び著作者】 此書著作の年代は正確に知ることは出来ず、希伯來文學の歴史の極めて早期時代に成りたる者に非ざるは、左の事實に依りて明也。
 (一) 此書の言語、文體は豊富、流麗にして、希伯來文學の初期に屬する者に非ず、既に發達せる時代に屬する者なること明也。
 (二) 此書に記せる宗教上の教訓も、亦此書が以色列國民の初代に屬する者に非ざることを示す。即ち前記に示せる如く、神の愛を高調せるは此書の著しき特色にして、一般の信する處に依れば、預言者モセアは此教訓の最初の表明者也。而してドライウヰエルは此書の教訓を以て預言者に基けりとなせり。又此書の唯一神教は初代以色列人民の唯一神禮拜の發達せる者にして、唯一箇の禮拜所に於てのみ神を禮拜すべしといへるは、唯一神教の思想を具體的に表明せるもの也。斯る思想は宗教的訓練の既に熟したる時代に於てのみ到達すべき者也。
 (三) 此書に記せる律法を出廿一―廿三に記せる者と比較するに、此書は契約の律法に基き、之に勸奨的の言語を附したる者に過ぎず。又他の場合に在りては、此書の律法は古代の律法を修正したる者にして、人情、文化の一層進歩せる時代に成りたる者なることを示せり(申十五の十二―十七と出廿一の二以下及び申五と出廿三の十を比較せよ)。
 (四) 國民的禮拜に關する此書の律法も、出廿一―廿三に記せるものより後の時代に屬する者なることを顯はす。出廿の廿四に依れば、以色列人は其至る所の地方に祭壇を築くことを得たり。而して隨所祭壇を築き禮拜を設くるの風は、モセア以來普く行はれ、ヘセキアに於り初めてエルサレムを以て、國民的禮拜の中心となさんとすに至り(王下十八の

四、廿二)而して此書が中央禮拜所の必要を極論するを見れば、以て此書著作の極めて早期時代に非ざるを想像し得べし。
 (五) 禮拜に關する此書の律法が完全の者に非ざるは云ふ迄もなく、此書は過越節及び捕虜節の精密なる時日を記さず。斯く此書の宗教的律法は斷片的にして、且祭司法典と矛盾せる處少からず。例之祭司法典に在りては「アロンの子孫」とレビ人の間に區別ありと雖も、此書には此區別なく、レビ人は分なく産業なきものなれば之を助くべしとのことを規定せり。又首出十分一税に關する律法にも兩者の間に大なる相違あり(申十二の六、十七以下と民十八の十八と。及び申十二の十七以下、十四の廿二と民十八の廿一―廿八、利廿七の廿、卅二を比較せよ)。而して此書には五十年節、贖罪の日、レビ人の市邑、罪祭、聖祭等を記さず。もし祭司法典に記せる律法にして此時既に存在したりとせば、此書が全く之を看過したりしとは信じ難し。
 以上の理由に由り、此書の律法が出廿一―廿四に記されたる古代法典の數層せられ、發達したる者なること共に、祭司法典の編輯以前に成りたる者なることは殆ど明也。而して(イ)此書はヨルダン河の西に於て書かれたる者なる事(一の一、五、三の八、四の四十一等)。(ロ)十七の十四―廿に記されたる王國の律法は、ソロモン朝の聖習を知りしと思はるる言語を以て書かれたる事(ハ)十七の八一―十三に記されたる訴訟に關する律法は、新なる制度に非ずして、既に存在し且代下十九の八一―十一に記されたる者と同似する事。(ニ)イザヤは埃及に於てエホバを拜むたため方尖塔を立てたりとのことを語れり。去れば彼は「汝の神エホバの温み給ふ方尖塔を己のために立つ

申命記

申命記

申命記

申命記

可らず」と云へる此書(十六の廿二)の律法を知れりと思はし難き事。(ホ)此書は天軍を拜むことを以て偶像禮拜となせり(四の十九、十七の三)。然れ共天軍崇拜が宗教的誘惑の原因也とのことは、アハブ王の時までは曾て記載せられざる事。(ハ)耶利米亞書の文體に感化を受けたる形跡少からざる事を併せ考ふる時は、此書はアハブ王の即位よりエレミヤの文學的活動をなせる時代に至る迄の間に編輯せられたる者也との結論に達し得べし。
 ヨシア王の治世第十八年(前六一三)エルサレム神殿の修葺をなさんごせし時、祭司長ヒルキヤ、エホバの家に於て「律法の書」を見せり(王上廿二の三以下)。此「律法の書」が申命記の大部分(五一―廿六、廿八)同一なる者なることは疑なし。此律法の書の作者はヒルキヤ自身にして、之を神殿にも發見したりとの物語は作話也との説あれ共根據なし。此書がマナセ王の治世又はヨシア王治世の初に書かれたる者なるべしとのことは、今日の諸學者が一體に承認する處にして、マナセ王はヘセキア王がエルサレムの中央禮拜所に於て神を禮拜すべしとのことを以色列人民に命じ、崇祀に於ける禮拜所を廢止せる政策に反對したりしことなれば、思ふに此書はマナセ王の時代に於て、崇祀に於る禮拜、之に伴ふ腐敗、及び當時巴比倫より輸入に入り來りし諸種の迷信に反對し、百弊の根本に向て一大打撃を加へ、以て世道人心を革新せんとの目的より著されたる者にして、著者は安全のため之を神殿の中に隠し置きたりし者なるべし。申命記が現時の形状に於てモセアの書きたる者也との傳説は、今日の批評家のものは一般に承認する處にざる所にして、作者が自ら其名を人格とを没却し、モセアの人格を標榜し之を以て

モセア自身の作なるが如く記せるは、要するに作者がモセアを祖述せりと確信するが爲めに外ならず。而して此書が政治家又は律法家の作に非ずして、預言者宗教家の作なること、而して其言語、思想、及び文體より察するに、前第七世紀頃に出でたる人の作なること殆ど疑なし。
 【參考書】 申命記に關する充分なる議論を知らんと欲せば、ドライウヰエルの「申命記註釋」舊約文學總論」及びスミス「聖書詳論」中の「申命記」の條を見るべし。其他の參考書として、エートロー「ハーパーの註釋書」、ライム「コルネル、ケーニヒ、ストラッダ、グライテン、ホルンゲル等の舊約總論」、ライルの「舊約聖書の正統」モンテフイオルの「古代希伯來人の宗教」等を推す。
 新約聖書 The New Testament 經名
 基督教の經典、書中に有する書物合せて廿七卷、分ちて歴史、書翰及び黙示録の三とす。歴史は馬太、マルコ、路加、約翰の四福音書、及び使徒行傳にして、四福音書は耶穌の言行を録し、使徒行傳は使徒等の事蹟を録す。書翰は羅馬書、哥林多前書、哥林多後書、加拉太書、以弗所書、腓利比書、哥羅西書、帖撒羅尼迦前書、帖撒羅尼迦後書、提摩太前書、提摩太后書、提多書、腓利門書、希伯來書、雅各書、彼得前書、彼得後書、約翰第一書、約翰第二書、約翰第三書、猶太書の廿一卷にして、使徒等が教會若くは個人に贈りたる書翰也。黙示録は即ち約翰黙示録にして、使徒約翰の幻にて見たりといふものを録す。
 【新約聖書の言語】 新約聖書は元來其二篇を除くの外皆希臘語を以て記されたる者也。耶穌の時代パレスチナに在る猶太人の一般に用ひたる言語は、アラミア語(又はアラマイック)と稱せられたる者に

して、此アラミア語は猶太人が巴比倫に俘囚となりし當時より漸次發達し來りたるもの也。耶穌及び其使徒等は希臘語を語りたりしや、又はアラミア語を語りたりしやとは、古來學者の間に議論ありたる處なれ共、彼等がアラミア語を用ひたりしことは今日一般の學者の一致する所也。(可五の四十一に、耶穌が會堂の宰の死せる女の手を執りて、之に「タリタミ」云ひしことを記し、又可十五の卅四に、耶穌が十字架上に在りて大聲に呼ばり、エリ、エリ、ラマ、サバ、タニと云ひしことを記せり、而して記者は兩處共に之を希臘語に譯せり。以上二箇の語はアラミア語にして、耶穌が斯る語を使用したることを記せるを見れば、彼及び彼の使徒の常用語がアラミア語なりしことは殆ど疑を容れず)。然れ共當時希臘語が殆ど世界語となりて、唯パレスチナ以外の地に在る猶太人が一般に之を用ひたりしのみならず、パレスチナに在る猶太人も尙其知識を有したりしこと、宛も今日我國人の多くが英語を解するに似たる有様なりしこと明也。蓋し希臘語が此の如き勢力を有するに至りし所以の者は他なし、亞歷山大王(前三五六―三二三)一たび世界を征服してより、其到る所に希臘の文明と其國語とを携へ之を播布せしめたり。當時猶太人は各所に散在したりしが、殊に彼等の多くは希臘文明の中心と稱せられたる埃及の亞歷山府に移住し、其人口の三分の一を占むるに至りたり。彼等は此處に於て希臘文明の感化を受け、希臘語は遂に彼等の常用語となれり。彼等は又舊約全書を希臘語に翻譯したり。是れ即ち七十人譯と稱する者にして、當時世界の各所に散在せる猶太人は皆喜んで之を受け、聖書として之を其會堂に用ひ、耶穌の時代に至りては其用益々廣まれば、而して希臘語の知識は又此

新約聖書

新約聖書

新約聖書

新約聖書

書に依りてマテオの内外に在る猶太人の中に傳はるに至りし也。當時羅馬帝國は希臘帝國に代りて起り天下を統一したりしが、拉丁語は文雅なる希臘語に取って代はるること能はざりしのみならず、羅馬の都府に於てさへも希臘文學は歡迎せられ、希臘語は多くの人々に依りて領解せられたりき。此の如く希臘語は當時世界語となりて大なる勢力を有したりき。新約記者が此語を用ひて聖書を記したりし所以の者實に此處に在る。

然れ共新約の希臘語は通常の希臘語とは異り、一種の特色を有せり。即ち(一)新約の希臘語はプラトーン若くはセノフオン等の古文と異り、亞歷山大王の時代に起りたる方言也。(二)此希臘語は更に希伯來語の感化を受けて希伯來語化せり。前既に云へるが如く希臘譯約聖書は當時一般の採用する處となり、新約の記者も亦之を用ひたりしは、彼等が舊約を引用するに方り、希伯來語の聖書よりせずして此書よりしたりし由りて知るべし。而して此希臘語は希伯來語聖書の直譯にして、多くの點に於て其原語の特色を保存せり。此の如き聖書を用ひたる者、不知不識其感化を蒙りしは自然の數也。(三)此希臘語は更にアラメイック語調を帯びたり。前既に云へるが如く、當時パレスチナに在る猶太人の用ひたりし言語はアラメイック語にして、新約記者も亦之を語れり。彼等の希臘語がアラメイック語の特色を有するは當然の事也。(四)新約記者は猶太に生れ、猶太的教育を受けたる猶太人にして、彼等は更に基督教を信したる者なりき。故に彼等の思想は一中基督教の思想にして一中基督教の也。而して彼等は之を希臘語に顯はしたることなれば、其希臘語が原意に異り、更に新たな意義を生じて一箇の術語となるに至りしは自然の

成行にして致て疵むに足らず。

【新約聖書の正統】 爰に正統といふは希臘語の「カノン」(其條を見よ)にして、基督教會が認めて信仰の證據となせる書物の義也。今日新約聖書中に有する書物合せて廿七卷は即ち正統にして、教會が其權威に依りて聖書として宣言せる所のもの也。(羅馬教會は此外に吾人が經外聖書と稱する者を含むれ共、プロテスタント教會は之を承認せず。然れ共此正統の今日の形狀をなすに至りしは一朝一夕の事に非ず。漸次教會の發展を経て信仰の證據となすに足れる書物を編輯し、初めて今日の形狀を有するに至りし也。今其結果の次第を略叙すれば左の如し。

蓋し新約中の書物の書かれたるは凡そ紀元四五十年以後のことにして、使徒約翰の書きたりと稱する福音書及び其書翰の書かれたるは、早くも紀元七十年以後のことなるべし(此等の詳細は各々其條下に就て見るべし)。當時使徒等の多くは尙生存して自ら福音を宣傳したりしが、教會は尙未だ正統編纂の必要を感ずるに至らざりき。後使徒等が凋落してイアナサス(Ananias)キリヤク(Polykar)羅馬のタリメント(Gleadow of Rome)マルナメ(Darnabas)等の世となりしが(七〇—一三〇)當時福音書及び使徒の書翰が一般に教會に於て用ひられたりしは、彼等の書に依りて推定するを得べしと雖も、此等の文書を集めて之を正統となさんとするが如き企圖は未だ曾て之れあらざりしが如し。次に來れるは所謂希臘譯聖書の時代(二〇〇—七〇〇)にして、此時代の代表者も云ふべきはユスチヌス(Justin Martyr)也。彼は其書に於て屢々其自ら「使徒の記録」(The Memoirs of the Apostles)と稱したるも、及び使徒保羅の書翰、使徒約翰の黙示録を引用

せり。其「使徒の記録」と稱する者は今日吾人の有する福音書也と雖も、今日聖書學者の一般に承認する所なれば、當時福音書及び使徒等の書翰が信仰の證據として採用せられたりしは明也と雖も、如何なる書翰が當時教會に於て一般に承認せられたりしや、今日より之を推定すること能はず。教會が使徒の書きたる文書を以て、基督教信仰の證據として之に重きを置き、如何なる文書を以て正統となすべきかを定むる必要を感ずるに至りしは、第二世紀の中頃のことにして、當時教會内に異端を唱ふる者相續き起り來りしは、實に教會をして正統編纂の必要を感ずるに至らしめたる最大動機なりき。即ちマルシヤン(Marcion)は異端論者の巨擘とせしむべき者にして、彼は新約の神を以て舊約のエホバと全然異りたる者となし、基督教を猶太教と分離したり。彼は又路加福音書中初二章を削り、其他多少の變改を加へて之を自己の福音書となしたり。而して彼は其他の三福音書を全然拒否して受けず、又保羅の書翰をも變改したり。ゲレンサス(Gelinas)はノストラク派の巨魁にして、彼は聖書を拒否し若くは之を變改することをせざりしが、之に自己一家の説明を附して聖書の意を曲解したり。マナアン(Maniche)も亦有名なる異端論者にして、彼は四福音書を和合して一の福音書を編纂し、基督の人より出でたりとの記事は一切除去したり。此の如く許多の異端相續きて起り、使徒傳來の正統説を危くせんとするの傾向ありしが、教會は此等の異説に對し、使徒の書きたる文書を保存するの必要を感じ、爰に正統編纂の第一階段を造るに至りたりき。而して此結果の事業に與りて力ありしは、當時新約聖書が拉丁語及びギリヤ語等に翻譯せられたることなりき。即

新約聖書

新約聖書

新約聖書

新約聖書

ち此等の翻譯者は眞實使徒及び其伴侶の著作たるべきものを推定せざるべからざりしが故に、彼等の事業は正統編纂の事を助くるに至りし也。斯くの如くして吾人は初代教會師父の時代即ち紀元百七十年頃に至りては、明に新約正統なるもの教會に於て承認せられたりしを見る也。即ち新約の正統は「福音書」及び「使徒」の二部に分け、神の啓示に依りて記されたる聖書として、舊約聖書と同一の地位を有するに至りたりき。

然れ共新約の正統が今日の形狀を爲すに至りしは、更に後世のことにして、當時尙或る書物は一地方の教會に承認せらるるも、基督教會全般の承認する處とならざりき。抑も新約の正統編纂の斯くの如く選りたりし一理由は、當時交通の機關甚だ不完全なりし事也。即ち當時に在りては舟車の便甚だ乏しく、又印刷の事業未だ世に知られず、一々筆寫せしことなれば、文書を四方に流布するが如きは容易の業に非ざりき。且基督教の中心一たびエルサレムを去りし後は、地方の諸教會各々獨立の發展をなして、教義及び儀式に彼此多少の相違を生じしが、新約の或る書物の流布に向て多少の妨害を興へたることなきに非ざりき。此相違なる者は素より根本的教義の相違には非ずして、唯一時地方的感化の相違に過ぎざりしが、時を経るに従ひ遂に全然消滅するに至りしが、之がため新約正統の結果を認らしめたりしが、斯くて第二世紀の終りに至りて正統の結果殆ど成りしと雖も、尙東西兩教會の間に於て議論未だ全く一致せず。東教會は「クリヤタ、ムシトール」(Cyrilus Peshito)を以て其正統となし、西教會は「ムラトリオン」(Muratorian Canon)を以て其正統となしたりき。前者は彼得後書、

約翰第二書、同第三書、猶太書及び黙示録を缺き、後者は希伯來書及び彼得後書を缺き、附するに彼得黙示録なる者を以てせり。思ふに所謂七疑義の書(以上の六書及び羅馬各書をいふ)を除きては、諸教會の間に早くも一致する所ありしと雖も、七疑義の書に關しては議論常に紛々として決せず。紀元三百六十二年に至り、ラオヂヤに於て開きたる宗教會議に於て舊新約正統の目錄を作り、新約に於ては黙示録を除くの外、今日吾人の有する書物を以て正統と定めたりき。而して三百九十七年カルセドンのに於て開きたる宗教會議に於ては、今日吾人の有する廿七卷を以て正統と定め、是に於て新約正統の議論を一定したり。爾後尙此正統に關し多少の議論なきに非ざりしと雖も、素より基督教の主要なる教義に影響を興ふるが如き者に非ざりき。

以上は新約正統の結果に至りし概略にして、吾人の今日有する正統の定まりたる精實なる時日は今日より之を推定すること能はず。吾人は唯漸次に今日の形狀を爲すに至りたりしを知るのみ。而して此正統を定めたる者は、學者の批評若くは宗教會議の議決に依るに非ずして、寧ろ彼等は初代教會が使徒及び其伴侶の手より出でたる者として早くより採用し來りたるものを結集したる也。換言すれば此正統は使徒及び其伴侶の手より出でたる眞正確實なる文書也との歴史的證據に依りて決定せられたる者に於て、吾人は其個々の書に就て如何に初代教會及び師父等が之を引用したりしかを證明し得る也。而して更に此等の書の正統たるを證明したる者は内部の證據にして、此等の書相互の關係及び初代基督教の發展との關係を見る者は、明に此等の書の使徒及び其伴侶の手より出でたる確實なる文書なること

を證明し得る也。而して又此等の書の内容は之を讀む者をして其眞正確實の書たることを承認せしむる也。吾人が今日信仰の證據として之を受納するは、歴史的證據と共に其實驗的證據の存するに依りき。

【新約正統の結果及び其個々の書が如何に正統と認めらるるに至りしやの詳略を知らんと欲せば、ウェストコットの「新約の正統」を見よ。

【新約聖書の外形】 新約の中に、有する書物廿七卷之を分ちて歴史、書翰及び黙示録の三となすべしとの事は既に之を云へり。初めに掲げられたる四福音書及び使徒行傳は、單に哲學若くは倫理の教訓を教ふるがために記されたる者に非ずして、基督教の言行及び初代教會建設の事實を示せるもの也。而して基督教の教義なるものは此歴史的事實の上に立つるなれば、此事實の記録が新約書の初に掲げられたるは適當の事也といふべし。書翰は福音書中に教示せる教義を敷衍して之を人生の實際に適用したるものなれば、之を歴史的記録の後に置くは自然の順序にして、教會歴史の將來に關する預言を含める黙示録を卷末に置きたるも亦適當のこと也。書翰は保羅の名を寄ふる十三卷、最初に掲げらる。特別なる教會又は個人に宛てたるものに非ずして、廣く一般の基督教徒に與へられたる公開書翰と稱する七の書翰は最後に掲げらる。此中間に立つものは希伯來書と稱する作者不明の書翰也。保羅の書翰を分ちて二種となす。特殊の基督教會に宛てたるもの九、個人に宛てたるもの四也。其中提摩太前後書及び提多書を教會書翰と稱す。勝利門書は私書と目すべきものにして且頗る簡短なるものなるが故に、保羅の書翰中最後に掲げらる「書翰」の條參照。此等の順序に顯る古く定められたるものなれば、古代の寫本の中には

多少の相違あり白聖書の寫本(の條を見よ)。元來此等の順序は其著述の年代に依りて之を整理したるに非ず。一般の信する處に依れば第四福音書は彼得及び保羅の死後書かれたる者なれば、約翰の書翰を除きては恐らく最後に書かれたる者なるべし。又黙示録は新約の末尾に掲げられたれ共、一般の信する處に依れば、此は新約の書物中比較的早き時代に書かれたる者也。左れば學者其順序に依りて著作の年代を判断すべからず。

現今の希臘語聖書に見るが如き頭文字及び小字の區別は第九世紀迄は之れなく、其以前のものに古代の慣例に従ひ、所謂大字的(Diastole)と稱せられたる大形の文字にて、句點及び言語間の區別なく連續的に書かれ、言語、文章間の區別は凡て讀者の選擇に任せたりき。此連續的書法の不便を避けんため第五世紀の中頃並列的書法(Diastole)なるものを採用せり。並列的書法とは一行に一呼吸に讀み得るだけの語の分を並列する書き方の謂にして、此方法は亞歷山の執事ユモリウスの發明也と云ふ。又は殉教者パムフィロスの創見也と云ふ。何れにしても希伯來詩歌の並列的書法より思ひ付きたる者なること疑なし。然れ共此方法は羊皮紙を費すことあまりに多かりしゆへ、後單純なる點に依りて行を分つこととなりしが、此は又思想の連續を破るの恐ありしを以て、印刷術の開くるに及び漸次今日の如き方法を採用するに至りし也。今日吾人が有する章の初めて附せられたるは第十三世紀のことにして、カルデアイナル、ローパー(Cardinal Hugo)が先づ之を拉丁譯に施し、後希臘語聖書に附したるに初まら。今日吾人が有せる箇の區分附せられたるは更に後の事にして、即ち一五五一年ロザルド、スチーヴンズの

例の法書的讀法
這五より一の傳倫約語讀番

ΕΝ ΑΡΧΗ ΗΝ Ο ΛΟΓΟΣ ΚΑΙ Ο ΛΟΓΟΣ ΗΝ
ΠΡΟΣ ΤΟΝ ΘΕΟΝ ΚΑΙ ΘΕΟΣ ΗΝ Ο ΛΟΓΟΣ.
ΟΥΤΟΣ ΗΝ ΕΝ ΑΡΧΗ ΠΡΟΣ ΤΟΝ ΘΕΟΝ
ΠΑΝΤΑ ΙΔΙΟΥΤΟΥ ΕΓΕΝΕΤΟ ΚΑΙ ΧΩ
ΡΙΣ ΑΥΤΟΥ ΕΓΕΝΕΤΟ ΟΥ ΓΕΕΝ
Ο ΓΕΓΟΝΕΝ ΕΝ ΑΥΤΩ Ω Η ΗΝ
ΚΑΙ Η ΣΩ Η Η ΝΥ Ο ΦΩ Σ Τ Ω Υ Α Ν Θ Ρ Ω Π Ω Ν
ΚΑΙ ΤΟ ΦΩ Σ Η Ν Τ Η Σ Κ Ο Τ Ι Α Φ Α Ι
Ν Ε Ι Κ Α Η Σ Κ Ο Τ Ι Α Υ Τ Ο ΟΥ Κ Α Τ Ε
Λ Α Β Ε Ν .

例の法書的列並
三二の二書多提羅羅番

ΠΡΕΣΒΥΤΑΣ ΝΗΦΑΙΟΥ ΣΕΙΝΑΙ
ΣΕΜΝΟΥΣ
ΣΩΦΡΟΝΑΣ
ΥΓΙΑΙΝΟΝΤΑΣ ΤΗ ΠΙΣΤΕΙ
ΤΗ ΑΓΑΠΗ
ΤΗ ΓΥΠΟΜΟΝΗ
ΠΡΕΣΒΥΤΙΛΑΣ Ω Σ Α Υ Τ Ω Σ
ΕΝ ΚΑΤΑ Τ Σ Η Μ Α Τ Η Ρ Ο Η Ρ Ε Η Ε Ι Σ
Μ Η Ι Α Β Ο Λ Ο Υ Σ
Μ Η Δ Ε Ο Ι Ν Ω Η Ο Λ Α Ω Δ Ε Ι Γ Α Ω Μ Ε Ν Α Σ
Κ Α Λ Ο Ι Α Σ Κ Α Λ Ο Υ Σ

附したる處也。此等章節の區分は聖書の研究上實際に便宜を與ふること少からず。然れ共是れ後人の屬したる區別にして固々不完全の點あるを免れず。故に吾人が聖書中思想の連續、關係を學ぶに方りては悉く是等の區分に依頼すべからず。
新約各卷の冒頭に附せる表題なるものも、亦原作者の手に出でたる者に非ずして後人の附加したるもの也。例之希伯來書の如きは保羅の希伯來人に贈りたる書翰也と記され、古來之を受け來りしと雖も、今日聖書批評の結果は保羅の書翰に非ずとの結論に達せり。故に表題の眞偽を定めんとせば、先づ批評の結果に依らざるべからず。又保羅の書翰及び其他の書翰の後に附したる所謂後記も稱すべき者(邦譯に之を省けり)も後の筆記者の附加したる者にして、何等の證據なし。

【新約聖書の經文】 愛に經文(Text)と稱するは聖書の本文をいふ。新約經文は二に分る。即ち寫本の經文、及び印刷本の經文也。
(一) 新約聖書の寫本 聖書の寫本の條に之を説けり。就て見よ。
(二) 新約聖書の印刷本 新約聖書の最初の印刷本は下に記す所の數種にして、此等の本文の信據するに足るや否やは、全く此等の印刷本が其本文を得たる寫本の價值如何に關せり。
(イ) コムプレメンタリヤ經文(The Complutarian Text) 希臘語にて初めて印刷せられたる新約聖書の全部。カルデアイナル、ウキメネス(Ximenes)保護の下に西班牙のコムプレメンタリヤに於て印刷せられたる此名あり。此書は一五二四年の日付を有す共其初めて世に公にせられたるは一五二二年にして、エラスムスが既に希臘語新約の三版を出したる頃なり

き。其出版者は羅馬法王圖書館より送られたる寫本に基きて、其本文を作りたりと公言すれ共、其寫本の如何なる者なるやは今日之を確知するを得ず。然れ共其本文なるものは、古代の寫本に似して寧ろ近代の寫本と一致する處多きを見れば、其寫本が古代の正確なる者に非ざるは殆ど疑なし。
(ロ) エラスムス經文(The Erasmus Text) エラスムスは英國に在りて註解附新約聖書拉丁譯改正の事業に從事し居たりしに、パセルの有名なる印刷出版家フローベンの依頼に應じ、一五二五年パセルに住き希臘語新約聖書出版の事業を開始せり。一五二六年三月の初め即ち印刷を始めて六ヶ月にして、希臘語、拉丁語及び註解共全部の事業完了せり。彼が斯く此事業を取り急ぎたりしは、コムプレメンタリヤ出版の企劃あるを聞き、之に先だちて自己のものに公にせんとしたるに由る。此經文はパセルに於て發見したる寫本に基き、英國及びアラバントに於て既に準備したりし改正拉丁譯を參考して作りたる者にて、黙示録の如きは唯獨に一部の寫本に依りたるのみなりといふ。エラスムスの手中に在りし批評的材料は實に此の如く僅少の者なりき。彼は次になしたる四箇の出版に於て多くの改正を施し、一五二七年に出版したる第四版はコムプレメンタリヤ經文に得たる所甚だ多かりき。此は吾人が今日使用する經文の基礎を爲せる者也。

(シ) スチーヴンズ經文 (Robert Stephens Text) 有名なる彼斯の印刷家スチーヴンズの經文は一五四六、一五四九、一五五〇年の三回に出版せらる。其第一、第二版の經文はコムプレメンタリヤ及びエラスムス版より取りたりといふ。第三版は十三箇の希臘語寫本を參考したりとのことなれ共、エラスムス版の第

五版と殆ど異なる處なし。
(ヒ) ウキメネス經文 (Theodore Beza Text) 一五六五年パザはウキメネスに於て自己の拉丁譯と共に希臘語新約の初版及び註解附ケルゲートを出せり。次で一五七六、一五八二、一五八八―九九年の三回に三版を出せり。彼は之を爲すに方りてパザ寫本、テラロモンタヌス寫本、西利亞譯等を參考したり。
(ヘ) エルゼツェル經文 (Ezer Text) エルゼツェル版の初版は一六二四年に世に出でたり。印刷の美なるを以て知らる。其經文は重にパザ版より取れるものにして、爾後數百年間出版したる多くの經文は之に基きし故を以て『評許經文』(Textus receptus)の名を得たり。

以上は新約聖書經文の最初に印刷せられたるもの也。今日に經文批評大に進歩し、其結果更に完全なる經文を有するを得るに至れり。近代批評の結果として出でたる希臘語聖書はテイリッシュェンドルフ (Theodor Liefeldt, 一八六四―七二) ヌアキアス (Tregelles, 一八五七―七九) 及びワグネルとコルトとホート (Wagener and Hort, 一八八二) の經文也。之等は皆三大經文と稱す(經文の批評に就ては希臘語聖書の條を見よ)。
【新約聖書の翻譯】 『聖書の翻譯』の條に説きたるを以て要には略す。就て見よ。
【新約聖書神學】 New Testament Theology. 聖書神學の後半、即ち新約聖書に關したる宗教上并に道徳上の思想を歴史的に表明する神學の一科にして、一言を以て之を云へば、耶穌及び其使徒等の思想の傾向を研究する學問也。但し其研究の方法は學者に依りて同じからず。聖書神學は純然たる歴史的事業也との立場より初めて『舊新約聖

書神學』(一七九六―一八〇〇) を著したるはローレンス・バウアー (Lorenz Bauer) にし。彼は其新約の神學を論ずるに方り、其發達の段階を區別して、共説福音書、約翰、約翰黙示録、彼得、及び保羅となし。此等の神學を別々に表示せり。テ、ウキメネス (W. M. L. de Wette) は新約の宗教を分ちて耶穌の教訓及び使徒等の教訓となし、使徒等の教訓に於て猶太の基督教、保羅の基督教、及び亞歷山派基督教の區別あるを認めたり(一八三三)。チアンアル (Chandler) は其『基督教建設史』(一八三三)に於て、使徒等の教訓を分ちて保羅、雅各、及び約翰となし、之を別々に表明せり。而して彼は使徒等の用いたる言語、說明の異なるより、其宗教的生活に各々特殊なる性質を具有せることを悟り、彼等の教義の相違を以て其個性即ち其性質の心的始原に基きて之を別々にし、而して之を別々の神學として之を明にしたり。此説に鼓吹せられ、使徒等の教義を以て基督教以外の勢力に基きて之をなせる見解に反對し、基督教は律法と約束とより成れる舊約の應驗せられたる者也との事實より立出して、新約の教義には四箇の異なる標式の生じ得べきことを論じ、此四箇の標式は四人の使徒に依りて代表せられたり、即ち雅各は基督教を以て應驗せられたる律法也として、彼得は之を應驗せられたる約束也として表示し、保羅は之を律法に對照し、約翰は之を律法及び預言に對照して表示せりと爲せるをシュミット (Chr. Fr. Schmidt, 一八五三) とす。チアンアル (Chr. Fr. Schmidt, 一八五三) とす。チアンアルは、記者の宗教的特質若くは心理的相違に歸したりしが、チアウゲン派の職將クリスチャン・パウル (Fr. Chr. Baum) は之に反對し、此相違は基督教が歴

新約聖書神學

史的發達を爲すに方り、其發達を助けたる人々の地位の相違に由りて形づくられたり。此發達を以て初代使徒の猶太的基督教と、保羅の非猶太的基督教との間に有する反對の傾向の漸次調和せる者となせり。パウルが一八五二年一六〇年に著したる新約聖書神學の出版せられたるは、其死後一八六四年にして、其門人シウワマン(Schweitzer)カヤンフネルド(Hilgenfeld)ケーストラン(K. H. Keatling)等亦各々書を著して師の説を敷衍せり。此學派が使徒時代於て論争せられたる問題、及び其使徒等の神學に及ぼしたる影響を向一層精細に領解すべきことを欲し、烟眼を以て使徒等の思想の傾向に差異あるを認め、而して之を以て相反せりとなし、又新約の文籍を是迄になく深く解剖批評し、其神學の特殊なる點を提出せるは、よし此學派取る處の地位に非難すべき處少からずとす。然れ共此學派は其所説の結果として、新約聖書文籍の多數を以て第二世紀の産物となし、同時代に記されたる他の書物と同一視せるを以て、新約聖書の特長たる性質を埋没し、聖書神學を以て使徒及び之に次げる時代の教義歴史となすに至れり。均しき歴史的研究の結果チヤビングン派研究の結果に反對したりしをアルブレヒト、ヨハネ(C. Albrecht Ritschl)となす。彼は其『古代公同教會』(一八五七)と題する書に於て、最も精細に保羅の教義及び猶太的基督教を代表せる新約聖書の文籍に關はる教訓を明示し、此二者がパウルに云へる如く相反する者には非ざるを明にせり。エドワルド、ロイス(Edward Reuss)はチヤビングン學派の立場より出立し、猶太教的基督教と保羅的基督教との傾向の間に、中間の傾向を有する

新約聖書總論

者ありとし、希伯來書、彼得前書、新約聖書中の歴史的文籍及びパルナボ、カレメントの書翰を以て此傾向を代表せる者となせり(一八五二)。イムメル(Cunier)一八七五、フライデル(Rehder)一八七三)も亦大體に於てチヤビングン派の説を繼承したれ共、種々の點に於てパウルに地位を變じたり。フライデルに於て殊に然りとなす。近時世に出でたる新約聖書神學の中最も重要な者をウァイツ(Bernhard Weiss)一八六八)及びバイシラフ(Wilhelm Bousset)一八九一)の二書となす。共にチヤビングン派に反對す。前者は聖書の章句を最も精細に研究し、其知字的意義の方面に最も重きを置き、後者は歴史的發展の次第を研究し、新約の思想を己の言語に譯解せんことを務めたり。スチーグンス(G. R. Stegmann)の『新約聖書神學』亦同時にして要を得たり。

新約聖書總論

Introduction to the New Testament. ユーレルは新約聖書總論に於て、新約聖書正經の批評也と云ひ、シウワイエン、ヘルは現今の讀者を最初の讀者の地位に立たしめんことを目的を以てせる新約聖書各卷の緒論也と云ひ、ユウワッヘルは新約聖書の文學的歴史學の科也と云ひ、新約聖書總論の論すべき問題に關する諸家の説多少相異れり。要するに新約聖書各卷の性質、結構、内容、著者、著作の時代、其場合、其當時の歴史的地位、其由来及び目的等を研究するは新約聖書總論の目的及び事業にして、全く事實、證據の問題に關す。而して此等の事實及び證據は一部分文籍其のより、一部分其當時又はそれに繼げる時代に出でたる著作者の證明より結果する者となす。近時世に出でたる新約聖書總論は頗る多し。其最も

新約聖書歴史

重なる者を舉ぐれば、ホットマンの『歴史の批評的新約聖書總論』(H. L. Holtmann's Historisch-kritische Einleitung in d. Neue Testament, 一八九二第三版)は最も該博にして、毫も傳説に拘泥せず、銳利なる批評眼を以て新約聖書の文籍を縱横に解剖批評す。ウァイツ(W. Weiss)の『新約聖書』(一八八六再版英譯せらる)は前者に比すれば保守的なれ共、其徹底せるを其諸論なるは此書の特色也。更に保守的なるはツァン(T. Zahn)の『新約聖書』(一八九七一九九)にして、此書は近代聖書學者が新約聖書文籍に對して取れる傳説的地位を最も能く代表せる者也。ユウワッヘル(Gülden)の『新約聖書』(一八九四再版)はホルツマンとウァイツとの中間の地位を取れる者にして、近代研究の結果を最も精確に示したる者也。セオロワカ、エウケートル叢書中のドッブ博士の『新約聖書』(一八九四)は其立場も亦ホットマンに守的也。邦文にては牧野成次の『新約聖書總論』の外推すべきものなし。

新約聖書歴史

History of the New Testament. 新約聖書に記載せられたる事實、即ち耶穌の一代、使徒等の行爲、事業等を記述するものにして、耶穌の一代の事を知らんために、其當時の政治、宗教、道德等の状態を詳にせざるべからず。故に舊約の時代以後以色列國民の經過したる歴史及び其當時の歴史を記述するは、新約聖書歴史を研究する準備として必要なる條件也とす。スキアの『新約聖書歴史』(E. Schürer's Geschichte des Judentums und des Christentums in der Zeit Jesu Christi, 一八九〇)は耶穌の傳及び其時代シウワレルの『猶太人民の歴史』(M. Steinsapir's History of the Jewish People, 一八九一)ラムゼーの『旅行者、羅馬市民たる使徒保羅』(Ramsay's St. Paul the Traveller and the Roman Citizen, 一八九〇)の諸書、保羅傳を以て此主題に關する重なる

新約聖書の時代

The New Testament Times. 新約聖書の時代とは、耶穌誕生よりエルサレム滅亡に至るまでの時期をいふ。當時の天下は羅馬の天下にして、其領地北は日耳曼のタニウブ、ラインの兩河より、南は亞非利加のニル河及び其沙漠に達し、西は大西洋より東はユフラテ河に及び、殆ど世界の全面を包括し、猶太國も亦其屬邦の一なりき。此條の目的は當時知られたる世界の實狀、就中其新約の歴史に關係あるものを略説せんとするに在り。故に先づ羅馬帝國に就て記述し、次ぎに猶太人民の状態に説き及ぼすべし。此時代より以前の歴史に就ては『ユダカピア』の條、以後の歴史に就ては『猶太人』の條を見よ。

新約聖書の時代

【羅馬帝國】(一) 世界主義的發展。紀元前三十二年アウグチオムの戦に於て、オクタヴィア、アントニオを敗り、羅馬を一統して其皇帝となり、帝國の權勢其絶頂に達せしが、當時羅馬は其雄略を盡し、只管其組織を建設し、道路を開き、水路を通じ、橋梁を架し、驛道を設け、諸國の交通を便せしが、海岸に依れる商業前古未だ在らざりし程の盛況に達し、且諸國民相交り相親み、物質上の産物のみならず、精神上の産物も亦有無相通じ、諸國民各々其腹に頼るを得るに至れり。而して智識を一般に普及する上に大なる功を與へたりしは、希臘語の傳播にして、拉丁語は法律及び軍隊の語として廣く行はれたりしに雖も、亞歷山大帝の亞細亞遠征に依り、希臘語は善く東方諸國に行はれ、パレスチナに於ては自國語に次ぎて日常語に用はる者となり、亞歷山大に於ては最も肝要視せられ、羅馬に於ては必要視せられ、斯くて希臘語は學者間のみならず、一般社會

新約聖書の時代

及び商業上の語となり、諸國民を結合する上に少くも便宜を與へたり。天下の道は羅馬に通ずと稱せられたる羅馬市を中心とせる羅馬帝國は、斯く平和を旨とせる其政策と、世界語となれる希臘語に依りて世界の諸國民を統一し、特殊の地方的感情漸く去りて、壯大なる世界主義漸く其地歩を占むるに至り、世界の宗教發生の準備期として成るに至りし。

の道徳力を疑人化したる者にして、其精神は東方に比すれば僧の嚴肅を缺きたれ共、暴逆不潔の跡なきなり。希臘人は世界に道徳的制裁あるを知り、人は永遠の道徳法に依りて支配せらるる者なることを承認したりき。故に其崇拜するゾロアスターは正義の保護者にして、惡業に對しては必ず懲罰を與ふる者也と信ぜられ、ヘルは家庭生活及び婚姻の保護者にして、之を破る者は必ず罰せらるべき者也と思はせられ、パラス、アセチは純全なる理性と智慧の擁護者、光明の神アポロは希臘宗教の啓示者にして、暗昧を一掃し過失を發見して之を誦ひし者也と信ぜられたりき。尤も以上は善美なる方面を示したる者にして、有害にして笑ふべき方面も亦之に伴ひ、人性的精神は人性的過失と弊風とを有したりき。希臘の宗教が東方諸國の宗教に比すれば、其觀念豊富にして且靈魂的なりしは疑ふ可からざれ共、新なる偶像と諸神に關する珍らしき談話の絶えず製造せらるるより、有識者は宗教を以て想像的製造物に過ぎざるを見做すに至り、ために漸次勢力を失ひ、耶穌の時代には衰光歴然たるものありき。

新約聖書の時代

【羅馬の宗教】 古代の羅馬の諸神は、多く其民俗及び社交的秩序の抽象的觀念を代表する者にして、古代の羅馬人は個人、家族、國家のあらゆる状態に於て其位置に相當したる守護神ありて、其恩恵を祈ること必要也と信じてたりき。而して彼等の最も尊崇したりしは國家にして、其重なる神とは即ち國家の安寧を守護すべき者也となし、ウエトル、カヒトリナス、マルス、ガイクトリア等の諸神を禮拜し、熱心なる祈禱を之に捧げたりき。此等の諸神に依りて代表せられたる國家が強盛なる間は、此等の諸神が誠實に崇敬せらるべきは當然の事なれ共、

シの部

新約聖書の時代

國家にして一たび衰微し初めれば、其信仰も亦自ら衰微せざるを得ず。而して羅馬は政治的繁榮の極點に達したる時を以て、衰頹の運を開きしかば、之と共に其宗教の衰光を呈せしむるに足らず。且其初めユビートルに依りて代表せられたる國家は、後に至りて帝王之に代り、帝王禮拜遂に國教となるに至りしかば、先祖傳來の宗教が威信を失ひ、人心を服する能はざるに至りしは自然の結果のみ。耶蘇出現の時代は實に羅馬宗教が其衰光を顯はせし時にして、人民は自己の諸神に満足することをばすして頻りに新なるものを求め、政治家は人民の宗教に對しては極めて寛容なる態度を取りしかば、羅馬は諸宗教雜居の有様となり、外部には宗教的生命の殘存するが如く見ゆるもの少からざりしと雖も、内部の深き信念は衰へ、殊に上等社會には懷疑不信の風盛に行はるゝに至りたり。

當時廣く行はれたる哲學系統三個あり。第一は懷疑派にして、此派の學者は萬事は不確也、諸神の存在も亦然りと云へり。第二はエピクロス派にして、此派の學者は絕對に神の存在を否定せざりしが、諸神が世界の出來事に干渉することを許さず、從て宗教に對しては極めて冷淡なりき。第三はストアック派にして、此派の學者は信仰と哲學の調和を謀らんとしたる者にして、萬物の全體即ち神也、其下に多くの小神あり、是れ即ち通俗宗教の所謂神也となしたりしが、其數ふる所は、單に克己、忍耐、自足に過ぎずして、人に與ふるに神聖と幸福とに達する秘訣を以てするが如きは其能ふ所に非ざりき。

斯くの如く當時の宗教も哲學も共に人心を満足することを能はざりしかば、彼等を満足する者の起りて彼等を救はんことは、上一段の切實なる希望なりし也。

新約聖書の時代

新約聖書の時代

ハの部

新約聖書の時代

り。而して此等の諸州は皆ヘロテ大王の治下に統一せられ、ヘロテの没後アテラオを襲ひ、アテラオマ之を繼ぎ、後スリヤの一部として羅馬に歸屬したりき。三部の中最も南方に在りてヨルダン河を東に控へたるユダヤ也。聖書に「ユダヤの地」と呼ばれたるは(約三の廿二、路二の四、太二の一)此地方にして、其大部分は丘陵の起伏せる山地なれ共、其丘陵は果樹に富み、多くの愛すべき葡萄を有し、又間々巖石多き荒地を有す。此部分は最も純潔なる猶太的血脈を有する人々の住居したる處にして、俘囚となり、猶太人の解放せられたりし時、ユダヤ、ユダの兩族此領域に歸り住したりし、ヘドヤ、ユダの多數を占めたりしより、之をユダヤと稱したりき。其首都はエルサレムにして、神殿の在る所也。耶蘇の當時エルサレムは人事の極めて活潑繁忙なる状態を呈し、六日の開市街は宛然たる一大蜂巢の如く、活潑なる動作と勤勞とに忙殺せらるる程なりき。而して市内に於て最も顯著なりしは、其宗教的生活にして、パレスチナ全國の住民のみならず、世界に散在せる猶太人は、視節に神殿に詣でんがために集り来るを例とし、時として其數三百萬に達したりしといふ。視節のみならず、各所よりの參詣者は終年絶ゆることなく、神殿に獻げられたる納金は莫大の額に達し、住民は皆其利益に潤ひたりき。パレスチナの中央部にして、ヨルダン河の四方に在るをサマリアと稱す。多くの青翠なる牧場を有し、柏樹、橄欖、胡桃等の森林多く、丘上山頂には耕作行き渡り、牧畜盛に行はれたりき。サマリア人は猶太人のアッスリヤに俘囚となりて送らるゝに方り、後に残りたる者と、巴比倫を始め他の地方より移住し來れる者との間に生じたる雜種にして、次第に猶太人に接近

し、其宗教的禮節を同するに至りしかば、猶太人が俘囚より歸り來るや、之を助けてエルサレム神殿再建の資を供せんを希望したりしに、猶太人之を拒絶したりしかば、双方の間に隔意を生じ、サマリア人はゲリザム山上に神殿を築き、耶蘇の時代に至る迄此處にて神を禮拜し(約四の廿)且猶太人に對する彼等の惡感情は尙消滅せざりき(約四の九、廿八、八の四十八)。サマリアの北に横はれる一部をガリラヤと稱し、分ちて上下二部となす。上ガリラヤは土地確かなれ共、下ガリラヤは耕作に適し、景色美にして交通又便也。ガリラヤの住民は俘囚より歸りたりし後異教人と混合せしかば、異邦人のガリラヤと稱せられ(太四の十五)耶蘇の時代にも「フェニキヤ人、亞利比亞人、スリヤ人、希臘人等の此地に住居する者甚だ多かりき。然れ共ガリラヤ人は勤勉にして氣力あり、敬虔の念に富みたりしが、愚鈍の力少く、口傳的傳説を信じたりしかば、ユダヤの學者ラビの輕蔑を蒙りたりき(約一の四十六、七の五十二、徒二の七)。ガリラヤは殊に名高かりし所以は、耶蘇が此地より出身せし事、弟子等の多くもガリラヤ人なりし事、耶蘇の事業の多くもガリラヤに爲されたりし事等に依れり。ヨルダンの東方に横はれる部分に上記の地方よりも劣り、貧すべき天然の景勝に乏しく、不毛の地にして人口も多からず。其住民は概して粗野にして、所々を徘徊し、戰闘、奪掠を事したりき。

(二) 言語。巴比倫よりパレスチナに歸り來れる猶太人の使用したりし言語は、古希伯來語なりしが、彼斯時代にして、當時通商語及び外國語なりしアラミア語(又はアラメイト語)は、近隣の國民に於けるが如く猶太國民に於ても漸く使用せられ初めたりき。

新約聖書の時代

新約聖書の時代

其最初の書は之を以上所書中アラミア語の歴史的

が如し。耶蘇の時代に於て、サマリアの都をセバステアと稱せしが、此は希臘語也。ヘロデ朝の通貨には希臘銘を印し、希臘風の禮拜も亦行はれたりき。ガリラヤのテベリアに於ける住民の多數は希臘人なりき。ユダヤ、就中エルサレムに於ては希臘語よく知られ、ヘロデの宮廷には希臘人の官吏少からざりき。大觀節にはパレスチナに在る者のみならず、外國に散在せる猶太人も亦多くエルサレムに詣り來りしが、此等の人々は希臘語を知るのみにて、希伯來語又はアラミヤ語を知らず。而して其中にはエルサレムに永住せし者も多かりき。又異邦人にして猶太教に改宗したる者のエルサレムに住する者も少からず。此等の人々はエルサレムに特別なる會堂を建て、其處にて禮拜せしが、斯くして希臘語はエルサレムに普及し、ユダヤ全國にも亦漸く知らるるに至りしが如し。

止むを得ず之を忍びたり。パルティアの人々は熱心に之に抵抗したりしが、之がため其重なる者の慘殺せられたる者四十五人に及べり。其治世の初期中彼の敢てしたる最も殘酷なる行爲は、アスモニヤ人の系統を断たんとすに在り、其妻の血族を悉く殺害したる事なりき。又外に在ては埃及女王クレオパトラのため、に、豐饒なるエリコ地方を奪得せられ、且女王のために亞利比亞人と戦ひ、多大なる損害を蒙りたりしが、アントニオ敗れ、オクタビオ之に代るに及び、之と交を結び、クレオパトラに對して土地を回復し、更に其領地を擴張し、地中海より西利亞に至り、ダマスコより埃及に至る土地を其版圖に入れたり。斯くてヘロデの威勢は其頂點に達し、爾來十二年間内外共に平穩なりしかば、彼は此間に壯大なる建築を企て、エルサレムに劇場、闘技場を建て、アントニアの城壁を堅固にし、セバステア、カイザリヤの諸市を築き、又猶太人の心を得んためエルサレム神殿再興の工事を起したりしが、此神殿は最も壯大なる者にして、其落成を告げたりしはエルサレム滅亡前五年(紀元六五年)也云へば、凡そ七十八年を費したることにして、當時の猶太人が「ヘロデの神殿を見ざる者は未だ美觀の何たるを知らざる者也」と云へりしが云へる一事に依りて其莊麗想見すべし也。然れ猶太人はヘロデの政治を喜ばず。彼が異邦の習慣、異教の儀式を輸入せる事、古來の法律を輕侮し又は變改せる事、我意に任せて祭司長を交迭せる事、苛税を徵收して之を濫費せる事、及び其政敵に對して殘酷なる事等に就て不平怨望の聲絶えざりき。ヘロデも亦自ら人民の信用を歸服を得ざることを覺り、多數の衛兵を以て自ら守り、権力を致して己に敵する者を探知し、之を獄に投じ

新約聖書の時代

新約聖書の時代

新約聖書の時代

又は死罪に處する等の事をなしたりき。彼は一面より見れば、明白なる判斷、大なる精力、鋼鐵の如き意志、國政を料理するの才能を有したりしが、他面に於ては猜疑の念深く、苛酷殘忍にして愛情なく、全く功名心のために支配せられたりき。彼の此性情を遺憾なく暴露したりしは最後の十年間に於て、彼はアスモニヤ系統の復讐を恐れ、其遺族を殺したるを以て満足せず、前廿八年其妻マリヤム子及び其母アレクサンデルを殺したりしが、前七年に至り、更にマリヤム子の所出に係る己が二子を殺し、前四年其愛子アンチパテルをも殺すに至れり。其晩年に至り彼を驚かしたりしは、猶太王の新に生れたる子の風聞にして、彼は之を殺さんかために、ハッレム及び其近傍に在る二歳以下の孩兒を悉く殺戮したり。彼は潰瘍を病み前四年七十歳にして死せり。ヘロデ大王死して後、其遺言に依り其子アケラオはユダヤ、サマリア、イブミヤの太守となり、其兄弟ヘロデ、アントニオはガリラヤ、パレスチアの分封君となり、ヘロデ、ヒリヤはヨルダン東方にて北部に於る諸郡の分封君となりたり。アケラオは前廿一年に生れ、羅馬にて不真なる教育を受け、其性傲慢にして、エリコに居りて政を見る事十年(前四一)後六年(前三五)に歸國を極めたり。耶蘇の父母が埃及より其本國に歸らんとして、更に難を他に遭はるは、即ち彼が暴虐を恐れたりしがため也。斯くて人民反抗の聲羅馬に聞えしは、彼は羅馬に召喚せられ、ガリラヤのグイユンナに追放せられ(紀元六年)領土は羅馬領として西利亞の一部に加へられたり。於是ユダヤは西利亞總督の下に在る方伯に依りて支配せらるることとなりしが、方伯はパレスチナ駐在の軍隊を指揮し、其領内内の徵稅を司

り、且司法の權を握れり(サンヒドリンの權内に屬する者を除く、宗教上の問題に關することは同會議の管理に屬したり)。而して死罪を宣告し、又サンヒドリンの議決を承認するは方伯の權能なりき(約十八の廿一)。方伯はカイザリヤに住したれ共(徒廿三の廿三)屬々エルサレムに赴きたり。殊に大觀節の時秩序を保障するの必要あり、エルサレムに赴き、ヘロデの舊殿又はブトリオオム(公廳)に滞在するを常とせり(太廿七の廿七其他)。六年より四十年までユダヤの方伯として在任せしはコゴニヤ(六一九)マルコ、アムベビヤ(九一二)アンニヤ、ルファス(十二一五)パレヤ、ゲラト(十五一廿六)ギンテオ、ヒラト(廿六一)マルケラ(廿六一)マララ(廿七)四十一の七人も也とす。コゴニヤが方伯たりし時代に西利亞の總督たりしクレンニオは、路加傳第二章に記載せられたる如く收稅の統一を謀らんとして、其結果としてガリラヤのユダを首謀せざる一揆を見るに至れり(徒五の廿七)。ヘロデ黨の組織せられしも、此時以後の事なりしなるべし。方伯の中最も名を知られ、基督傳に最も密接の關係を有するはギンテオ、ヒラト也。彼に就ては其餘を見よ。

ヘリヤの分封君たり。新約には單にヘロデと稱せらる。彼は其野心、奸智、虛榮心に富みたりしことに於ては、其父ヘロデ大王に酷似したりしが、父親には能力と勇氣と有せざりき。耶蘇が「其氣」(路十三の廿二)と稱し、又弟子を警めて「ヘロデの獅子を懼めよ」(可八の十五)と云ひたりしは、ヘロデの弱きを、彼が兵隊に頼りしセフォリア市を再建して之を擴張し、ヨルダンの東に在るベタラムアタを圍めてリビアと名け、ゲネザレ湖畔に新都を起してテベリアと稱せり。彼は兄弟ヒリヤの妻ヘロデヤを娶り、バプテスマのヨハネの直譯せるを怒りて之を獄に投じ、後之を殺せり。後又ヒラトと共に基督の處刑に與れり。紀元廿六年亞利比亞王アレタスと戦ひて大敗せり。時にアゲリッパ一世(ヘロデ大王の孫)羅馬に在り、カリヤラ帝の寵を得て、ヒリヤの領地たりしイタリヤ其他を領し、アントニオを讒奏して之を廢せしめ、其所領たりしがガリラヤ、ヘリヤを併せ(四〇年)クラオテヤの即位と共にユダヤ、サマリアをも領有し、パレスチナ全土を統一するに至れり(四一—四四年)。彼は其在位の間パルティア派の主義に則り敬虔の態度を表し、國民に對して勉めて好意を表したりき。彼が基督教徒を迫害したりしは、思ふに之がためなりしなるべし。彼の死後パレスチナは再び西利亞の總督に屬せる方伯に依りて支配せられたり。アントニオ、ヘリヤ(五二—六〇年)は其第四回の方伯にして、ホルキオ、ヘストス(六〇—六二年)は第五也。紀元五十年に至りアゲリッパ二世(一世の子)はレバノン地方のカルシスに一小領地を授けられしが、三年の後王位を授けられ、ヒリヤの領地を加へられ、ネロ帝の時更にヘリヤとガリラヤの一部を加へられ、死に至るまで(一〇〇年)其王國

新約聖書の時代

新約聖書の時代

新約聖書の時代

を領したりき。斯る間に猶太人間に於る羅馬の壓制に對する不満は漸く増長し、ヘリヤの在位の時より反逆の勢漸く成らんとするの勢を示せり。ゲシオ、フロラス(六四—六六年)は最後の方伯にして、暴虐を極めしは、人民の激昂を加はり反逆の火種遂に炎上せり(六六年)。於是西利亞の總督セナオ、ガロス兵を率ひて來り鎮壓せんとして、却て反逆のためには敗られ、其勢益々猖獗を極めしは、六七年ネロ帝はグエスタワアンをして六萬の兵を率ひパレスチナに向はしむ。會テロ帝死し、之に繼げるガルス。オソ。ウイテリオの在位も短く、グエスタワアン推されて帝位に即しめられたりしが、七十年の春羅馬に歸り、其子ナオスをして兵に將としてエルサレムを攻めしむ。羅馬軍は七十年の復活節に全市を圍みしが、此時市中には多數の人民各地より入込み居たり。猶太人は頗る頑強なる抵抗を試みたりしも、敵軍漸く兵を進め、新市街先づ陥り、下軍之に次ぎ、アントニアの壘も亦遂に陥るに至り、續て宮殿破壊せられ、テラスは聖所のみは破壊す可らずと命ぜしに、猛り切りたる兵士等は其命を用ゐず、アラの月(今の八月頃)九日遂に之に向て火を放ち、莊嚴なる神殿も怒り灰燼に歸するに至れり。羅馬人の手に落ちし猶太人は、老幼男女貴賤の別なく悉く殺戮せられ、エルサレムは全然羅馬の占領に歸し、全く壊滅し終りたり。七十三年の初に至りて當時尙殘存せざりし各地方の業も悉く占領せられ、之と共に猶太國は終焉を告げ、戰爭に依りて荒されたる土地は、多く荒涼の地となり、住民は四方に離散したり。(四) 社會上の状態 耶蘇の時代に於ける猶太人の

ノ部

新約聖書の時代

重なる職業は、早き時代に於けるそれと同じく農業にして、牧畜も亦之と共に盛なりき。而してガリラヤ湖邊に於ては漁業盛に行はれ、狩獵も亦重なる職業の一なりしといふ。諸種の工業も併因以後の時代に在りては、歳入の重なる源泉の一をなし、建築家、彫刻家、治工、陶工等に關する記事は、タルムドその他の文學に於て之を見るべく、後代の學者は手工に依りて生活したりしといふ。希臘時代より商業も亦盛に行はれ、パレスチナの猶太人も外國に在る同胞に依りて盛に之を營めり。エッセイ派の人々は商業を賤しみを排斥したれ共、此は此派の人々のみにして、耶穌の時代には祭司及び教法師さへ商業に従事したりしといふ。當時官吏若くは公吏の得たりし報酬は何程なりしや明ならず。長老、判事、サンヒドリンの議員の如きは、思ふに名譽職なりしなるべしと雖も、會堂の世話人、宮廷の役人の如きは、働きの其價を得るは宜也と云へる當時の格言に基き、相當の報酬を得たりしこと疑ふ可らず。祭司及び神職に奉仕せる人々が報酬を得たりしことは明白にして、レビは十分一税を得べしとの規定に基き、人口の増殖、富の膨脹に従ひ、莫大の收入を有したりき。而してエルサレム滅亡の當時猶太國內に散在せる祭司の總數二萬人に上り、其中五千人はエルサレムに住したりしといふ。所謂自由市民の中には傭人なる者あり。此等の人々は土地を所有せず、又一定の職業なく、人に傭はれ労働に依りて生活する者にして、其數甚だ少からず。太甘の一以下に記されたる耶穌の傳説は、此階級の光榮を描ける者也。此外奴隷なる者あり。猶太人も其負債を償還すること能はず(太十八の廿五參照)又は倫盜の罪を犯す時は、奴隷となされたりしと雖も、猶太の律法は奴隷たる時期に制限を附したりしを以て、奴隷の多くは金錢を以て購はれたる外國人なりき。併因より歸り來れる直ぐ後の時代に比すれば、耶穌出現の頃の猶太國民は、概して勤勉にして勢力を有せり。當時彼等は十分一税の如き重き負擔と共に、羅馬政府より苛税を課せられしと雖も、尙能く之に堪ゆる程の富を有したりき。故に物質上の富の状態より云へば、當時の猶太國民は左迄不幸の状態に在りしといふ可らず。猶太人生活の中心は其古來より奉じ來れる宗教にして、上流社會即ちサンヒドリンの議員及び學者の如きは云ふ迄もなく、全國民の精神を傾注したりし者は宗教なりき。而して其宗教的生活の中心はエルサレムの神殿に在り。彼等に取りては神殿は神の住み取りては無上の光榮にして又彼等の有する特權なりき。然るに彼等が併因たりし間神殿の祭典中止せられたりしかば、此間に於て會堂(Synagogue)なる者組織せられたりしが、彼等がパレスチナに歸り來るや此組織をも携へ來りて之を移植し、耶穌の時代には至る所會堂を見ざるはなき有様となり、エルサレムのみにて其數四百八十の多きに達したりき。此會堂にては犠牲を供ふる祭典を行ふこと禁ぜられ、單に祈禱を捧げ聖書を朗誦し之を説明するのみなりき。而して神殿と會堂とは斯くして相助け、以て猶太人の宗教的生活に甚大の感化を與へたりき。當時猶太の少年が如何に教育せられたりしやに關しては吾人の知る所甚だ少しと雖も、ヨセフス及びフィロンの著述に於ては猶太人が兒童教育に最も力を盡し、幼少の時より之に律法を教へたりしと云ひ、保羅がテモテに贈れる書に「幼少より聖書を讀むことを知

新約聖書の時代

に訓練せられ、之を初めとして希臘語の猶太文學は此地に起れり。フィロンの著述に起れる哲學の代表者さしふべき者也。以上の如く世界の各地に散在せる猶太人は、エルサレムを以て彼等の宗教の中心となし、大祝節には數千萬の猶太人等聖地に旅行し、其處にてエホバを拜し之に犠牲を獻けたり。斯くエルサレムとの關係を保ちて居ることなかりしことは、基督傳播の上にも多くの便宜を供したりき。【參考書】 シュテックマン博士の『新約時代の歴史講義』ハクスラットの『新約時代の歴史』フアラの『聖書以後の猶太人史』ランゲンの『基督時代のパレスチナに於ける猶太人史』エデルシャイムの『メッシーヤの傳及び時代』シワレルの『猶太人民の歴史』ホルマンの『新約時代の歴史』邦語にては原田助博の『耶穌の時代』

新約聖書の時代

れり(提後三の十五)と云へるを見れば、篤信なる猶太人が其兒童の教育に意を用ゐたりしこと明也。而して當時の教育は單に家庭に於てのみならず、又學校に於てもなされたるが如し。タルムドの記す處に依れば、ヨシヤ、ベン・ガマリエル(思ふに六三―五年祭司長たりし人なるべし)は凡ての市色に學校を設け、兒童六七歳に及べば就て學ばしめたりしと云ひ、ヨセフスの傳ふる所に依れば、ヒレル及びシヤマイの弟子なるユダ及びマツテアはヘロデ大王の時代に於て少年を集めて之を教育したりしと云ふ。而して保羅の如きもエルサレムにてガマリエルの門下に學びたりしと云へば、當時斯る大小の學校所に設立せられたりしなるべく、而して此等の學校に於ては主として律法を教へたることなれ共、此外に希臘生れの猶太人のために、希臘風の教育を施す學校もありしは、ヨセフスの傳ふる所に依りて推知すべし。【五】 宗教上の諸黨派及びメッシーヤ降臨の希望を以て國民的生活の中心となしたりし猶太人の間に、其活動の結果として分派を生じ來りしは既に足らず。當時勢力を有したりし黨派はパリサイ、サドカイ、エッセイの三派にして、之にセロテを加ふべし。此等の分派及び當時の猶太國民がメッシーヤの降臨を期待したりし事に就ては『耶穌基督の傳(八十一―八十二頁)』を見よ。尙此等の分派の詳論に就ては各々其條を見よ。【六】 散在せる猶太人 猶太人の郷國はパレスチナなれ共、多數の猶太人は自國以外の諸國に散在したりき。之を散れる者(Dispersion)と稱し、其數自國內の住民よりも多かりしが如し。巴比倫に併因となりし猶太人の中タロスの大奴に達して歸國マ

ノ部

新約聖書の時代

しは、重んじユダ、ベニヤミン兩族の子孫にして、其他の多數はユフラテ河の彼岸に永住したりき。故にヨセフスは凡人類の彼める所は猶太人にて充てりしと云ひ、フィロンの著述に猶太人は他の國民の如く一國の内に屏居する者に非ずして、全世界に所を住居せりしと云へり(徒二の五―十二參照)。即ちアッスリヤ、メデア、巴比倫、メソポタミア等には數千の猶太人居し、ユフラテ河に沿へる低地、殊にニヘビス及びチアルダは猶太人の集會地と稱せられ、チアルス河の東北アデアベチ王国と稱せられたる地方にも多數の猶太人あり。亞刺比亞にてはエメン地方に住居せし者頗る多く、前二世紀の頃繁榮する傭民地ありしといふ。保羅が改宗後亞刺比亞に往き、三年間留りたりしといふ(加一の十七、十八)思ふに此地地方なりしなるべし。亞歷山大王の亞細亞洲にて征服したる各都會には、何處にも多少の猶太人住居し、希臘人、マケドニヤ人等と同一の權利を有したり。轉じて西利亞の地方を見れば、此處にも亦多數の猶太人住居し、ダマスコの如きは其數千人に上り、アンテオケは殊に多數の猶太人を有したりき。小亞細亞の諸都市にも亦多くの猶太人住居し、保羅が傳道のため各地を巡回せし時至る所に猶太人の會堂を見たりき(徒十三以下)。猶太人は小亞細亞より更に進んで希臘其他の歐洲各地に入り込み、以て利殊に羅馬には多數の猶太人住居し、尙進んで西班牙に至れる者ありしが如し。亞非利加に於てはゲレチは猶太人の重なる殖民地にして、モビヤ、エテナヒヤ等にも多數の猶太人住居したりき。然れ共猶太人の移住したりし都市の中最も著名なりしは、埃及の亞歷山にして、耶穌の時代には、一百万以上の猶太人此處に住居したりしといふ。舊約全書は此地にて希臘語

新約聖書の年代

に翻譯せられ、之を初めとして希臘語の猶太文學は此地に起れり。フィロンの著述に起れる哲學の代表者さしふべき者也。以上の如く世界の各地に散在せる猶太人は、エルサレムを以て彼等の宗教の中心となし、大祝節には數千萬の猶太人等聖地に旅行し、其處にてエホバを拜し之に犠牲を獻けたり。斯くエルサレムとの關係を保ちて居ることなかりしことは、基督傳播の上にも多くの便宜を供したりき。【參考書】 シュテックマン博士の『新約時代の歴史講義』ハクスラットの『新約時代の歴史』フアラの『聖書以後の猶太人史』ランゲンの『基督時代のパレスチナに於ける猶太人史』エデルシャイムの『メッシーヤの傳及び時代』シワレルの『猶太人民の歴史』ホルマンの『新約時代の歴史』邦語にては原田助博の『耶穌の時代』

新約聖書の年代

同七五四年を以て耶穌誕生の年とし、之を紀元元年と數へたれ共、彼の計算には數年の相違あること後に至りて發見せられたり。路加福音書には、耶穌は羅馬帝アウグストの世クレオ、スリヤを治めし時の初次、戶籍調査の行はれし時、メッセルヘムに生れたりとの事を記すれ共、戶籍調査の行はれたる時日を記さざるを以て、耶穌誕生の年代を定むるの料となし難し。耶穌誕生の月之日に至りては全く不明にして最古の傳説は東教會に在りては之を一月六日に在りとなし、西教會に在りては之を十二月廿二日に在りとなしたりといふを以て満足せざるべからず(基督降臨節の條參照)。【一】 耶穌受洗の年代 路加は「時に耶穌齡凡三十にして福音を宣へ給む」と記せり(三の廿三)。然れ共此語は耶穌が「宛も三十歳に達したりし時若くは「未だ三十歳ならずして」受洗せりといふが如き精確なる義に非ずして、廿八歳より三十二歳頃までを包含すべき頗る漠然たる意義を有するが故に、此語のみにては、受洗の時を以て漠然紀元廿二年乃至廿七年に置くの外なし。然れ共第四福音記者は、耶穌が第一の過越節にエルサレムに上り、神殿を渡す者を遣出せし時、猶太人が耶穌に向ひ「此殿を建てしには四十六年を経たり云々」と云ひしこの事を記せり。此殿とはヘロデの建てたる神殿にして、此時四十六年を経る尙之を竣らざりし也。而してヨセフスの計算に依れば、此四十六年目の過越節は紀元廿七年に當れば、耶穌の受洗は遅くとも紀元廿七年の初め、廿六年の末ならざる可らず。又路加福音記者は「テベリオ、カイセル在位の十九年バプテスマのヨハネ其傳道を始めたなり」との事を傳へたり(二の二)。史家の計算に依れば、テベリオ帝在位の第十五年は

十字軍

失となす。爾後此處は東教會に於ける損益甚となれり。西教會に於ては之に反し苦みの基督よりも、寧ろ死に勝てる生命の君なる基督を願はすことを誓め、冠を戴き紫衣を纏へる基督を慕ひり。東西兩教會の相争へるに方りて、カレステイナル、フンベルト(Carlus Humbert)は東教會の諸家が基督を死する人として願はせるを非難し、教長ケールラウクス(Patriarch Callistus)は之に反して西教會の諸家が基督を想像的王として願はせるを攻撃せり。然れ共第十三、四世紀に至りては東教會の諸風西歐にも勢力を有するに至れり、而して之に反し東教會に於ては、偶像破壊の争論中十字軍は遂に消滅するに至れり。西教會に在ては唯に教會に於て禮拜の對象として十字軍像を見るのみならず、家々に於ても亦私拜の對象として之を見し。

十字軍

事蹟 第十一世紀土耳其人回教を信じ、パレスチナを掠奪するや、聖地に參詣する基督信徒に大なる妨害を加へたりしが、歐羅巴洲に西歐の基督信徒は佛怒として起り、十字軍と稱する聖地回復の戦争を起せり。其之を十字軍と名けたるは之に與れる者皆十字軍の徽章を用ひたりしに因る。此運動の動機は初め純然たる宗教的熱心に外ならざりしが、後基督教武士回教戦士との比武と變じ、更に政治的、商業的目的を加ふるに至れり。此戦争は併せて七回也。

十字軍

大演説を爲したりしに、集會者は皆異日同音に『是れ神の聖意也』と云ひて之に應じたりき。是れ實に十字軍の起點とも云ふべき者也。然れ共斯る大なる事業は容易に非ず、其進むや遅かり。斯くて一〇九六年八月十五日を以て軍旗の動くべき日也と定めたりしが、人民の中には之を待つこと能はざる者あり。其一群は隠者ヘテロを大將として三月出發し、他の一群はウエラテルに導かれて稍や後れて出發し、第三の一群はゴットシャルク之を率ゐて出發したりしが、此等の人々は掠奪其他の罪惡を敢てしたりしがため、アラブ人、希臘人等の抵抗を受けて潰走せり。本軍は初期の如く出發し、海陸並び進んで、一〇九六年の末日コンスタンチノブルに入り、其第一戰に於てニコヤを陥れ(一〇九七年六月)次第に進んで小亞細亞を占領し、七月間アンテオク包圍の後、一〇九八年六月漸く之を陥落し、一〇九九年六月十日初めてエルサレムに達し、其七月十日を以て之を攻め落したりしが、無情にも市中に在る猶太人を悉く殺戮し、回教徒數萬人を殺戮し、此處に新王國を建設し、ゴッドフリーを立て國王となせしが、彼は王の名稱を辭し『聖墓の保護者』なる名稱を以て政治を掌り。後數ヶ月にしてパレスチナ全國を占領し、多數の軍隊は各々本國に凱旋せり。其翌年ゴッドフリー死し、其弟、兄の後を繼ぎて王位に登れり。一〇九九年アンタキヤに死し、爾後内亂相繼ぎ、且パレスチナに殘れる兵數次第に減少せしため、此地方に在る回教徒のために攻められ、基督教徒の勢甚だ衰はずなり。

十字軍

事蹟 第十二世紀土耳其人回教を信じ、パレスチナを掠奪するや、聖地に參詣する基督信徒に大なる妨害を加へたりしが、歐羅巴洲に西歐の基督信徒は佛怒として起り、十字軍と稱する聖地回復の戦争を起せり。其之を十字軍と名けたるは之に與れる者皆十字軍の徽章を用ひたりしに因る。此運動の動機は初め純然たる宗教的熱心に外ならざりしが、後基督教武士回教戦士との比武と變じ、更に政治的、商業的目的を加ふるに至れり。此戦争は併せて七回也。

十字軍

ワグネ三世自ら此運動の率先者となり、パルナルドは獨、佛、二國に於て十字軍に加はるべきを説き、神は必ず異教徒を滅し、基督教徒に勝利を得せしむべしと説けり。斯くて獨逸皇帝コンラッド三世、佛蘭西王ルイ七世の率ゐたる軍勢は東方に向て進み、漸くにしてスリヤに到着し、ダマスコを陥落せんとして之を圍みたりしが、東羅馬皇帝の陸軍に依りて、獨逸兩軍共に大に敗れ、之に繼ぎに獨逸、疫病を以てし、全軍全く潰走し、十字軍の失敗に歸したり。

十字軍

事蹟 第十三、四世紀に至りては東教會の諸風西歐にも勢力を有するに至れり、而して之に反し東教會に於ては、偶像破壊の争論中十字軍は遂に消滅するに至れり。西教會に在ては唯に教會に於て禮拜の對象として十字軍像を見るのみならず、家々に於ても亦私拜の對象として之を見し。

十字軍

過ぎず。一〇九二年聖地を去りしが、歸途英國のために擯にせられたり。

十二使徒の教訓

事蹟 第十四、十五世紀に至りては東教會の諸風西歐にも勢力を有するに至れり、而して之に反し東教會に於ては、偶像破壊の争論中十字軍は遂に消滅するに至れり。西教會に在ては唯に教會に於て禮拜の對象として十字軍像を見るのみならず、家々に於ても亦私拜の對象として之を見し。

十二使徒の教訓

事蹟 第十六、十七世紀に至りては東教會の諸風西歐にも勢力を有するに至れり、而して之に反し東教會に於ては、偶像破壊の争論中十字軍は遂に消滅するに至れり。西教會に在ては唯に教會に於て禮拜の對象として十字軍像を見るのみならず、家々に於ても亦私拜の對象として之を見し。

シの部

十二使徒の福音書

食の事、祈禱の事、主の晩餐の事等に就き、基督教徒の守るべき方法を示し、且當時の教會政治の事にも言及せり。...

十二族長約書。十分一税

十分一税

人々の中に使用せられたる馬太の福音書と稱する者同一の者なる事は、エヒファニウスの引きたる初めの句に、十二使徒の召の事あり、...

の義務として定められたり。以色列に於ける其の歴史は多くの點に於て明白ならず。創世記十四章には...

シの部

十分一税

納めざりき。 (一) 祭司典に於ける十分一税、エセキエルの制度には十分一税の如き律法なし。祭司典は初代の規定よりも進歩せる者也。...

計算せられたり。尤もマイロローンは祭司の臨時手當の中に加へたり。若し第二の税にして金銀に兌換せらるる場合には、...

哲學者の巨擘として知らる。 ジェラシウス第一世 Gerlachus I. 人名 羅馬法王。四九二―四九六在位。前法王フレイタス三世、...

ジェオのジェエのジェーム

ジェラ

ジエローム

せしかば、ウエラシウスは帝と新法王を破門す。暫くして羅馬に歸りし、フランツワニ及び帝黨の爲に再び逐はれ、佛蘭西に走りタルニーニへ行く途にて死す。

ジェルトン

ジャン シャーワエ Genon, Jean Chastier 人名 一三六三—一四二九 佛蘭西の名高き神學者、所謂カリカン主義の祖。レイムスのウエルツ村の農夫の子なりしが、母は第二のモニカなりしと彼自ら言ひしことあり。巴理のナバル學院に入り、ペトル、デイリ及びワル、ド、シヤムアの下にて神學を研究し、一三八七年には名聲の高きため選ばれて大學を代表し、法王クレメント七世の朝に至り、ドミニコ派の僧モンソンのウオアンがマリアの無罪懐胎を否定せしを訴へたり。九二年デイリに繼いで巴理大學の長官となる。神學者として彼は煩瑣主義を厭ひ、其の晦昧無用の點多きを説き、神學の改革を著し、聖書及び師父の研究を勤め、自ら唯名派哲學を取るが故に神學の神學を唱へたり。然れども第十四世紀神學派とは異なる所あり。彼は聖ゲイトルのユーゴ及びリチャルドに倣ひ、内に自己靈性的の状態を見て其の法則を知らんとせり。其の教義は二部より成り、一、思辨的神學主義、二、實際的神學主義と云ふ。此の神學派は即ち愛の神學なりと定義し、愛こそ人の意志を神の意志に従はしむる器械なれと言へり。然れどもジェルトンの最も大なる働きは、當時混亂な教會の狀態を整理せんことをし事あり。法王は南北兩方に立ち、一時は彼も教會を一致せしむる途なきに絶望し、大學長官及び公生活より退きしが、一四〇三年法王ベネディクト十三世の逃亡の頃巴理に歸りて法王に説く所あり、一四〇九年セザの會議にはデイ

ジョン

ジョン

ジョン

ジエローム

と共に勢力を振ひ、同會議及び一四一四年一八年のコンスタンツ會議には同會議を法王より獨立せしめ、法王を訴へ、又は廢立するの權を有せしめんことを建議し、兩法王を召集せしも二人ながら應ぜざりしに由て共に之を廢せり。一四一〇年に出したる『世界會議に由る教會の一致改革』にては又同様の事を主張し、會議を法王より以上に置かんことをり。かくて彼は實にカリカン主義の祖たりしなり。然れどもヨハン、フッスが召されて處刑されたるも同會議にして、ウエルツンの書より十九箇條の異端説を指摘し、處刑者の重なる一人となりしは彼の一生の汚點なりき。議會終りて歸らんことを時、アルカンター侯は烈しくウエルツンに敵對せしかば、彼はバリエルンに逃れ其所にて尙著作を出だし、維納の新設大學に招かれしも拒絶し、一四一九年アルカンター侯の死せしに由り佛蘭西に歸り、ジャンに住み小兒の教育に専り十年を献げ、愈々臨終となりし時また小兒を集め彼等と共に祈りたりと云ふ。

ジェルメーン

オーサールの聖 Germain De Auxerre, St. 人名 佛蘭西の聖人。市民に懇請せられて四一八年生地の監督となり、最も厳格なる隱遁主義を採用し、四二九年には英國に渡り、正統派を助けてペラヤウス派と争ひ、アルモリカ人のために死す所あらんとして四四八ワツエナに行き其所にて死す。生時非常に名高く今尚佛蘭西にて尊崇せらる。

ジェルメーン

バ理の聖 Germain De Paris, St. 人名 四九六—一五七六 聖シムフリアンの院主なりしが、五五〇年巴理の監督となり。メロヴェウス朝の乱世の中に善く其の職務を盡

して民の崇敬を受けり。

ジエローム

又はイェロニムス(Jerome) プラダの Jerome (Jeronymus) von Prague 人名 一三六五—一四一六、ボヘミアの改革殉教者。プラダの貴族の子、牛津に學び、ウィックリフの神學書を讀らして歸る。次でプラダにてパトリックを、更に巴理にてマスタルを、一四〇七年フランスの計劃に深き同情を抱きてアラカに歸り、一〇年波蘭王に招かれてワカオ大學の確立を助くるために赴き、次で匈牙利王シズムンドの前にて説教せんためオーフェンに招かれ行けり。去れど異端の嫌疑を受けて維納に脱れしも捕はられ、終にアラカ大學の要求に由て免さるゝを得たり。一四一四年フランス召されてコンスタンツに行かんとするに之を奨励し、必要に應じて助力せんを約し、之を守りて翌年四月五日コンスタンツに到着せしが、市の貴族等の忠告に由り翌日脱走せし、ヘルショウにて捕はられ、コンスタンツに送還せらる。フランスに連れられ九月十日會道のため一たび其の信仰を取消せしも、翌日再び之を取り消して再び歸り、再審を受けしも此度は如何にしても信仰を取消さず、五月三十日禁閉に處せらる。焔の燃ゆる中に彼は復活節讃美歌を唱へ、祝ひ日を唱へ、使徒信條の父と子と聖靈の條を繰返し、語して死せりと云ふ。

ジェンチリス

ジョーバンニ フレンチ Genilis, Giovanni Valentino 人名 一五二〇—一五六六 以大利の僧。改革主義を奉じて國を脱しウエチツアに住す。然れども三位一體説を否定す。ウエチツアの官吏同市在住の凡て以大利信徒に向て信仰告白に署名することを求めし時、彼はソーシメスの事に鑑みて之に従ひしも、依然自説

を標榜せしかば告發せられて處刑に宣告せらる。脱れて波蘭に行きしもまた波蘭に歸りしに、バレンにて捕はられ、鼻端を以て獄に投ぜられ、終に斬首せらる。

ジェンチレット

インノチエント Gentile, Innocent 人名 維納に生れ、改革主義を取り、迫害のためウエチツアに脱れ、一五七六年佛蘭西に行き、アレノールの議會議長たりしことあり。されど一五八五年再び脱れウエチツアにて死す。其の『福音的佛蘭西基督教教義』は改革教義の最良なるものなり。

ジェンナティウス

Gennadius 人名 一四五三—一五九 コンスタンチノールの教長たりし人、其の時代の哲學神學の著書多し。私生活の事は委しく知るを得ず。實名はウエチツア、スコラオスといふ。東帝に事へ宮廷議員、帝國議員となり、一四三八年にはハネス帝に從て、フエツア、フイレンチエ會議に列し、僧ならざる故參議權なかりしも東西兩教會の合同を主張し、又書を著して國人にも勸む。然れども希臘に歸りて主張一變し合同に極力反對するに至り帝と合はず。一四四八年ヤントカラトル僧院に退き、修道僧となり文學に從ふ。マホメト二世コンスタンチノールを取るや僧名ウエチツアイウスとされるスコラオスをして教長の位を充たさしめ、其れまで東帝のなせし就職式を『ステタン』(土帝)行ひたり。ウエチツアイウスも基督教信仰の告白及び説明を明確に書き、バレンアの裁判官ブラウシカモスをして土耳其語に譯せしめて土帝に呈し、後又土耳其人基督教者との問答の體となせる説明を作りて帝に呈す。然れども土帝の下に教長たるは長く堪ふる能はざるに至り、一四

五九年監を蒙り、マケドニアのセルに近き一僧院に退き不明の中に死す。著書は甚だ多けれど大抵原稿のみとなり居れり。

ジョン

コルヴイノの John of Monte Corvino 人名 一二五〇—一三三三 中世の支那教化者。南部以太利コルヴイノ山に生る。彼斯に行きて多くの蒙古人を改宗せしめ、一二八八年事業報告のため召還せられしが、支那帝忽必烈基督教の師を得たしと稱ひしに由り、一二九一年支那人間に傳道すべく委任せられ、異教徒に對し同情なきチンチウリス派中に在りて孤獨迫害に堪ふる。二十一年、六千人を改宗せしめ、新約及び詩篇を譯し、男子學校を起す。一三〇五年七人の補助者を送り北京の監督にせらる。

自我實現説

The Theory of Self-Realization 學說名 自我實現とは自我に具在せる諸性能を圓滿に發展せしむるの義にして、自我實現を以て人類の目的也とせる倫理説を自我實現説といふ。此説は古代に在りてはアリストテレス、近代に在りてはカント、フイヒテ、ヘーゲル之を主張したれ共、最近此思想を最もよく代表し明確なる論究を爲せる者をトマス、グリーン (T. H. Green, 一八三六—一八八二)とす。進化論派倫理説は其快樂説の根據に立てたる者否とに拘はらず、皆一様に人類の生活を其本質上より動物的生活全體の一部と見、隨て人類に應用せらるべき善惡の原理は又同じく動物全體に應用せらるべき者也と見たり。是れ畢竟人を感性的方面よりのみ見たる者に外ならず。自我實現説は斯の如き思想に反抗して起りたる者にして、其説に以て感性的生類としての人類は動物と異らざれ共、理性的生類としての人類は大に異れり、即ち人類は

自我實現を有す、是れ動物の有せざる所、而して人の善、即ち目的は此の自我實現を充足せしむるに在り。

グリーンは『永遠なる心意』を以て世界の本能とし、自意識的生類を以て之が再々となし、斯くして道徳の基礎を心算の原理の上に置きり。自然的倫理學者は、人類を引き下げて自然的存在物となし、人類をして必然法に屈せしめたる共、グリーンは人類を以て自由原因にして自由意志を有せる者となせり。何を以て自由原因也といふ。曰く、吾人の有する自意識の根源なる世界の大自然は、一切萬有の淵源にして外に之を束縛する者なく、時空の範圍を脱し、因果法の規定以外に立つたのみならず、因果法と云ひ必然法と云ふも皆此大自然の所産に外ならざれば也。何を以て自由意志を有すと云ふ。曰く、吾人は種々の欲望を有すれ共、此欲望は直ちに行爲の動機となる者に非ず、之が動機となるには欲望の對象と自己とを一致せしむる意志の作用を有す、此作用ありて欲望は理想を造り行爲の原因となる者に

して、欲望の對象と自己とを一致せしむる者は自意識の自由なる働に外ならざれば也。既に自意識の働あり、故に何人も自己の行爲に對して道徳的責任を負ふこと能はず。此の如くグリーンは自意識の原理を立てて人類を自然以上と上はせ、其處より自由原因と自由意志とを導き出し、以て人類を道徳的生類となしたり。彼に依れば善は自我を満足せしむる者にして、自我と相關なる者、自我の有する恒久性を有する者、換言すれば永續的の自我の永續的充足也。故に善は吾人の自然的要求の充足即ち快樂に非ず。吾人の行爲の目的は一定の事柄を認めて直ちに之に向ひ、自我を充足し、自我を完成するに在り、

ジョン

ジョン

ジョン

ジョンの自我實現説

自我實現説

シの部

耳語懺悔

快樂は其結果として生じ来るものにして、吾人行為の目的には非ず、是れ吾人が平生必ずしも快樂に向はず、却て往々身を設して仁を爲し生を棄て義を取らざるの行爲を爲す所以也、アーンは又自我を以て感情、欲望、及び意志を結合し、若くは是等が結合せられて、自己を自己の對象となす行動者の性格を爲す者也とせり、彼に依れば自我は欲望の系統にして、欲望の系統中には感性も理性もあり、欲望の系統の充足は是れやがて自我全體の充足也、換言すれば欲望はそれ自ら善惡の性質を帯ぶる者に非ず、罪惡なる者は唯或る特殊の欲望を充足せんとして其他の欲望を顧みず、欲望の系統の調和的活動を妨害する所に生ずる者なれば、あらゆる欲望を系統的に組織し、軍備の備を許さず、種々の欲望を道徳法に照して整理し、以て調和的活動を爲さしむる所に自我は實現する也、アーンは又個人と社會との兩者に着眼し、自我の實現を以て必ず社會の勢力に依らざる可らず、自我の發展を以て社會を離れて望む可らずとせり、人の目的は個人善なると共に社會善なるべきべからず、而して其善は個人の方面より云へば自我實現にして、社會の方面より云へば社會實現也、故に眞の自我實現は社會實現を除きて之を期すべからずと云へり、自我實現の詳細を知らんと欲する者はアーンの『倫理教義論』(Prolegomena to Ethics)を見るべし。

耳語懺悔 又は私語告白 Auricular Confession

之を行はざる者は聖門の刑に處すべしとのことを定め、爾後今日に至るまで凡ての羅馬教徒の義務として行はる。 Deaconus 希伯來語 Rofar'cuph (申四の十三、十四の四)は「十誡の律法」の義にして、Deaconusは最も相當の譯也、十誡の法(Ten Commandments)を稱するは、原語の體裁としては稍不當を缺けり、蓋し、英語にても日本語にても通常斯く稱せらる。又「出廿五の廿一」(Covenant) 邦譯には「律法」とあり、「契約」(申九の九、Covenant)とも稱せらる。 十誡の與られたる次第は左の如し。以色列の民神の啓示を得んとしてシナイ山の麓に集る。雷電及び雷雲山を蔽ひ、又喇叭の聲ありて高く響き、營に在る民皆震動す。エホバ火の中に在り、煙れる山に下り(出十九の十六以下)、此處より民神の聞き得べき聲を以て、律法の語を告げ給ふ(出廿の十九、申四の十二)既にモーセに語ることを終へ給ひし時、申四の十二を著し給ひし語の二枚をモーセに賜ふ(出卅の十八、申四の十三)斯くしてモーセ營に近づくと及び、民等が營を造り給ふ有様を見て大に怒り、其手より律法の板を斷ち之を碎けり(申卅の十九)。エホバ又モーセに命じ石の板二枚を作りてシナイ山に携へ來らしめ、再び別の語を書きて與へ給ひ(申四の十一)之を櫃に藏めしめ給へり(申卅の五)。 十誡はモーセ六經中二箇所に記さる。一は出廿の二、十七に記す、之を古身的神學といふ。二は申五の六、廿一に記す。此二箇多少の相違あり、今出埃及記に從て之を記せば左の如し。 一 我は汝の神エホバ、汝を埃及の地其奴隷たる家より導き出せし者也。汝我の前のに我の外何物をも神とすべからず。

十誡

十誡

- 二 汝自己のために何の偶像をも彫む可らず。又上は天に在る者、下は地に在る者、並に地の下の水の中に在る者の形状をも作るべからず。之を拜すべからず之に奉ふべからず。我エホバ汝の神は眞の神なれば、我を惡む者に向ひては父の罪を子に報いて三四代に及ぼし、我を愛し我が命を守らる者には恩恵を賜して千代に至る也。 三 汝の神エホバの名を妄りにあぐべからず。エホバは己の名を妄りに口にあぐる者を罰せてはばかざるべし。 四 安息日を憶て之を聖潔すべし。六日の間勞きて汝の一切の業を爲すべし。七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲すべからず。汝も汝の子息、息女も、汝の僕婢も、汝の家畜も、汝の門の中に居る他國の人も然り、そはエホバ六日の中に天地と海と其等の中の一の物を作りて第七日に息みられたれば、是を以てエホバ安息日を祝ひて聖日とし給ふ。 五 汝の父母を敬へ、是は汝の神エホバの汝に賜ふ所の地に汝の生命の長からんため也。 六 汝殺す勿れ。 七 汝姦淫す勿れ。 八 汝盜む勿れ。 九 汝其隣人に對して虚妄の證を立つる勿れ。 十 汝其隣人の家を食する勿れ、又汝の隣人の妻及び其僕、婢、牛、驢馬に於て汝の隣人の所有を食する勿れ。 申命記に記せるものは、第四誡の安息日を聖く守るべき理由、出埃及記のそれと異り、第七日に其業を息み給へる造物者の例に倣はんために非ずして、埃

シの部

十誡

及の勞役より救はれたるを感謝し、人道を行はんとす也。故に此處には左の如く云へり。曰く。 安息日を守りて之を聖潔すること汝の神エホバの汝に命ぜし如くすべし。六日の間勞きて汝の一切の業を爲すべし。七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲すべからず。汝も汝の男子女子も、汝の僕婢も、汝の牛、驢馬も、汝の家畜も、汝の門の中に居る他國の人も然り、斯く汝僕婢をして汝と同じく息ましむべし。汝の神エホバ強き手を伸べたる腕をして、其處より汝を導き出し給へり。是を以て汝の神エホバ汝に安息日を守れと命じ給ふ也。 第五誡も申命記は、父母を敬ふもの、神より受くべき報として「神のあらんため」の句を加ふ。第十誡も出埃及記のそれは順序相異り「汝其隣人の妻を食する勿れ、又隣人の家、田、野、僕、婢、牛、驢馬並に凡て汝の隣人の所有を食する勿れ」と云へり。出埃及記の方申命記に記載せる者よりも古く正しき者也とのことは、アリマナ、アイホマン、ロホルトソン、スミス、ドライゲル等近代學者の多くが一致する所也。 十誡がモーセの作也とのことは古來よりの傳説なりしが、近來之に反する三箇の説あり。第一はウエールハウゼン、ケーセル、スメント、ペーンシエ等の説にして、彼等は十誡全體の精神及び詳細の點共に預言者以前の儀式的宗教と全然調和せず、此は早くとも前八世紀頃の預言者の宗教の綱領を示せる者として見るべしと論ぜり。第二はモーセがエホバの名を以て、十誡の中に含まれたる律法を以色列人のために設けたりとのことを承認すれ共、其中或るものは

十誡

十誡

モーセ以後の產也と論ずる者にして、即ち第四誡に農業的生活を假定するが故に、モーセの時代に過ぎず、又第二誡には偶像を彫むことを禁じたり共、土師の時代及び王政の初代に此禁制のなかりしを見れば、モーセ時代に立てられたる律法とは認め難しといふに在り。イキチン其他の學者此説を主張す。第三はモーセが十誡の體裁、倫理的律法の作者也との傳説を承認すれ共、此等の十誡はもとは簡短なる者にして、人心に訴ふるため漸次理由又は約束を附せられたる者也、第二、第三、第四、第五誡には元來理由なく、第十誡には「汝其隣人の家を食する勿れ」とありしのみとの説にして、出埃及記及び申命記に記せる十誡が相異れるは此説を設する者にして大に勢力あり。エホバ以來多くの學者之を來す。 十誡が其簡短なる文字の中に、宗教の根本的簡條(神の主權と其權なる事)及び人間の諸關係(家、社會及び職業に對する)に於ける道徳の綱領を示したるは、著しき事實にして、殊に宗教と道徳とを以て離る可らざる關係を有する者として示したるは十誡の特色也。略言すれば十誡は倫理的敬虔の憲章にして、基督教以前に在りて、義を以て宗教の最高形狀となせる神學者也。聖世道徳を以て宗教に關係なき者の如く思惟したりし時代に於て、神は儀式よりも犧牲よりも正義と仁慈とを要し給ふとの事を明にせるは十誡の功也。然れ共當時此十誡の與へられたる人民は、尙未開幼稚のものなりしが、十誡の教訓も亦初步にして、從て其訓も未だ甚だ高からず。且其中八誡は消極的にして、僅に二誡のみ積極的教訓たるに過ぎず。元始人民教化のためには自ら然らざるを得ざれ共、道徳上更に高貴なる理想を有するものゝ要求には應ずるに足らず。是れ基督が更に之を再説

- 改正せし所は、我は十誡の神より出でたる者なることを承認すべし(太五の十七)之を解説するに方しては、更に其範圍を擴張し其要求を高めたる。今汝が再説せる十誡を示せば左の如くなるべし。 一 爾心を盡し精神を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし(太廿二の廿七)。 二 神は靈なれば拜する者も亦靈と眞を以て之を拜すべし(約四の廿四)。 三 更に誓ふ勿れ(太五の卅四)。 四 安息日は人の爲めに設けられたる者也(可二の廿七)。 五 父母を敬ふは他の宗教上の義務を盡すに優れり(太五の四十六)。 六 其兄弟を怒るは殺すと同じ(太五の廿二)。 七 婦人を見て色情を起す者は中心既に姦淫したる也(太五の廿八)。 八 (基督は別に之を説かず)。 九 爾曹惡にして如何で善をいふことを得んや、夫れ心に充つるより口に言はるる者なれば也。爾其いふ所の言に依て義とせられ、又其いふ言に依りて罪ありとせらるる也(太十二の卅四、卅七)。 十 (基督は別に之を説かず、然れ共其精神は彼の教訓に明也)。 斯くの如く福音書中には基督がモーセの十誡を再説するものあるを見るべしと雖も、彼は遂に之を二誡に約し(太廿二の卅六、四十一)其所謂「新しき誡」に於ては、更に之を一誡に約して「我れ新しき誡を爾曹に與ふ、即ち爾曹相愛すべし」と是也、我れ爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云へり(約十三の卅四)。基督教神學は通常十誡を以て神の啓示となし、

シの部

受難劇

なり。彼は歸國後直ちに講壇上より基督教攻撃を始め、師父の文書には法王の有する如き誤りなしと云へり。一五六二年アゴロワ、エドレンジェ、アンケイカ、ナイニ英國教會辯護を著す。第十六世紀神學書中最も傑出せるものなり。直ちに全歐に行はれ、以、四、傳、獨、和、希臘及びウェールズ諸語に譯せらる。トレントの會議は二監督を逐んで此書に答へしむ。最も有力なりし反對者は曾てヘンリー八世の時牛津の希臘語教授たりしトマス、ハーティンガにして、書中の弱點を指摘論駁せしが、ウェールズは一五六七年更に『辯護學の辯護』を著して之に答へたり。ウェールズの辯護は英國教會の地位に就ての辯護として最も完全に言ひ盡はされたる者にて、教義に於てはカールヴィン及びヒートルの感化あり。基督の人格、天賦の力、聖禮典等同説なり。去れど預定説なく、義とせらるるは全然基督に依るを説き、見ゆる教會と見えぬ教會の別を立てず、教職の三階級を許せど、必要の場合には普通信徒の禮典を執るを許すべきを説き、濫用なく英國教會は初代の加特力教會に立ち歸れるにて、之を基督と使徒と師父とを兼てたりといふは誣妄なりと云へり。

受難劇

Passion Play. 神話 耶穌基督の受ける苦難を題とする演劇にして、中世の末獨逸及びボヘミア國の農夫等所に於て盛に之を演じたり。一六三三年疫病閉息感謝のためバザリア國オベル、アムメルケラの農夫等十年毎に此劇を演ずべしとの誓約を爲せしが、爾後此誓約は履行せられ、一九〇〇年には五百人餘の俳優之を演じ、其技頗る神に入りたりしより此劇の名頗る高まりたり。此劇今はボヘミア其他の場處に於て復活せられつゝあり。

受難節の巡回法。殉教殉教者

受難節

Passion Week. 行事 耶穌復活日前の第二日曜日を受難の日曜日と云ひ、其日より復活日曜日に至る二週間を受難節と云ひ、耶穌の受難を記念す。復活前の二週間を大週又は聖週(Triduum)と云ふ。此一週に於て開闢以來最も大にして且聖なる出来事の行はれたるの意也。聖週の第一日を枝の日曜日(Palm Sunday)と云ふ。耶穌の驢馬に騎りエルサレムに入りし時、民衆が棕櫚樹葉等の枝を捧げ、其道路に衣服を布き之を迎へたりしに因る也。羅馬教會は聖週中四福音書に記されたる基督の歴史を四日に分けて講讀す。又木曜日には洗足式を行ふ。金曜日にはマスを執行せず、土曜日にも新耶路撒冷を築するの故を以てマスを執行せず。

純理説のジョア

巡回法 Itinerancy. 制度 メソヂスト教會特有の制度にして、教師をして一所不仕の生活を爲さしむるをいふ。是れジョン、ウェスレーが一七四六年其第三回年會に於て創設せし處にして、當時ウェスレーの任用に於てし普通信徒なる説教者は、長く一所に止むること能はざる事情ありしを以て、ウェスレーは毎年新任を任用したりき。而してウェスレーは三年を以て説教者の一所に止まる最長年限となしたりしが、後事情の漸く變するに及びて、メソヂスト教會は隨所に此年限を延長せり。日本メソヂスト教會は米國メソヂスト、エヒスコパル教會の例に倣ひ、毎年其任命を新にするの外別に年限を定めず、必要に依り之を變更することなせり。而して任命の權は監督に在り。監督を置かざる教會にては、適當の方法を以て選ばれたる任命委員之を任命す。

教と云ひ、自己の信仰のため其生命を棄つる人を殉教者といふ。基督教の初代に於ては殉教に對する熱心甚だ盛にして、殉教者を尊崇する風も亦甚だ盛なりき。殉教者を崇拝したりといふは前大の言なれ共、殉教者のために視目を設け、又一般に天に在る殉教者の仲保に甚だ價值ありと信ぜられたりき。而して此等の殉教者は初には夫々其地方にて祭られたりき。例之ギリカルプはスマルナに於て、クブリアアトモスは凡ての殉教者の祝祭の事を記せり。此祝祭は五旬節後八日目の日曜日又は其頃に在りしが如し古來多くの殉教者編纂せられたれ共、羅馬教會の公に承認せるはパロニウスの殉教傳にして、此書は法王シクスタス五世の准允を得たり。システルツアン殉教傳は一七三八年及び四八年に羅馬に於て公にせられたり。希臘教會の殉教傳は第九世紀にボリッス帝の命に依り編纂せられたる者にして、一七二七年カレタイナル、ハンニバル、ワルビニ之を出版せり。

殉教

Martyrdom, Martyr. 自己の信仰のため其生命を棄つるを殉

純理説 Nationalism. 教義 合理説、唯理説、主理説又は偏理説とも譯す。偏理説の條を見よ。

ジョアン

ジョアン アークの Joan of Arc. 人名 一四一二一三一年オレルアンに處女と稱し、佛蘭西を英軍の侵襲より救ひし少女。シヤムニエズローレンに跨るドムレミーに生る。其頃英人はブールゴニエのフィリッパの助によりロバール北を悉く占領し、佛蘭西全體混亂を極めたり。王母イサベラはブールゴニエ侯と相屬して共に巴黎を取り、英國のヘンリー五世の歡心を得んとして佛太子(ヘンリー七世)をば廢儲となしぬ。一四二二年英王死せしむ

シの部

シの部

きには、其の兄弟マッドフォード侯佛蘭國總督として來任し、巴黎人等の歡迎を受け、オレルアンをも圍みの中に入れたり。之より先シャール七世はボアチエにて即位したりしが、唯だ佛蘭西の危急を傍觀する外何の爲す所を知らざりき。かゝる際に一少女の身を以て義兵を起し、城の圍を解き國の滅亡を救ひたるが、アンナなり。彼は風景美はしきマッソの村にて優しき父母の膝下に育ち、母より信仰篤厚の祈禱を習ひ、其時代に傳へられし聖徒と聖賢との物語に我を忘れて傾聴し、當時民間の童謡に佛蘭西は一婦人のために亡ぼされ、ローレーノ境の一處女のために教はるゝに至るべしといふが行はれ、人々が其の亡ぼす者をイサベラとするを聞きては、終には救ふ者は我なりと信じ居たり。長じては女藝技に凝注し、戀愛に關する容子言語をば羨ら且つ厭ひ、讀み書きをば知らざりしが、宗教の事には賢く、教會と其の勤務とを愛し、貧民と兒童とには柔和なりき。其の郷村は四圍の村々のオレルゴニエ黨なる中に、獨り太子黨に屬し居りしが、ジョアンは十三歳の時に、正午頃庭園にて餅食し居りしが不意に聖の起るに驚かされ、仰いで聖カエルの首にして來れり一群の天使を見しを始とし、其後屢々天使がアリエル、聖カマリナ、聖マーカレー等を見しが、何れも王を助けて佛蘭西を救へと命じたり。されど五年間は隠れて起きても之を見ながら祈禱せしが、終にオレルアン圍まるに聞き、もはや天命歎すべからずとて、父母のしを脱してグロキリアアに行き、知事よりの紹介状を獲、男裝してシノンに在る太子の所に到り、其の疑ひ危ぶむを一々正せし末、軍隊の士氣を興まし、自らに籠る者、聖カマリナ教會の祭壇の下にて發見せる古劍を佩び、自らの意匠

シの部

シの部

シの部

になれる謀を持し、馬に乗り、王と共に軍を率ひてオレルアンに向ふ。一四二九年四月の末城に著し、其れより續々勝利を獲、英人等をロバール以外に驅逐し、王を勤めてレインスに行かしめ、王は七月十七日其所にて位に即たり。此にて少女の使命は終りしなり。此時身を退げ全かりしならん、彼は一變して狂熱者となれり。朝廷もはや彼には聽かず、唯だ之を神の如く過せしむるに、彼は尙軍隊に長として行動せり。されどはや常勝者に非ざりき。同年九月巴黎を攻めて利あらず股に傷き、次でオレルアンの附近にて戦ひ敗れて再び傷つきぬ。而して彼はフランス派に書を贈り、其異端を改めんば劍を抜かんと言ひ、又オレルアン侯を自由の身とし、聖地を土耳其人より取り返し、法王朝の分立を止めしめ、法王權を至上のものとしんといふ夢想を公言せり。されど一四三〇年三月コンペニユを防禦せんとして戦ひ、五月一峽路にて敵のために捕にせらる。英軍は大勝を博し、巴黎は歡喜に過きぬ。ジョアンはルキセンアルのジャンの城に囚はれしを、家より飛び出で、重傷を負ひ、再び城に取り返され、十一月に再び巴黎大學の陰謀によりルキセンアル侯より一萬リッグルにて英軍に賣られたり。其の代金を拂ひしはノルマンデーなりき。傷癒ゆるを待たしてジョアンは鐵鎖に繋かれ、粗暴の兵士に護られてルーエンに送られ、異端と魔法を行はしといふを以て罪せられ審問を受く。其の論告文に曰く、彼は舊約聖書の法律に背きて男子の服を着たり、彼は故郷の冤木の下にて惡魔と結合したり、彼の天啓は惡魔の行爲なりと、斯くて妖女として燒き殺すべく宣言せらる。之を聞きては流石女性の怒に堪へず、天使より啓示ありしてふこをを取り清し、斯くて生

命だけに取り留めて終身監禁に處せられたり、英人は之を以て満足せず、嚴計を以て陥れんとし、獄舎の中に男子の服を掛け置き、ジョアンが兵士の侮辱を免れんため之を取り着くを見るや、之を以て舊約の神聖なる律法の破毀なりとなし、再び死刑を宣告せらる。ジョアンは一たび泣き就きし、後は善く堪へ、聖徒と教主の名を唱へつゝ楯の中に息絶えたり。其の灰はメーロラに投せられたり。王は彼の力に由て位に即きながらも、少し彼を救ふに勉めず、却てジョアンの累ひのなくなるを喜ぶ風なりき。然れ共處刑の時臺上より一羽の鳩ジョアンの無罪を證せんため天に舞ひ上りぬと言はるゝ位なりしかば、一四四九年ルーエン侯は王はジョアンの審査を再びすべく命じ、カリストス三世は佛蘭西の要求により監督官門検査官等に此件を取り調べしめしが、ジョアンの母は此の判廷に訴ふる所あり、かくて初の宣言は一四五六年法王より取消となりぬ。ジョアンは其後何所にて賞讃せらるゝに至りぬ。されば又奇なる事も出で來れり。一四三〇年の事、或婦人は自らジョアンなりと稱し、先に死しは他人代りて刑に就きしなりと言ひ、之を信する者も多かりしが、彼はアーマススのロバールに嫁し、一四四四年死ぬるに際して凡て虚偽なりしを告白したり。

ジョアン コアリーの John of Chur (Cory) 人名 第十四世紀の瑞西の神祕者。第十四世紀の下半年に『神の友』なる神祕者の一派あり。教會に行はるる宗教を懐らすことし一層活ける宗教を得んと熱望したる者にて、隨所兄弟團結を造り普通信徒を首領とせしも少からざりき。ライン沿岸、ケルン、ストラスブルグ、ネデルランドに最も繁榮す。エツカルト、マウレル、及び名高き『日耳曼神學』の著者

スの部

スウイ

に關する討論は、聯邦官憲の決すべきものとせられ、聯邦の許可なくして新に監督管區を立つるを得ずとせられ、イェスイト徒などの派は國の平安を亂すの恐ある故、教會の事に關しては教育の事に關しても全く瑞西に入るを禁ぜられ、尼院及び僧派(イェスイトやドミニコ派などの如き)は創設するを得ずとせられたり。最近(一九〇〇年調)の統計に依れば、瑞西に於けるプロテスタント教徒は九十一萬六千一百五十七人、天主教徒は三十七萬九千六百六十四人、猶太教徒は二萬二千二百六十四人も

スウイフト

人名 ジョナサン・スウィフト Jonathan Swift 一六六〇—一七四一 愛爾蘭の諷刺作家。ダブリンに生る。一六八九年ウィリアム、テムブルの秘書となる。九四年僧職に入り、相續てケルロー、ラコル、聖パトリック等の牧師となる。一七〇四年『書籍の戦争』(The Battle of the Books)及び『捕物語』(The Tale of a Tub)を著す。前者は文學上に於ける古人と今人の優劣に關する當時の論争に對し、テムブルの説を辯護したる者、後者は羅馬教、カレイン派及び英國教會の長短を批評し、前二教會を罵倒し英國教會を揚げたるものにして、落想の斬新筆致の鋭利諷刺の深刻を以て稱せらる。彼が此書を著せる目的は之に依りて英國教會の歡心を買ひ、大監督の地位を得んが爲めなりといふ。彼は此間英國に於てアディンゲン、ステイール及びスマーリス、ハリファックス等の民黨の友なりしが、後政見を變じ王黨に與し、之に依りて聖パトリック、カセドラルのデーンとせられたり。二四年『ドレビーア書翰』と題する匿名小冊子を發行し祖國のために盡したり。二六年『ガリゲル巡遊記』を著す。此書は彼の最大傑作にして人間界の醜惡所を

瑞典

スウェー

なる方面を餘蘊なく描出せる者也。二八年『ゴラスト、プロゴザール』を出し、三六年『レグオン、タラプ』を出す。彼は不遇を失望に依りて其情入主義を増長し、殘忍暴虐に流れたりしが、當代第一流の創始的作家にして其諷刺冷嘲の筆は妙を極め深刻に達したり。

瑞典

スウェー

に會堂を建てたり。八三四年がワットセルト (Gaut, 1834) 瑞典の聖母とせられ、其甥ニキエド (Nikand) 共に赴任せり、されど其教民の反對激しく、彼等はガウトセルトの家を設け、ニキエドを殺し、會堂を破壊せり。監督は免れ走り、間もなくヘルゲイルに死にしが、基督教は瑞典に絶たる如くなりたり。然るにアンスガリウス再び之を訪ひ、皇帝の詔書を得、更に自主人民の大會合にて基督教寛容を受け得たり。基督教の丁味人アンスガリウスは、ビルカに住みて會堂を建て、團體を造りし。されど瑞典に實際基督教が確立するに至りしが、丁味に於けるトニョク (Olin, Gokkunga) 一〇二四年死の治世中アンスガリウスがアフリカに赴き、瑞典人の教化は英人及び丁味人の傳等を手引に來り、瑞典人の教化

瑞典

を始め、聖者王エリク (Eric the First 1150—1160) の世にはアルファストラとニダラとワアルンヘムとに會院立てられたり。瑞典の教會は初はハムアルヒ、アレーマン大監督領に屬せしが、一六三三年自己の大監督を得、此監督はワプサウに住し、スカラ、ウスケイビンガ、ストレンアチス、ウエスデレス、ウスケイビンガ、アガの選挙監督を統べたり。瑞典に於ては羅馬教會は他のスカンディナヴィア國、即ち諸國に於けるよりも深く根を下しぬ。蓋し瑞典人は最も想像的衝動的にして、壯大なる事と言へば直ちに之に熱心するが故ならん。されど一五二三年の政治的大革命の後、改革主義は著しく反對なくして民間に侵入し、ケスターフ、ファサ (Christen Vasa) は教會の狀態を甚だ非なりとし、不平の脈を法王アドリアヌス六世に訴へ改革を建言せしが、而も何等の答を受けざりしが、彼は自ら教會を改革せんとし、其二兄弟オラウス及びウラウレンナウス、ベトリと彼等の友人ラウス、アンデルソン等夜を助けて其の業をなせり。一五二六年瑞典語譯の聖書現はれぬ。二九年のオエレプロ會議にては教職等は政府が其れをシエールの助言に由り採用したる凡ての改革は是認し、ラウレンナウス、ベトリは最初の瑞典新教監督として聖別せられたり。エリク十四世の世(一五六〇—一六八八)には國は迫害を受けたる凡ての基督教徒に取りて避難地たるに至れり。されど間もなくルーテル派とリフォーメド派との間に論争起り、羅馬教徒の之に樂するあり。ヨハン三世(一五六八—一六二九)は實際羅馬教に傾き、會院を再興し、拜儀を再び採用し、死者のため祈を復舊するなどの事をなせり。イェスイト徒のアントニオ、ゴッペイノは皇帝の公使を以て實際法王

スの部

瑞典

代理として瑞典に行き、王も秘密ながら全く羅馬教に入りしと云へり。王の死後ワプサウ會議(一五九三)は福音主義教會の保持を謀りしも、天主教派は長く瑞典に殘りて續き、一六五三年に於てヘグスマウス、アドルフの女にてありながら女王クリスタチナは天主教に改宗したる有様なりしが、長羅馬主義との抗争は激烈になりし事なりしが、長き間續きしが、之に由り瑞典教會は二重の感化を蒙りたり。即ち一方には瑞典教會は丁味及び諸國教會に比して一層多く羅馬的僧職組織を残したること、他方には比較的排他的不寛容なりしこと、是なり。宗教改革は採用せられしも、教職は其の政權を失はず、彼等は(一八六五—一八六六年)の憲法改正までは國會の第四級議員を形づくりにたり。而して此の權力が如何に運用せられしが、一八六〇年に至るまでルーテル教より他派へ改宗する者に對して、追放及び財産没収を以て罰せし事實を以て推知すべし。全き宗教上の自由、即ち政權と信仰との結合の全廢は、一八七七年に至りて行はれたるなり。其の結果瑞典の住民(一八七九年)四百五十七萬八千九百一人の中極めて微少な部分他教派へ屬せしこととなりしが、而も瑞典ルーテル教會の内狀は健全なりと謂ふべからざりき。第十九世紀に於てはエリク、ヤンセンの徒や、讀者黨と稱するものなど、下級社會の間に宗教運動起りて廣く蔓延せしが、此等は宗派心に由るものを見えず、唯だ人民が適當に指導せられ居らざるを證するものたりしなり。彼等は一體にルーテル派正統説より敷衍したる神學以外を求めず、而も瑞典教會の與ふる宗教よりは一層實際的なるものを求めたり。第十九世紀の後半の中頃瑞典よりは移住民輸出し、人口の減少政府を憂慮

スウェーデン

スウェーデン

せしめたるが、此は瑞典の土地の強弱にも原因されど、其よりも教會の荒廢に原因すること多かりしなり。神學生も非常に減少し、教會は常に眞牧師を得る能はざる状態に在り。

スウェーデン

スウェーデン

自身の言ひ及びし所に由れば、四歳より十歳まで常に神の事、救の事、靈的經驗の事のみを思ひ、或時には父母驚きて天の使に語りしなりと思ひし事をまで言ひ出せし事あり。十歳より十二歳まで教職者と語る事を好み、信仰の生命は愛なり、生命を與ふる愛は隣人を受する愛なり、神は凡ての人を受するものと云へり。若し少時の傾向を知るべし。一七〇九年廿一歳にしてワプサウ大學を卒業し、哲學博士の號を得、翌年當時の青年教育の大変業たりし旅

スウェー

行をなす。彼は知識を求めしが、而も實用的なるを欲し、天文及び數理を研究せんとしつゝ、或は時計師と共に住み、或は什器製造者と共に住み、或は數理的器械製造人と共に住みし事あり。されど單に知識の渴望に由りて心を奪はれりならず、研究に倦む時は詩を讀みて心を新にしたり。五年間外國を巡り、倫敦、和蘭、巴理、獨逸各地を旅行し、見聞を博くし、人民の生活を觀察し、得る所多くして故國に歸り、一年を経て瑞典王カール十二世より鐵業學校特別助教師とせられ、商業大臣ホルハイムを助くることとなりしが、實は凡て工業に關する事の顧問となり、之に由りて數學を好みし王と近づき、王のために器械を作りて、戦艦三隻大船五隻二階帆船一隻を十四哩の距離ある陸地に運べり。彼は其の職に忠を盡し、其の取り扱へる物質の知識を一層精くせんため、熱の性質と物質の構造とを研究し、之がたの露々外國へ行き、鐵山及び採掘法を觀察し、斯くて三十年以上の、職に精勤して國人を満足せしめ、科學界にも貢獻し、諸科の學問に關する著作をなすこと七十七種に及べり。當時應用科學の點に於て彼ほど忠實に彼ほど功勞多かりし人は他になかりしと言はる。

スウェー

然るに斯くの如く學者としても最高の地位に立ち、王家の寵を受けつゝありし時に、彼は一轉して全く宗教的事に心を向くるに至れり、是れ其の研究せし所の直接の結果に外ならず。唯だ彼にも人にも其が意外の結果たりしといふのみ。彼は多年靈魂の事を研究し居たり。之に由りて『動物界の經濟』、『動物界の二書』八枚折大のもの四冊を書き、其の間に心機の轉向を來たせしなり。彼は後に至り自己が先に關係せし所のものは小さきことなりき、主は我を聖職に

スの部

スウェー

招けり、一七四三年我眼を世界の方に向つて開き、我をして諸靈と天使と語るを得せしめ給へりと言へり。之よりして彼は天に就き地獄に就き、其他世界の事に關し、自己の受けたる天啓を人に顯はして、死に至るまで已まざりしなり。彼は官職を退き、科學的研究を止め、希伯來語を學び「神の言」を原語にて讀み、此にても研究的方法と勤勉とを以て之に當れり。彼は神より特別の天啓を受けたるを信じ居たり。其の文書は彼の精神的發達の極めて漸次的にして精神的法則に由れるを示せり。其の神學書は神の言の靈的意味の說明と、其の言より引き出されたる靈的真理の說明と、彼が世界に入りし間に見えた開きたるものも説明とを記したるものなるが、八枚折大三十二冊の多きに達せり。其の言ふ所その重きを置く所の理否如何は兎に角、スウェーデンボルグは當時は勿論、何時の代り見ても最も特色ある人物なりしは否むべからず。彼は事實と經驗とを重んじ之に從ひし、又自然現象の隠れたる原因を洞觀するに特殊の才能を有し、殆ど眞覺に達せり。彼は無私にして眞理を愛し、眞理を神の智慧の命と認め、何物より之を強め之に従はんことを共に實際的にして、眞理に従ふと云ふも、其の美なるがために従ふに非ず、其の有用なるがために従へり。議會に列り又宗教的著作に従へる間にも、財政其他の實際問題に就ての書を著し、社會の放縱を見ては之を矯正せんとの勉め。彼は又上流社會に歡迎せられ、大著作に心を吞まされつゝ、小兒を愛し、己れに近き者共を愛し、眞率にして敬虔なる基督信者なりき。時代は懷疑の盛なりし頃なりし、彼は曾て至上者の存在を疑ひし疾なく、至上者の人事を支配するを信じ、科學的の著書にても人の能力幸福は皆な

スウブラアサリアニズム

スウブラアサリアニズム

神に依て存するを認め居たり。彼の科學的宗教的意見の今日には隨從者有し居れるは、以て彼の人格の非凡なりしを知るべし。
神は慈悲及び公義の働に由りて其榮光を顯はすべしとの事を預定し、而して此定命を遂行する方法として、創造、墮落、及び基督の器を備へ、怒の器を棄つる等のことを預定せりと論ずる極端なるカルヴァン派の所説をスウブラアサリアニズムといふ。換言すれば此派の所説は、人類の始祖の墮落其のもの神の永久の定命の中に含まれ、墮落以前に於て既に預定せられたりといふに在り。カルヴァン派の多數は此説を取り、バザ、ゴマル、トワイッセ亦此説を贊せり。第十七世紀に至りタルレンナン其他の溫和カルヴァン派の人々は之に反し、預定は墮落以後に爲されたる者にして、墮落は神の預知し許容され共預定したるには非ずと説けり。此説をインフラアサリアニズムといふ。其條を見よ。

スカル

スカル

ゼしが、二四年には區域廣き信仰復興あり。三六年エロン、カインスローと共に印度マドラスへ轉じ、タミル語にて聖書及び小冊子を印刷し、初の年六百萬ペーを出す。彼はマドラスに近きナンタドレムに住し、斯くて其の監督の下にアルコト宣教師なるもの起る。同團は一八五二年アメリカンボードに、翌年マッテ、レフカルド教會に入られたり。四二年より四六年迄は米國に在りしが、外國宣教師のため忙がしく活動し、四九年にはマテョ宣教師に在り。此の外は常にアルコト宣教師團のために働き、四九年妻と子を戀ひて益々其の熱心を増せり。五四年健康衰へたるに至り、醫士の注意によりて喜望岬に行き、航海のため大に快くなりて將に歸途に就かんとして時卒中にて死せり。スカンダーは丈夫堅固にして均衡を得たる體軀の人なりき。もさ強き健康なりしを過勞のために弱くなり。思想には勇氣あり、其の企圖をば何處までも實行せんし、人間の反對を意せず、又如何なる辛苦に堪へたり。金曜日毎に正午まで斷食祈禱し、聖書は殆ど聖書に限り、善をなすために所々を歴めぐり、東南部の印度の各村には殆ど流れなく傳道せり。彼は天に於て耶穌の内輪の一人に列せんことを其の大望とし居たりと云ふ。

スカッター

ジョン Schuler, John, M.D. 一七九三—一八五五 米國マッテ、レフカルド教會の印度宣教師。一八一年ニワセレン1學校を、五年組育市内科外科醫學校を卒業し、醫學に従ひ熱心敬虔なる基督信者たり。一九年「世界の改革、一名六億萬の要求と之に關する諸教會の義務」といふ小冊子を讀み、自ら異教徒のために義務あるを感ずること強く、終に宣教師に從はんと決心し、紐育にて准允を得、一九年六月八日出發して二〇年エロンに達し、二一年五月會衆派浸禮派メソヂスト派の諸教師より按手禮を受け、ワッパナマタムに病院を立て、二二年半先して同地に高等の學校を起

スの部

逾越節

向未不明ならず。
節。出埃及記十二の一—十三、此祝節の起源は出埃及の事實と結合し、之を詳記せり。之に依れば、以色列人の尙埃及に在りし時、エホバモーセとアロントに告げて「此月を汝等の月の首とせ。汝等之を年の正月とすべし。汝等以色列の全會衆に告げて言ふべし。此月の十日に家の父たる者各々羔羊を取らべし。即ち家毎に一箇の羔羊を取らべし。もし家族少くして其羔羊を盡すこと能はずば、其家の隣なる人と共に人の數に従ひて之を取らべし……汝等の羔羊は純なき十歳の牡なるべし……此月の十四日迄之を守り置き、以色列の會衆皆海邊に之を屠り其血を取りて其之を食ふ家の門口の兩旁の柱と鴨居に塗るべし。而して此夜其肉を火に炙きて食ひ、又酔いぬパンに苦菜を添へて食ふべし。水に炙ても身ぶ勿れ。火に炙くべし。其頭と腰と臍とを皆食へ。其を明朝迄残し置く勿れ。其明朝まで残れる者は、火にて焼き盡すべし。汝等斯く之を食ふべし。即ち杖をひきかけ、足に鞋をはき、手に杖を取りて急ぎて之を食ふべし。是れエホバの逾越節也。此夜我れ埃及の國を巡りて人と畜とを論ぜず、埃及の國の中の長子たる者を盡く撃つ殺し、又埃及の諸の神に對を蒙らせん。我はエホバ也。其血汝が居る處の家に在りて汝等のために記號とならん。我れ血を見る時汝等を逾越すべし。又我が埃及の國を撃つ時果汝等に臨りて滅ぼすこと勿るべし」と言へりとあり。然れ共此は此祝節の實起源に非ずして、此祝節に關する傳説以後の考なるべし。此祝節に關し申命記(十六の一—八)の記す處とJ.E.典(出十二の廿一—廿八)及びP.典(十二の一—十三、四十三—五

逾越節

十一、到廿三の五、民九の一—四、廿八の十六、書五の十)の記す處とは各々相異れり。今其重なる點を擧ぐれば(一)祭司典(P)は單に除酵パンを食ふべからずとのことを命ずるの一部分に過ぎず、申命記に在りては、逾越節は除酵パンの一部に過ぎず、即ち其初日のみにして、除酵パンを食ふべしとのことに最も大なる重を置けり。(二)祭司典に在りては、逾越節は家々に於て守るべき者也とせらるるに反し、申命記に在りては、最も明白に之を家祭とすことなく、エホバの神に於て守るべしと云へり。(三)祭司典に在りては、逾越節の犠牲は羔羊に限られたれ共、申命記は之を羊及び牛の中より取るべしと云へり。此等の事實に依りて之を見れば、逾越節なるものは漸次發達し來れる者なるを知るべく、此事は此祝節の起源モーセ以前に在りしとのことを含蓄せる聖書の語と一致す。出埃及記は埃及に在る以色列人が、曠野に往きてエホバに犠牲を獻ぐるの許可を得んことを、屠埃及王に請願したりしとの事を記せり(三の十八、七の十六、八の廿五)。思ふに此は原始の逾越節にして、以色列人が埃及を出でたりしは實に此逾越節を守らんがためなりし也。然らば此原始の逾越節とは如何なる者なりしや。之に就ては學者の間に諸説あり。今其重なる説を擧ぐれば左の如し。

逾越節

て初生の犠牲祭となす者にして、此祝節の最も単純なる例を創四の二—四の「アベルは羊を献ぐ者、カインは土を耕す者なりき。日を経て後カイン土より出る果を持ち來りてエホバに供物となせり。アベルも亦其羊の初生と其肥れたる者を携へて來りし」と云へるに發見せり。此説に依れば、逾越節は牧者其畜畜の繁殖を以てエホバの賜となして、感謝のためめに獻ぐる犠牲の祭にして、初生子をエホバのものとなし、之を獻ぐる事は原始時代より行はれたる慣例也。此慣例は逾越節にも密接の關係を有し、出十三の十二以下には「汝凡て始めて生れたる者、及び汝の有てる畜の初生を悉く分ちてエホバに歸せしむべし」と云ふ、申十五の十九以下には「汝の牛羊の産める初生は、皆之を聖別めて汝の神エホバに歸せしむべし」と云へり。埃及人の初生が凡て殺されたりと云ふは、埃及王がエホバに歸すべき此祭を妨けたるがためにして、斯く解して初めて此祝節の起源を説くを得る也。

逾越節

(二) 贖罪の祭。出十二に記されたる逾越節の物語中、特に血の犠牲に重を置けるより、之を以て贖罪の祭となせる者あり。クリスチャン、パウルは之を以て印度、波斯、小亞細亞、及び埃及に於て春分に行はるる祝節と關係ありとなし。逾越節の犠牲は人類の初生子のために獻げられたる者にして、本來贖罪のための犠牲也と云ひ、アイエマンは之を以て調和、贖罪のための犠牲にして、春分を守る祝節也と云ひ、出埃及との關係は以色列人が此季節に於て埃及を去りし事實に基けりとなせり。エリウドも亦之と均しく、極めて早き時代より贖罪の祭は春季の祝節に缺く可らざる要素なりしと云ひ、シホルも亦殆ど之と均しき説を唱へたり。

スコット

る。希伯来、サマリア、カルデア、希臘、スリヤ、...

スコット エリザベス Scott, Elizabeth

スコット トマス Scott, Thomas

スコット

人名 一七四七—一八二一 英國の聖書註解者...

スコット ウォルター Scott, Walter

スコット トマス Scott, Thomas

蘇格蘭

書夜精勵著作に従事し、四年にして七萬磅を償還せし...

蘇格蘭 Scotland

蘇格蘭の歴史は蘇格蘭政府を援助せんため...

スコット

スコット エリザベス Scott, Elizabeth

蘇格蘭

スコット トマス Scott, Thomas

蘇格蘭

蘇格蘭の歴史は蘇格蘭政府を援助せんため...

蘇格蘭

スの部

蘇格蘭

然消滅せる事を宣告し、ミサの儀式に出席するを禁じ、之を犯す者は懲罰に處すべき事を宣告せり。又ノックス及び他の神學者に命じて、蘇格蘭プロテスタント教徒の信仰告白を起草せしめ、且教義の要領及び教會規則を編纂せしめたり。此等は何れもカルウェインの意見に據りたる者にして、後ウエストミンスター信仰告白の成りし時に至るまで、彼等の間に重要視せられたり。其教會政治も亦専らカルウェインの説に基きたる者にして、傍ら極端プロテスタント教徒の慣例を參照せし者也。初め牧師の數少く乏せしため、地方の小教會は専任の牧師を得るに能はずりしかば、普通信徒の助力を仰がざるを得ざりき。蘇格蘭の教會が英國の教會に比して著しく民主的となりしは幾分か此等の原因ありしに基く。蘇格蘭改革教會の總會は此年始めて開かれたりしが、爾後毎年二回之を開けり。此年佛王フランシス死し、六一年メアリー蘇格蘭に歸り、女王の實権を握る。彼は表面プロテスタント教會に對して寛容を示したれ共、陰に羅馬教の回復を謀り、且頗る不調儀の行ありしかば、貴族人民連合して其地位を迫り、當時僅に一歳なりしメアリーの子を取上げて王となし、ウエストミナセ、モレーを擧げて攝政となせり。メアリーの兵力を以て之に抗したれ共、敗れて英國に走りしかば、プロテスタント教は又勢力を得て、六七年レフォルムド教會は蘇格蘭唯一の宗教として宣告せられ、法王の統治權及び羅馬教の偶像禮拜は禁止せられ、カルウェインの神學と長老政治とは採用せられたり。而して此光榮ある改革を成就するに與りて最も力ありしノックスは七二年を以て歿す。

(三) 改革以後の蘇格蘭教會 然るに一五八一年ウエストミナセ世親政の世となりしより、王は英國に散り

蘇格蘭

て教會の統治權を其掌中に收めんを謀り、其結果王と教會との間に久しく葛藤絶えざりしが、一六〇三年エリザベス女王死して、ウエストミナセ世が同一世と改稱して英蘇兩國を兼治するに及び、王の此願望は一層切實となり、あらゆる手段を以て貴族高僧等を擁護して自己の味方となし、一六〇一年終に國會の協賛を経て、蘇格蘭に監督制度を布き、三名の監督を立て、新に規則を設け、晩餐式を執行する時は跪くべき事、晩餐と洗禮とを秘密式として執行すべき事、小兒に堅信禮を行ふべき事、耶穌の復活及び降誕を祝日となすべき事等を規定せり。一六二五年ナヤールス一世父に繼ぎて位に登り、蘇格蘭に於けるが如く蘇格蘭にも獨裁政治を行はんと欲し、カンタベリーの大監督ウイリアム、ロッド (William Laud) の政策を採用し、三七年其作れる新福音書を蘇格蘭教會にも使用せんことを命じたり。此新福音書は羅馬教會の新福音書に倣して作りたる者にして、晩餐式の初きは給ミサ祭と均しき者なりしかば、蘇格蘭人等に斯るパアル崇拜を國王に依りて強訓せらるべき苦難しむる熱心之に反對し、三八年長老主義派の目的を以て「大契約」と稱せらるる同盟を結び、且軍隊を召集して英國の北境に連軍せしめしかば、十一年國會を開き、獨裁政治を實行したりし王も、止むを得ず國會を開き、其決議に従ひ國民の自由を保護せんことを約し、且蘇格蘭人の請願を請れたりき。然れ共王は屢々其約に背き強制を行ひたりしかば、英國の民権黨及び清教徒等は、蘇格蘭の助力を得んため之と同盟を結び、且教會の改革を確立せんため、四三年ウエストミナセに會議を開き、蘇格蘭の代表者を列席せしめ、四八年議會を編纂し、カルウェイン主義に基ける信仰告白、即ちウエスト

蘇格蘭

ミナセ信仰告白と稱する者を制定し、長老主義の教會政治を採定せり。此決議は英國に於ては一部分の承認を得たるのみなりしが、蘇格蘭に於ては充分に承認せられたり。後英國に於ては引續きて王と國會との間に激しき争論あり。遂に民権黨勝利を得て、王は四九年脱獄せられ、クロムウェル「國家の保護者」として政權を握り、蘇格蘭も亦其下に在りしが、クロムウェルは蘇格蘭の教會に干渉せざりしを以て、蘇格蘭民は之がために何等の苦痛を感ぜざりき。クロムウェル死してチャールス二世世位に即ぐや一六〇一五年在位。蘇格蘭民も英國民と共に之を歡迎したりしが、王は直ちに監督政治を復興し、六二年「對一條例」を布き、監督政治を強訓し、新福音書を使用せしめ、之に従はざる牧師を破門し、新に之に従ふ牧師を任命せり。而して信徒にして其新牧師に服せず、禮拜に缺席せる者あれば之を罰し、又破門せられたる牧師にして山中に隠れ、竊に説教を爲す者如きことある時は、直ちに其説教を禁止し、且其處に集會せる者を捕へて懲罰に處したりき。於是教會の獨立を保護せんとする人々相率りて謀反を企てたること一再ならざりしが、常に官軍のために敗られ却て懲罰に處せられ、斯くして殉教したる者其數を知らず。ウエストミナセ二世位に繼ぎて立ちしが(八五—八八年在位)彼は公然羅馬教徒たることを告白し、專制主義を行ひしが、プロテスタント教徒の反對に達して、羅馬教を寛容せんとするの政策は失敗に歸し、其女婿たるウイリアム三世世相繼り入りて王位に即き(一六八九—一七〇二在位)新教各派に對し禮拜の自由を許せしかば、蘇格蘭人も漸く長老政治を回復するの自由を得たり。

斯くて蘇格蘭に於ては長老政治漸次確立し、國民の大

スの部

蘇格蘭

多數は長老教會に屬し、監督教會は僅々として僅はざる者となるに至れり。教會に對する政府の保護は宗教改革の時全く廢止せられたりしが、一七二二年女王アンナの時再び此政策は回復せられ、嚴正なる一派の反對ありしに拘はらず、政府は之を強用して會員の希望に背き不當なる牧師を任命したりしかば、ために教會の分裂を來し、一七三二年には「ウエストミナセ教會」なる者起り、五二年には「ウエストミナセ教會」なる者設立せられ、後者は前者に優りて、絶對的に國家の保護權に反對し、教會の獨立を主張せり。此二派は一八四七年合同して「政長老教會」なる者を形づくれり。他方に在りては政府の定めたる選定權所有者が牧師を任命するの法律を廢止せんとの請願が國會に於て否決せられたるを憤り、トマス、チャールズ指導の下に、一八四三年「蘇格蘭自由教會」なる者設立せられたりしが、元來此二教會は教義及び教會政治を一にせるのみならず、共に國家の政治に對して獨立なりしかば、早くより合同の議起りたりしが、一九〇〇年を以て「蘇格蘭一致自由教會」の名を以て兩派の合同成りたり。然るに自由教會の中に合同を欲せざる少數の一派ありて、自由教會に關する資金及び財産は一切彼等の所有に歸すべき者也とのことを主張したりしより大なる紛擾起り、政府は委員を設けて其事情を調査せしめ、其結果蘇格蘭教會條例なる者國會に提出可決せられ、一九〇五年國王の批准を経て、財産を「自由教會」及び「一致自由教會」の間に分配することとなり、斯くして其紛擾を終れり。(「長老教會」蘇格蘭自由教會)「蘇格蘭一致自由教會」の條參看)。

斯く蘇格蘭の大多數は長老教會に屬すも、監督教會も亦第十八世紀の半以後再び成立し、現今七人

蘇格蘭

の監督、三百三十四人の牧師を有せり。アンダリックン教會の條を見よ。羅馬教會も亦一七〇七年の「合同令」に依り、全蘇格蘭に排斥せられたりしが、近時羅馬教徒の數漸次増加し、ヒュース九世は其晚年に於て蘇格蘭に於ける僧侶制度の再設に力を盡し、レナ十三世は一八七八年蘇格蘭に二箇の大監督管區及び監督管區を新設したり。

蘇格蘭一致自由教會 The United Free Church of Scotland. (宗派名) 一九〇〇年蘇格蘭自由教會及び政長老二派の合同に依りて成りたる新教會。蘇格蘭自由教會は一八四三年五月十八日を以て獨立教會より分離成立したる者にして、(其條を見よ)分離は會衆の寄附金のみを依りて維持せらるべき教會を各教區に設立せんことを計劃し、之がために中央資金供給の道を立て、各地方の教會より之を募集し、各教會の牧師に均しく之を分配せり。且此教會は初めより外國傳道の必要を熱心に感じたり。一政長老教會は一八四七年、ウエストミナセ及びレヴォフ二教會 (Weston and Relief Churches) の合同に依りて成りたる者にして、此合同の成りたる時レヴォフ教會は一百十三箇の教會を有し、セ、ウエストミナセ教會は三百八十四箇を有したりき。一政長老教會は其會衆が教會其他の事業のために金錢を惜まざる事と、外國傳道事業に熱心なる事とに依りて顯はれたり。自由教會は一政長老教會とは元來教義及び政治を一にし、且共に國家の政治に對して獨立なりしを以て、早くより合同の議ありしも、國家と教會との關係に就て其議論の一致せざる點ありて其熱せざりしが、一九〇〇年十月卅一日「蘇格蘭一致自由教會」の名を以て兩派の合同成りたり。然るに自由教會の中に合同を欲せざる少數の一派あり。

蘇格蘭

此等の人々は獨立教會より分離したる自由教會の真正なる顧問也の事を主張したりしのみならず、自由教會の資金及び財産は一切彼等の所有に歸すべき者也との事を主張し、新教會が會衆其他のものを使用するを拒みたり。蘇格蘭の高等民事裁判所は新教會の主張を是認したりしが、共、一九〇四年八月上院は之を反對の判決を下したり。於是新教會は財政上大打撃を蒙り、直ちに此危急を救ひ内外に於ける教會及び傳道事業を維持する資金の募集に取り掛りたりしが、一年にして十五萬磅以上を募集するを得たり。自由教會は上院の判決を履行し、新教會に關する教授はニウ、カレッサより放棄せられ、又多くの牧師殊に山地の教會は其職を奪はれたり。之がため國內の人心頗る惘たりしを以て、政府は委員を派びて事情を調査報告せしめたりしが、一九〇五年四月其報告は公にせられたり。即ち委員は自由教會が其主張せる權利を實行することの困難なるを指摘し、其結果蘇格蘭教會條例なる者國會に提出、可決せられ、一九〇五年八月國王の批准を得て、財産を自由教會及び一致自由教會の間に分配するの委員任命せられ、斯くて其紛擾を終れり。

蘇格蘭監督教會 The Episcopal Church of Scotland. (宗派名) 「Episcopalian Church」の條を見よ。

蘇格蘭自由教會 The Free Church of Scotland. (宗派名) 一八四三年の分裂に起れる蘇格蘭基督教徒の一團體なれ共、彼等は自ら一五六〇年に改革せられたる蘇格蘭教會の歴史的系统を有する正統の教會也と主張す。此分裂は教會と國家との關係に關する原因す。元來長老教會にては各教會の會衆自ら其牧師を選定する權を有すれ共、第十八世紀の初期英國の議會は蘇格蘭教會の獨立を侵し、

蘇格蘭

蘇格蘭監督教會、蘇格蘭自由教會

スの部

蘇格蘭自由教會

英國教會の風習に従ひ、蘇蘭に於ても牧師選定權を或る一定の人々に專有せしめたり。第十八世紀の教會は頗る冷淡無頓着なりしが故に、此無法なる法律に服従したりしが、第十九世紀に至り宗教的熱心の復興するに及び、選定權所有者の任命せる牧師を受くることの無道理なることを悟り、遂に一八三四年の總會に於て、會衆の意志に反して任命せられたる牧師には按手禮を授く可らずとの決議を通過し、爰に教會内部に於ける十年の争議を開けり。一八三八年所謂アクトナル事件なる者起りしが、高等民事裁判所は教會が選定權所有者の任命せる牧師を拒絶せるは、國家の法律に違反せる者也との判決を下し、翌年上院は此判決を可決せり。於是教會は高等民事裁判所が此の如き判決を下せるは、教會の權能を侵し其專的獨立を妨害する者也との事を女王に訴へ、且選定權所有者が牧師を任命するの法律を廢止せんことを請願したれ共(一八四二)共に聽かれざりしが、一八四三年三月遂に之を國會に訴願せり。然るに下院も亦百三十五人の多數を以て此訴願を否決せしが、一八四三年に開かれたる總會に於て、凡そ二百人以上一致して、教會の希望に反し牧師を任命するは不法無道理なるが故に、蘇蘭教會の信條及び標準に従ひ、別に集會の場所を設くべしとの決議をなし、此人々は國立教會より離れ、カノン・ミルスのモン・フィード會館に會し、博士トマス、チャルメルス(Thomas Chalmers)を議長となし、蘇蘭自由教會を組織し、爰に其第一總會を開けり。此會議は五月十八日に初まり十日を以て終りたりしが、四百七十四人の牧師及び教授は此分離に同意し、且分離の結果彼等が從來國教會として受りたりし補助金、及び彼等に關したりし信徒、會堂に對する凡ての權利を放棄したり。斯くて彼等は非常なる宗教的熱心をも以て新會堂を立て、牧師給與の道を立てたりしが、其年の終りに六萬磅以上の資金を募集し、爾後著々進歩して一八九〇年には十八萬八千磅以上に達し、各牧師に對し百六十磅の俸給を附するを得るに至り、且國立教會の數一千四百に對し、一千一百箇の教會を有するに至り。

スコトス

一八六三年一致長老教會(The United Presbyterian Church)と合同の議起り委員を設けて同派と交渉を開始したりしが、國家の補助金及び其他の問題に關して兩派の意見一致せず。後合同の氣運漸く熱し、一九〇〇年十月廿一日を以て兩派の合同成り、新教會を「蘇格蘭一致自由教會」(The United Free Church of Scotland)と命名せり。然るに自由教會中に合同を欲せざる少數の牧師及び長老ありしが、此等の人々は自由教會の財産全部を從前組織せられたる教會に歸すべき者にして、新に合同せる教會に歸すべき者に非ざる主張し、教會堂其他の使用を拒み法廷の判決を仰ぎたりしが、高等民事裁判所は合同教會に屬すべき者也との判決を下せり。少數派は之に服せず、更に上院に訴へたりしに、上院は少數派の主張を以て正當也とするの判決を下せり(一九〇四)。然れ共少數派の人々は財産全部を所有し、最初に組織せられたる自由教會の計劃全部を實行するは實際不可能に屬するが故に、此問題は更に國會の議となり、國會は一九〇五年六月を以て教會條例を可決し八月國會の批准を得、自由教會及び合同教會の間に財産を分配する委員任命せられ、爰に財産の處理成りて其紛擾を終り。自由教會は山地に其根據を有す。(蘇格蘭一致自由教會の條參照)。

Erasmus, John 人名 中世の哲學神學者。其の誕生の時と所とは不明なれど、八〇〇年乃至八一五年の間に愛蘭に生れたるに明なり。熱心して先王ジョージの廷に事へ、アルデンナチウスと相知りしが、アルデンナチウスは八四七年先王廷を去れり云ふにても推知すべし。彼は愛蘭の盛なる一僧庵にて教育せられ、愛蘭より出でたり。スコトスといふ名は法王ニコラス一世、アルデンナチウス、ランゲル會議記等同時代の人の文書にあれど、彼が愛蘭人たるを反證するものには非ず。エリゲナといふ名は彼の筆に成るアレクサンドリアのオキシオス文書翻譯の最古の原文書に存するものなるが、希臘語にて「聖徒の島より生る」といふことを意味し、愛蘭が聖徒の島と呼ばれたるに照して、彼の愛蘭人たるを確めしむ。彼の死時及び其の事情も明ならず。インガルフ、ダルハムのシメオン、マームスベリーのワイリアム其他の文書に據れば、彼はアルフレッド大王より(多分先王ジョージの死後、八八三年頃)英國に招かれ、牛津大學の教授に任ぜられ、後マームズベリーの院長とせられしが、八九一年頃其の弟子のために其の教會にて殺されたりと云ふ。マビリオンやナタリウス、アレクサンデルや佛蘭西文學史や其他は、法王王大會議議が異端者となせし者を院長とせし事は有り得べからずとて此の傳説を全然否認すれど、虚實は定め難し。先王の廷にては大に崇められ、王の信任重く、宮廷學校の長とせられ、有爲有名なりし凡ての學生と親交せしが、佛蘭西にては教會の職に就きざりしものも如く、又按手禮を受け居たれど、何れの宗派にも屬せざりしが如く、重に著作をなせり。即ちアレクサンドリアの翻譯に其一にして、此は新ア

スコトス

スの部

スコトス

ラトーン哲學者をして西歐に侵入せしめし根據となりたるものなり。彼は王命に由て此の翻譯をなせり。之がために彼は學者の名を博せしが、又法王の疑をも蒙りぬ。『デ、ディビウオネ、ナチュライ』も大作なり。哲學と神學は一なりといふ思想を以て始まり、唯心的精神論に達せる自然哲學もしくは思辯的神學の一種にして、全く哲學を神學に併存せるものなり。マスカシウス、ラドベルトス、ラバヌス、マワルヌ、ラトラムヌス。其他の間に湧き上り居たる聖職論に就ては、彼は如何なる意見を有せしか定かならず。昔彼の作なりと信ぜられし『エウ、エウカリスチア』はラトラムヌスの作なりしが、此の明になりたり。されど彼の約翰註解やヘンリクスの書等に由りて、彼は聖職論の麵包と酒とを基督の現在の記號のみとなしたることは察せらる。彼の神學の全體より見ても然りあるべきなり。預定論の争に於ては彼は甚だ有力なり。アルデンナチウスもラトラムヌスもセルグアトス、レボスもレミヤウスも其他もゴットシャルクの説に當せし時、セントマルはエリゲナの有名なる論議者なるに由りて之を招きて助となす。彼は善惡に關する自説を述ぶるの好機として喜んで招に應じ、『デ、プレーデスチナチオネ』を著し、唯一の預定あり、即ち永遠の祝福の預定なりと説き、善惡及び罪に關しては決して預定なし、前知すらし、何となれば惡は非實在なり、善の實現に於ける決断なり、過誤なりと言へり。セントマルも此説には却て恐を抱けり。反對に忽ち雲集し、セントスの大監督グエニコやアルデンナチウスやフォルス等は著書を以て争ひ、八五三年のチェルシー會議にては半ばエリゲナの説を容れしが、八五五年のローレンス會議は絕對的に之を否認し、八五九年のラ

スコラ哲學

ラトーン會議及び法王ニコラスは此の否認を是定したり。スコラ哲學 Scholasticism 學派名 煩重哲學を譯す。中世期に於て神學を中心として哲學を研究せし思想の總稱。基督教會の教義は、教父時代(其條を見よ)に於て略ぼ其形を爲し、且教義を形成せんために主として希臘哲學を用ひたりしが、哲學と宗教、理性と信仰との關係は尙未だ明瞭に決定せられざりき。更に進みて哲學上の完理と宗教上の信仰との一致を示さんとしたる者、換言すれば教父時代に於て組織せられたる教義を繼承し、之に哲學的根據を與へんとしたる者、是れ即ちスコラ哲學にして、此目的を成就せんとしたる人々は所謂スコラ學者(Scholastic or schoolman)也。中世の暗黒時代に於ては一般の人々の中には殆ど學問を専攻する者なく、歐洲の文物一時暗黒の裡に没したりしが、シヤレーマン帝の頃より、朝廷又は寺院に附屬せる學林を起して學者を集め、學問に従事せしめたりき。當時の學者は殆ど凡て教會の僧侶にして、其所謂學問なる者も教會を中心とし教義を研究するに在りき。而して此等の學林は其初め傳道者を養成する目的を以て起りたる者にして、彼等が此等の學林(Studium)に集りて學を講じたりし故を以て、スコラ學者の稱起りたり。彼等は實は教會の學者(Scholasticus)たりし也。スコラ學者の目的は、教會の信仰の理性に合へることを示さんとするに在りて、其根據とせる假定は(一)宗教上の信仰に於て吾人は既に確固不易なる真理を有し居る事、(二)従て吾人の知識(或は理性或は理解力)は、吾人が既に信仰として有する者の道理に合へることを示すに過ぎざる者なる事是也。彼

スコラ哲學

等に從へば、哲學の用は唯先に先定決定し居る原理(教義)を證明し、又は吾人をして之を理解せしむるに在り。故に理性は信仰に對して獨立の位置を有する者に非ずして、唯信仰のためにその道理上の根據を示すに過ぎず。換言すれば哲學は宗教に對して轉換的地位に立てる也。然れ共吾人が宗教上確實として有するものは、之を教會の教義として客觀的に定まれる者、換言すれば教會の傳説として存在する者とも見るを得べく、或は之を各人の心底に直に實踐する者とも見るを得べし。前者の見に立ちて其道理に合へることを示さんとしたる者は是れ即ちスコラ哲學にして、後者に立脚し専ら各人直接の宗教的經驗に基きて説を立てんとしたるものは神秘學也。中世期の哲學と云へば概してスコラ哲學を指すことなれ共、嚴密に云へばスコラ哲學の傍には神秘學の流れの並行せるを見る。又此外に極めて微々たる者なりしが、多少自然科學めきたる研究に心をを用いたる學者あり、スコラ哲學の衰微するに及びて漸く隆盛となり、ために學問界の面目を一新するに至りたり。(一)スコラ哲學の哲學的根據 哲學思想の上より見れば、スコラ哲學の骨子を成せる者は實在論と唯名論との争にして、唯名論の勝を制するに至りて、信仰と理性とは相分離することとなり。斯くて宗教と哲學とは相一致せる者也と云へる確信を以て初めたりしスコラ哲學も、兩者全く範圍を異にする者もといふに終りたり。而して此等の思想の基礎となれるものは皆希臘の哲學にして、哲學思想の内容より云へば、スコラ哲學は概れ希臘學術の遺物を受け繼ぎたるものにして、根本思想には殊に新しきものあるを見ず。通常スコラ哲學の時代を大別して三期

スの部

スコラ哲學

となす。第一期は第九世紀より第十二世紀に至るまでにして、之を其發生の時代となす。第二期は第十三世紀にして其全盛時代也。第三期は第十四及び第十五世紀にして、其衰頹の時代也。第一期に於ける哲學的基礎はプラトーン學派風の實在論にして、エリゲナ、アンセルムはプラトーン學派風の實在論者たりき。スコラ學者の中に於て唯名論を唱へたるはロッセリンにして、之に對し極端なる實在論を唱へ、通性の實在を證せんがために、殆ど個性の實在を犠牲にせんとしたりしが、オカムのウィリアムも亦之を批判し、普通名辭は少くも心意上の實在を表現する者にして、即ち之を使用する人の心意の概念の表現也とし、以て名辭は單に音響に過ぎずと云へる説に反對せり。換言すれば彼は概念論を取りたる者の如し。然れ共彼は又前や制限せる實在論に傾きしが如き觀なきに非ず。第二期に至りてはアリストテレスを擧げてプラトーンの上に置くの傾向頗る著しく、其著書の廣く教會に知れ渡りしより其研究を奨励し、遂には其學を講ずるを以て教會の學者に缺く可らざることとなすに至り、而して單に哲學者云へばアリストテレスを意味することとなり。斯くの如くアリストテレスをスコラ學者に受け容れられ又尊崇せらるるに至りたるには理由あり。即ち第一には彼の哲學の方式が當時の教學を組織することに便利を與へたること、即ち此點に於て彼の論理式が最も有用のものなりしこと也。第二には教會が天然界に関する知識をも擧げて當時の學界の主權を握り、あらゆる世間の事を司る者となるの必要を感じ、而してアリストテレスは最も道徳知識の淵源となるに堪ゆる者なりしこと也。

スコラ哲學

第三期には彼の有神哲學が希臘哲學の中最も教會の教義即ち神學を組織するに適合せりと思はれたること也。此等の理由を以てアリストテレスの哲學の大に用ゐられたるに依りて、スコラ哲學は其面目を一變し、遂に其全盛時代に入ることとなり。此の如き有様なれば此時期に於ける實在論がアリストテレス風のものなりしはいふ迄もなし。第三期に至りて反動的潮流漸く顯はれ、久しく塞てられし唯名論を取る者を生ずるに至れり。ウゴン、スコトスは即ち其一人にして、彼は未だ唯名論者といふ程には非ざりしが、個物論に傾けるは明にして、實在論風の風有神教的思想に反對して有差別の個物を實在と見たりき。而してスコトスは於ける個物論の傾向はオッカムのウィリアムに至りて充分に發達し遂に唯名論の復起となりぬ。唯名論及び實在論に就ては唯名論の條を見よ。

(二) スコラ哲學の神學。以上はまことにスコラ哲學に於ける實在論と唯名論との争の移りゆく次第を擧げざるに過ぎず。更に轉りて以上擧げたる哲學的基礎の上に於ける神學思想の變遷を考察すれば、教會の教義を組織し、又之に附するに哲學上の論議を以てせんとしたるスコラ哲學の正當なる組織者はアンセルムにして、教父時代に於て決定せられたる神性論、基督論及び人論を中心となせる教義を一大系統に組織したる者は即ちアンセルムの神學也。彼はプラトーン學派風の實在論に於て神の存在を論議し、以て爲らく神は絶対に完全なる者にして之に優りて全きものは考ふ可らず、而して神といふ觀念其の者に於て既に彼の存在するに含まれてあり、何となれば吾人の心のみある者より、吾人の思想に存在すると共に存在するもの、方更に多く

スコラ哲學

實有なる者なれば也。是れ所謂有神論の實體論上の論議として有名なるもの也。彼は又天地萬物を以て神の意中に在る觀念の表出せられたる者也と説き、罪惡は意志の向ふべき方向を誤りたる者に外ならずと云ひ、而して人類はアダムに於て墮れたリし人性を受け繼ぎて罪に染められたるものなるが如くに、又基督に於て實現せられたる神聖にして完全なる人性に與ることに依りて罪惡を脱することを得ざり。アベラールは道徳上の善惡は外に表はるゝ動作に在らずして、意志が自由に認諾することに在りとし、從て人間が祖先より傳へて生れ乍らに感染せる罪は寧ろ過失といふべき者也と云ひ、吾人が罪惡なくして生涯を送ることは必ずしも全く爲し難きことには非ざると考へたり。第二期スコラ哲學全盛の時代に入り、アリストテレスの學説を用ひて教會の教義に偉大なる組織を與へんと試みたる最初の學者はヘールスのアレキサンデルにして、彼に優りてアリストテレスの哲學に逼じ、而して更に一層組織的に教會の教義を説かんとしたるものを、次に於てたるアベルトス、マグネスとす。而して當時の思想界の最大且最好代表者となれるはトマス、アテナスにして、吾人は彼が立てたる神學の大組織に於て中世紀の大理想の反映を見ることを得。彼は先づアリストテレスより得たる論法を以て、神の存在を證明せんとし、所謂第一原動力の無かるべからざることを以て論議せんとせり。知性・意志との關係に就ては、彼は吾人の知見が吾人の行爲の指導者也といふ説を取り、意志を決定する者は吾人の知性に於て、兩者の關係は神に於ても亦同一也と論じ、人類社會の起源に關しては、人間は自然に社會を結ぶ性情を具ふと説けり。世上の國家は神の制定に依り

スの部

スコラ哲學

る者にして、其目的は吾人を世間的道徳を修めしむるに在りしと雖も、吾人は世間的道徳に満足せず、更に一步を進めて神前に於ける救済を得ざるべからず、而して之を得せしむる者は教會也、故に教會と國家との關係は前者が後者の上に加りて之を全うするに在り。斯くしてトマスは一切の事物を上下の二界に分ち、而して常に上なる界が下なる界の冠として其上に位し、之を全うすといふことに依りて兩者の關係を説かんとしたりしが、彼は此説は當時羅馬教會が世を僧俗の二階級に分ち、俗人の上に位する者として僧侶を置き、僧侶にも亦幾多の階級を設けて其頂上に法王を戴きたりし制度を最も巧妙に辯護したる者なりき。

宗教と哲學との一致を目的として起りたりしスコラ哲學は、斯くの如くして其最も偉大なる組織を成したりしが、スコラ哲學が取て以て宗教上の信仰を辯護する武器となしたりし希臘哲學は元來斯る目的を以て起れる者に非ざりしかば、第三期に入るに及びて信仰と理性とは全く其範圍を異にする者也とのこと漸く明白となるに至れり。初めて此理を發見したりしはドンス、スコトスにして、彼は哲學者に取りて眞理なることも、神學者に取りては非眞理と見らるべきことあるべしと云ひ、哲學と神學との間に區別を設けたり。而して彼が此二者を區別したる根據は神の意志に関する所論に在り。彼れ以て爲らく、神の所業は凡て其絕對に自由なる意志に由りて出で來る者、而して其意志自らの活動以外に其活動を規定すべき道理と稱するものなし。此意を推究すれば吾人は理性を以て神の所業を研究すること能はず、宗教上のことは唯天啓に依りて示され、信仰を以て受け納るより外に之を測知すべき道なしといふ結

スコラ哲學

論に達するの外なき也。斯くして初よりたる哲學と神學との分離はオッカムのウィリアムに至りて更に著しく、殆ど其極點に達したり。前既に云へる如くオッカムに至り唯名論の復起となりしが、唯名論の主眼は經驗上の個物のみ實在とし、個物に通じたる普遍性の實在を否み、斯る普遍性は唯だ名のみにして眞に實存する者に非ずと見るに在り。此故に初代スコラ學者が個々の感覺上の經驗と萬物の究竟根據たり究竟目的たる神との間に架せんとしたりし思想上の橋梁は、オッカムの唯名論の打擊に達して粉碎せられたり。斯くしてオッカムは信仰上最も確實と思はるる事も、人智にては毫も之を認め得る力なきと見、神の存在及び其一事を初めとして、三位一體論、天地創造論、化身論の如きは到底道理を以て證明し得べからずとせり。此の如く信仰と理性との職能は皆もて兩断せられ、之と共に信仰の哲學的根據を打ち越つるを以て當初の目的となしたりしスコラ哲學は頓に眞理の域に沈淪しぬ。

(三) スコラ哲學の價值。スコラ哲學は左の價值を有す。即ち(一)驚くべき智力上の勤勞の結果にして、其複雑廣大なる結構は之を中世技術の一大創造なるゴシック型の大會堂に比するを得べし。(二)前世紀の神學的方法に一大進歩を與へたり。師父等の遺せる文書は材料の散在せる者たるに過ぎず。之を一個の系統とせんに先づ之を組織構成せざるべからず。而してスコラ學者は之を爲し、且明確確實に之が分類要略を附せり。(三)是れ實に基督教の眞理の合理的哲學的性質を論證せんとする廣大の意匠より生じ來れる者也。(四)而して彼等がなしたる區別は、多くは是れ誤謬に對して防禦となり、眞理に對して解説となるの眞價を有する者也。然れ共スコラ

スザンナの歴史

哲學は又多くの弊習すべき缺點を有す。即ち(一)其大結構は不定の基礎に立てり。則ち歴史の評論を輕視し、當時存在したりし信仰を以て直ちに耶穌及び其使徒の教訓と同一なる者となしたり。(二)聖書研究に適當の地位を與へず、獨立自由の研究を禁じ、單に傳説上の解説に従ふを以て満足したり。(三)形式的論理學を過重したり。(四)嚴密な辯論を弄し、神學上の建設には過せざる者多し。(五)其系統の完全なるを欲し、其習慣に過る説を發見せんと務むるよりして、往々聖書の意圖もなく教會歴史にも證據なき説を講入せり。(六)僧侶政治の權威に伏し、學者の權威を信じ、ために心靈的壓制主義を助くるに至れり。

スザンナの歴史 The History of Susanna.
 書名 舊約經外聖書中の一書。『エズラ及びドラハス』(Ezra and the Dragon) 『三聖童の歌』(The Song of Three Holy Children) 共に但以其書の補遺也と稱せらる。猶太人が俘囚となりて巴比倫に住めりし頃其中にヨアキムと云へるものあり。其妻スザンナ美色あり。二人の長老之に不義を言ひかけ頼りに口説きけれ共、スザンナ頑として應ぜざりければ、二人のもの彼女不義を犯せりと訴へ、自ら之が證をなしけり。スザンナは爲めに死刑の宣告を受けしが、ダニエルに依りて救はれ、究問の末却て二人の罪證顯せしかば、彼等遂に死に處せられたりとの物語を載す。此物語は思ふに耶廿九の廿二以下に記されたるものを後世に至り敷衍したる者なるべし。此書がもと希伯來語にて書かれたる者に非ざるは殆ど明なれ共、希臘語にて書かれたる者なりや、又はアラマイック語にて書かれたる者なりやに關しては學者の説一ならず。

スの部

スノー。スタウ

スタウ

スタウ。スタニ

スリー

スリー。ハインリヒ Suso, Heinrich.

人名 一三〇一—一三六五 瑞西の神秘者。コンスタンツに生れ市のドミニコ派僧院にて教育せられ、ケルンにて神學を修め、エッセルハルトの熱心なる弟子となりしが、思辨よりは想像に長ぜしものから、一種獨特の神秘主義に達し、中世の詩的神秘主義の代表者となり。彼は思想を凝らして之が終に人格化せられ完美の光に包まれるに至るまでは満足せず。此を以て所謂ソロン文書の中よりは彼の眼前に永遠の智慧出て来り、之が基督と同一人となり、又はマリアと同一人となり。斯くの如き理想に耽るため、彼は己の教育せられしドミニコ派僧院に退き、通世の生活を送り、一三三八年「永遠の智慧」を著し、四〇年説教を始め、多年ワインデルツル僧院に止まり、後ワルム僧院に止まり。タウレルやチルディングンのハインリヒ及び神友會の徒と交り、同胞會を造り、其の規則を書き多くの人を改宗せしめたり。

スタウビッツ

人名 ヨハン フォン Stauffitz, Johann von 人名 一五二四年死

ルの友。其の生時及び生所は明ならず。フワグニスタル派の僧となり、所々の大學にて學び、最後にチワピンゲンにて學び、一五〇〇年同市アウグスチヌス派僧院の長となり、神學博士とせらる。煩瑣神學を排し、聖書と神秘主義に耽り、心情の神學者たり。其の教養と實務の力を丈夫らしくして而も禮儀ある事とがサキソニー選侯の心を奪ひ、ワインテンベルヒ大學新設に與るために招かれ、同大學に關し法王の許可を得るため羅馬に往き、一五〇二年ワインテンベルヒに往きて神學科長及び教授となり。一五〇三年同院に於けるアウグスチヌス派司牧長に選ばれる。

スタウテンマイエル

人名 フランツ アントン Staudentmayer, Franz Anton 人名 一八〇一—一八五六

編譯の天主教神學者。チラビングンのワイルヘルムスナフトにてメーレルの下に學び、一八二七年僧となり、三〇年「監督選舉史」

スタツベル

人名 フィリップ アルベルト Staber, Philip Albert 人名 一七六六—一八四〇

佛蘭西のプロテスタント教徒の一人。瑞西ベルンに生れ、一七九二年美術教授に任ぜられ、後哲學神學教授となり、九八年瑞西教育大臣なる。性度量にしてヘスタロツグをしてアルヒドルフ城内にて其方法を試みしむ。彼は瑞西にて其任務を盡し、一八〇四年公生涯より退き、巴理に住み、一般に宗教に冷淡なる中に常に熱情を有し、佛蘭西の宗教的社會界に異彩を放てり。其の客室はギゾットを佛人に紹介せんと努めたる一人なり。彼は又教協會の長ともなり。『テ、ゲイテ、インメルタリス、ス、ス』等耶穌基督の神聖的使命及び其高次の性其他を著す。

スタニスラウス

人名 タラカワの監督 Stanislaus, 人名 一三〇一—一〇七九

タラカワの監督。波蘭の守護聖徒。アネーセン及び巴理にて教會法を修め、僧となる。通世生活を嚴守し、其の傳來の財を貧者に施し、波蘭の王ボレスラウス二世の嘆息致儀を責め、終に之を破門し、王の復讐を蒙りタラカワ附近にてミサを行ひつゝありし時に殺さる。生存時にも死後にも奇蹟ありしと信ぜられ、一五四年インノーセント四世より聖者とせらる。波蘭には彼を記念せる多くの

聖壇や教會立てり。

スタリーング

人名 ジェームス Stirling, James Hutchison 人名 一八二二—一八六五年

蘇國の哲學者。グラスゴーに生る。一八六五年『ヘーゲルの秘訣』二巻を著し其名譽を揚ぐ。此書は獨逸風唯心論の研究及び感化の英國に及ぶ端を開ける者也。同年ワイリアム、マキルトン哲學の批評出づ。一八一年『Text-Book of Kant』を著す。『アトプラズムに就て』はヘグスレーの說に答へたるもの、『思想は何ぞや』(一九〇〇)及び『範疇』(一九〇三)は自己の哲學思想を述べたる者也。彼は『ケッセル』『哲學史』の英譯者にして、エザンバラに於ける最初のギッフォード講演者也。

スタンホープ

人名 ヘステル Stanhope, Hester Lucy 人名 一七七六—一八三九

英國の女流福音教者。スタンホープ伯の女、チャム伯ワイリアム、ピットの姪、倫敦に生れ、叔父の秘書をなし二十歳の時より一八〇六年ピットの死する時まで其家に住む。叔父死してウエールズの淋しき所に退き、一八一〇年西利亞に行きて住み、一三年マール、エミアの跡を興す。ソドンより八哩なり。餘生を此に終り周圍の亞利比亞人に著しき感化を興ふ。其の僕はアルバニア人にして其家は迫害を受けし者の隠れ家となり。彼は亞利比亞兵魁の如く服裝し、部下を募集し占星術を行ひ、聖書とコーランを混じたる教を説き、其の思想は殆ど健全の境に入れり。

スタンホルド

人名 トマス Stanbald, Thomas 人名 一五〇〇頃—一五四九

英國の詩篇譯者。ヘンリー八世及びエドワード六世の宮内官たり。彼は詩篇中より五十一篇を譯したりとい

スの部

スター。スタン。スター

スタン

スタン

スタンレー

人名 アルサル Stanley, Arthur Penryn 人名 一八一五—一八一八

英國の哲學者。父エドワード、スタンレーがチャターのアルダーレー司長たりし時に生れ、同村落にて美しき性格の父母より注意深き教育を受け、且つ母の親族にして頗る趣味深きレーセスター族との交際によつて一層善き感化を受く。八歳にして既に記能力の非凡なるをあらはせしむ。教學には殆ど無能にして算術の加算にすら終日頭を悩ます風なりき。一八二九年ラグビー小學校に入り、溫和と決斷とのすぐれたるを表はせしむ。『オム、アラワン』中に出て居れるが如し。同校校長トマス、アルノルドの恐ろしき感化は彼を捕へざるを得ず。後年の全生活に現はれたる心力は多く此の時に吹き入れられたるものと言ふを得べし。彼は早くより歴史を好み、ミルフォードやギボンや多くの小著者の書を通讀したり。ラグビーは彼の第二の故郷なりき。彼は第五賞を得て之を卒業せり。三三年牛津のトリオル校



スタンレー

生に選ばれ、卒業前に『カノン』の註釋を得。三七年父はラグビーの監督となり、彼も此に往復せり。四〇年四年希聖に行き、豐富なる知識と感興とを得て大學に歸り、直ちに助教として講義を始め、學生の心に力を吹き入れ、歴史神學の講演に由て多くの注意を引けり。一八四六年「使徒時代に關する説教と論議」を公にす。之より先「アルノルド傳」を出し時人をして到る所に先師の事を口にしむ。又第一牛津委員の秘書とせられ、大學教育に著しき改善を起し、神學論争の経過を注視しつゝ五〇年にはボルナム裁判に關する文章を書けり。五一年

スチウアルト

スタン

る所となり、又萬事に夫を助け夫をして古今のワ...

たる後、病んで臥し三日経て死せり。其の葬式に...

スチウアルト

デュガルド Dugald Stewart

の倫理学者。エジンバラ大学教授の子にして同...

スチウアルト

と共に政治學を講究せしむれば、政治に志す人々...

スチュアルト

モセス Stuart, Moses

人名 一七八〇—一八五二 米國の聖書学者...

スツルム

Sturm, Johann

福音の神性神の子の永遠の誕生... ヴァイナートの新...

スツルム

Sturm, Johann

人名 一五〇七—一八八九 獨逸の古典学者...

スチウアルト

スチウ

スツル

スチウ

スチウ